

そしかいする度に時間
が巻き戻るようになった

青菜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ループ体質の幹部オリ主が自身の目的のために警察学校組を救済していくと、次々に不可解な点が浮かび上がってくる。

毎回NOCバレするスコッチ、何者かに命を狙われている伊達、？？？？？
？。そして、オリ主が失っている記憶。

……みたいな話。

一見コメディ寄りですが本筋はシリアスとなっております。

※ 主人公の癖が強いです。将来成長予定ですが言動にそこまで変化は見られない

と思うので、苦手意識を感じたらすぐにブラウザバックするのを推奨します。

※犯罪を推奨しているわけではありません。

※これは二次創作です。原作者様および出版社様、その他一切の公式とは関係ありません。

※この作品の大枠を考えたのは警察学校編連載が始まる前です。新たな公式情報が出てくるたびにアップデートしていきませんが、もしかしたら警察学校編連載前の解釈が含まれてしまうかもしれません。

※p i x i vにも投稿しています。

目次

第1章 毎回死んだ男

第1話

2

第2話

23

第3話

46

第4話

67

第5話

90

第6話

107

第7話

135

第8話

154

第9話

170

第10話

196

第2章 萩原研二の消失

第1話

225

第2話

246

第3話

273

第3章 スコッチは自殺をやめてくれな

い

第1話

291

第2話

309

第3話

331

第4章 小さな攪乱

第1話

348

第2話

367

第3話

379

第5章 救済と真相

第 2 4 話
第 2 3 話
第 2 3 話
第 2 2 話
第 2 1 話
第 2 0 話

(2)

(1)

514 493 476 450 418 398

第1章 毎回死んだ男

第1話

元犯罪組織の幹部。三十路。

なんて恥ずかしい文字の並びだろうか。

間宮秋^{あき}は思わず身悶えした。パイプ椅子がきしんだ。

「もしかしなくても私の肩書き、相当痛いのでは？」

「ブツブツとどうしたんだ」

向かい側の扉から入ってきた男に呆れを含んだ声で言われる。彼はアクリル板を挟んで秋の目の前に腰かけた。

「バーボン、ここ最近毎日来てない？」

「聞かなきゃいけないことが山のようにあるからな。異常がないようなら取り調べを始めるぞ。間宮秋、コードネームはアドニス。未成年のうちから黒の組織で幹部を務めあ

げた。公安、FBI、CIAなどの機関が共同で取り組んだ組織壊滅作戦にて逮捕される。間違いないな？」

「うっわ傷口に塩塗りたくられた。改めて私の肩書きってキツイね」

「自己を省みるのは結構だが、取り調べが終わった後にしてくれ。組織の目的は？」

「その気になれば永遠の時を生きられる方法が云々ってあの方が言ってるのなら聞いたことある。ついていっても、マティーニ作らない？ で通じる職場のトップの言葉だからポエムの可能性が高いけど。ちなみに私はポエムに精通してないから何言ってるのかさっぱりわからないね」

なにせ同僚との会話は半分くらいフリーリングで乗り切ってきたのだ。特にジンが意味不明だった。

「マティーニの意味がわからないだなんて随分とおぼこいんだな」

「ベルモットに眠れないって相談されて梅昆布茶勧めた人に言われたくない。詳しいことはあの方に聞けばいいんじゃないの」

軽口を叩き合う。

お互いに嫌味を言い合っている形だが険悪さはない。どちらかと言えば悪友同士のやり取りに近かった。

取り調べのために彼と腹を割って話す日がずっと続いており、友情のようなものが芽生えてきている。

出会いさえ違えば本当に友人になれたかもしれない。

「そうしたいのは山々だが姿を眩ませていてな。どこにいるか心当たりは？」

「あつたらとづくに話してるよ」

「庇ってないだろうな」

「んなわけないでしょ。あの方にも組織にも忠誠心なんてないんだから。これだけ素晴らしい存在である私があんな組織に忠誠誓ってるわけないじゃん」

「きみ、毎日のように自画自賛してるだろ。いい加減聞き飽きたからもう言わないでくれ。で、話を戻すけどそれならなんで組織に入ったんだ？」

痛いところを突かれた。

我ながらあの就職先はないと思う。

秋は記憶をたぐり寄せようとして失敗した。いつものことだ。

しようがないので端的に答える。

「忘れた」

「は？」

「部分的な記憶喪失なの。いくつか記憶が抜け落ちていいる部分があるし何を忘れていいるかすらわからない。これで満足？」

「へえ。じゃあ、スコッチが死んだときのことは覚えてるか？」

「公安のNOC——Non—Official Cover、ようするに公安からのスパイだったはず。でもあつちは警視庁でしょ？ 関わりあつたの？」

「質問に答えろ」

ただの雑談とは思えないほど真剣な表情だ。

「廃ビルの屋上でライが射殺したって聞いてるけど」

「その後のことは？」

「えーと。スコッチが殺された直後に私も現場に到着して、ライから報告を受けた。現場にいたバーボンが遺体は自分が始末するって主張してたから任せたって」

「あのときの彼の顔色がやけに悪かったのを思い出した。やはりスコッチと親しい間柄だったのだろう。」

「他には？」

「降谷はじつと秋を見つめている。」

「秋は記憶の海に潜りこんで——やはり何も思い出せなかった。」

「別に何も。その様子だと忘れてることがあるみたいだね」

「ああ。それを話す前に昔話をさせてくれ」

「降谷は懐かしむように目を細めると語り始めた。」

「僕とスコッチは幼馴染だったんだ。あいつは幼少期につらい目に遭って、それでも前を向く強さを持っていた。一緒に警察官を志して、警察学校を卒業してすぐに僕は警察庁の公安に、スコッチは警視庁の公安に配属された。当時は長い別れになると思った」

けど、蓋を開けてみたらあいつが僕のサポートに着くことになって、潜入先でも変わらず一緒だったんだ」

小さな窓から入りこんだ光が金髪をきらめかせる。

穏やかな顔だった。彼は安室透でもバーボンでもない降谷零なのだと言再確認する。

「しばらくしてスコッチがNOCだと知られた。あいつは一人で逃げ出した。自決するつもりだったんだ。僕は急いで探したけど、赤井のほうが早かった。

スコッチは赤井に投げ飛ばされるふりをして拳銃を奪うことに成功。自分の胸に突きつけた。胸ポケットにあった、家族や仲間の情報が入っているスマホを破壊するためだ」

「スコッチが拳銃を持っていた？ ってことは——」

「ああ。ライが殺しただなんて嘘っぱち。あいつが命と引き換えに破壊したスマホの存在に組織が気がつく可能性を潰して、ついでに自分の手柄にすることでの上がるための嘘だったんだろう」

「へえ。ライの裏をかくなんて、スコッチってかなり優秀だったんだ」

「そうだな。NOCバレしたのが不思議なくらいだよ。」

話を戻そう。スコッチが拳銃を胸に突きつけると、赤井はリボルバーのシリンダーを掴んだ。人間の力で引き金を引くのは不可能になった。……赤井はスコッチの逃亡に手を貸すつもりだったんだ」

降谷の顔に後悔が色濃く浮かび上がる。嫌な予感がした。

「スコッチが赤井の話を聞く体勢になったとき、屋上に足音が響いた。僕の足音だ」

その言葉ですべてを理解してしまった。

幼馴染を助けるために必死で走った降谷。

足音に気を取られてシリンダーから手を離してしまった赤井。

一瞬の隙を見逃さず、敵に情報を渡さないために自決したスコッチ。

誰も悪くなかった。

タイムリングが悪すぎた。

話は終わったと言いたげに、降谷が小さく息をつく。

秋は首を傾げた。話を聴き終えて真っ先に浮かんだのは悲痛な気持ちなんかではな

く、純粹な疑問だった。

「なんでこの話を私に？ 悲劇を聞いて心を痛めるような繊細な心は残念ながら持ち合わせていないってのに」

「スコッチが死んだのを知った時のきみの表情だ。僕以上に絶望しているように見えた」

「……はあ？」

彼は何を言っているのだろう。

秋はスコッチと親しかったわけではないし、特別な感情を抱いていたわけでもない。そもそも他人の死に心を動かされるほど情があるのかも怪しい。

にわかには信じられないが降谷は至って真剣だ。嘘をついているようには見えない。

一つだけ思い当たる節があった。

記憶喪失。

彼に特別な感情を抱く理由があつて、それを覚えていないだけだというのなら説明がつく。

もしもスコッチが記憶を思い出す重要な手がかりだったとしたら。

記憶を取り戻すのはとうの昔に諦めていたが、スコッチが自決する前に関わってれば何かが変わっていたのかもしれない。

わずかな後悔が胸ににじんだ。

* * *

頭が割れる。人生で経験した中で一番痛い。目覚めと同時に思わず叫びそうになったが気合いで飲みこんだ。監視員に叫び声を聞かれるのは嫌だ。

頭を押さえながら身体を起こすと胃の不快感に気づいた。頭痛といい二日酔いに似た感覚だ。

「おつかしいなあ。バーボンと別れてからは独房で一人きりだったし、アルコールを口にする機会なんてなかったのに。……ん？」

おかしな点がもう一つ。物が増えている。枕元に置かれた目覚まし時計、小ぢんまりとした勉強机、壁際に置かれたハンガーラックには制服がかけられている。

どう見ても独房ではない。十五歳になるまで住んでいた児童養護施設の一室だ。

「まさか……!」

すばやく勉強机の上に視線を走らせる。予想通り、過ぎた日にバツ印がつけられたカレンダーが置かれていた。スマホで日付を確認できるようになるまでずっと置いていたものだ。

カレンダーが指しているのは――

「十五年前の四月? 組織に入る直前じゃん。こんなに戻ったの初めてじゃない?」

痛みが和らいできた頭をさすりながらこぼす。

久々にループが始まったらしい。

ループ。同じ時間が何度も繰り返される現象。

ループは突然訪れる。繰り返される『幅』は毎回バラバラ。小学生の時に同じ一日を何度もやり直したのが最短だ。一番『幅』が大きいのは今回の十五年である。

ついでにループが起こる原因は不明。共通する条件にいくつか当たりをつけてあるが、すべての条件を満たしてもループが発動しないこともある。

「ループかあ。終わらせない限り永遠にこの十五年間が続くんではしょ？ うっわ、面倒」

基本的にどの周でも起こる出来事は変わらない。基本的にというのは、ループを認識できる唯一の存在である自分が物事を引っかき回さない限り、という意味だ。秋が物事に介入しなければ『前』と同じ出来事をなぞるだけの毎日が流れる。

ついでに何を成し遂げようとループした瞬間にすべてなかったことになる。なんて退屈で面倒な事態だろうか。

「ループを終わらせるしかないな」

極めて消極的な理由で、秋はループ終了を目指すことにした。

不可解な点が多いループ現象だが、終わらせ方ははつきりとしている。

時間が巻き戻る直前に感じた心残りや後悔を解消すれば終わるのである。

例えば小学校低学年の秋が学校の花瓶を割ってしまったとき。慌てて焼却炉に突っこんだもののバレたらどうしようかと不安に押しつぶされて布団に入り、目を覚ますと翌日は訪れていなかった。ループが開始したのだ。今度は花瓶に近づかないことで、怒られる危険性を作ってしまった『後悔』は解消され、ループが終了して翌日が訪れた。

このようにループ開始のトリガーは『後悔』であり、これを解消すればループが終わる。

「後悔……バーボンの話を聞いてもつとスコッチと関わっておけばよかったって思ったやつかな。自決する前に話してみるか」

実際に試してみた。

スコッチは思いの外いい奴で、話していて楽しかった。

親しくなっただけでしばらくすると、スコッチがNOCだとバレて始末された旨が風の噂で届く。「お前と最近親しかったスコッチがNOCだったらいいじゃねえか」とイチャモ

ンをつけてくるジンをいなしつつ、スコッチの落ち着いた声が二度と聞けないことに僅かな寂しさを覚えた。

ループ終了の条件は満たした。これからは進む一方の時間に身を任せるだけだ。と思ったが、またループした。

「ええ……。これでも駄目なの？」

時間が折り返したのは前と同じで、逮捕されて数日が経ったタイミング。つまり新たなループが発生したわけではなく、今までのループが継続されたのだと分かる。

「なんだろう。スコッチと関わる時間が短かったのかな？ それとも記憶を取り戻すところまで行かないと条件達成できない？ つつてもスコッチが組織に入ってきてから死ぬまでの期間が短すぎるんだよなあ。ループするたびに関係性リセットされるから、順当にやってたらいつまで経っても終わらなそうだし」

「だったら一周分ごとのスコッチと関わる時間を伸ばせばいい。つまりスコッチの死を阻止するのだ。」

まずはスコッチがNOCだという情報を握りつぶそうとした。どれだけ握りつぶしても次から次へと湧いてきた。公安に裏切り者でもいるのだろうか。

キリがないので自決当日の流れを変更する作戦にシフトした。

幸い、彼が自決までに何があったのかをバーボンから聞いている。

一般人のふりをして足音がバーボンのものだと伝えるだけでいい。あとは現場にいるFBIと公安がスコッチを逃す作戦を立てているところに乱入して、協力を申し出る。

今後内通者としてスコッチとの接点を持てるはずだし、前々から裏切っておけば逮捕後の扱いも良くなるだろう。

しかしこの作戦は机上の空論で終わった。

足音がバーボンのものだと伝えてもスコッチは自殺したのである。なんでだよ。

スコッチ救済は困難を極めた。

まず、NOCバレの経緯も日時もバラバラなのだ。

ジンと一緒にいるところに連絡が来ればズドンだし、そうでなくても当日どこにいないかが予想できない。

なんやかんやで廃ビルにたどり着き、ライとバーボンが集結したところで拳銃自殺す

るケースがもつとも多いが、毎回ではない。

拳銃を手に入れられないように手を回せば屋上から飛び降りる。

NOCバレの原因をどれだけ潰しても予想だにしない理由で正体が発覚する。

自分がトドメを刺すと主張して生きた状態で連れてきてもらっても隙を見て自害される。殉職の覚悟が高すぎないだろうか。

結局、スコッチの死を初めて回避できたのは八周目だった。

「つつかれた……」

秋はセーフハウスのソファでうなだれる。

目の前には椅子に拘束されたスコッチ。閉じられたまぶたにはくつきりと二重の線が見て取れた。

彼をスタンガンで気絶させてからしばらく経つ。もうすぐ目を覚ますはずだ。

(そう。NOCバレするとありとあらゆる方法で死ぬんだつたら、NOCバレする前に身動きを取れないようにすればいい。拉致軟禁こそが最適解！ さっすが私、これぞま

さに逆転の発想、天ツ才！)

脳内で自画自賛していたら疲れが吹き飛んだ。

秋がソファアの上でふんぞりかえっていると、スコッチのまぶたが痙攣する。

「——ッ。ハハ、は……？」

「あ、目え覚めた？」

スコッチは腕を動かそうとしたが、拘束されているのでピクリともしない。彼は自身の腕に視線を落として、呆然と呟いた。

「なんだ、この椅子」

彼が座らされているのはベルトが取り付けられた椅子だ。ベルトは両手両足、ついでに胴体に巻き付けられている。一度拘束されれば頬を搔くことすらできなくなる代物だ。

「シェリーの研究室でいらなくなったらしいから貰った。ほらあそこ人体実験してるし。暴れられると困るから拘束してるだけで、平静を取り戻してくれたらベルト外すよ」

言いながら、秋は背中とソファアの間で挟んでおいたスマホを取り出して軽く振る。

時間が巻き戻る前の彼が、命と引き換えにして消し去ったデータが入っているスマホだ。

スコッチの瞳がこぼれ落ちそうなほど見ひかられた。

「気絶してる間に拝借させてもらったよ。仲間や、もしかしたら家族のデータも入ってるかもね」

「……それをどうするつもりだ？」

「スコッチが自殺したら組織にデータを流す。さらに、私が死んだ場合もデータが組織に流れるように手を打つてある。要するに私を殺してからスコッチが自殺する選択肢を潰したわけだ。それを踏まえて聞いて。……スコッチは公安からの潜入捜査官だつてバレた。殺害命令が一斉にくだったよ」

端的に告げるとスコッチが息をのんだ。

が、普通に嘘である。スコッチはまだNOCバレする時期じゃない。本当にNOCバレするまで待っていればスコッチが自殺してしまうリスクが高まるので、NOCバレ数ヶ月前に行動を起こした。

公安からの潜入捜査官だと気がついたからスコッチを始末しておいたと組織に説明して、本人には彼がNOCだと連絡が回ってきたと伝える計画なのだ。

「まあ、私が殺したことにしてあるけど。大幹部の私が言うんだから疑われないでしょ。ああ、なんでかって？ 匿うつもりだからだよ」

「親切心、ってわけじゃないよな？」

「もちろん完全なる私情。スコッチに死なれると私が困る」

「理由を聞いても？」

「私が部分的な記憶喪失だから。組織に入った理由も思い出せないんだよ。笑っちゃうでしょ」

スコッチの顔には笑えないと書いてあった。秋は気にせず続ける。

「で、なんかスコッチに懐かしさを感じるんだよね。多分似た人を知ってるんだと思う。もしかしたら一緒に過ごしているうちに記憶を思い出すかもって考えが浮かんだら、ここで殺すのはもつたないないなーって」

これも嘘だ。ループのことは言えないので適当な理由をでっち上げた。

「……それは組織への裏切り行為だ。いいのか？」

「この私が気づかれるようなへマをするとでも？」

「そうじゃなくって——」

「ああ、組織への忠誠心なら微塵もないよ。同僚は癖強いし、あの方はポエミーすぎて何言ってるか分からないし、抜けたら地獄の底まで追いかけるって条件がなければとっくの昔に転職してるね」

「なるほど」

すでにスコッチの動揺は鳴りを潜めていた。納得し始めている証拠だ。

これだけ落ち着いたのなら拘束を解いても問題ないだろう。秋は椅子にくっついたベルトを外してやった。

スコッチは椅子から立ち上がると、手首を回しながら話す。

「確認させてくれ。俺はスマホのデータを人質に取られている以上、アドニス言いなりにするしかない。俺から公安の情報を自白させるための演技にしては回りくどすぎるから、記憶を取り戻したいって話は本当である可能性が高い。アドニス記憶を取り戻したあと俺がどうなるのかは不明」

「殺されないように媚び売つとけば？　一緒に住み始めてから一瞬で記憶が戻るわけでもないし」

「……一緒に住む？」

「言つてなかったっけ。スコッチが変な行動しないか監視できて、接触も多くなるから記憶を取り戻しやすくなる。幸いこのセーフハウスは広いから、二人でも暮らせるし」

「待て待て待て」

「私が目を話した際にスコッチが仲間に連絡を取ろうとして失敗、私の裏切りが組織に知られるって展開は避けたいしね」

「いい歳した男女が一つ屋根の下つてのがさあ……」

「命綱握られてる相手に手を出すほど見境なしじゃないって信じてるよ」

「はは、期待を裏切られたら失望で銃の引き金を引いちゃうかもしれないって？」

「そういふこと」

秋はニヤリと挑発的な笑みを浮かべてみせた。

第2話

スコツチを拉致した翌朝。

秋がりビングに行くとき、ソファで寝ていたスコツチがすぐに身体を起こした。目の下には隈ができている。ろくに眠れなかったらしい。

「……おはよう」

「えっ、あー、おはよう」

朝っぱらから人と話すなんて何年ぶりだろうか。その上朝の挨拶を交わしたのは人生で初めてかもしれない。慣れない経験だったので反応が遅れてしまった。

秋は違和感を振り払うように首を振りながら冷蔵庫に向かう。扉を開けると冷気が漂ってきた。

冷蔵庫を後ろから覗きこんだスコツチが思わずといった様子で漏らす。

「うわっ、中身少な」

「えー、ちゃんと飲み物冷やしてあるじゃん」

「飲み物しか入ってないだろ……」

比較対象がないので知らなかったが、どうやら相当中身が少ない部類らしい。

食に興味がないからこうなっているのだがズボラだと思われるのは癪だ。秋は言い訳がましく口にした。彼女は相手からどう見られるかを一番に気にする面倒なタイプなのである。

「基本は外食か、出来合いのもの食べるだけだからね。スコッチは出歩けないし、冷凍おかずの宅配サービス探さなきゃ」

言いながら今度はキッチン棚をあさる。レトルト食品の袋を発掘した。
秋は銀色の袋をスコッチに突き出しながら尋ねる。

「スコッチはレトルト食品温める派？ 温めない派？」

「逆に温めない派が存在することに驚いたよ」

スコッチは温める派らしい。贅沢な奴だ。久々に電子レンジを使うことになった。普段は袋から直接食べているが、今日はスコッチの歓迎も兼ねている。盛り付けるべきだろう。

秋は親切心で紙皿を取り出した。陶器の皿がない事実には自分が料理を担当する提案をされた。

聞けば料理は趣味だという。学生時代にも毎日同居人のために用意していたから慣れているとも言っていた。

紆余曲折あつた末に二人とも食卓に座つて食事を開始した。

秋は紙皿に出したレトルトの牛丼を一口食べる。今まで食べていたものと同じとは到底思えないほどおいしかった。スコッチに猛ブツシュユされて数年ぶりに温めたのだが、記載通りに温めるところも味が変わるらしい。

ついでに紙皿を使っているのもスコッチの態度が原因だった。片付けが面倒なので袋から直接食べたいと言ひ出せる雰囲気ではなかったのだ。

秋は牛丼を飲みこむと唐突に言った。

「スコッチ、楽器弾くでしょ。ギター？」

「ベースだけなんで分かったんだ？」

「昨日スコッチを拘束するために触った左指の腹が硬かった。楽器を弾く人の指だよ」

話しながらスマホでベースとは何か調べてみる。ギターと同じような形をしていた。どこがどう違うのか分からない。

「ま、それなら今後生活に必要なものと一緒にベースも買おつか。お金なら腐るほどあるし」

「………娯楽品だぞ」

「私が記憶を思い出す前にスコッチの気が狂っても困るじゃん。必要経費だよ。あ、そうそう。なんか質問ある？ 可能な限り答えるけど」

何気なしに言うと、スコッチの目の色が変わった。

一瞬視線を斜め上にやって逡巡してから、彼は始めの質問を口にする。

「今からの質問に嘘はないよな？」

「え、うん」

その質問は予想外だった。早速嘘をつかれたら尋ねた意味がなくなる部類の質問だからだ。

(いや、答えを聞きたいんじゃないじゃなくて私の反応を見て判断材料の一つにしたかったのか) そう考えると納得がいった。スコッチが秋の回答を全面的に信じるなんて想像がつかない。彼の立場なら警戒しすぎて損はないはずだ。

スコッチは次の質問に移る。

「ところでここはどこだ？」

「東都のどこか」

「俺が持っていたスマホの中身は見た？」

「見てない」

問いかけはまだまだ続く。その日は矢継ぎに質問されて終わった。

スコッチの警戒心が鳴りを潜めたのは共同生活が始まって二ヶ月経った頃だった。ここまで期間があれば危害を加えるチャンスはいくらでもあるのに、ずっと何もしないので警戒するだけ無駄だと判断したのだろう。

秋はリビングに置かれたテレビに、動画配信サイトで探したホラー映画を映した。ソファアールの上で体操座りをしてリモコンを掴み、早送りボタンを押す。

登場人物が恐怖で顔を青くしているシーンに到達すると早送りを解除し、そのシーンが終わると巻き戻りボタンを連打する。そうしてまた同じシーンを見る、を繰り返す。

演技の参考にするためだ。

秋は自身の感情を引き出すのが苦手なので、人の演技を見よう見真似で模倣するしかない。特に映画はその道のプロの演技を何度も確認できるので重宝している。

主人公らしき女性が血が抜けたように白くなった顔をして、全身を震わせながら床に崩れ落ちた。硬く結ばれた唇は真っ青。カタカタと身体が震えている。

なるほど、こうするとそれらしく見えるのか。

「何やってるんだ？」

十回ほど同じシーンを繰り返していると、自室から出てきたスコッチに尋ねられた。ベースのチューニングが終わったのだろうか。

秋は顔だけ動かしして答える。

「今度任務で米花町に行くから、殺人事件に巻き込まれてもそれらしい演技ができるように勉強してるんだよ」

「うっわ。よりにもよって米花町か」

スコッチがうめいた。当然である。

米花町は恐ろしい。

なんとといっても事件発生率が異常なのだ。毎日殺人事件が起こっているし、連続爆破事件や強盗だって日常の一部だ。

それだけ事件が起こっているのだから多少事件が増えても目立たないだろうと、組織が起こす犯罪の実行場所に度々選ばれるレベルである。現に、不審死が多少増えたことで訝しんでいる住人はいない。やばい。

「ところで任務ってどんなの？」

「最近有名な毛利小五郎っているじゃん。組織が起こした暗殺にあの探偵が関わっていたから何か勘づかれていないか調べろってさ。なんと普段姿を見せないあの方が、経過報告すら直接報告するように言ってきたんだよね。何考えてるんだろ、あの老いぼれ」
「へえ。アドニスってあの方と面識あるんだ。どんな人？」

「情報収集に余念がないね」

「ま、公安に帰れた場合手ぶらはまずいからな。で？」

スコッチは続きを促すように言葉尻を上げた。

しかし秋は言葉に詰まる。さすがにあの方の情報はペラペラと喋れない。

こちらが言い淀んでいるのに気づいたのだろう。スコッチがすかさず話題を変えた。

「じゃあアドニスが普段やってる任務は？ ほら、組織では謎に包まれてたから。あの方と面識持てるなんて相当だよな」

「どんな面を見出されて組織に所属しているのかって質問なら答えは簡単だね。ほら、私って存在そのものが素晴らしいからさ。組織に在籍してるって事実だけで全体の士気が上がるんだよ」

「やっぱそう簡単には教えてくれないか〜」

スコッチはケラケラと笑った。

失礼な奴だ。こっちは本気で言っているのに。

スコッチはソファアールの後ろから回りこんで秋の隣に座る。

テレビ画面に映った女性を見て、顎に手をあてた。

「話は戻るけど、この演技は参考にならないだろ。アドニスなら必死に虚勢張りそう」

「えー、そう?」

「この前ゴキブリが出た時だって必死に強がってただろ」

「私が虫けら如きに怯えるんでも?」

「ほら、そういうところ」

納得したが認めはしなかった。スコッチが指摘しているのはこういったプライドの高さなのだろう。

このような機敏をスコッチが察するくらいには、彼との距離が縮まっているのだと思う。

* * *

組織の暗殺に巻き込まれた毛利探偵事務所を探るようにとあの方直々に命令された。調べるのは毛利探偵事務所であって、毛利小五郎単体ではない。小五郎の娘と、長いことと在籍している探偵助手も含まれる。

世間で名探偵ともてはやされている毛利小五郎はもちろん、一時期警察官だった探偵助手にも念のために探りを入れる必要があるだろう。

秋は探偵事務所の人間のプロフィールをざっと調べたのち、実際に接触することにした。

舞台に選んだのは喫茶ポアロ。

毛利探偵事務所の下の階に位置しており、事務所の人々もよく訪れる。

何度か通っていれば、いずれ店内に居合わせるだろうという計画だ。

——そして今日。

入店してさりげなくあたりを見渡せば、窓際の席で新聞を広げている毛利小五郎を発見した。耳に挟まれた赤鉛筆を見るに、競馬の予想をしているらしい。

(そういえば、ループすることに『前』に起こった事件がなくなっていくつ。それも毛利小五郎の周辺で起こった事件ばかり)

いかんせん事件数が多すぎるので全てを覚えていくわけではないが、偶然では済まされないほど多くの事件が起こらなくなっている。

考えられるのはバタフライ効果。秋が前回とは違う行動をとったせいで起こった些細な変化が、やがて大きな変化として現れたという説。

しかし今までのループではこのような事態になったことがない。可能性は低いだろう。

もう一つ考えられるのが、秋と同じようにループしている人間が未然に事件を防いで回っている説。

もしも他にループ者がいるのなら、毛利小五郎自身か、その周辺の人物がそうである可能性が極めて高い。

（今回の目的は二つ。組織の任務として、暗殺に毛利小五郎たちが勤づいているか確認すること。そして、ループ者らしき人物がいるか探りを入れること）

心の中で自分に言い聞かせながら注文したコーヒーを一口飲む。

ソーサーにカップを戻すと胸ポケットから折り畳まれた紙を取り出した。

広げた紙に視線を落として考え込んでいるふりをする。独り言をこぼすのも忘れな
い。

平日の昼すぎだけあつて客はまばらだ。

数分間悩んでいる演技をしていれば、調査対象が秋の存在に気がついた。

新聞をたたむ音と革靴の足音。

「何か悩んでいるようですが、よろしければこの名探偵・毛利小五郎がお手伝いしまし
うか？」

髭をさわりながら彼は続ける。赤鉛筆は耳に挟んだままだ。

「いやあ、それにしてもお美しい」

「知っています。顔が天才ですよね」

「はっはっは。ユーモアがある方ですな」

本気で言ったのだが、彼は冗談だと受け取ったようだった。

秋が見ていたのは推理ゲームの概要が書かれた紙だ。

友人から出された推理ゲームが難しくて悩んでいたところ、偶然居合わせた女好きの毛利小五郎が助力を申し出てくれる、という筋書きである。

彼が組織の暗殺に気がついているのかを探るしだけは推理ゲームにある。

ゲームの答えが件の暗殺事件の真相に酷似しているのだ。事件の裏を知っているのなら何かしらの反応をしろだろう。

ちなみにこの問題を用意したのはバーボンだ。「そういえばバーボンってスコッチと仲良かったよね。バーボンもNOCじゃないかって噂になってるよ。深い意味はないけど、バーボンが怪しいって私が口にしたらどうなるかな。いや、本当に深い意味はないんだけどさ」などと言って作成してもらったのだ。バーボンはキレてた。

経緯を思い返していると数十分が過ぎた。コーヒーは冷めきっている。しかし推理に進展はない。

毛利は何度か推理を披露したが、どれも簡単に矛盾点が見つかるほどお粗末なものだった。

「意外と難しいですな。でもこの毛利小五郎にかかれば解けない謎はないですよ。なっはっはっは」

笑ってはいるものの彼は冷や汗を浮かべて、しきりに目を泳がせていた。

毛利小五郎は世間で言われているほど推理力が高くないのではないかと秋は思い始める。その思考は上から降ってきた声によって中断された。

「小五郎さん、何してんの?」

見上げると背の高い男がいた。

「ああ、ちよつと推理ゲームをな」

「へえ。俺も手伝おっか？」

「ま、まあ今後の勉強になるだろうし、助手としてしつかりと励みたまえ」

「はい。名探偵毛利小五郎の助手、萩原研二です。よろしくね、お姉さん」

男は人好きのする笑顔を浮かべると、自然な動きで毛利の隣に座った。

ずいぶんとフランクな態度だ。それでいて相手に不快感を与えない。人の懐に潜り込むのが上手そうな印象を受ける。

二人目の調査対象は問題が書かれた紙を覗きこむと疑問を口にした。

「あれ、容疑者Bっていつトイレに行ったんだ？」

それからはあつという間だった。

不自然な遺体の状況、不完全なアリバイなど。萩原が次々と不可解な点に気がついて口にする。それを聞いた毛利がだんだんと真実に近づく。

どう見ても萩原の方が洞察力が高い。おそらく推理力でも彼が上回っているのだろう。

さらに、さりげなく毛利を誘導している節が見られる。

今まで毛利小五郎が解決してきた事件は萩原が誘導していただけなのではないかと秋は感じた。

萩原到着から数分経つと、ついに毛利小五郎が真実にたどり着いた。

助手のアシストによって判明した真実を自信満々に語る彼に相槌を打ちながら、脳内で状況を整理する。

（萩原研二にも推理ゲームを見たときの動揺はなかった。あの事件に組織が関わっていたことには気がついていないっぽい。組織の任務としてはシロ。でも毛利小五郎と萩原の推理力を考えると、事件を未然に防いでいるループ者の第一容疑者は萩原研二。今後個人的に調べる必要あり、つと）

秋は隙を見て発信機を萩原にしかけた。これで行動を把握できる。偶然を装って接触し続けられ親しくなれるだろう。

* * *

萩原は頻繁に未遂事件に遭遇していた。いや、将来事件が起こる場所に出向いていると言った方が正しいだろうか。

どう考えても萩原は未然に事件を防いでまわっている。三十日間接触を続けた末に出した結論がこれだ。

例えば、毒が入った飲み物をこぼす、犯人が隠し持っているナイフを発見する、アリバイ工作を失敗させる。

どれも、これから事件が起こるとあらかじめ知っていたからこそできたのだろう。

萩原は毎回、偶然を装って犯人が用意したトリックを防ぐ。

確固たる殺意を持っている犯人は次の機会を狙うが、ノリで犯行を決意したり、勘違いの未犯行に及ぼうとしていたパターンなら、一度トリックが失敗すれば事件は起きない。そして、その場合のほうは圧倒的に多かった。

秋は、一台の車がギリギリ通れる細さの道を萩原と並んで歩いていた。あたりに人影はない。

日は暮れていて、かといつて暗闇ではなくて、薄紫の淡い空が広がっている時間帯だ。ぼつぼつと街灯が灯りをともし始める。

偶然東都タワー内で出会った二人は一緒に行動し、案の定事件に巻きこまれた。今はその帰り道だ。

「にしても大変だったよな。まさか爆弾事件に巻きこまれるなんて」

先に口を開いたのは萩原だった。

この一ヶ月間で距離を縮めることに成功し、今では彼と砕けた話し方をする仲になっている。

「犯人が起爆スイッチを押す前に萩原が解体しておかなかつたらと思うとゾツとするね。取り調べとかどうなるんだろ」

「警察も忙しいからな。大ごとにならなかつたし、あつさり終わると思うぜ。この規模の事件でもしつかり対応したら警察官が過労死しちまう」

「今の時点でそれって、毎日のように事件が起こる時期になったらどうなるのさ。確か工藤新一の名前を見かけなくなるくらいだっけ？」

何気ない口調に聞こえるよう注意しながら言葉を送ると萩原が足を止めた。秋はそれに気づかず数歩進んでしまったので振り返る。

緊張を気取られないように意識して余裕げな笑みを浮かべながら告げる。

「萩原もそうだつてすぐに分かったよ。毎回事件を未然に防ごうとしてるから」

「……つてことは間宮ちゃんもくり返してんのか。よく自分から話そうと思つたな」

「どつちかが行動しないと何も変わらないでしょ」

さも当然かのように言つたが真意は違う。

面倒な状況になつた場合の対策手段があるから、ここまで大胆な行動に出られたのだ。

廃人になる部類の薬物を盛つてから殺せば『前』の周に何があつたかなんて綺麗さっぱり忘れてしまう。

萩原は秋の真意に気がつかずに軽く笑つた。

「はは、それもそうだ。で、打ち明けた理由は？」

「単刀直入に言えばループについて知っていることをすべて教えてほしい」

彼は初めて出会った同類だ。可能なら持っている情報を知りたい。

答えを待つようにじっと見つめる。

萩原は少し考えこんだ後、口を開いた。茶色い木枯らしが吹き抜けていった。

「条件がある」

「ふーん、どんな？」

「未来を変えるのを手伝ってほしい。毎回死ぬ友人がいるんだ」

受け入れてくれるなら後でもっと詳しく話すけど、と前置きしてから萩原はかいつまんで説明する。

伊達航。

警視庁捜査一課に所属する刑事。

事故にしか見えない状況で毎回死ぬ。どれだけ状況を変えても死ぬ。

「いくつも事件を未然に防いでいる俺だからわかる。ただ条件を変えただけでは覆せな

い出来事つてのは存在してる。それらには決まって明確な意志が介在してるんだ」
「それって、」

「ああ、事故に見せかけた殺人だ」

犯人の目星すらついていないのだろう。

でなければ、こうして秋に助けを求めたりしない。何度やつても糸口すら掴めないから、新しいループ者という名のイレギュラーを投入してみようといったところか。

組織随一の洞察力を持つバーボンが作成した推理ゲームを解き、いくつもの事件を未然に防ぎ、ついでに爆弾の解体までできてしまう萩原が、怪しさ満点の秋に助けを求めている。ただ、ループ者だからという理由だけで。

(萩原でも何も掴めてないって、かなり面倒な案件なんじゃ……?)

秋は返事に迷った。果たして労力と対価は釣り合うのだろうか。

そもそも萩原に情報共有を持ちかけた一番の理由は彼が不穏分子だからだ。同じループ者である萩原と敵対すれば、強大な敵となるだろう。

そうなる前にある程度行動や持っている情報を把握しておきたくて今回の行動に出

た。

が、その対価に働かなければいけないのなら話が変わってくる。

断る方向に傾きかけていると、萩原は大げさすぎるほどに傷ついた表情をした。

「そう……だよな。間宮ちゃんって自分にできないことはないとかいつも豪語してるけど、考えてみりゃ普段のポンコツ振りと結びつかない。きつと自分を大きく見せたくて、ついつい大口叩いちやうんだろ？ 大丈夫、自分を大きく見せたいって気持ちには否定しねえから。嘘は駄目だけど致しかたない場合もあるって理解してるぜ、うん」

秋にはわかる。

これは謝罪をよそおって相手を煽る高度テクニクだ。だって、萩原の態度はあまりにもわざとらしい。

プライドの高さに定評のある秋は反射的に返した。

「そんなこともないけどね?!」

「いやいや、間宮ちゃんの性格わかってたはずなのにこんなこと頼んじやってごめん。手がかりがほとんどない状態でまだ起こってない事件の犯人を見つけ出すだなんて無

理難題、出来るわけないって聞く前にわかりそうなもんなのに……」

萩原は白々しくへによりと眉を下げた。

彼の変わらない態度のせいで口が勝手に動いてしまう。

「じきんげんじきん」

しまった、と思った時にはもう遅かった。

秋はこの状況で一度発した言葉を取り下げられる人間ではない。そのことは自分が一番よくわかっている。

こうなったらヤケだ。

秋はいつも通り胸を張って偉そうな口調で言った。

「この間宮秋様にできないことなんてあると思う？ 発生前で捜査のしようがなからうが、私にかかればお茶の子さいさい、ゼーんぶ綺麗に解決するね！」

第3話

伊達航が殺される未来を変えるための話し合いの場として指定されたのは、どこにもあるありふれた居酒屋の個室だった。すっかりとした壁に囲まれているので盗み聞きをされる心配はなさそうだ。

ジョッキやいかにも家庭料理らしいお惣菜が置かれたテーブルを挟んで、秋の目の前には萩原が座っている。その隣には癖毛の男。

萩原は隣席の男に秋を紹介すると、彼に親指を向けた。

「で、こいつが松田陣平。俺の親友。ちよつと態度が悪いかもしれないけど良いやつだよ」

「どーもっ」

秋もつられて頭を下げた。萩原とは対照的にぶつきらぼうな男だ。説明通り態度が

悪く、粗暴な印象を受ける。

それならこちらも同じように対応しよう。それで気分を害さないのなら秋としては文句がない。むしろ普段通りの振る舞いができるのでありがたいくらいだ。

「今回集まってもらったのは伊達班長の死を防ぐためだ。間宮ちゃんは俺と同じくループしていて、陣平ちゃんにはループ関連のことを全て伝えてある。どの周でも協力してもらってるんだ」

「どうやって信じさせたの?」

秋の問いに、萩原は松田と顔を見合わせた。
ややあつて、あつけらかんと松田が答える。

「んなもん、そう言われたらすんなり信じるだろ。萩は意味のない嘘つかねえし」

松田の声を聞いてから、意味を理解するまでに時間を要した。秋は意味もなく唇を開いたり閉じたりする。

理解不能だった。

萩原は信じてもらえなかった場合のことを考えたのだろうか。そのせいで関係性にヒビが入ることを普通は懸念するだろうに。

あつさりと信じる松田も松田だ。

秋は数秒間逡巡したのち、彼らは自分とは全く別の生き物なのだとは結論づける。これ以上考えてはいけないと脳が警報を鳴らしていた。

秋が折り合いをつけ終わったと察したのだろう。萩原が会話内容を本題へと戻した。

「じゃあ伊達班長が死ぬ経緯について説明するな」

曰く、萩原たちと警察学校での同期である伊達航はどの周でも死ぬらしい。

ループ者が未来を変えるために動かなければ今度の二月七日に交通事故で死ぬ。

これを避けると、六月一日に轢き逃げに遭う。さらにそれを避けても七月一日に何らかの形で死ぬといった具合に、来年の六月を節目に毎月一日に命を落としかねない状況に襲われるらしい。

今は十二月のはじめ。交通事故まで約二ヶ月であり、エンドレス殺害開始まであと六ヶ月ほどだ。

思っていたよりも時間がない。

「伊達航は何者かによつて事故に見せかけて殺害されるつて考えてるんだね」

「ああ」

「質問いいか？」

萩原が頷いたところで松田が口をはさむ。いつの間にかサングラスを外していた。意外と童顔だ。

「言いにくいんだけど、伊達の死はあらかじめ決められてるものだって可能性はないのか？俺たちがどんなに頑張つても変えられない運命みたいなもんがあつて、それが班長の死だったら？だからって俺は諦める気はないけど、仮にそうだとしたら対策とか色々変わつてくるだろ」

癖毛をガシガシと搔いて、松田は居心地悪そうに視線を逸らした。

それはないだろう、と秋は思った。

明確な根拠はない。

しかし伊達の死のように、何度くり返しても変わらないと思われたスコッチの死を回避したという事実が、運命の存在を否定している気がした。

「その線はないと思うぜ。現に、俺も陣平ちゃんも生きてるじゃん」

「たりめーだろ」

「それがそうでもないんだな。正史のままだったら二人とも死んでるんだよ。俺が爆死して、陣平ちゃんが俺の仇を取ろうとその爆弾犯を追いかけて、結局爆死。ちなみに俺が殉職を回避しても陣平ちゃんは仇を取ろうとして死んだ。運命ってやつに打ち勝った生き証人が二人もいるんだぜ」

「おい、お前が爆死したってどうということだよ」

松田に詰め寄られて萩原は簡潔に説明した。爆弾をしかけて十億円強奪をもくろんだ二人がいたらしい。犯人らの本名や行動、萩原が手を回している今回はすでに逮捕されていることを聞き出すと、松田は気が済んだようだった。

「なるほど。悪い、話の腰を折ったな。班長の説明に戻ってくれ」

「オツケー。犯人は巧妙に事故に見せかけて殺す。誰もが伊達は事故死だと思ってた。

俺も、何度防ごうとしても死ぬことを確認してやつと殺人だつて気づいたくらいだ。

殺害方法は基本的に轢き逃げ。俺や陣平ちゃんや伊達に張り付いて殺されるのを防いでいることを勘づかれると、別の殺害方法にシフトする。それも、確実に殺せるように被害が大きくなる方法にだ。火災や爆発事故に巻きこまれたかのように偽装する手口が多いつけ」

「はた迷惑なやつだな」

「いや、火災はまだわかるけど一般人が爆発事故を起こす手段が思いつかないんだけど。どうやってるの？」

「んなもん米花町にある適当な高い建物探せば爆弾が手に入るじゃねえか」

「一から爆弾作るのも割と簡単だしな」

米花町の高い建物に爆弾があるのはわかる。なにせ米花町だ。

しかし萩原の意見には反対だった。世界的な犯罪組織の幹部を務める萩原ならまだしも、一般人がそう簡単に爆弾を作れてたまるか。

萩原は職場が米花町。

捜査一課に所属している松田が仕事で出向く先はほぼ米花町。

可哀想に、彼らは米花町に毒されているのだろう。

あそこは木を隠すなら森の中理論によって、組織が起こす犯罪の隠れ蓑にされるような場所である。

長らくそんなところに身を置いていけば、そこでまかり通っている常識が一般的なものだど錯覚してもおかしくない。

秋は心の中で彼らに合掌する。藪をつついて蛇を出すのも嫌なのでこの件には触れないでおこう。

「この時点で分かっていることはいくつもある。一つ、通り魔的犯行ではない」

萩原が人差し指を立てた。

松田への解説も兼ねて秋が付け加える。

「もしもそうなら毎回伊達航が狙われるのはおかしいもんね。犯人が何となく伊達航を選んだのなら、次は若い女性や老人がターゲットになるかもしれない」

「そーそー。分かっていること二つ目、犯人は伊達の行動を把握できるか、もしくは操れる人物である」

「そうじゃなきや轢き殺したり、班長がいる建物を爆破するなんて芸当できないよな」

「そういうこと。ま、GPSでも事前にくつつけておけば伊達がどこにいるかなんてすぐわかるから、容疑者を絞りこむ手がかりにはならないけどな」

「轢き逃げならそれでいけるかもしれないねえけど、爆発事故は無理だろ。事前に爆弾しかけとく必要があるんだし」

「それがそうでもないんだよねえ」

萩原がのんびりとした口調で言った。

「爆発に乗じて殺された場合、どの周でも現場から爆弾らしきものは見つからなかった。大規模な爆発だったから爆弾の破片すら残らなかつただけかもしれないねえけど」

となると、爆弾による爆破事件ではない可能性がある。一瞬違和感を覚えたもののもおかしいところはない。

米花町周辺ではやけに爆弾が使用されるので忘れかけていたが、わざわざ爆弾を用意して設置するのは面倒だ。爆弾を使用するメリットは低い。

爆弾以外の手段を用いたとなれば、発信機によって伊達が条件を満たしている建物に入ったことを確認してから爆発の準備をしても間に合うのかもしれない。しかしその

手段とやらに見当がついていない現状では妄想の域を出ない思いつきだ。

松田は首に手をやりながら唸った。

「今の時点であれこれ考えても仕方ないな。それより対策を考えねえと。俺にしたみたいに伊達にもループのことを打ち明けるってのは駄目なのか？」

「何度か試したけど失敗した。やらない方がいい」

萩原は卵焼きをつつきながら話す。

「信じてはくれるんだけどさ。伊達班長、なーんか隠し事してるみたいなんだよね。決まって心当たりはないって言うけど、それも本当かどうかわからない。」

しかも俺たちに対する警戒心が強くなって犯人探しの調査は難航するし。

班長に命を狙われてる自覚ができて交通事故は自分で回避してくれるのはいいんだけど、交通事故に見せかける作戦が失敗したら爆発事故に見せかけて殺されるじゃん。仮にこれも避けられたとしても被害が大きくなる。

班長には知られずに俺たちで犯人を見つけ出してとっ捕まえるのが一番確実なわけ

よ」

秋としては目的さえ達成できれば被害が大きくなっても構わないのだが、二人は違うのだろう。

伊達の隠し事には触れず、松田が尋ねた。

「んじや、今までは犯人を見つげるために何をしてたんだ？」

「伊達と親しい人や、伊達が担当した事件の関係者全員が容疑者つてことでしらみ潰しに調べてた。事件のデータは陣平ちゃんに横流ししてもらおう形で。今回もやってくれるか？」

「ダチの命が懸かってるんだからそれは全然構わねえけどよ。しらみ潰しってお前、マジかよ……」

秋も絶句した。

米花町の殺人事件発生率はそりやあもう多い。そしてそれらをまとめて担当しているのが、伊達が所属している捜査一課である。担当事件件数なんて余裕で三桁超えるんじゃないだろうか。

萩原は何でもなしのように続ける。

「つつても、二人が考えてるほど大変な作業じゃないぜ。周によつて起こる出来事が微妙に違うこと、間宮ちゃんも気付いてるだろう？」

当然だ。

秋は二周目——またもやループが始まったと発覚した周に、あらゆる事故や大規模爆発など、巻きこまれたくない事象のリストを暗記した。しかしその試みは徒労に終わった。

爆破事件も、事故も、自然災害も、『前回』とは違ったのだ。

もちろん前と同じように起こるものもある。しかし発生しなかったり、逆に『前』は何も起きなかった場所で事故が起こったりする。

何度かループ現象を経験していたのにこの時初めて、周ごとの出来事は微妙に違うのだと知った。

おそらく今までのループではくり返す期間が短すぎて、比較に必要な情報を十分に手に入れられなかったからだろう。

「例えば陣平ちゃんが今朝白米を食べたとしよう」

秋がしっかりと頷き返したのを確認してから、萩原は松田への詳細な説明を始めた。

「何が何でも朝は米じゃないと嫌だつて確固たる信念があるわけじゃない。ただ何となく炊飯器に残っていた米を食べただけだ。別にパンでもよかった」

「他の週の俺はパンを食べてるかもしれないねえつてことか」

「そう。そしてそのパンにカビが生えていることに気づかず、完食してたら？ 陣平ちゃんは職場で腹を下す。本来予定していた聞きこみには行けなくなつた」

「んで、その聞きこみ現場に爆弾がしかけられてたら一つ爆破事件が増えるつてわけだ。一方、俺が米を食べた周では聞きこみに行つた俺が爆弾を見つけて爆発前に無事解体していたと」

萩原の説は秋が掲げているものと同じだった。

確かに歴史の大軸は変わらない。

世界を前に進める大きな出来事の核には強固な意志がある。そして、どれだけループ

しても変わらない事象の条件は強固な意志だ。そのため世界の成長の流れに変化が生じない。

伊達航殺害犯にも強固な意志があつて、だからこそどの周でも伊達が死ぬのだろう。その一方で、些細な変化は起こる。

本当に些細なものだから、十五年間をくり返すループを経験するまで、秋はその存在に気がついていなかった。変化した事象を見つけても、知らず知らずのうちに自分が『前』とは異なる行動をとったからだろうと思っていた。

しかし今回のループを経験してサンプルが増えたため気がついた。

周ごとにかかる事象は、人々の何気ない決断の上に成り立っているのだ。だから微妙な変化が生じる。

秋が考えている間に、萩原は話を進める。

「こんなふうなループしてない人の何気ない選択によっても変化は引き起こされてる。同じように、伊達班長の担当事件も周によって異なるし、事件の関係者なんかも違ってくる」

「なるほど。どの周でも犯人は同一人物。だから、全部の周で伊達の担当事件関係者で

ある人物、もしくはどの周でも伊達と親しくしてる人だけが容疑者ってことになるのか」

秋は二人の会話を聞いていて引っかけかりを覚えた。

さっきのは萩原が今までの周の容疑者を全員覚えていて、該当しない人物を選別できる前提での発言だった。

ループするごとに数が減っていくとはいえ、一周目の容疑者は途方もない人数だったはずだ。それを全部覚えてるって？

思い返してみれば、萩原は事件を未然に防いでまわっている。

前に起こった事件の詳細を正確に覚えていないとできない芸当だ。記憶力が良すぎないだろうか。

困惑が顔に出ていたのだろう。松田が「萩の記憶力はピカイチだからな」と胸を張った。なんでも幼少期に一度見かけただけの伊達航の父親の行動を覚えていたこともあるらしい。どうして松田が得意げにするんだ。

特殊能力を持っている探偵は多いのでその類だろう、と秋は無理やり自分を納得させ

て会話に意識を戻す。

「事件関係者と同じく、班長と親しい人のピックアップアップにも陣平ちゃんとの協力は欠かせない。これもあんまり褒められた方法じゃないんだけど……」

「んなこと気にしてる場合かよ。どーせ『褒められる方法』ってやつだけでどうにかしようとしても無理だったんだろ。具体的に何するんだ？」

「相互監視アプリを使う」

「相互監視アプリい？」

「お互いに自分のスマホから相手のスマホを見ることが出来るアプリだ。浮気を疑うカップルなんかがよく使っている。相手のスマホに保存されている画像、動画、連絡先、通話記録やSNSの履歴なんかの閲覧もできるな。ついでに位置情報も確認できるぜ」

世の中のカップルは何を考えているんだ。プライバシーがゼロじゃないか。

松田も同じことを思ったらしく顔を引き攣らせていた。

「そのアプリを使う連中のことは一旦置いてくとして、相互監視アプリを伊達のスマホにインストールすれば、定期的に連絡を取ってる相手を知れるってことか」

「ああ。陣平ちゃんには隙を見てそのアプリをインストールしてほしい」

「そりゃあ職場が同じなんだし松田にそういった機会はあるだろうけど、勝手にアプリがインストールされてたら気づくでしょ」

「それがそうでもないんだな」

萩原は空になった大皿を重ねながら答えた。

「このアプリのアイコンが表示されるのは設定画面のアプリ一覧だけだ。ソフトウェアすら更新しない機械音痴の伊達は気づくわけない」

なるほど。つくづく悪用できそうなアプリである。

「まとめると、私たちが調べるのは伊達航と親しい人物、もしくは彼が担当した事件関係者。毎月一日に殺害チャレンジをしかけてくることから、犯人は伊達の行動を把握できてる。担当した事件によって逆恨みしているだけの犯人が伊達の行動を把握できるかは微妙だけど、盗聴器や発信機を持ち歩いているような六歳児もいることだし、すれ違いざまに発信機をつけることもできるだろうって線で考えてる、と」

「おい待てなんだよその六歳児」

江戸川コナンのことは後で萩原が説明してくれるだろう。将来彼の職場に居候する少年なわけだし。

話が逸れるので秋は松田を無視した。

「前に萩原が言っていた通り、どれだけくり返しても変わらない事柄には強い意志が介在している。今回の強い意志は『絶対に伊達航を殺してやる』っていう犯人のもの。つまり通り魔的犯行ではないし、すべての週の伊達殺害は同一犯。言い換えれば、ループの中で一度でも容疑者じゃなかった人は全員シロ。この条件でだいぶ絞られるね」

萩原は言わずもかな、一時間ちよつと一緒に過ごしたただだが、松田も優秀なのはわかる。頭の回転が早くて思い切りもいい。

「萩原と松田が何度も調べていて、条件も絞られてきたっていうのに、手がかりすら掴めてないってかなりまずくない？」

「ああ。だから今回から捜査範囲を広げようと思ってる」

「具体的にどうやって？」

「親しい人の定義を下げる。親族や恋人、俺たちくらい親しい友人や同僚だけじゃなく、行きつけの店での顔なじみなんかも含めるつもりだ。ちょうど人手も増えたし」

萩原は笑顔を秋に向けた。秋も笑顔を返した。若干顔がこわばっていたかもしれない。

「あー、一応聞くけど、定義を下げた親しい人の割り出し方は？」

「そりゃあ最も手軽で強力な方法さ」

「つまり？」

「足を使う」

「……私は大変優秀だからどこからも引つ張りだここでかなり忙しいんだけど、二人はどれくらい尾行できる？」

「あー、はいはい」

萩原は慣れた様子で適当な反応をした。

一方で松田は突然自画自賛し始めた秋にギョツとする。彼は萩原を横目で見て、親友

がまったく意に介していないのを確認すると、ため息とともに喉まででかかっていたであらう異議を吐き出した。大人な対応だ。

「俺は担当事件が伊達と被ればそれこそつきつきりになれる。それに、仕事が終わる時間が伊達と同じ場合も帰宅まで尾けれるな。どっちも結構かぶるぜ。このために捜査一課に移動したんだし手回しはバッチリだ」

「このため？」

「思わずこぼす。横から萩原が補足した。」

「陣平ちゃん、元々は爆発物処理班に所属してたんだけど、伊達が死ぬ経緯を打ち明けたらすぐに異動を申請したんだ。仕事でも一緒に行動できてればトラックに轢かれそうになっても助けられるだろ、って。かつこいいだろ。なーんで佐藤ちゃんは振り向いてくれねえんだらうな」

「萩原、やめろ」

ガチトーンだった。あだ名でなく苗字で呼んでいるところから真剣さがうかがえる。

詳しいことを聞き出すのは後日におこう。

「仕事中は高確率で松田が見張れるんだね。萩原はどれくらい尾行できる?」

「自由業だから融通はきくぜ。ちよくちよく事件現場で顔合わせるし」

「融通をきかせて捻出した時間で女の尻を追いかけてる、と」

「佐藤ちゃんに触れたのは悪かったって」

容疑者を割り出すには少なく見積もつても数ヶ月間は伊達を尾行しなくてはならぬ。
い。

仕事中は松田に任せるとして、それ以外の時間はピッタリ張り付いている必要がある。たとえ誰にも会わなそうな状況でも、その間に事件に遭遇する可能性を考えると見張ってないといけないからだ。

クツソ面倒くさい。できれば今すぐ投げ出したい。

しかしこの話から降りると伝えようものなら、萩原は「やっぱ間宮ちゃんには荷が重かったか」などと言うに決まっている。そんな扱いを受けるのはプライド的に耐えられない。

秋は戯れている二人を眺めながら、しばらく忙しい日が続きそうだと内心ため息をついた。

第4話

伊達航の尾行は三人が持ち回りで行っている。基本的に誰か一人が伊達に張りつく形だ。

しかし例外はある。

ターゲットが一人でいると浮く場所にいる場合は、周囲に溶け込むために二人以上で尾行を行う。例えばクリスマスシーズンのデートスポットとか。

ライトアップされた国営公園は人でごった返していた。大半が家族づれかカップルである。

二十メートル先では伊達が歩いている。背が高く人混みから頭が飛び出しているの
で位置を確認しやすい。一方で彼の隣を歩いている恋人の姿はここからだと思えない。
足元に注意してLEDランプで飾り付けられた並木道を歩いていると横から声をか
けられた。松田だ。

「萩は予定があるって言ってたけど女と事件どっちだと思う？」

今まで無言を貫いていたので話しかけられると思っていなかった。驚いて茶色のタイルを踏み外してしまう。右足は白のタイルの上に乗っていた。

残念、ゲームオーバーだ。

茶色のタイルは足場、白のタイルは底なしの淵。子供のころ誰もがやっていた遊びだろう。

童心に帰ったわけではなく伊達に視線を送りすぎないための工夫だったが、失敗すると普通に悔しい。

秋はうつむいていた顔を上げると少し考えて答えた。

「7：3で女性」

「8：2じゃね？ この前合コン行ったらしいし」

会話はすぐに終わってしまった。再び無言が訪れる。

話題を提供できない無能だと思われるのも癪なので、秋はイルミネーションを何気なしに目で追いながら話を振った。

「クリスマススイブにほぼ初対面の女と一緒に、デート中の友達の尾行をしている気まずい状態とはいえ、相手はこの私だよ。頭脳明晰、容姿端麗、眉目秀麗、才色兼備。全ての褒め言葉は私のためにあると言っても過言ではないってレベル。その割にはなんか浮かない顔してない?」

「お前その自信どこから来んの?」

「客観的事実から。そんなに佐藤刑事と出かけたかった?」

「お前の認識が歪んでるのはよくわかった。……おい待て、佐藤刑事? 居酒屋での萩の言い方なら職業までわからないはずだろ」

「後日萩原から詳細を聞き出してね」

「あのおしゃべりめ」

「警視庁版の私みたいな人なんだって?」

「萩が何言ったのかは知らねえけどお前が話を歪曲しまくってるのはわかる。佐藤のほう百倍いい女だぞ」

「それ本人に言いなよ。この私よりもいい女だってことは、宇宙で最も尊い存在であることと同義なんだから」

「お前の中ではな。で、萩からどんな話聞いたんだよ。おら、全部吐け」

松田が凄んでくる。刑事よりもチンピラに近い風貌だ。

秋が詳細を思い出そうと記憶をたどっていると、ライトアップされた花畑の前で尾行対象が立ち止まる。何か伝えてからナタリーが離れていったのが確認できた。あの方向は化粧室だ。

先ほど見かけた、長蛇の列ができた女性用トイレが頭に浮かぶ。ナタリーが戻るまでしばらくかかるだろう。

秋と松田はカモフラージュのために、花畑から少し離れた位置に停められた移動販売車で割高の飲み物を買ひ、その横の長ベンチに座った。

コーヒーを飲みながら松田の問いに答える。

「萩原に何を聞いたかだったよね。えーと、確か……。」

佐藤刑事は過激なファンクラブが結成されるほど美人。特に捜査一課の刑事の九割がファンクラブに所属していて、そのうちの三十人が精鋭中の精鋭。事件発生率が多すぎるから偶像崇拜でもしないとやってられないんだってね。そのため佐藤刑事といい感じに見える松田は捜査一課で針のむしろ、とまあこんな感じ」

「ファンクラブとか初耳だぞ……。え？ 俺が捜査一課で疎まれてるのって態度じゃなくって佐藤が原因なのか？」

「態度悪い自覚あるなら改めなよ」

松田の返事はなかった。改める気はないらしい。

雑談しているとしても意識は伊達に固定したままだ。ナタリーを待っている彼は退屈そうにイルミネーションを眺めている。一人ではつまらないだろう。

秋がそう考えていると伊達の隣に男性が移動した。近くに連れられしき人物はいない。こんな時期のこんな場所に男一人とは珍しい。

こちらも背が高かった。特徴的な眉毛をした、二十代後半から三十代前半の男だ。やがて隣に座っていた松田が立ち上がる気配がした。彼の視線の先には小走りで駆け寄ってくるナタリー。もうすぐ移動開始だ。

秋も松田にならって立ち上がる。空になった紙コップを備え付けのゴミ箱に捨てた。

* * *

国営公園を出た伊達たちは大通りを少し逸れた場所にあるレストランに向かった。

相互監視アプリによって、伊達が専用のウェブサイトから予約した内容は筒抜けだ。二人が窓際に座るのは分かっている。移動中に検索したところ、その周辺の席は既に予約済みだった。

さらに店内は広く、いくつかのテーブルごとに仕切りが設置されており、簡易的な個室のようなものが形成されている。

つまり時間をおいて入店し、彼らから離れた位置に座れば伊達に見つからない。

二人は来た道に戻って、ハイブランドのショーウィンドウが並ぶ煌びやかな大通りを適当にぶらつき、時間を潰してからレストランに入った。

店員に案内されて通路を歩く。席が見えてくると松田の動きが急にぎこちなくなつた。様子がおかしい。

秋が問いかけるように目くばせをすると、松田は席に座ると同時にほとんど唇を動かさず言った。

「佐藤がいる」

あたりを見渡せば、すぐに当たりはついた。萩原から聞いた特徴と一致する女性が二席先にいる。しかも男連れだ。

オブラートに包んだ表現をすれば松田はワイルドなタイプだが、佐藤の連れはいかにも優男といった風貌である。ジャンルが真逆だ。

佐藤と松田がいい雰囲気だというのはファンクラブの勘違いだったのだろう。人が失恋する瞬間に居合わせてしまった。

「おい、妙な勘違いしてるだろ。違うからな。今日、佐藤は仕事中的はずだしあの男も刑事だ。おそらく張り込みだろうぜ」

松田が囁くのを聞き流しながら秋はメニューをパラパラとめくる。視線をそのままに端的に尋ねた。

「どっ」

「どうにかしてくれ」

佐藤たちの席は近い。向こうにも気づかれているはずだ。

つまり松田はクリスマススイブに雰囲気の良いレストランでとんでもない美人（自称）と過ごしているのを意中の女性に目撃されているのである。

そのうえ佐藤と一緒に張り込みをしている刑事はどう見ても彼女に気がある。中年が大部分を占めているファンクラブよりも脅威的な恋敵の出現だ。なにせ仕事中心とはいえ聖なる夜に一緒に過ごしているのだから。

さらにあの刑事はヘタレ感が漂っているものの素直そうである。好きな人に小学生男子みたいな態度を取りそうな松田とは大違いだ。

これは下手したら横からかつ攫われるんじゃないだろうか。

一番確実なのは後日伊達の尾行について打ち明けることだが、それはできない。伊達に尾行を知られる可能性がある。

そうなれば隠し事があるらしい伊達に警戒されて調査が難航する。

となると、秋と松田の間には何も無いのだとアピールするしかない。

幸い、耳をすませばお互いのテーブルの会話が聞こえる距離だ。

注文した料理が届いたところで秋は演技を開始した。うさぐさい笑顔を作ってペラペラと話す。

「米花町って事件が多いでしょう。実は崇りなんですよ、あれ。由緒ある神社が取り潰されたせいで瘴気が充満しているんです。しかし、このストラップをつけていれば瘴気

から守ってくれるバリアが自動で生成されます！ 事件に巻き込まれなくなるし病気も治る、その上恋も成就します！ お値段たったの二万円！」

逆ナンされてホイホイについて行ったら怪しげなキャッチだったという設定である。

松田は「あとで覚えてろよ」と唸った。

しばらく胡散臭いトークを続けていれば、買い出しから戻ってきた店長が逮捕された。なんでも殺人事件の犯人らしい。

佐藤たちは店長を逮捕するために張り込んでいたようだ。

刑事二人と店長が覆面パトカーに乗り込んだのを窓越しに確認してから秋は意外そうに呟いた。

「本当に仕事だったんだ」

「だから言っただろ」

「いや、実はデートだったってオチかもしれないって感じてたからさ。そういえばあの二人も捜査一課ってことは伊達殺害の容疑者なの？」

「どつちにもアリバイがあるって萩が言つてたぜ。そもそもアイツらが伊達を殺すとは思えないけどな。特に高木は教育係の伊達に懐いてるし」

「ふーん」

松田も高木も佐藤に好意を持っていて、松田は伊達の友人。高木は伊達が教育している後輩。

伊達はどちらを応援するのだろうか。尾行中に垣間見える彼の性格から中立の立場を保ちそうではあるが、伊達の行動次第で結果が変わりそうな気もする。

秋がビーフシチューを口に運びながら下世話なことを考えていると、松田が納得がいかないと言わんばかりの顔をした。

「ところでさっきの演技なんだったんだよ。お前のせいで佐藤たちに店出てくタイミンで可哀想な奴を見る目で見られたじゃねえか」

「ああ、いい案でしょ。詐欺まがいの商品の勧誘とカモ。私のような超絶ウルトラハイパー美人に声をかけられたら誰もがついてくるんだし、いくらクリスマスに怪しげな商品を勧められてるって状況とはいえマイナスイメージにはならないじゃん」

「お前の認識の歪みにはもうつつこまねえ。他にももつとマシな設定あっただろ。双子

の兄妹きょうだいとか」

「姉弟きょうだいにしては外見が違いすぎるじゃん」

「じゃあいいとこ」

「いいところは結婚できるし。超絶美人ないことクリスマスと一緒に過ごしてるとか、どう考えても下心あるでしょ」

「あー、まあ、うん……。いやでも勧誘はないだろ」

一応は納得したらしく、松田は皿に残っていたパスタをフォークに巻きつける。数口で食べ終わると、取ってつけたような何気なさで疑問をこぼした。

「そーいやお前、やけに尾行に手慣れてたよな」

「そーう?」

「ああ。素人っぽさがゼロだった。捜査一課の刑事が全く尾行に気づかないのも納得が
らく」

何が言いたいのか尋ねる代わりに片眉をあげる。

松田は続けた。

「それだけじゃねえ。伊達と親しくしている人物を見つけ次第、写真を撮って萩原に確認させてるだろ。つまり盗撮の技術もある」

松田の疑念はもつともだ。どう考えても怪しい。

しかしこうなることを見越して秋は設定を用意していた。

「どっちも知り合いの探偵に教えてもらったんだよ。私の天才的な能力の高さと探偵の教えさえあれば、それくらい普通にできるから」

「お前探偵の名前だしときや有耶無耶にできると思ってるだろ。言っとくけど普通の探偵は小学生のときに道路をスケボーで爆走してたりしないからな。将来毛利探偵事務所に転がり込んでくるっていうガキは特例中の特例だ」

「あー、やつぱり？ この間宮秋様にトラウマを植え付けられるレベルの存在がゴロゴロいるわけないもんね」

「お前萩んとこに将来居候する坊主がトラウマなのかよ」

「んんっ。ともかく、まああれだ。私に色々教えてくれた探偵も特別能力が高いんだよ」
「へー」

松田は生返事をした。人の弱みに意図せず触れたくせに、この話題にそこまで興味が
ないらしい。

秋は拍子抜けする。肩透かしを食らった気分だ。もつと深く突っ込まれたら安室透
の名前を出そうと思っていたのに。

「ま、これ以上追及する気はねえよ。不審な点は山ほどあるつてのにお前を信用するこ
とにした萩の判断を信じてるからな」

「前から思ってたけど萩原のこと好きすぎない？」

「……腐れ縁だし」

松田は照れ臭そうに視線を逸らして言った。

そして露骨に話題を変えた。

「ていうか、なんでアンタは萩原にそこまで信用されてんだ？」

「それが私も不思議なんだよね。どれだけ考えても心当たりがない。つまり答えは一つ
だけ」

言葉を切つて一呼吸置くと、緊張をはらんだ静寂が訪れる。ただごとではない雰囲気を感じ取つた松田が神妙な顔つきになった。

秋は真剣な表情で重々しく告げる。

「私に一目惚れしたから対応が柔らかいと思えない」

松田はずっこけた。

「んなわけあるか。萩は誰にでも優しいんだよ」

「えー、でもこの私だよ？　あまりに美しすぎて神様から嫉妬されて楽園から追放された天使かと鏡を見るたびに思う顔面を兼ね備えた私だよ？」

「分かったわかった、お前の自己評価がぶつ壊れてるのはよくわかった！」

伊達とナタリーがレストランを出る。

タイミングをずらして秋たちも会計を済ませ、夜道を歩く二人の尾行を再開した。

ジングルベルが流れる大通りを歩いてしていると松田からレストランでの会話の続きを振られる。

「大体なあ、毛利探偵事務所ですら助手やってる理由からお人好しだろ、萩のヤツは」「ああ、そういえば気になってたんだよね。なんで萩原って毛利小五郎の助手なんかやってるの?」

「なんかっってお前、あの人ああ見えて尊敬できるところあるんだぞ……」

松田は癖毛をガシガシとかき乱すと問いかける。

「萩が未然に防ぐ事件と防がない事件の規則性、気づいてるか?」

萩原はすべての事件を防いでいるわけではない。

殺人事件を防いだと思ったら大規模な爆破事件はスルー。しかし数日後には似たような爆破事件を防いでいる。そのくせ同時期に起こる大臣暗殺事件には関与しようとするらない。

改めて振り返っても何も思いつかなかったので萩はモゴモゴと言った。

「あー、うん、これじゃないかってものはあるけど上手く言語化できないっていうか……」

「わからねえんだな。お前そういう場合は素直に認めるよ」

「ごもつともである。正論すぎて反論の言葉が出てこない。」

松田は呆れたようにため息をついてから答えを教えてくれた。

「毛利探偵事務所が関与してるかどうかだよ」

「ああ」

言われてみれば確かにそうだ。

事件現場に居合わせるきっかけの依頼が舞い込むとか、のちに事務所の居候となる死神少年が持ち込んでくる事件だとか、そういった「毛利探偵事務所が関与する事件」にだけ萩原は手を出している。

伊達のような特例を除けば、探偵事務所が関わる事件は防ぐ。関わらないのならどんなに大きな事件でも防がない。これがルールだ。

「要するに防ぐ事件を決める基準として毛利探偵事務所を利用してらんだらうぜ」

「……つていうと？」

「偶然に判断をゆだねないと良心が壊れちまうだろ」

「……あー、なるほど」

少し考えると納得がいった。

例えば二箇所と同時に事故が起こるとする。一方を防ぐともう一方が防げない。どちらを選ぶのが正解なのか。

この答えを出すのは命に価値をつけるのと同義だ。人間には荷が重すぎる。

さらに片方が死に、もう片方が植物状態になる場合なら？

死ぬほうがひどいからとそちらを助けるのか。

しかし見方によっては一思いに死ぬよりも意識がない状態で生きながらえる方が酷いのではないか。

判断なんてできるわけがない。

秋のように自分に利があるかどうかで決めるのならともかく、萩原は良心の呵責に襲われるだろう。

なんとも生きづらそうな男だ。そうなる運命なのだと言っていて全部放っておけばいい

のに。

「でも基準をわざわざ毛利探偵事務所にする意味ってある？」

「そりゃあ無理のない範囲かつ多くの事件が該当するからじゃねえの？ 一人でも多くの人を助けたいから、刑事と同じくらいの事件遭遇率を誇る毛利探偵事務所に目をつけたいだろうし」

「でもそれなら探偵助手やらずに刑事やって、自分が関わった事件は防ぐってルールにしたほうが効率良くない？ 松田の話だとよりスムーズに事件に介入できるように探偵事務所の助手になったってことでしょ？ 刑事でも条件同じだしそっちの方が給料いいんだから、助手になるメリットが見当たらないんだけど」

「殺人が最も悲惨だつてことで捜査一課に配属されるか、交通事故が悲惨だからと交通課に入るか。それとも威力が大きい爆死が最悪か。配属場所を選ぶ時点である程度命に優劣つけちまうじゃねえか」

「確かに。にしても、そこまで話す仲だなんてやっぱり二人とも仲良いんだね」

「いや、これただの予想だけだ」

「はあ？」

「そーいや萩が探偵助手やってる理由、ちゃんと聞いたことねえな」

今度は秋が肩透かしをくらう番だった。

それじゃあ松田が勘違いしているだけかもしれないじゃないか。

(そうだ、きつと松田の勘違いだ。萩原にそこまで高尚な考えがあるわけない)

自分に言い聞かせるように心の中で唱えると、だんだんそんな気がしてきた。そういうことにしておこう。でないと自分と萩原の違いにやりきれなくなる。

* * *

伊達がナタリーと一緒に彼女の自宅に入っていったのを見届けて二人は解散した。ケーキ屋に寄つてからセーフハウスに戻る。

購入したのは二切れのショートケーキ。クリスマスにケーキなんて買ったのは初めてだ。特段イベント事や食べ物に関心があるほうではないのだが、スコッチとクリスマス

スを祝ってみたかった。

「最近毎日のように出かけてるよな。任務？」

「いや、個人的な情報収集の一環で尾行三昧」

「あー、だから格段に外食が増えてるのか」

「ていうか聞いてよ。すべての褒め言葉は私のためにあると言っても過言ではないって周知の事実¹に異論を唱える輩が現れてさ」

秋が怒りながら指揮棒のようにフォークを上下させると、スコッチは静かに首を振った。

「アドニス、残念ながらそれは完全に過言なんだよ」

なんてことだ。生命線を握られているため強い否定はできないはずのスコッチにまるで裏切られた。

秋は打ちひしがれた。

「いやー、まあ、役になり切って嫌なことから目を背けてるのは楽だろうけどさ。やつぱりアドニスにはちゃんとなを向いて欲しいよ。まだやり直せるだろうし」

彼はよくわからないことを言いながら、トッピングされた生クリームとイチゴを同時に口に運ぶ。一口が大きい。

スコッチは咀嚼し終わると空気を払拭するように全く違う話題を振った。

「ところで記憶喪失の手がかりは見つかった？」

「うーん、全くないね！」

というか、スコッチに指摘されるまで忘れかけていた。

降谷の話によると、秋はスコッチの死体を見て絶望したらしい。心当たりはゼロだ。絶望の理由と記憶喪失とに密接な関係があるのではないかと考えてスコッチの軟禁を始めたわけだが、記憶喪失の手がかりを見つけようとしていただろうか。何も考えずに毎日を過ごしていた記憶しかない。

きつと、記憶を取り戻したらこの生活が終わってしまうから、無意識のうちに考えないようにしているのだ。

秋は存外スコッチを気に入っていた。

「まあ安心しなよ。仮に記憶を取り戻してもスコッチは殺さないから。公安の捜査官を保護していたとなれば、逮捕されたあと便宜を図ってもらえそうだし。だから自殺しようなんて考えないでね」

本音を伝えるのは気恥ずかしいのでそれっぽい理由をでっち上げて伝えるとスコッチは呆れ声を出した。

「アドニスって俺が自殺したがってると思ってる節あるよな」
「違うの？」

なにせ前例が山ほどある。

足音がバーボンのものだと分かっても彼は自殺をやめないのだ。そのせいで十五年を無駄にした。

しかしスコッチはきつぱりと秋の予想を否定した。

「意味もなく死ねないさ。というより、公安警察である限り無駄死にはできない。これでも大事な駒の一つだからな」

それならどうしてループの度に死んでいたのだろう。

（もしかしてどの周でも、自分が死ぬに値する状況だと判断したとか？ ……ま、いつか）

今回のスコッチは死なないと言っているのだ。

この日常はまだ続く。それだけで充分だった。

第5話

年が明けた。

伊達の尾行を開始して二ヶ月ほどが経ち、容疑者が全員出揃った時期に、再び全員で集まることとなった。

会場は毛利探偵事務所だ。

平日の探偵事務所は何かと便利なのである。

毛利小五郎は競馬かパチンコ、たまに依頼で出かけており、彼の一人娘は学校。妻とは別居している。

萩原は留守番という名目で事務所にいるが、大抵の依頼人は休日を訪れる。

結果、盗み聞きされる心配がなくて自由に使える空間ができあがる。

暖房がついた事務所内は暖かく、外気に晒されて凍りついた体がじんわりと溶けていく感じがした。

来客用スペースに近づく。萩原はテーブルに写真を並べている最中だった。写った人物は全員カメラに視線を向けていない。どれも秋が撮影した盗撮写真だ。

伊達殺害犯を炙り出すため、伊達と接触している人物の写真をひとしきり撮って萩原

に送ったのだ。並べられているのはそこからピックアップされた、どの周でもアリバイがない人物のものである。

こうしてみると随分と少ない。

「少ないな。十人もいないじゃねえか」

秋の心情を松田が代弁してくれた。彼は自分の前に大皿を引き寄せ、皿から一つサンドイッチをとる。

「あ、これ昼飯な。間宮の分もあるぞ」

松田が言った。続いて萩原が「ハムサンド食べやすいし陣平ちゃんの前に座れよ」と声をかけてくる。

大皿の横に置かれているのはポアロのロゴが刻印されたお手拭き。下の喫茶店でテイクアウトしたもののようだ。

秋がソファアームに座ったのを確認してから萩原が松田の問いに答えた。

「で、容疑者が少ないって話だっけ？　これは単に、周ごとの出来事が微妙に違うってループの特性のおかげだな」

「って言うのと？」

「ループのあいだ班長殺害は何度も起こってるけど、どれも同一犯なわけだろ？　つまりどこか一つの周で犯行不可能だと証明されてれば、その人物は犯人候補から外れる。

たとえば殺人事件を起こして犯行当日は刑務所にいるとか。ループのどこかで殺されたことがあるとか。伊達殺害が始まる前に自殺しているなんてのもあったな」

「具体例が物騒すぎない？」

「ま、班長の知り合いって事件関係者か米花町の人間が多いし」

「おい萩。逆に言えば写真の連中はどの周でもアリバイがなかったんだよな」

「そーそー」

脱いだコートをたたみ、おしぼりで手を拭き終わると同時に会話が終了した。秋は静かになったタイミングでハムサンドに手を伸ばして一口かじる。

(ん?)

咀嚼しながら引っかかりを覚えた。どこかで食べたことのある味だ。

記憶の糸をたどっていくと、やがて同じ味の正体に思い当たる。スコッチが作るサンドイツだ。レシピが同じなのだろう。

どこで食べた味なのか思い出そうと集中していたのを、味わっていると勘違いしたらしい。松田がニツと笑って得意げに言った。

「美味しいだろ。前に話した、新しく入ったバイトが考案したメニューなんだぜ」
「ああ、ポアロで作戦会議できなくなった原因の。頭が切れる探偵なんだっけ」

それにしても、どうして松田が得意げにするのだろう。彼が我が事のように自慢するのは古い友人関連だと相場が決まっているが、ポアロのバイトとは出会って日が浅いはずだ。

「……」

その様子を萩原がじっと見つめていた。何か考え事をしている顔だ。

不思議に思いつつ、わざわざ指摘するほど気になるわけではなかった。秋は彼の

反応に触れずにハムサンドを食べ進めた。

無言でサンドイッチを口に押し込んでいると、松田が声を発する。彼は容疑者の写真に添えられた説明文に視線を落としていた。

「ん？ この日下部誠つて容疑者、公安検事つて書いてあるじゃねえか。なんで捜査一課の伊達と知り合いなんだよ」

「ああ、日下部さんね」

松田の言う通り、彼の写真の下には「東京地検公安部所属の検事」と書かれている。

「班長が担当していた事件が公安警察の管轄になるってパターンが何度かあるんだよ。たまたま裁判に証人として出廷したり、事件の担当検事である日下部さんが話を聞きに来たりしてて、そこそこ関わりができてる」

「ああ、はじめは捜査一課の管轄だった事件を公安に奪われたーってやつか。確かによくあるパターンだもんな」

一言で公安と言っても、文脈によって意味が変わるので非常にややこしい。

警察庁公安部やら、警視庁公安部、検察の公安部なんかもあるから面倒なのだ。前提となる知識がないとごっちゃになる。

秋も訳知り顔で二人の会話に頷いているが、正直ちゃんと理解できていない。今度スコツチに訊こう。

「つていうか日下部さんつて何だよ。お前いつも容疑者はフルネームの呼び捨てで呼んでるだろ。『前』に関わりでもあつたのか？」

「いやあ、毎回世話になってるつていうか……。世話？ マッチポンプみたいなもんではあるんだけど……」

途端に萩原は歯切れが悪くなった。その上さりげなくスツと視線を左に移動させる。怪しい。

松田も不審に思ったらしく、萩原の方向に体を向けて追及するように目を細めた。

数秒無言が続いたが、やがて一步も引く様子のない松田に根負けした萩原が渋々口を割る。

「……毎回俺を取り調べるのが日下部さんなんだ」

「取り調べ!? どういうことだよ」

「テロ容疑でな。もちろん誤認逮捕だけ」

「ええ……探偵つて誤認逮捕までされるの? 採算取れなさすぎじゃん」

秋はドン引いた。

毎日のように殺人事件に巻き込まれ、月一くらいで爆破事件に巻き込まれるくせに誤認逮捕までされるとは。そのうえ同業者は江戸川コナンとかいう死神。

何があっても探偵だけにはならないでおこう。

「ん? ていうかさっきの発言を踏まえるとその犯人つて……」

「そう、実は日下部さんなんだ」

「そう、じゃねえよ! なに毎回逮捕されてやがる!」

「いやー、あれは不可抗力っていうか……」

彼らの話を聞いていると段々と記憶が蘇ってきた。

どの周でも日下部誠が起こしたI・O・Tテロは世間を賑わせているし、言われてみれば日下部が逮捕される前に探偵助手が犯人だと報じられていた。

(にしても、伊達航はたくさんの方安事件に関わっていて、容疑者に公安検事があるだなんて、公安って単語出てきすぎじゃない?)

「もしかして他にも公安と関係のある情報があったりして」

「あるぜ」

「あるんだ」

何気なくこぼしたら瞬時に反応された。会話の流れを変える機会をうかがっていたのだろう。

萩原はすばやくスマホを取り出して画面に指を滑らせる。数秒後、一枚の盗撮写真を表示させてこちらに向けた。伊達航尾行中に秋が送った元容疑者の写真だ。

「強いて言うならこの人だな。羽場ふみかず二二三一。公安事件をよく担当する弁護士事務員。

公安担当の裁判関連で班長とよく顔を合わせてるって間宮ちゃん報告してくれたけど、どの周でもそうなんだ」

「たしか伊達殺害が始まる前に自殺してるから容疑者から外れてる人だけ」

「ああ。毎回五月一日に拘置所だな。しかも自殺直前には異例の公安警察による取り調べが行われたらしい」

また公安警察だ。さすがに出てきすぎじゃないだろうか。

言いながら萩原も気が付いたらしく、数秒考えこむそぶりを見せてからポツリと呟いた。

「そーいや班長、どの周でも今回と同じくらいに公安事件に関与してたな。大規模爆発といい、米花町の事件は公安が関与しそうなものも多いから疑問に思ってたけど……」

「不自然ではあるよな。それに羽場が自殺しなかった周はないんだろ？ で、二月七日に交通事故で死ぬ場合を除いて、伊達が殺されなかった周もない。つまり羽場の自殺と班長殺害に因果関係がないとは言いい切れねえ」

松田が続けた言葉を聞くと、ますます疑念が深まる。しかしピースが足りないのか、それ以上真実に近づくとく気配はなかった。

* * *

二月七日。

秋はかじかんだ手をコートに引っ込めて白線の内側を歩く。早朝だからか道路はガラシとしていた。

反対側から歩いてくる背の高い男二人を確認すると、わざと顔をうつむける。同時にマフラーをたくし上げ、寒さを通り越して痛みを感じている頬をうずめた。頬の痛みが少し和らぐ。

そのまま彼らの方に早足で進み、わざと伊達にぶつかった。

「つと、すみません」

彼の第一の死因は居眠り運転による事故死。落とした手帳を拾おうと屈んだ瞬間でトラックに轢かれる。こうして手帳を取り出す前に動きを止めさせれば事故は防げるのだ。

現に、謝罪すると同時に背後でトラックが勢いよく通り抜ける音がした。

「なに?」

伊達がギョツとした。おおよそ予想がついていたのに思わず振り返ってしまった。

ガードレールにめり込んだトラックが見えた。まだタイヤは回ったままだ。

「高木イ! 救急車を呼べ!」

「は、はい!」

鋭く後輩に指示を飛ばしながら、伊達自身は運転手の安否確認に向かう。

閑静な朝の道路は一気に騒がしくなった。

慌てて消防署に連絡する高木の意識が完全にこちらから逸れた隙に秋は立ち去る。

どれだけ声を荒げても応答しない運転手を救出するため、伊達がトラックの窓ガラスを破る音が聞こえた。

事故現場から少し離れた位置にある裏路地に入ると、安堵の息を吐きながら帽子と眼

鏡を取る。端にフレームが入り込んでくる視界には慣れないが、尾行対象と接触するの
で念には念を入れたのだ。

これで今日、伊達航が事故死する未来は避けられた。

次に彼が死ぬ危険があるのは六月一日。殺害ラッシュの開始日である。ひとまず最
初の山場は乗り越えた。

簡易的な変装道具をバッグにしまいながら考える。

伊達は徹夜で張り込みをしていたはずだ。事故の後処理が終われば帰宅許可が降り
るし、翌日まで仕事はない。

（ま、家に帰ったら動きはないだろうけど一応夜まで近くで待機しておくか。相互監視
アプリで動きを確認したらすぐに尾行を開始できるし）

結果、伊達は夕方に出かけた。仮眠は数時間だけ。元気すぎやしないだろうか。本当
に自分と同じ年なのか疑問に思えてくる。

伊達は何度も道を折れた。遠回りになるはずなのに右左折する場合もある。わざと

ジグザグに歩いているのは明白だ。

（何度も角を曲がっているのにずっと足音がついてきたらすぐに尾行に気づける。尾行対策だろうな）

そろそろ手を打たないと、いつまでも着いてくる足音を不審に思われる頃合いだ。

秋は脳内でこの住宅街の地図を思い描いた。ここ周辺の入り組んだ道路はそこそこ交通量があるため、カーブミラーが完備されているはず。

ターゲツトが右左折を繰り返すとしても、カーブミラーが設置されているのなら話は簡単だ。

秋は靴紐をなおすふりをしてしやがみこみ、伊達が先に角を曲がるのを待った。伊達が次の道の中腹に差しかかったであろう頃に立ち上がると再び歩き出す。

これで彼との間にひとつ角を挟めた。あとはこの距離を保つだけだ。距離を空けておけば気配にも足音にも気付かれないし、万が一伊達が振り返っても角を挟んでいるので秋の姿は見つからない。

さらに、角を曲がった直後ならカーブミラーに伊達の姿が映っているため、彼がどちらの道に折れたのかわかる。後はこれをくり返せばいいだけだ。

しばらく歩いていっていると、カーブミラーが設置されていない曲がり角に行きあたった。秋は慣れた動作でスマホを取り出す。

このスマホは仕事用でもプライベート用でもない。相互監視アプリをダウンロードしてある、対伊達航海専用のスマホだ。その日尾行を担当する人物が所有する決まりとなっている。

ただ一つ新たにダウンロードされたアプリを開いて、伊達の位置情報を確認する。カーブミラーが設置されていない曲がり角の先で立ち止まったままだった。

コンクリート塀に寄りかかってスマホを眺める。しばらくすると伊達は再び動き始めた。

尾行に勘づいたわけではない。定期的に伊達はこのような動きをとるのだ。尾行を警戒しているのだろう。

そして、こういった日の行き先は決まっている。国営公園だ。

さらに十分ほど歩くと大きな公園にたどり着いた。

伊達とナタリーのクリスマスデート先であり、尾行中の秋と松田がお互いに虚無を抱えて歩いた場所である。

伊達が尾行に注意してここに訪れたのは三度目だった。前日も前々日も同じ時間帯に一人で公園に訪れて、しばらくの間何をするでもなくベンチに腰かけていたのだ。

鬱の前兆じゃないかと秋は思う。いくらタフネスな刑事でも、米花町の事件件数は多すぎるのだろう。

尾行に注意しているのは妄想と現実の区別がつかなくなっているのだろうか。だとすると重症だ。

黒の組織が未解決事件を増やしている自覚があるのでいたたまれない。

数メートル先から観察していると今回も伊達はベンチに陣取った。

秋は数メートル先の自販機で適当に飲み物を買ひ、自販機の横に置かれたベンチに座る。厚手のパンツ越しでもベンチが冷え切っているのがわかった。

手の中で先ほど買った缶コーヒートを転がしながら噴水を眺める。その奥にいる伊達を視界の端で捉えることに成功した。

切るように冷たい風が吹きとおる。伊達航はコートの襟を立てて顔をうずめた。

伊達がかすかに動いたおかげで、彼の影になっていた男の後ろ姿が現れる。伊達の背後に座った、深緑色のスーツを着た男だ。仕事終わりに訪れたサラリーマンだろうか。

(……………ん?)

秋は何か引つかかかって眉根を寄せた。しばらく考え込んで違和感の正体を探り当てる。

(あのスーツの男、今までも同じ場所にいなかったっけ)

思い返してみれば、前日も前々回も、深緑色のスーツ姿が伊達の後ろにあった。

秋は立ち上がる。空になった缶をゴミ箱に放り投げると、大きく回り込んで伊達の背後側に出た。つまりスーツの男の顔が確認できる位置に移動した。

少し離れた先でスマホを取り出す。

風景の写真を撮るふりをしてスマホを掲げ、彼の顔を画面に入れた。スマホのカメラをズームにすれば虫眼鏡のように男の顔が拡大される。

シャッターを押しながら小さく目を見開いた。

(クリスマスデートのとき、伊達航の隣に移動した人と同一人物だ!)

それだけではない。

遠目からではわからなかったが、スーツの男は一人で座っているにも関わらず口を動かしていた。

秋には伊達も同じ動きをしているはずだと確信があった。

SNSアプリを開いて先ほどの盗撮写真と共に、彼に見覚えがないかを尋ねるメッセージを送る。

萩原からの返事はすぐに来た。

——警視庁公安部所属の風見刑事だ

また公安が登場した。

第6話

名前の由来を教えてもらって発表しましょう。

小学校低学年の時に与えられた宿題だ。

幼なかった秋には、その宿題が一条の光に思えた。

小走りで児童養護施設に向かいながら、過度な期待を抱かないよう自分に言い聞かせる。それでも胸が浮き立ち、自然と下校の足が軽くなっていた。

秋は親の顔を知らない。物心ついた時には児童養護施設にいた。だから秋は、自分は捨てられたのだと漠然と考えている。

それでも、もしかしたら施設に赤ん坊の自分を置いていく時、母親が「この子の名前は秋です」と職員に伝えていたかもしれないじゃないか。名前にはこんな願いを込めていて、こんな子供に育ててほしい。だからどうぞこの子をよろしくお願いしますと職員に頭を下げていたかもしれない。

今日、自分が愛されていた証拠が見つかるかもしれない。

砂だらけの玄関で靴を脱ぎ散らかす。

秋は一直線に施設長の部屋に向かった。

施設長は毎日周囲に当たり散らしている酒浸りの駄目人間だ。極力近づきたくない相手だが、彼は最も施設に長くいる人物であり、秋の親と会っている可能性がある唯一の職員でもある。背に腹は変えられない。

廊下を歩きながら、ランドセルを体の前へ移動させプリントを取り出す。無理やり取り出したせいで少しよれた。

施設長室の扉を開ける。施設長は椅子に座って酒瓶を仰いでいた。

彼はこちらに向かつてギョロリと目玉を動かす。血走った目も相まって恐ろしい形相だ。

いつもなら腹いせに殴られる前に逃げ出すところだが、秋はグツと恐怖を堪えて足に力を入れた。

「えっと、学校から宿題が出されて。みんなの名前には素敵な願いが込められてるって先生が……」

気持ちちはやって言葉がとっ散らかる。要領を得ない秋の説明が終わる前に、施設長は立ち上がってズカズカと扉まで歩いてきた。

机に置かれたままの酒瓶は空っぽ。新しい酒を取りに行くのだろう。

施設長は部屋を出るついでに、秋が握りしめているプリントを覗きこむ。

「名前の由来だア？ んなもんお前が施設の前に捨てられてた季節が秋だからに決まってるだろうが」

秋は凍りついた。先ほどまで熱を帯びていた頬が急激に冷める。

施設長は様子が百八十度変わった秋を一瞥すらせず部屋から離れていった。

秋はその場に立ち尽くして、しばらく動けずにいた。ずっとぼんやりしていた気がする。記憶が曖昧だ。

飛ばした意識が戻ったのは、横から声をかけられたからだった。

「ああ、その宿題が出される頃か。だからあんなに期待を顔に滲ませて帰ってきたのかい」

いつの間にか秋の横に立っていたのは中年の女性職員だった。手にはモツプを握っている。掃除に来たのだろう。

秋はゲツと顔を歪めた。彼女は意地が悪く、人を落ち込ませるのを生きがいにしていくような人間だ。できるだけ近づきたくない職員の一入である。まあ、この児童養護施設には近づきたくない大人しかいないのだが。

女性職員はニイッと意地の悪い笑みを浮かべて、楽しそうに問いかけた。

「知ってるかい？ 赤ん坊が捨てられる時期が一番多いのは春なんだよ。暖かくなってきた頃合いで、暑すぎて熱中症になる危険もないから、見つけてもらえるまで赤ん坊が生き延びやすいって親は考えるんだろうさ。」

だからね、朝晩の冷えが強くなった時期に捨てられたアンタは、そういった些細な気遣いすらしてもらえなかったんだよ」

一番初めに訪れた自分の転換期を挙げると言われたら、秋はこの出来事を選ぶだろう。

幼いときに自分は誰からも必要とされていない人間だと突きつけられたからこそ、彼

女は自分を大きく見せることを覚えた。

偉そうにふんぞり返って自画自賛していれば幾分か息がしやすくなる。意味もなく攻撃されたり蔑まれる機会はグツと減るし、そう振舞っていれば自分は素晴らしい人間なのだと思います。

そうやって思考を停止させるのは何よりも楽だった。

* * *

伊達殺害ラッシュ阻止のために他メンバー二人と顔を合わせた際に、とんでもない事実が発覚した。萩原も松田も割と自炊をするタイプだそうだ。料理の腕もそこそこだという。

秋は慌てた。

なにせ、彼女の料理スキルは初心者も同然。得意料理はカップラーメンで、レトルト食品を温めるのすら面倒がる人間だ。

まずい。非常にまずい。

もしも話の流れで最近作った料理の話になって、写真を見せ合うような事態にでも発展したら完璧人間という自分のイメージが崩れてしまう。どうせそんな事態にはならないだろうが、万に一つでも可能性があるのなら潰さなくてはならない。「間宮秋」のイメージを守るのは何よりも大切なのだ。

秋は苦渋の決断の末、スコツチに助けを仰いだ。

一緒に生活している以上彼には情けない部分も見られてしまっている。今さら取り繕っても意味がないし、教えを乞う相手としては最適だろう。さらに言えば、イメージが崩れそうな事態に何度も直面しているのに、彼が態度を変えないのも後押しの要因となっていた。

他人に弱みを晒すのは身が裂けるほど嫌な行動の一つだが、萩原と松田が持っている「間宮秋」のイメージが崩れる方が怖い。

もしもそれが原因で、今まで必死に取り繕ってきた幻影が解けたらどうする。彼らは秋に失望して距離を取るかもしれない。

二人はたったそれだけのことで馬鹿にしてくる人間ではないと分かっているが不安は増す一方だった。だって本当の自分は何の価値もない薄汚い犯罪者——

ダアン！

秋は勢いよく包丁をまな板に叩きつけた。必要以上の力を込めて切られた白菜が真つ二つになる。

現在、秋はスコッチによる料理の監修を受けている最中だった。

こうなつた経緯を思い返していたら嫌な考えがよぎつたので、思考を切り替えようと力いっぱい包丁を振り下ろしてみたが、そう簡単には切り替わってくれないらしい。マインナスな思考は依然として頭の片隅に居座り、精神を蝕んでくる。

（人間は同時に二つのことを考えられないって言うし適当に雑談するか）

記憶をたどつて話題を探す。公安の詳しい解説を聞いたかっただのを思い出した。

秋は包丁を動かしながら尋ねる。

「ところでさー、公安つて結局なんなの？ いろんな意味がありすぎて訳わかんないんだけど」

「公安？ そりやまたなんで」

「個人的に調べてる事件に公安が関わってるっぽいんだよね」

「……へえ、それってどんな事件？」

「組織とは一切関係ないよ。具体的にどんな事件かって聞かれると何から話せばいいのかわからないけど」

言外に相手はバーボンではないと伝えると、スコッチはあからさまにホツとした。緊張による強ばりが消えて、普段のやわらかい表情に戻る。

「あそこらへんの用語ってややこしいもんな」

その言葉を皮切りにスコッチは説明を始めてくれた。

彼はすでに作業を終わらせており、タオルで手を拭いている段階だ。

歪な形の白菜の切れ端を量産している秋とは大違いである。

「ええっと、まずは公安警察からな。一般的に公安警察つてのは警察庁公安部と警視庁公安部をひつくるめた言い方なんだ」

「へー」

風見裕也とスコッチの所属が警視庁公安部。バーボンは警察庁公安部だ。

公安Ⅱやばい事件を担当するところ、くらいにしか理解していないせいで違いがわからない。

「警察庁と警視庁って何が違うの?」

「県警はわかるか?」

「県ごとに置かれてる警察機関」

「そう。長野県警や大阪県警ってやつだな。全部で四十七個ある。その東都版が警視庁で、すべての県警をまとめ上げているのが警察庁」

「なるほど。すつごく簡単に言うると警察庁公安部のほうが警視庁公安部よりも偉くて、色々と指示を出したりしている、と」

つまり警察庁公安部なんちゃらかんちゃら所属のバーボンの方が、警視庁公安部所属のスコッチよりも偉いのか。

ついでに伊達との接触が確認された公安警察官、風見裕也はスコッチと同じ所属先。

「まあそうだな。で、公安部の意味はわかってる？」

「……ほら、なんか、あれだ。一般的な事件じゃなくって黒の組織とかを担当するようなところでしょう」

「大体合ってる。公安部ってのは公共の安全の維持を目的とする部署のことな。国家の秩序を脅かす事案を担当したり、そういった事件を未然に防ぐために動いたりしてる」

「ああ、だから黒の組織。規模も幹部も頭おかしいし」

「幹部のアドニスがそれ言うか？」

「まともなのは私くらいなんだよ」

やれやれと言いたげに肩をすくめてから、スコッチの指示通り鍋に具を敷き詰め始める。一番下に肉類、その上に豆腐や野菜。

「あとは味付けして煮るだけ。簡単だろ」

事もなげに言い放ったスコッチに、秋は信じられないものを見る目を向けた。包丁を使う料理は総じて面倒だという自明の理を彼は知らないのだろうか。

(にしても)

公安の解像度が上がった今、風見と伊達の関係性はますます不明になった。公安部と捜査一課の仕事はかけ離れている。定期的に接触するとは思えない。

(それに二人の接点を隠しているから別人のフリしてたんだろうけど……なんで?)

そこまで考えて思い当たった。

秘匿性が高い大事件を担当している公安警察は、所属している警察官だけで手が足りるとは思えない。特に専用の知識、立場が必要になることもあるだろう。

「……もしかしてだけど、公安警察が一般人や別の部署の人間——例えば捜査一課の刑事——に協力を仰ぐことってあったりする?」

「ああ、公安刑事に協力する民間人はいるよ。協力者って呼ばれてるんだ。特殊な技術や知識、立場を持つてる人とか。後は調査対象と親しい人なんかも協力者だったりするな。捜査一課のほうは分からないけど、公安刑事が動くよりも捜査一課の人間を足にす

るほうが適している場合なら、協力を仰ぐこともあるんじゃないか？」

協力者。きつと伊達航の立場はそれだ。

伊達と風見の接触を確認してすぐ、秋は彼らが使用しているベンチ裏に録音型盗聴器をしかけた。その盗聴器が拾った彼らの会話は二パターンのみ。

特定の殺人事件に関わるよう風見が指示しているか、伊達が監視相手の経過報告をしているかのどちらかだけだ。

伊達が公安の協力者なら、あの会話内容にも納得がいく。

(伊達が監視してる相手の正体とかは、萩原、松田との作戦会議で考えればいつか)

彼らと話し合うときに知識が不足していると大変なので、秋は再び質問を投げかける。

「公安警察が監視するとしたらどんな人物？」

「国家を揺るがすような大事件を起こしそうな不穏分子や、放っておくと面倒そうな団体。ようするに黒の組織みたいなやつだよ」

なるほど。

伊達が団体全体を監視しているとは考えにくい。

せいぜい団体に所属しているうちの一人か、公安に危険視される経歴がある人物の監視を請け負っているはずだ。

伊達航周辺に該当する人物はいなかっただろうか。

秋は尾行によって確認した伊達周辺の人物を思い浮かべ、すぐに諦めた。最終的に絞られた容疑者とはかく、周辺の人物となると膨大な数だ。いちいち覚えていない。

その代わりに、容疑者の一人である日下部誠の存在を思い出した。

彼の職業は東京地検公安部所属の検事だ。ここでも公安が出てきているが、名前の響きからして公安警察とは別物な気がする。

もしも彼に焦点が当たっても今のままでは話についていけない。

秋は次の質問をぶつけた。

「次のしつもん。東京地検公安部ってなに？」

地検——地方検察庁。日下部の職場は東都の検察庁だ。検察庁とは検察官の職場で

ある。そこまでは分かる。

が、秋は検察官に対して「弁護士ドラマに出てくる弁護士の敵役」程度の認識しか持っていない。

さらに公安だとか言われても理解が到達しないのだ。

「犯罪者が逮捕されたあと、警察が捜査した結果を検察に送って、検察はそれを受けて改めて事件を調べるだろ。容疑者を起訴するかどうかはこの検察の調べを踏まえて、検察官が判断するのが普通。検察公安部つてのは、その中でも公安事件を担当する場所だよ。

ほかに公安部の場合は警察と検察のパワーバランス問題とか色々あるけど、それはいいや」

「なるほど、なるほど」

秋は相槌を打ったついでに鍋へ視線を落とした。具材の間から小さな空気の泡がポコポコと出ている。

「ところで素朴な疑問なんだけど、弱火のところを強火にしたら時間短縮できたりしな

いっ。」

「悲惨なことになるから絶対やめろよ」

「経験あるの？」

「親友が同じことをやったんだ。そいつは料理のさしすせすすら口クに言えなかつたけど、今では料理が得意になってるよ」

「ふーん、この私と同じ発想をするなんてさぞかし優秀な人なんだろうね」

秋はドヤ顔で言い放った。すでに普段の調子を取り戻している。

彼女が反応に困る言動をするはいつものことなので、スコッチは慣れた様子で話題を
変える。

「ていうか、なんでそんなふわっとした理解で黒の組織でやってけたんだ？」

「NOCの始末や各国捜査機関の相手は私の仕事じゃないしー。なんとなくて事足りるんだよ。殺されない程度の働きをするのが目標だからね。むしろ組織のために勉強するとか癪にさわる」

「ふーん。じゃあアドニスの仕事って？」

「ほら私、そこにいるだけで充分だから」

「やっぱり教えてくれないかー」

スコツチはケラケラと笑った。

* * *

次に伊達殺害防止メンバーで集まったのは三月半ばだった。前回から今回までの間、萩原や松田と別々に落ち合うことはあつたが、全員の予定が合う日は皆無だったのだ。それもこれも米花町の事件発生率のせいである。

松田と初対面のときに利用した居酒屋の個室。キャベツの代わりにネギを使ったお好み焼きのようなものを食べて、秋は首を傾げた。

「このねぎ焼き、前よりもおいしくなっていない？」

「そうか？ 変わらねえだろ」

ねぎ焼きだけでなく他の料理も美味しくなっている気がするのだが、二人ともピンと来ていない様子だった。

注文した最後の品が届いたところで萩原が口火を切る。

「んじゃ、さつそく情報の整理を始めようぜ。六月一日以降に班長の命を狙ってくる犯人がやつとわかつたんだから」

萩原に視線を向けられて秋は箸を置いた。

「前会った時に軽く説明したけど、偶然を装って伊達と定期的に接触してる人がいたんだよ。萩原に確認したら公安刑事の風見裕也だつて判明した。」

二人が落ち合うのは月に一回くらい。国営公園の決まったベンチで背中合わせになるように座ることで、他人同士にカモフラージュして会話してる。なにせ私は非常に優秀だから、これは何かあるだろうってことでベンチの裏に録音型盗聴器をしかけてみた。いやー、この動きの早さ我ながらすごいよね」

萩原と松田は白けた目を向けてきた。

この様子だと盗聴器を手に入れた手段に言及されなさそう。言及された場合に備えて、安室透の名前を出す許可を取り付けておいたのに。

「その音声がこれね」

安室透の名前を出さなくてもいいならそれに越したことはない。秋はさっさとスマホを操作して、スマホに移しておいた音源を再生する。

遠くから聴こえる子供たちの笑い声をBGMに、風見の硬い声が出た。

『米花町のゲーム会社社長殺人事件に関われ。容疑者として浮かび上がっている人物は、おそらくNAZU不正アクセス事件の犯人だ。ふざけてアクセスした証拠を見つけられ、口封じ目的で衝動的に殺したんだろう。犯人が不正アクセス事件にも関与していたのが確定すれば、あの事件は公安の管轄になる』

『そうすれば監視対象に接触する機会が得られる、と』

『ああ』

『よし来た、上手いことやってみる』

『頼んだぞ。次に「彼」と「彼女」の動向だが——』

『今のところ不審な動きはないぜ』

『そうか。引き続き監視を続行するように』

ガサリと盗聴器が音を拾った。風見が立ち上がるうと身じろぎしたらしい。そのタイミングで伊達が声をかける。

『なあ、あいつらは元気にやってるか?』

『……必要以上の情報は教えられない』

今度こそ風見が立ち上がる音が聞こえた。続けて遠のく足音。

秋は停止ボタンを押して、音声から読み取れた内容を羅列する。

「別の日の会話内容も似たり寄ったりだし、風見、伊達の間で交わされる会話パターンは二種類だけなんだよね。

一、特定の殺人事件の調査に携わるよう、風見が伊達に指示を出している。二、伊達が監視対象の動きを風見に報告している。その監視対象つてのが『彼』『彼女』って呼ばれている人物。別の報告では『彼女』の情が『彼』に移つてるとかなんとか話してたよ」

秋は一呼吸置くと確信を持って尋ねた。

「……今までの周で、萩原は伊達と風見の接触到気づいていなかった。そうだよな？」
「ああ」

「つまりこの新事実と、今まで尻尾すら掴めなかった伊達航殺害犯とは関係があると
考えて間違いない」

『彼』と『彼女』の正体が割り出せりや真相にグツと近づくな。萩、公安が協力者に監視を命じそうな経歴を持った人物、班長の近くにいたか？」

協力者。松田は伊達のことをそう呼んだ。

萩原もその呼び方に引つ掛かりを覚えたそぶりを見せない。

相談するまでもなく、三人は各々でその答えにたどり着いたのだ。人目を憚んで公安から指示を出される立場なんて一つしかない。

互いに相手の実力はある程度把握している。この件で意見のすり合わせを行う必要はないだろう。

全員がそう判断したため伊達が協力者である事実はサラッと流され、話題は監視相手

の心当たりへと移った。

「二人だけいるぜ。羽場ふみかず二二二。裁判官を志していた司法修士生だったけど、不採用を言い渡された際に所長に食ってかかり、その態度が自己満足な正義感の暴走であるとして、裁判官はおろか弁護士になる道も断られた過去がある。二度目の暴走を懸念した公安にマークされてもおかしくない。

現在は弁護士事務所の事務員として働いてるから裁判関連で頻繁に班長と顔を合わせているけど、班長殺害ラッシュ前に自殺しているため容疑者から外されてた」

「なるほど、これが『彼』か。そーいや萩、お前、羽場は拘置所で自殺するって言ってたか？ 逮捕された理由は？」

「窃盗のためにゲーム会社に不法侵入したところを現行犯逮捕。でもなぜか公安警察による取り調べが行われて、その直後の五月一日に自殺、つてのが表向きの説明だけだ……」

「本当は公安が関与するだけの理由があったんだろうな」

「ああ、それに現行犯逮捕なんてタイミングが良すぎる」

「班長のリークがあったから逮捕に漕ぎ着けたって？」

「そうかもしれないし前々から公安が羽場を見張っていただけかもしれない。でも、問

題なのはそう考えても筋が通るってことだ。羽場の逮捕、ひいては自殺の原因が班長だと考えた犯人が班長殺害を決意してもおかしくない。

しかも羽場の命日は五月一日で班長が殺されるのは毎月一日。月命日だ」

萩原の指摘で疑惑は確信に変わった。動機は羽場の自殺で間違いない。

人物相関図を頭に思い描いてみる。

伊達航は公安警察の協力者で、羽場二三一を監視していた。後に羽場が自殺して、伊達が彼の監視を公安警察から命じられていたことを何かしらの理由で知った犯人が伊達を殺害。

あらかじめスコッチの解説を聞いていなかったら話の内容を理解できていなかっただろう。なにせ協力者だとか公安警察だとか、普通に生活する分には知らなくても問題ない単語ばかりが出てくるのだ。

そこまで考えたところで松田に声をかけられる。

「ところで羽場が逮捕されたってゲーム会社、盗聴した会話に出てきた場所と同じじゃねえか？ ほら、殺人事件現場の」

「だよ。羽場に接触するために伊達が事件に携わるよう命令されてたわけだけど

……」

口に出しながら釈然としなさが深まっていった。

刑事の伊達と事務員の羽場とを殺人事件がつなぐとすれば、接点は裁判所しかない。

羽場の職場が犯人の弁護を担当し、初期の捜査に携わっていた伊達が証言台に立てば、そこで接点が生まれる。逆に言えばそれ以外の接点はないはずだ。

しかし羽場の職場が公安事件の弁護を頻繁に行うと言っても、警察が捜査している段階では、どの法律事務所が犯人の弁護を行うかなんて分かりっこない。

そんな不確定な状態で公安が指示を出すとは思えなかった。

秋がその疑問をこぼせば松田も肯定する。

「捜査段階で、誰が被疑者を弁護することになるかなんてわかりっこねえよな」

「……弁護する人間を公安が斡旋してない限りは、な」

確信をにじませた声でした。

萩原は真剣な表情で告げる。

「もう一人の監視対象であり、羽場の上司でもある橘たちばなきょうじ境子は公安の協力者だ」
「はあ!？」

松田が大きな声を出し、秋は口に運んでいた卵焼きをポトリと落とした。

突拍子もない主張に度肝を抜かれたが萩原が言うのだから根拠があるのだろう。秋はひとまずそう自分を納得させて、橘境子のプロフィールを思い返す。

橘境子。十人にも満たない容疑者の中にいた人物だ。

公安事件を担当することが多い、基本的に負け続けの弁護士である。

橘法律事務所の所長で、部下は事務員の羽場二三一のみ。彼とは恋人関係でもある。

頼りない笑顔をよく浮かべている彼女にはへっぴょこ弁護士の印象しかない。どれだけ想像を働かせても、公安の協力者として暗躍する彼女の姿は思い浮かばなかった。

「橘境子ってほぼほぼ裁判で負けてるだろ」

「うん」

「だな」

容疑者の情報はひとしきり共有してある。

秋と松田はそろって頷き返した。

「さらに調べてみると彼女が担当して負けた——つまり被告人に有罪判決が出た事件は、公安警察が有罪に持って行きたかったであろう事件ばかりなんだ」

「おいおい、じゃあなんだ？ 橘境子は公安に指示された通りわざと負けてるって言うてえのか？」

それは、いささか発想が飛躍していかないだろうか。

異議を唱えた松田と同じく秋も眉をひそめた。

訝しむこちらの反応は想定内だったらしい。萩原は二人の反応にたじろぐでもなく、その結論に至ったわけを話す。

「ああ、根拠は二つだ。まずは『前回』以前のすべての周で、俺が誤認逮捕された時の橘境子の行動。『サミット会場爆破を事故として処理させないためにひとまず用意したでつち上げの犯人を有罪にしないよう、送り込まれた協力者の弁護士』としか思えない行動を彼女はとっていた。

その時点で察してはいたけど、今回改めて彼女を調べて、さらなる新事実が判明した

ぜ。これが次の根拠。羽場が橘法律事務所就職するのに、公安が誘導した形跡が見られた。羽場の監視役はもともと橘境子の役目だったんだろうな」

「……しかし橘が羽場と恋人関係になつてしまい監視能力に不安が出た。だから班長が投入された、つて？」

「ああ」

確かにそれだけ証拠が揃っていけば、橘境子は協力者なのだとなつて納得するほかない。

「公安警察が担当した事件の犯人を橘境子が弁護することになつて、初期に事件の捜査をしていた班長も裁判に関わつたりする。結果、班長と橘境子、羽場二三一の接点が見られる」

萩原の締め言葉で全てが繋がった。

（そうやって伊達が二人を監視できる状況を作り上げてるのか……！）

公安警察から目をつけられている羽場二三一。

彼の監視を命じられていた公安の協力者が橘境子。監視だけでなく、公安警察の思い通りに裁判を進める手助けもしている。

しかし二人が恋人関係になり監視能力に不安が出たため伊達が投入された。

伊達が新たな監視員なのだとか橘境子が気づく可能性は十分にある。自身も協力者なのだ。風見と伊達が落ち合っていると、場所を目撃すればすぐにピンとくるだろう。

そして羽場の逮捕と自殺の原因は伊達なのだと思います。犯行に及ぶ動機ができる。

「萩原、伊達はどの周でも『今回』と同じくらい公安事件に関わってるって言うてたよね」
「ああ。言い換えると被告人の弁護を担当する橘境子と毎回関わりがあるってことになる」

「しかも橘境子と伊達の関係性は薄いから今までの周では容疑者として扱っていなかった。当然、伊達殺害時にアリバイがあったかどうか調べていない」

「そうだな」

初めて三人で集まった日に導きだした犯人の特徴。

一つ、伊達を殺す強い意志がある。

二つ、すべての周で伊達との関わりがある。

三つ、ループ中に起こった伊達殺害の際にアリバイが確認されていない。
橘境子はすべてを満たしていた。

第7話

「犯人は橘境子だ。そして動機は羽場の自殺。となればやることは一つ」

「羽場の逮捕を阻止する」

「え、」

萩原と松田が導き出した答えを聞いて秋は目を丸くする。

彼らが当たり前に導き出した方法を自分は思いつきすらしなかった。犯人が判明したらずぐに殺すつもりで、どのように橘を殺害するか考えていなかったからだ。

「……あ、ああ。羽場の逮捕ね。逮捕後の取り調べで何かがあつて自殺するんだから逮捕さえ防げば羽場は自殺せず、結果として橘境子の動機も消える。うん、私も同じこと考えてたよ」

秋はとっさにごまかした。

松田と知り合つて五ヶ月、萩原に至つては半年にもなる。

彼らとの差異を自覚するには充分な時間だ。

二人と一人との間には決定的な違いがあるし、それが埋まることはない。

それでも表面上は彼らと同じでいたかつた。

自分を偽っている緊張からか、ペラペラと言葉が出てくる。

「じゃあ羽場のゲーム会社侵入を止める感じ？　まだ動機もわかってないのに？　悠長に調べてる時間なんてないでしょ」

「動機は橘境子だろ。彼女は羽場にとって恋人であると同時に、行く宛のない自分を雇ってくれた恩人のはず。その恩人は受け持つ仕事すべてで惨敗してる」

羽場はどうすると思う？　と言いたげに萩原が視線をよこした。

「公安から指示されてわざと負けているわけだけど、裏事情を知らない羽場はどうかしたいって考える……？」

羽場には自己満足的な正義感を暴走させた過去がある。昔と同じよう暴走して、橘の勝利のために犯罪を犯してもおかしくない。

秋がそこまで思い至ったところで萩原が締める。

「現在橘が弁護してる被告人が有罪だつて決定的な証拠を隠滅するためにゲーム会社に侵入して逮捕されるって流れだろうぜ」

次に口を開いたのは松田だった。

「問題はどうかやって防ぐかだよな。班長殺害みてえに、阻止しても阻止しても別の方法で決行に踏み切られちゃイタチごっこにしかならねえ」

「それは問題ないぜ。確かに何度試しても変わらない事象は存在していて、それらには決まって明確な意志が介在している。例えば陣平ちゃんの仕事で大阪に行くとして、乗るはずだった新幹線が爆破されていたら自動車や飛行機で向かうだろ」

真つ先に思いつく具体例が新幹線の爆破だなんて、米花町で探偵をやっているだけある。とても嫌な具体例だ。

「一方、大阪での用事がそこまで気が進まないものだったら？ まあいいかってなるはずだ」

萩原の言う「明確な意志」とは、先程の例での仕事にあたる。

相手に明確な意志があれば、結果に行き着く道すじの一つを潰しても、別の手段を探されて前と同じ未来へと向かうだけ。

反対に明確な意志が存在しない事象なら、過程のどれか一つを潰すだけで未来を変えられる。

「羽場はゲーム会社侵入に対して確固たる意志なんて持つちやいない。恋人を裁判で勝たせてあげたいから証拠を握り潰そうってひらめいた末の犯罪行為なんだ。常に迷いを孕んでいたに決まっている。ていうかそうじゃなきゃ怖えよ」

だから羽場のゲーム会社侵入は阻止できる。侵入を試みるたびに邪魔が入ればやがて諦めるだろう。

これが最終的に出された結論だった。

後は簡単だ。組織の下っ端に命じて、ガラの悪い連中を現場周辺にたむろさせればいい。

今までは萩原たちに繋がる情報を残したくなくて組織の力を使えなかったが、ゲーム会社と彼らの接点はゼロ。たどり着けるわけがない。

……簡単だと思っていた。

しかし羽場はゲーム会社に侵入して逮捕され、最終的に自殺した。スコッチの自殺と同じく、すぐに解決とはいかないらしい。

* * *

羽場の逮捕防止作戦が失敗に終わった今、残された手段はただ一つ。

伊達を轢き殺そうと車で突っ込んできた桶を捕まえて、今までの推理と先ほど伊達を殺そうとした事実を突きつけ、混乱に乗じて自首を引きだす計画だ。

六月一日。早朝。

秋はしきりにスマホ画面へ視線を落としながら住宅街にある道を歩いていた。

曲がり角に到着すると奥を確認してスマホに視線を戻し、ため息まじりに首を振る動作をくり返す。はたから見れば、迷ってマップと睨めっこしているように見えるはずだ。

もちろん本当に迷っているわけではない。犯人探しのカモフラージュである。

（伊達は警視庁に向かう途中、ここらで轢き殺される。犯行時間まであと三十分くらいか。それまでに近辺で待機している犯人の車を見つけないと……）

大通りからひとつ逸れたこの道は、車一台通るのがやつとの細さだ。

入り組んだ場所にあるからか、人影も通りすぎる車もない。

伊達が登庁するときに通る道の中で、もつとも目撃者が出なさそうな場所を殺害現場に定めたのだろう。

曲がり角の先を確認しながら一本道を歩いていると、やがてそれらしき車を発見した。黒いスポーツカーだ。

角を曲がらず住宅の影に隠れる位置に陣取って、スマホを操作する。萩原は数コールで電話に出た。

「殺害現場から右折したところに停車してる。乗ってるのは黒いスポーツカーだね。車

内に橘境子がいるかどうか確認しようか？」

『いや、前と同じなら性別すらわからないくらい変装してるはずだ。計画通りナンバープレートを確認して発信機を取り付けたら合流しよう。そこからさらに右折した道に移動しとく』

「わかった」

秋はスマホをポケットに滑り込ませると角を曲がった。

チラリと太陽に目をやる。ここ数日で日差しの強さが増していた。

嫌そうに顔をしかめてから道路沿いに視線をさまよわせる。スポーツカーの少し先にある自販機を発見すると表情を明るくした。

これで、思いのほか強い日差しにやられて飲み物を求めているように見えるはずだ。

気持ち早足で自販機に向かう。

その途中、スポーツカーの真後ろに差しかかったところで小銭入れを取り出してポタンを外す。

途端、手を滑らせた。

小銭がアスファルトに散らばる。狙い通り、車の下にも小銭がいくつか転がっていた。

秋はしゃがみ込み、小銭を拾うふりをして車の裏側に発信機を取り付ける。ついでにナンバープレートを盗み見た。

カモフラージュのために購入した飲み物を片手にぶら下げながら萩原の車に近づく。細い道に停車している車は一台だけだったのですぐに見つかった。

スポーツカーだろうか。シュツとしたデザインである。バーボンが乗っている車と同じ種類かもしれない。

秋は助手席に乗り込んだ。

「ドリンクホルダーにペットボトル置くね」

「いや、ちよーつと運転が荒くなるかもだしグローブボックスにしとけよ」

秋は言われた通りペットボトルをグローブボックスに入れて、ついでに中から預かってもらっていたタブレットを取り出した。

タブレットを操作して、赤いランプが点滅する画面を開いた。先ほど取り付けた発信機の現在地が表示されているのだ。

タブレットを膝に置く。

今度はスマホを取り出して通話アプリを開いた。発信機が動いたらすぐに松田へ連絡するためだ。

準備を終えてタブレットへ視線を落としたところで、運転席に座った萩原が言った。「シートベルト」

「……はいはい」

面倒だが大人しく従う。

シートベルトをつけ終わってスマホを持ち直したと同時に、ずっと鼻をくすぐっていた香りの正体に思い当たった。女性ものの香水だ。それも複数。

秋が鼻をひくつかせたのに目ざとく気づいた萩原が問いかけてくる。

「悪い、香水の匂いきつかった？」

「気になる程ではないけど、恋人を乗せるときには気をつけたほうがいいかもね」

「それなら問題ないな。今フリーだし」

「私と松田に伊達の尾行を押し付けてクリスマスデートした相手は？」

「いやあ、タイミングに恵まれなかったっていうか……」

やはりデートだったらしい。

秋たちが虚無を抱えながら伊達の尾行を行っている間、萩原は女性と楽しく過ごしていたのが確定した。

秋はわざとらしく悲しそうな顔を作ったため息をつく。

「松田は怪しげなキャッチに引っかかったって汚名を被ってまで伊達の尾行を遂行し

たっというのに」

「その汚名被せたの間宮ちゃんだけどな」

「その間萩原は女性とよろしくやっていて、結局振られたと。『車と女の扱いなら負けな
いぜ』とか言ってたくせに」

「だーかーらー、あれはタイミングが悪かったんだって。仲が深まる前に探偵だつて知
られちまって、デートのたびに事件に巻き込まれるのはお断りよ！ つてビンタされ
さー」

「探偵の風評被害がひどい」

秋は遠い目をする。その瞬間、

「——動いた！」

発信機が動いた。

萩原がアクセルを踏み、秋はスマホの通話ボタンを押す。画面に表示された発信相手
は松田。

松田は今朝、伊達と一緒に登庁する約束を取り付けている。秋からのコール音が鳴つ
たらすぐさま周囲を警戒し、轢き殺そうと突っ込んでくる自動車から伊達を庇うため
だ。

殺害に失敗した犯人は伊達を深追いせずすぐに撤収するので、そのまま犯人を追いかけて確保すれば作戦は成功する。

エンジンが唸った。萩原が勢いよくアクセルを踏み込むと、反動で秋の体が背もたれに沈む。

街並みが飛ぶような速さで後ろへ流れていく。すぐに殺害予定現場に到着し、一瞬で通り過ぎた。

その一瞬で窓の外を確認する。突然の出来事に目を丸くしている伊達と、彼の腕を引つ張った状態の松田が見えた。二人とも無傷だ。ひとまず第一条件はクリアした。

「いた！ 黒いスカイライン400R！」

叫ぶと、萩原がさらにアクセルを踏み込む。気持ちのよい高音とともにスピードメーターが勢いよく回った。

相手は追跡されていることに気が付いたらしい。向こうもスピードを上げて、再び両車の距離が離れる。

萩原がチラリと右前を一瞥した。

軽自動車を通れるか通れないかくらいの細さの路地がある。どう考えても萩原の車

は入らない。

しかし萩原は右手にハンドルを切った。

「間宮ちゃん、舌嚙むんじゃないぞ」

普段の間延びした話し方からは想像がつかないほど真剣みを帯びた声だった。

思わず萩原を見る。彼は眼光をかつぴらいて狂気的な笑みを浮かべていた。

(い、嫌な予感がする……)

前に視線を戻す。予感は見事的中していた。

ぐんぐんと細い路地に迫っていくが、道幅よりも車体の方が大きいのだ。どう考えて

も激突する。

秋は力を込めて目をつぶった。

途端、浮遊間に襲われる。ジェットコースターが落ちる寸前の妙な気持ち悪さにそつ

くりだ。

不安定な場所を走っているのか体が小刻みに揺れるが、事故による衝撃は一向に伝わってこない。

秋は恐々と目を開けた。

そして目を開けたのを後悔した。喉から引きつった音が漏れる。

世界が傾いていた。違う。秋たちが乗っている車が傾いているのだ。

ガガガと何かが削れる音から察するに、車体の半分をコンクリート塀に乗り上げて爆走している状態なのだろう。

路地の終わりはすぐに見えてきた。その奥には路地と垂直になる形で車道が横たわっている。

路地から抜け出すタイミングで萩原はハンドルを回す。

車道の上に投げ出されたと同時に、車が宙で九十度回転する。道路を走っている他の車と同じ方向を向いた。

萩原のスポーツカーが轟音とともに車道へ降り立つ。タイヤに吸収されきらなかった衝撃で、秋の体が再び浮いた。

心臓が縮み上がった。

一度完全に止まって、数拍おいてから再び動き出す。心臓が耳に移動したのかと思うほど大きな音でバクバクいつている。

脂汗がブワツと吹き出す。死ぬかと思った。

とんでもない運転を披露した萩原は平然としている。ここで取り乱すわけにはいか

ない。

秋は平然を取り戻そうとあたりを見渡し、目の前を走る黒いスポーツカーに気づいた。

(あれ、犯人の……)

車内でひとつの人影が揺れる。姿かたちはよく見えないが犯人で間違いない。

そこまで思い浮かんだところで車が減速した。

忙しなく動いていた鼓動が少しだけ遅くなる。恐怖でこわばった体がわずかにゆるんだ。

余裕が出てきたおかげで周りが見えてくる。

街中を走っていた。犯人の数メートル先には赤く瞬く踏み切り。踏み切りがしまっているから萩原は減速したのだ。

しかし犯人はためらわなかった。

踏み切りの前で、黒いスポーツカーが勢いよく回転する。そのまま横向きに踏み切りへ突っ込んだ。

遮断機がへし折られる。

犯人の車は踏み切りを超えて、その先へと進んでいく。

車がまばらなのを良いことに萩原も後に続いた。

それからは恐ろしかった。

秋は早々に目を開けているのを諦めてまぶたを閉じた。目から入る情報をシャットダウンすれば、アトラクションに乗っているのと変わらないはずだと自分に言い聞かせる。

ガンガンと何かにつつかかる衝撃。宙に浮くときの妙なくすぐったさ。

「——ちゃん、間宮ちゃん！」

「……っ！」

萩原に呼ばれて目を覚ました。

車は高速道路を走っていた。一般的な速度だし、全てのタイヤがちやんとアスファルトに接している。

ややあつて、フロントガラスの先に犯人の車が見えないのに気づいた。カーチェイスは終了したらしい。

記憶が途切れていることから考えるに、数分間は気絶していたようだ。

「犯人を見失った。発信機の反応はどうなってる!？」

「あ、ああ。発信機ね、発信機」

秋は慌ててあたりに視線を走らせて、足元に落ちているタブレットを発見した。荒い運転のせいだろうか取り落とししてしまったと言わんばかりの態度で拾い上げる。

電源を入れて、発信機の現在地が表示されている画面を見せた。

「オーケー、鳥矢大橋方面だな」

秋は気絶していたとは悟られないように普段通りの表情を心がけて頷いた。

減らず口でも叩いておけば完璧だったのだが、後追いでやってきた恐怖に喉がひきつっていて言葉を発することができなかつたのだ。

* * *

発信機が示していたコンビニの駐車場には乗り捨てられた車だけが待っていた。あれだけ怖い思いをしたのに桶境子の現行犯逮捕は叶わないらしい。

萩原が乗り捨てられた車を調べている間、秋はガムで貼り付けてあった発信機を回収

する。

やがて二人は車内に戻った。あれだけ用意周到な犯人が証拠を残しているわけがなく、大した収穫は得られなかった。

秋はカーチェイスが始まる前に自販機で買ったお茶を飲みながら、窓に肘をついた体勢でぼやく。

「ていうかあの運転技術といい、橘境子ポテンシャル高すぎない?」

「面倒なことに犯人の中でも有能な部類だな」

「……次の犯行は七月一日なわけだけど、その時にまた現行犯逮捕を狙う?」

萩原はゆるゆると首を横に振った。上半身を背もたれに投げ出す。

「現行犯逮捕は駄目だ。言っただろ、犯行計画が露呈してるって勘づいた犯人は、すぐに爆殺に切り替えてくるって。今回の追跡で俺らの存在がバレたし、次回の犯行からは規模が格段に大きくなる」

「あー、新たな犯行を起こす前にどうにかしないとイケないのか。そうなると自首に持つてくとか?」

「それが無難だな。繰り返してる間に手に入れた諸々の情報と、今さつき轢き逃げしようにしたって事実を突きつければなんとかなるだろうし」

「だね。もしも失敗したら次回は松田も連れてこっか。刑事にプレッシャーかけられた

ら吐くでしょ」

「職権濫用させる気満々じゃねえか」

「事件を未然に防いで回るほど正義感が強い萩原には抵抗あるかもしれないけどさー」

「ま、それしかないよな。それに、何やら勘違いしてるみたいだけど正義感から事件を防いでるわけじゃないぜ。俺は物事を変えたただけだ。世界をより良くしようだなんて一度も思ったことはない」

飄々としながらも、真剣みをおびた声だった。本心からの言葉だ。

彼はやや逡巡した素振りを見せてから言葉が続けた。

「俺が毛利探偵事務所に入った目的は人探しだ」

「人探し？」

困惑が強くて思わず聞き返してしまう。

予想外の答えだったのもそうだし、人探しのために毛利探偵事務所就職する流れがそもそも不可解だ。

警察よりも探偵助手の方が適した人探しなどそうそう無い。

最もありそうなのは、事件、事故の根拠がない成人の失踪を調べているため職務として人探しをするのが叶わず、時間を工面するために転職した線だ。

しかし時間に融通が利きやすい自由業かつ、人探しの理解を得やすい職場を求めた結

果だとしても、なぜ毛利探偵事務所だったのか。元警察官が営んでいる探偵事務所など沢山ある。

萩原は毎回庇っているが、毛利小五郎が有能な上司だとは思いいにくい。身辺調査をした時に知った散財癖を考えると、給料がまともに払われているのかも怪しい。

だとしたら、求めたのは探偵という職業ではなく毛利探偵事務所そのものか。

「毛利探偵事務所に縁のある人を探しているとか？」

「んー、まあそんな感じ」

半ば確信して尋ねると、軽い口調ではぐらかされた。真意が読めない笑顔で、これ以上立ち入らないよう線を引かれる。

「ま、俺が動いてるのはただの私情だってこと。そろそろ向かうか」

彼は自ら話を畳み、秋が何か言う前にアクセルを踏んだ。鈍感なふりをして追及できない雰囲気ではなかったし、そこまでの興味もなかったので秋は沈黙に身を任せた。窓の外景色が後ろに流れ始める。

* * *

橘境子は留置所にいた。

彼女は八時半から秋たちが会いにくるまでずっと、被告人の面会を行っていたらしい。留置所の職員にも確認を取ったので間違いない。

そして伊達の殺害未遂があつたのは八時半過ぎ。

橘境子には完璧なアリバイがあつた。

捜査は振り出しに戻つた。

第8話

居酒屋の個室にはどんよりとした空気が漂っていた。

テーブルに置かれているのは食事と烏龍茶のみ。誰もアルコールを注文しなかったし、食事はほとんど手をつけられていない。

重い空気の中、はじめに口を開いたのは松田だった。

「……橘境子は犯人じゃなかったんだって？」

「まあね。でも全てにおいて秀でたこの私がいるんだし大丈夫でしょ」

「声に覇気がねえぞ。お前でも落ち込むんだな」

秋は口を真一文字に結んだ。

「しかも七月一日以降は爆殺に切り替わるから、被害を拡大させないためにも一ヶ月以内に犯人を見つけ出してとっ捕まえなさいといけない。え、やばくね？」

「まあね。でもこの私がいる限り、」

「お前一旦黙っとけ。話してる内容と声のトーンが合ってねえんだよ」

ついつい自画自賛を始める秋。それに突っ込む松田。

いつまでも終わらなそうなりとりを中断したのは萩原の報告だった。

「今日は陣平ちゃんが仕事してるあいだ、間宮ちゃんと犯人が乗り捨てた車のナンバーを辿ってたんだ。レンタカー店で偽名を使って借りられたものだって分かったけど店内に監視カメラはなし。おまけに店員はどんな客だったのか覚えてないってさ。前の周で何回かナンバープレートから辿ったことがあったけど、その時も同じ状況だったし、これ以上の情報は望めないだろうな」

「橘のアリバイが立証されたつてのに車から得られる手がかりは皆無か……。手痛いな。にしても羽場の敵討ちをしそうなのって橘境子くらいだろ。そいつの無実が証明されたつてことは、やっぱ班長の殺害と羽場は関係ないのか?」

「それはないでしょ」

秋はすぐさま否定した。

今までその可能性を考えては何度も否定してきたのだ。考えは固まっている。

「伊達航殺害動機が羽場の自殺ではなかったと仮定しよう。そうになると私たちが見落としていた新事実がまだ隠れていることになる。でも時間が巻き戻るたびに萩原と松田が何度も調べて、この私まで調査に全面協力したっていうのに見落としなんてあると思う？　ないよね。つまり仮定が間違っていたってことで、伊達殺害の動機は羽場だって証明される」

「最もらしく言ってるけど、俺たち三人が調べたって事実を根拠にしてるとかガバガバ理論じゃねえか」

「まーまー、それだけ俺たちを信用してくれてるってことだろ」

「いやだな、一番信用してるのは自分自身に決まってるじゃん。二人はおまけ」

「ブレねえなお前」

「ともかく、犯人は伊達が公安の協力者だって気がついて、羽場の監視をしていたことにも思い至って、羽場の自殺は伊達のせいだって考えるわけでしょ。でも風見との報告会を目撃しただけで協力者だと気づくのは無理。犯人がその結論に至るために必要な条件は三つある」

秋は人差し指をたてて説明し始めた。

「二つ目。伊達と風見の報告会を見て伊達が協力者だって思い浮かぶくらい、犯人は公安の事情に精通している」

伊達と風見が落ち合っているのは国営公園。背中合わせになる形でベンチに腰かけて言葉を交わしている。

二人の口が動いていると気づいたとしても、「公安刑事とその協力者の密会だ!」とはならない。

しかし犯人はその結論に達した。それだけ公安の事情が身近なものだからだ。指をもう一本増やす。

「そしてふた、」

「二つ目。風見さんが公安刑事だって知っている」

萩原にセリフを奪われた。

推理ショー中の探偵は特に、一つの言葉を複数の人間で分けて言う傾向がある。その名残だろう。

秋は気を取り直して三つ目の条件を口にしようとするが、今度は松田が言葉を被せてきた。

「みつつ、」

「そして三つ目。班長が後々公安の管轄となる殺人事件を担当することが多いと知っている人物。そういった前情報もなくあの場面を見て公安の協力者だと考えるわけがねえ。流石に発想が飛躍しすぎだ」

「……」

秋が二人に物言いたげな視線を送っているというのに、萩原は平然と話を続ける。

「改めて振り返ってみると橘境子って全部の条件満たしてるよな。自分自身も風見さんの協力者だし」

日に日に自分の扱いが雑になっていくのを感じる。

初めのうちはこつちを氣遣うそぶりを見せていたのに最近では遠慮がなくなってきた。それだけ親しくなった証拠なのかもしれない。

秋はムスツとしたものの文句を垂れたりせず、萩原のぼやきに答える。遠慮のない態度が親しくなった証拠だとするなら悪い気はしない。

「他に条件満たしてる人物って言われてすぐに思いつくのは警察官なんだけどね。同僚なら伊達の担当事件も知ってるだろうし。容疑者の中に何人かいなかったっけ」

「そりゃあいるけど、あの中の誰かが犯人だとは思えねえな。羽場との接点なんてなさそうだし」

「そこなんだよねえ」

犯人の動機は羽場の自殺による逆恨み。

しかしそれだけ羽場を大切に思っただけいそうな人物は伊達の周辺にいない。

「まあ取りあえず、容疑者たちと羽場に関わりがないか調べるところから始めるか」
「それと班長の尾行も再開しようぜ。何か新情報が見つかるかもしれねえし」

提案した本人たちも渋い顔をしている。

それだけで犯人がわかるとは思えなかった。やらないよりもマシだから提案してい

るだけで、全部無駄に終わる確率が高い。

それでも、こうなったら僅かな可能性に縋るしかないのだ。

秋もほか二人と同じ表情で承諾した。

* * *

六月三十日。未だに真犯人は見つかっていない。

羽場と親しい容疑者はいなかった。

強いて言えば羽場が偶然現場に居合わせた殺人事件を担当した刑事や、裁判所でよく顔を合わせる検事などがいたが、自殺した羽場の仇をとるほど親しい間柄ではない。

黒と明るい茶色で構成されたフォーマルな廊下を歩く。裁判所の廊下は広々としていながらも、どこかかつちりとしたデザインをしている。

今はNAZU不正アクセス事件の裁判が行われ、被告人が犯した殺人事件を一時担当した刑事として伊達が証言台に立った直後だ。

休廷時間なので伊達は廊下を歩いている。彼から距離をとって、秋は軽く変装した萩原と一緒に尾行を行っていた。松田は仕事中心なので居ない。

数メートル先を歩く伊達が、長い廊下の突き当たりに差しかかった。彼は曲がり角から出てきた橘境子に呼び止められて歩みを止める。そのまま二人はわきに逸れた。

秋は萩原と視線を交わし、次に自販機の横にあるベンチを指す。

萩原がうなずき返したのを確認して、二人はベンチへ移動して腰かけた。尾行対象が立ち止まった今、歩き続けるわけにもいかない。

「何話してんだろ」

「待って、読唇術する。あ、そうそう、これは探偵に教えてもらってね」

「……探偵は万能の言い訳じゃないからな」

「えーと……『伊達刑事、お久しぶりです』——検察側の証人と弁護士が仲良くしてるってどうなんだろ」

「ま、橘境子は裁判に勝つ気ないしねえ」

「『ああ、二条院大学過激派事件の裁判以来だな。六月一日の』『ええ、確かそうです。あれ、その指輪……』『実は婚約が決まってる。明日式場の見学に行くんだ』——うわ、えっ

ぐ。橘境子の恋人が自殺した直後だって伊達は知らないんだろなあ。公安が二人の監視理由詳しく教えてるとは思えないし。……ていうか後で話の要約を伝える形でいい?」

「もちろん」

萩原から許可が出たのでしばらく唇の動きに集中する。

橘が一礼して立ち去ったのを見届けてから、読み取った内容を伝えた。

「羽場が窃盗事件を起こした理由を知らないかって橘が尋ねて、伊達は知らないって答えてた。まさか自分のために犯罪を犯しただなんて考えてもいないだろうね」

言いながら小骨が引つかかったような違和感を覚える。

しかしどの部分に違和感を覚えたのか、深く考えを巡らす時間はなかった。新たな伊達との接触者が発生したからだ。

伊達は、反対側の曲がり角から歩いてきた人物に声をかけた。

髪をかつちりと固めた四十代前後の男。検事の日下部誠だ。

羽場との繋がりは見つかからないものの、犯人の条件は満たしている人物の一人であ

る。

(ついでに将来起こるIoTテロの犯人)

IOTテロのあらましを思い返す。

あらゆる家電が一斉に爆発したり、火を吹いた家電がきつかけで大規模爆発が起これたりと、相当な騒ぎになっていたはずだ。

——また違和感を覚えて眉を寄せる。似たような話をどこかで聞いたことがある気がした。

伊達は日下部と何やら話し込んでいる。

彼らの動作と唇の動きから読み解いた内容によると、二ヶ月前に日下部が落としたペンケースを伊達が届けたらしい。

前回裁判所で一緒になった日は声をかけるタイミングが拙めず、届けるのが遅くなつてしまったと謝っていた。

ふと思い出す。

伊達が前回裁判所を訪れたのは六月一日。伊達殺害日当日だ。

そして歴代の殺害方法からして、犯人は伊達の行動を逐一監視できる手段を持っている。ペンケースの中に発信機でも忍ばせておけば行動を把握できるな、と頭によぎった。

ゾワリと背中に冷たいものが走った。

橘が羽場の行動理由に思い当たっていない事実。IoTテロ。ペンケース。何かが掴めそうな気がする。

秋は隣に座る萩原をチラリと盗み見た。違和感を覚えている様子はない。

(おかしい)

絶対に認めはしないが、秋よりも萩原の方が洞察力に長けている。だというのに、彼をさしおいて自分が違和感に気づくだなんてあり得るだろうか。

じっと考えこむ。喧騒が消え失せる。

しばらくそうしていると眼前を肌色の何かが行き来した。突然黙りこくった秋を心配してか、萩原が顔の前でひらひらと手を振っている。

手首にかかった手錠の幻覚が見えて、すべてが繋がった。

(そっか！ 伊達殺害とIOTテロとは密接な繋がりにあるのに、毛利探偵事務所で働く萩原にとつてあの程度のテロや誤認逮捕は日常の一コマでしかない！ IOTテロに特別性を見出してないからヒントも見落としているんだ！)

目を見開く。

秋の意識が現実に取り戻されると、萩原は手を振るのをやめた。

「おーい、班長の尾行再開しないといけないからもう行こうぜ」

「その必要はないよ。犯人が分かったんだから」

冷静な声を心がけて告げるが、興奮が隠しきれずに自然と唇がっつきあがった。

鏡を見なくても分かる。自分は今、ドヤ顔で自信満々な笑みを浮かべているはずだ。

「ところでさ、日下部誠が将来起こすIOTテロの手口ってどんなのだっけ」

突拍子のない問いを投げかける。

萩原は不審そうにしながらも律儀に答えてくれた。

「今裁判やってるNAZU不正アクセス事件と同じで、Norってソフトを使ってIOT家電に不正アクセスするんだ。最近よくあるインターネットと家電が繋がったものがIOT家電な。スマホで遠隔操作ができたりするやつ。

不正アクセスして遠隔操作したIOT家電を発火させて、同じくIOT家電のガス栓を事前に開けておけば爆発が起こせる。これがサミット会場爆破の手口だって報道されてたぜ」

「……つまりIOTテロの手口を使えば、爆弾を使わずに大規模な爆発を起こせる。そうだよな?」

秋の言葉に萩原が動きを止めた。みるみるうちに目が見開かれる。

ひき逃げに失敗した犯人は作戦を爆殺に切り替えてくる。

しかし爆発に乗じて伊達が殺された場合、どの周でも現場から爆弾らしきものは見つ

からなかった。大規模な爆発だったので爆弾の破片すら残らなかっただけかもしれないが、爆弾によって爆発を起こしたわけではない可能性が高い。

「発火物がIOT家電で、ガスに引火して爆発が起こったから何も見つからなかったとしたら？ おまけにIOT家電は遠隔操作ができるから現場にいなくても爆発を起こせる。……犯人は、将来IOTテロを企てる日下部誠だよ」

重々しく告げる。

人が行き来する廊下はガヤガヤと騒がしい。そんな中、二人が座っているベンチだけ静寂と緊張感に支配されている気がした。

決まった。我ながら完璧だ。

秋はフツと息を吐いた。キメ顔のまま前髪をかき上げるべきか迷う。流石にそれは狙いすぎな気もするが、やはりここはかき上げたほうが綺麗に決まるかもしれない。くつだらないことに秋が思考を持っていかれていると、隣の男がハツと息をのむ。

「そうか……！ おかしいと思ってたんだ！ 橘境子は公安の協力者として動けるほど頭が切れるのに、羽場が自分を裁判で勝たせるために侵入した線を考えてすらいなかつ

た。ゲーム会社に証拠があるって知らなかったからだ！

そうなる跟前提条件が崩れてくる。ゲーム会社に証拠があると羽場に教えたのは橘じゃない。じゃあ誰に教えられた？ あんな情報を手に入れられる人物はごく僅かだ。被告人から話を聞ける立場の人物。担当弁護士か検察官しかない……！」

頭の回転が早いだけある。

萩原は一瞬で秋に追いついた。彼よりも優位に立っているおかげで一時的に得ていた安堵感が四散する。

彼が指摘した事実も、秋が犯人にたどり着くための手がかりとなったピースの一つだ。

羽場にゲーム会社のことを教えたのは橘ではなく日下部。

日下部が情報を流した理由は不明なままだが、残り時間で日下部周辺を重点的に調べて羽場との関係性を突き止めるしかないだろう。

それに、隠されていた羽場との関係性を突き止めるのは動機解明にも繋がってくる。秋がそれを伝えると萩原は同意を示した。

「だな。その前に仕事終わったらすぐに合流しろって陣平ちゃんに連絡しといてくれ」
「萩原は？」

「ちよつとしたコネを当たってみる。ダメ元だけどな」

萩原が席を立て移動する。秋には会話内容を聞かれたくないのだろう。

萩原の姿が見えなくなつてから、秋はスマホを取り出した。松田の連絡先を開くと、画面の上部分に表示された時刻が目に入る。

午後三時。

日付がまわつて二度目の伊達航殺害日を迎えるまで、あと九時間だった。

第9話

「真犯人がわかったって!？」

どつぷりと日が暮れたころ、いつも利用している居酒屋の個室の扉が勢いよく開かれた。鋭い声とともに松田が姿を現す。

松田はそのままズカズカと個室に入り、暗黙の了解で決まっている定位置にドカリと腰をおろした。

走ってきたのだろう。若干息が切れている。

彼は息苦しそうにネクタイを緩め、水を一気に流しこんでから個室内を見渡した。

「ところで萩は?」

「席はずしてる。真犯人を突き止めたと言っても、あるのはループ知識が前提の状況証拠だけなんだよね。これだけだと逮捕は無理だから、公安警察の友達にかけ合ってみるとかで」

「なるほどな」

松田の反応はあっさりしていた。

普通、親友に公安とのコネがあると知ったらもつと驚くはずだ。もしかしたら公安の友人というのは松田との共通の知り合いで、前からその存在を知っていたからこの反応なのかもしれない。

些細な思いつきを頭の片隅に追いやってメニューを広げる。
長時間居座るのだからそのぶん注文をしなくてはならない。

松田と適当に決めた品がすべて届いてから、秋は直球で本題に入った。

「真犯人は日下部誠だった」

「日下部？ 確かに条件に当てはまっちゃいるが羽場との接点は皆無だったろ」
「それがそうでもないんだよね。日下部犯人説にたどり着いた経緯から説明するけど……」

秋は少々自分の活躍を盛って、裁判所で起こった一連の出来事を語った。
秋が盛った部分をすべて指摘した後、松田は納得の色を見せる。

「その状況なら日下部が犯人で間違いねえな」

「でしょ。私たちもそう考えて日下部の周りの人に話を聞きに行つたんだよ。ま、萩原が世間話の体で女性から色々聞き出したって表現したほうが正しいけど」

「だろーな」

「日下部はかなり過激な思想を持つてたみたいだね。公安検察は公安警察と同等の権限を有するべきだ、検察の違法捜査も許されるのが正しいあり方だつていたる所で主張してたのが判明した」

公安警察と公安検察との間には力関係が存在している。捜査員の人数やノウハウに雲泥の差があるためだ。公安検察には公安警察ほどの権限を使いこなす力がないと判断され、今の状態に落ち着いている、らしい。

「だから日下部は強硬手段に出たんじゃない？ 認められないのなら勝手に違法捜査をしてしまえつてことで秘密裏に協力者を抱え込んだ」

「おい、それつて、」

「そう。羽場二三ふみかず一は日下部の協力者だった。だから証拠を見つげるために日下部の頼

みでゲーム会社に侵入して逮捕されたんだよ」

警察に逮捕された犯人の起訴・不起訴を決定するために、検察官は改めて捜査を行う。その捜査に協力していたのが羽場だったのだ。

日下部は検察官。羽場の恋人である橘と裁判で争う関係性である。早い話、敵同士だ。

しかも橘は公安警察の協力者としての立場と羽場への恋心で揺れ動いているし、羽場と日下部は固い絆で結ばれている。

関係性ドロドロだなあと秋は思った。

どうでもいいことを考えている秋とは正反対に、松田が苦々しい顔で言う。

「動機は協力者として育んできた絆？　一緒に悪いことをした相手と妙な一体感が生まれる感覚はわかるが……。そんな理由で班長はずっと殺され続けてきたのかよ」

最後に小さく吐き出された言葉には、静かな怒りがにじんでいた。

伊達航が殺されたあとの顛末について萩原から聞いたことがある。

伊達の死にシヨックを受けた恋人のナタリーは自殺。彼女の両親も娘の遺体を引き取りに来る途中で交通事故に遭って他界。

このまま行けば、日下部の犯行はさらなる負の連鎖を引き起こす。

松田の怒りはもつともだ。

そう思うと同時にどこか冷めている自分がいた。それどころか日下部を援護する言葉ばかり頭に浮かんでくる。

本当に日下部に非がないと思っっているわけではない。道理を曲げたから別の場所にシワ寄せがいつて悲劇が起こるものだと思っ承知している。

日下部を庇ってしまうのは、彼の罪が許されてほしいと思っっているからだ。

どうしてか考えようとして、心臓にヒヤリと冷たいものが触れた。

頭が警報を鳴らす。駄目だ、これ以上考えてはいけない。この先には直視したくない現実が待っている。

秋は思考を放棄した。

タイミングよく松田のスマホが鳴る。着信相手は萩原だった。

松田は取り出したスマホを耳に当てて数言交わしてから、通話を切ったスマホをポ

ケットに戻す。

「荷物が多いから運び入れるのに手を貸してくれっさ。ちょっと行ってくるわ」

松田が席を立ったことで一方的に感じていた気まずさが強制的にリセットされた。

松田と一緒に戻ってきたのは萩原と、二人の腕に抱えられた大量の段ボール箱だった。

「何それ」

「日下部誠が担当した裁判資料諸々」

「……なんで？ どうやって？」

短く発した秋の問いに、段ボールを机に下ろしてから萩原が答える。

「日下部をどうにかするため公安の知り合いに話を通してみるって言っただろ。その結

果がこれ」

今度は松田が段ボールを置いた。

その横で萩原が段ボールをパシリと叩く。

「この資料、本来は閲覧申請してから許可が降りるまで数週間かかるし、閲覧場所や時間が決められてるほど制約でギツチギちな代物なんだけどな。ま、公安警察が命令すれば規則くらいねじ曲げられるってこった」

公安警察。今までもそうだったが、萩原は相手が警察庁と警視庁、どちらに所属しているのか口を滑らせない。秋に情報を与えないように気を張っているのだろう。飄々としているようにでいて隙がない。

「いやー、さすがの公安警察でも証拠もなしに日下部の逮捕はできないらしくってさ。頑張つて食い下がった結果、証拠を見つけ出したら取り合ってくれてるって約束に漕ぎつけたわけよ」

「証拠オ？」

手首を回しながら松田が眉根を寄せた。

「推理だつてループ知識があつてこそ成立するもんだし、ちゃんとした証拠なんて存在しねえだろ。強いて言えば日下部の自宅にテロを計画している証拠があるかもしれねえが、それを得るためには公安に家宅捜査をしてもらふ必要がある。でも公安は証拠がないと取り合わないと言つてる。……つまり推理を突きつけて自白を引き出す、そうだな？」

「ああ、披露する推理にループの知識は使えないから、その代わりとなる根拠を裁判記録から探し出そうつてわけ」

秋は机を埋め尽くす勢いで置かれた段ボールの山を盗み見た。

次に、壁に貼られたポップに目を向ける。朝まで営業していますの文字。思わず引きつった笑いが漏れた。

どう考えても徹夜作業である。

* * *

朝日が眩しい。

七月に入ったただけあつて窓から入りこむ日差しは強かつた。

秋は思わず目を細めて、そのまま瞼を閉じる。眠気のピークに抗いつづけた結果一周まわつて目が冴えているのでうっかり寝ることはないだろう。

眼球の上を軽く抑えた。書類とのにらめっこが続いたせいか目がズキズキと痛む。

揺れが止まった。目を開けると窓の外景色は動いていない。住宅街の道端に車を止めたらしい。

外に降りて、横にそびえるマンションを見上げた。

自分を引き出す材料をすべて揃えて日下部のマンション前に到着したのは、すっかり日が昇りきつた時刻だった。

「うっし、今のうちに復習するぞ。日下部さんを問い詰めるための根拠は、羽場との協力がスタートしたのであろう二年前から調書の精度が段違いに上がっていたこと。そして日下部さんが作成した調書には違法捜査を行わない限り手に入らない証拠が多数

見受けられた」

「その件については裏取りをとって別紙にまとめてある。コピーするのが大変だったぜ」

松田が紙束を持ち上げて見せた。

「あとはこれらを根拠に揺さぶりをかけて自白を引き出し、家宅捜査に漕ぎつける。そうすれば伊達航殺害およびI・O・Tテロ計画の証拠が発見されて、無事日下部は逮捕される」

そう言ったつきり秋は口を閉じた。不必要な雑談をするほど体力に余裕はない。

米花町付近の事件発生率が異常なせいで日下部が担当した事件は膨大で、つまり確認するべき調書は山のようにあった。

伊達航の尾行、真犯人判明後の調査のあとに待ち構えていた大量の書類精査。おまけに不可解な点の裏取りが必須なせいで現場に赴くこと多数。

体は鉛のように重い。

秋はマンションの出入り口をぼんやりと眺めていた。日下部が外出するにはあそこ

を通らなくてはならない。

待ち人が来る前に外出されても困るので意識を向けておくべきだ。

——待ち人。

それこそが、こうして三人が日下部の部屋に突入せず外で待機している理由である。改めて萩原が公安の友人とやりに交渉した結果、部下を一人貸してもらえることになったのだ。今はその公安刑事を待っている。

(にしても、交渉のときシフト表がどうのとか聞こえたけどあれなんだったんだろ)

カツン、と革靴の音が背後から響いた。

すぐさま三人は振り返った。

眼鏡の男がこちらに歩いてきている。彼は大きな体を縮こまらせて、特徴的な形の眉を下げていた。

困っているのが一目でわかる表情で、彼は耳に当てたスマホへ話しかけている。

「はい、はい。日下部誠を逮捕するんですね。ところでマンション前に控えている彼ら

は……え、ちよつと、ふる……切れた」

呆然と咳いてから風見はこちらの視線に気づく。一部始終を見られていたのを悟ると、彼は慌てて姿勢を正して咳払いをした。

「……オホン、インターホンを押して日下部が出てきたところで推理を突きつけ、自白を引き出す。そこを俺が逮捕するという流れでいいんだな？」

萩原は風見に、「うわあ、可哀想……」と言わんばかりの表情を向けた。

秋は横足で松田の隣に移動してささやく。

「何もごまかせてないよね、あれ」

「普段のお前もあんな感じだぞ」

「うっそでしょ」

全員がそろったので、四人はマンション内へ移動した。

エレベーターから降りて少し歩くと日下部の部屋前に到着する。代表して萩原がインターホンを押した。

数秒待つてもなにも起きない。そればかりか、耳を澄ましても玄関に向かう足音が拾えなかった。

三人はすばやくアイコンタクトを取る。何かがおかしい。

今度は松田がインターホンを押す。やはりなにも起きない。

「おつかしいなあ……。証拠が出揃ってすぐに飛んできたからまだ午前中だし、こんな朝っぱらから出かける用事なんて……」

ぼやきながら、秋は徹夜明けのまわらない頭で考える。

風見を待っている間、マンションから日下部は出てこなかった。

つまり秋たち三人がマンションに到着する前に外出していたことになる。

日下部が外出する目的となると……。

「式場の下見！」

秋と同じタイミングで萩原も気づき、二人が同時に叫ぶ結果となった。勢いよく顔を見合わせて口々に言いあう。

「伊達は裁判所で、今日の午前中に結婚式場の下見に行くって話してた！ 橘に、日下部が通りかかる少し前にね。それを日下部が聞いていたとしたら？ 結婚式場で伊達を殺そうと考えたら？」

「昨日の会話では見学時間を言っってなかった！ いつ班長が到着するのか知らない日下部さんは事前に現場で待ち構えるのを選んだんだ！ 班長は今どこに!!」

言いながら、萩原が相互監視アプリをインストールしているスマホを取り出してGPS機能を確認する。

伊達の現在地を表しているピンは、けっこうなスピードで移動していた。

「この速度、車で移動してるぞ！ きつと式場見学に向かっている真っ最中だ。班長、どこか式場に行くか言っってなかったか!？」

「言ってない！ 日下部は別の機会の雑談かなにかで場所を聞き出してたんだろうけど……」

秋は思わず歯噛みした。

ここまで来て完全に手詰まりだ。

伊達が現場に向かっていて、猶予は刻々と迫っているのに場所がわからない。

松田が萩原の横からスマホを覗き込んだ。

彼はそのまま手を伸ばしてスマホ画面を拡大する。

「この方向ならあの老舗ホテルじゃねえか？　ほら、披露宴にもってこいって売り出してる」

「!？」

「仕事の合間に班長が調べてた式場候補にあったんだよ。その方面なら該当するのは一つだけだ」

「でかした！」

三人は弾かれたように走り出す。風見の呼び止める声が聞こえた気がしたが全員無視した。

すぐにエレベーター前に到着し、扉横のボタンを連打する。扉が開く。中に乗り込んで下に降りながら松田が萩原に尋ねた。

「ここから向かうと何分で着く？」

「通常なら四十分」

「お前なら？」

「事故を起こさないように気をつけて二十分ちよい」

「よしー」

少年のようにニヤリと歯を見せて笑いあう二人とは反対に、秋は一人で肩を落とす。萩原は馬鹿みたいに荒いあの運転を披露する気満々だ。当然その車に秋も乗るわけ

で。とてつもなく嫌だが、伊達航殺害防止作戦は終盤に差しかかっている。こうなったら最後まで付き合っ

てやろう。秋は腹をくくった。

チャイム音とともにエレベーターが地上に到着する。

小さなエントランスを突っ切って外に出て、脇に止めてあった萩原の車に乗り込んだ。運転席には萩原、後部座席には秋と松田が座る。

手早くシートベルトをつけると秋はタブレットを引つ張り出して目的地の公式サイトを開く。

伊達が本日見学に向かい、日下部が待ち構えている現場は、冠婚葬祭などによく使われる老舗ホテルだ。

建てられたのは昔。ほとんどの機材や設備は古いままなのでIOTが使われているのはせいぜい厨房だけだろう。

しかし館内マップによると、結婚式場として使われる大会場に向かうまでの道と厨房とはかなり離れている。例え厨房のIOT家電を爆発させても伊達は殺せないはずだ。

「これIOTテロは無理じゃない？ どうやって殺すつもりだろ」

走行音を聞き流しながら秋がこぼす。すると隣から松田が覗き込んできてタブレットの画面をいじり始めた。

写真つき館内マップをスクロールしたり拡大したりしながら彼が言う。

「殺すだけならI・O・Tテロじゃなくてもいい。おそらく今までの爆破も殺害目的ってよりは証拠隠滅のためだったんだろ。んで、殺害方法として刺殺や撲殺なんかは無しだな。班長は血だらけでも犯人を確保するくらいタフだ。タイマンで勝ち目はなし」

「萩原、このホテルで伊達が殺されたことは？」

「ない！」

となるとサンプルは無しか。

遠距離からの殺害方法として真つ先に思い浮かぶのは狙撃だが、日下部には無理だろう。

秋が考え込んでいると松田にタブレットを奪い取られた。これ以上自分で持つていても意味がなさそうなので好きにさせておく。

「これだ！」

少しすると松田が声を上げた。

タブレットを少し傾けて、小広間の中央に置かれたアクアリウム水槽の写真を見せてくる。

自然とタブレットを中心に身を寄せ合う形となった。途端、車が大きく揺れた。

松田のジャケットがめくられて、その中に思わず目がいく。くたびれたシャツに黒いベルトが巻きつけられていた。ベルトにくくり付けられているのは黒い袋。あれは拳銃がしまわれている袋だ。

秋は一巡したあと、拳銃をスツた。

松田がどうして拳銃を持っているのかは知らない。

真犯人判明の連絡を受けて慌てて駆けつけたから仕事で使った拳銃を返却し忘れたのかもしれないし、公安が持たせてくれたのかもしれない。

しかし前者の場合、現役警察官である松田が取れる行動は限られている。事前に秋が盗んでおいた方が、せつかくの武器を役立てられるだろう。

盗んだ拳銃を隠し終わるとほぼ同時に、松田が次の言葉を言った。

「水槽に取り付けられてる手のひら大の機械があるだろ。これはIOTを使用した遠隔監視システムだ。出先でも水槽の温度なんかをチェックできるよう取り付けられてる」

今度はタブレットにうつった小広間の床の写真を拡大する。

段差がついて円形にくぼんでおり、くぼみの中には演出照明用の電気ライトが取り付けられているのが見てとれた。

「この遠隔監視システムに負荷をかけて爆発させれば水槽のガラスが割れる。当然水がこぼれて床のくぼみに溜まる。そして、そのくぼみに取り付けられているのは電気ライト。電気の通るライトが水に浸かれば漏電するだろ？」

「伊達がかくぼみに足を踏み入れたところで水槽を爆破して感電死させる計画か……！ それにしてもよくあれがIoTの装置だってわかったね」

「ま、この前解体したばっかだからな」
「解体？」

聞き返したところで、内臓が浮くような気持ち悪さに襲われた。ジェットコースターが落ちる直前の感覚に似ている。

車が一瞬浮いたのだ。

「陣平ちゃんは解体魔！ ガキの頃からなんでも解体してよく怒られてたぜ。いつも工

具セツトを持ち歩いてるのはその名残ってわけよ」

萩原がすかさず解説してきた。

思わず彼のほうに視線を向けて、すぐさま後悔する。

フロントガラスの先には、傾いた細い道が見えた。車体を斜めにして爆走している最中なのだ。道理で先ほどから激しく揺れているわけである。

恐怖のドライブは始まったばかりだった。

* * *

二回目なので気絶こそしなかったが、秋はひどい吐き気に襲われていた。体を引きずるようにして駐車場を歩く。

ジリジリと焦げたアスファルトの熱気が顔まで伝わってきた。暑い。

おまけに車酔いと寝不足が追い討ちをかけてくる。

（だってのにあの二人はどうしてああもピンピンしてるんだろ。駐車場に到着するなりホテルへ全力疾走してくし……。本当に同じ年なのか不思議に思えてきた）

言葉を発する余裕すらないので頭の中で考えるだけにとどめた。
次に、移動中に推理した内容を思い返す。

（移動中に松田が確認した公式サイトのマップによると殺害予定場所は入り口から大会場の間にある小広間で、そこを見下ろせる吹き抜けの廊下に日下部は陣取ってるはず。二人はそこに向かったんだろうな）

相互監視アプリの情報によると、伊達が現場に到着するまで少し時間がある。
その間に日下部を無力化する取り決めだった。

建物内に入って冷房の風を浴びたら気分が元に戻ってきた。

広いエントランスホールを抜けて薄暗い廊下に入る。一人ぶんの足音は絨毯に吸収されていく。

何度か曲がれば青く輝く巨大水槽が見えた。日下部が爆破するつもりのもりの水槽だ。

その隣。小広間の一步手前に位置する太い柱の裏に萩原と松田がいる。

秋は彼らに近づいて声をひそめて尋ねた。

「何やってるの？」

松田が柱の奥を指さしてささやき返す。指の先には、小広間の奥にある吹き抜けの廊下があった。日下部が手すりに重心をかけるようにして立っている。右手にはスマホが握られていた。

「あそこに日下部がいるのが見えるだろ。で、その廊下まで登るには小広間横の階段を使うしかない。当然日下部には丸見えだ」

「先月の殺害未遂で班長を庇ったから、陣平ちゃんは日下部に顔を知られてるだろ？ ついでにカーチェイスの時にバックミラーを確認されてた場合は俺たちの顔も割れる。無関係な人間を装って近づくのは危険すぎるし、どうしたもんかって話し合ってたところだ」

「たしかに。伊達殺害を阻止してくる人間がここまで追ってきたってバレたら手に持つ

てるスマホで厨房のIoT家電にハッキングされて大規模爆発を引き起こされるかもしれないしね。伊達は殺せなくても混乱の際に逃げ出すことはできるから」

非常に厄介な状態だが、自分は一つだけ状況をひっくり返す手札を持っている。

秋はそれに思い至ると大げさにフツと息を吐いた。彼女には、自分が役立つ場面に遭遇すると調子に乗る悪癖があるのだ。

「なるほどなるほど。非常に厄介な状態だね。この私がいなければ、だけど」
「お前急にどうしたんだよ」

白けた目を向けてくる松田に、秋は人差し指を振りながら偉そうな態度で説明する。
うざったいことこの上ない。

「劣勢をひっくり返す手段があるって言うてるんだよ。ああ、感謝は後で聞くから。私
が日下部のスマホを吹き飛ばした隙に二人は日下部を取り押さえて。二人の足の速さはさつき痛感したし、一分もしないうちに動きを封じれるでしょ」
「つつてもどうやって、」

萩原の言葉は途中で尻すぼみになって消えた。

秋が懐から拳銃を取り出したからだ。

松田が息をのむ。彼は慌てて自分の上半身をまさぐり、顔を青くした。

「おつま、それ俺の拳銃だろ！　いつの間に……」

「ほら、後部座席でタブレットを覗き込んだとき密着したでしょ。あの時」

「あれかよ！」

「どうせ公安のオトモダチがなんとかしてくるだろうし、細かいことは気にしなくて良くない？　ほら、三秒後に撃つから」

「間宮ちゃん色々隠す気なくなってるよな」

隠すもなにも、プロ顔負けの射撃を披露しておいて「ハワイで親父に教えてもらったんですよ」で済ます高校生が将来現れるのだ。

成人女性が多少拳銃を扱えたくらい、米花町に毒されている彼らならそこまで気にしないだらう。

萩原と松田が小広間横の階段方向にむき直り、いつでも駆け出せるのを確認する。

秋は手早くセーフティーを外し、拳銃を構えた。

日下部は吹き抜けの廊下の手すりに重心をかけて立っている。その右手に握られたスマホに標準を合わせた。

「ぎーん、にーい、いち」

ゼロ、と呟くと同時に発砲音が響き渡る。

火花が散って、日下部のスマホが吹き飛んだ。

第10話

銃弾が日下部のスマホを吹き飛ばしたのと同時に、萩原と松田が走り出した。

彼らは驚くほど速く階段を駆け上がり、吹き上げの廊下に出る。そこから日下部を拘束するまでは一瞬だった。

日下部の身動きが封じられたのを階下から確認して、秋は小走りでエントランスホールに向かう。

エントランスホールでは予想通り混乱が起りかけていた。先ほどの銃声のせいだ。初対面同士だろう。偶然居合わせた宿泊客たちがひそひそと話している。

少し離れたフロント付近ではスタッフたちが困惑しきつた顔を突き合わせている。あまりこういったことに慣れていないのか、話し合いが堂々巡りしているのが見受けられた。

非日常でもなお、自分の判断に自信が持てる人間はごく僅かだ。スタッフたちは大多数側の人間の集まりらしく、責任を負いたくないとばかりに対応への明言を避けている。宿泊客の話に耳をそばだて、彼らが口にする突拍子のない予想にいちいち肩をビクつかせてもいた。

この様子なら、客同士の会話を誘導してやれば、その結論がそのままスタツフの結論になるだろう。

秋は自然な顔で宿泊客の輪に入りこんだ。

あとは簡単だ。効果的なタイミングで適切な言葉を発すれば、話の流れを誘導できる。

無事、思い通りの結論——エンジンの中で燃焼しきらなかったガスが引火して起こった自動車の小規模爆発によって、発砲音そっくりな音が出たという予想——を客に導き出させたのは数分後だった。

聞き耳を立てていたスタツフ一同の雰囲気も和らぐ。

あれは銃声ではなくバックファイアーによるものだど人々が信じきつたのを確認して、秋は小広間に戻った。

小広間の端にある階段へ向かう途中、日下部のスマホを拾う。銃で吹き飛ばしたときに上の廊下から落ちたのだ。

回収したスマホをポケットにねじ込み、小広間端にある階段を登った。

吹き抜けの廊下へ出ると、取っ組み合っている三人が見えた。手錠をかけられてもなお盛大に暴れる日下部、それを抑える萩原と松田。

どこかから鳴っている着信音をかき消すほど大きな声で、日下部が怒鳴った。

「離せ！ 私にはまだ無人探査機を警視庁に落下させて公安の権威を地に落とす使命があるんだ！」

「ずっと思ってたけどポテンシャル高いな!?　なんで一介の検事が数ヶ月でハッキング覚えてんだよ！　あ、間宮ちゃんいいところに！　腕押さえるの代わってくれ！　固定するだけで力はそんなに必要ないから！」

言われた通り、萩原がやっていたように日下部の両腕を拘束する。

萩原は離れた場所に移動してポケットからスマホを取り出していた。くぐもっていた着信音ははつきりと聞こえる。着信を告げていたのは彼のスマホだったようだ。

彼は画面をタップして電話に出た。なにやら話し込んでいるが日下部の騒ぎ声でも聞こえない。

「私は薄汚い公安警察に鉄槌を下さなければならぬんだ！　あいつらのせいで羽場は、羽場は……！」

「あ……、その羽場だけどさあ」

スマホを手を持ったまま、こちらに戻ってきた萩原が気まずそうな顔で言った。彼はスマホ画面を日下部に見せる。

「騒いでたから会話聞こえなかっただろうけど、公安が取り繋いでくれてこの人からビデオ電話がかかってきたんだ」

言われて、秋もスマホ画面に目をやる。

画面の向こう側には長い髪をひとくりにした男がいた。

男は様々な感情が混じり合った顔で協力者の名前を呼ぶ。

『日下部さん……』

「……………羽場？」

呆然と日下部がつぶやく。これでもかというほど見開かれた目蓋から瞳がこぼれ落ちそうだった。

羽場は眉を下げて、形容しがたい感情が渦巻いていると一目でわかる表情をする。

それから、ゆっくりとこれまでの経緯を語り出した。

窃盗罪で羽場が逮捕された直後。公安検事が協力者を使っていたという事実を隠蔽するため、公安警察は羽場の自殺を偽装することにしたそうだ。

そして協力者の逮捕を防げなかった日下部には協力者を満足に使いこなす能力がないと判断され、同じことが二度と起きないように彼にも真実が伏せられた。

名前を変えた今は公安警察の協力者として動いているらしい。

「ただしアンタの執念を考えれば羽場が生きてることを知らせない限り抵抗し続けるだろうからって俺の友達が手を回してくれたわけだけど……聞こえてねえな」

萩原が付け加えた通り、日下部は完全に放心しきっていた。一言も発さずに脱力し、拘束を振りほどこうと暴れることもない。

秋はおそるおそる日下部を押さえる手を離してみた。日下部はピクリとも動かない。今度は彼の目の前で手をふる。視線すら動かさない。

これなら大丈夫だろうと、最後に日下部の右手を持ち上げ、ここに来る途中で拾った彼のスマホのホームボタンに人差し指を押し付けた。スマホの指紋認証が解除されても、日下部は動こうとしなかった。

いくつか操作をして、N o r を使った不正アクセスの痕跡が残っているのを確認す

る。これを証拠に逮捕できるはずだ。

データが破損するほどの損傷がなかったことに安堵の息をついたタイミングで横から声がかかった。松田だ。

「なんか色んなことが空回ってたんだな」

「だね。羽場が生きてただだなんて盛大な肩透かしを食らった気分だよ。にしても、昨夜の様子からしてもつと感情をあらわにするかと思ってたのに意外と冷静なんだね。説教の一つや二つかますかと」

「正義を大義名分に好き勝手やってもロクなことにならないって実例が目の前にあるだろうが」

「ふーん？」

「俺たちの役目は終わってんだ。ここからは公安の管轄だぜ」

そういうものなのだろうか。よく分からない。

分からないが、彼の言葉に引っかかりを覚えた。

「……公安？」

なにか、とても大事なことを忘れてる気がする。

「忘れてることがある気がするんだけど」

「奇遇だな俺もだ」

互いに首を傾げ合う。

しばらく考え込んでも答えは一向に出そうになかった。

諸々のやり取りを終えてテレビ通話を切ったばかりの萩原に、しびれを切らした松田が声をかける。

「おーい萩、お前なにか心当たりねえか？」

「風見さんじゃね？ マンションに置いてきたままだろ」

「あ」

「俺も今気づいたわ。犯人引き取ってもらったために顔合わせるの気まずいなあ」

言いながら、萩原は笑顔を浮かべていた。

肌はボロボロ、目の下には濃い隈があるくせに、彼の顔には疲労よりも達成感の色が強く出ている。

松田も同じ表情だった。

これはあれだ、徹夜明けに変なテンションになる現象だ。
そこまで考えて自分の口元がほころんでいるのに気づいた。

「お前笑ってんで」

「そつちこそ」

「やつと解決したからなあ」

言い合いながら三人で笑い合う。屋内なのに、爽やかな風が吹き抜けていった気がした。

だんだんと笑い声が大きくなり、しまいには辺りに三人の馬鹿笑いが響きわたる。
ガラス張りの天井から、まるで屋外にいるように燦々と日光が降り注ぐ。

何がおかしいのかひたすら笑い続けて、頬の筋肉が痛みだした頃に、伊達とその恋人が小広間に足を踏み入れた。

「あ、班長」

真つ先に伊達を見つけた松田が、みるみる悪ガキそっくりな笑顔を浮かべる。彼は手すりに駆け寄り身を乗り出して、ワンフロア下を歩く伊達に大声で叫んだ。

「バーカ！ 式場の下見にくるのが早すぎんだよ！ そのせいでとんだ手間かかったんだからな！」

「は!? え? 松田?」

萩原もニツと笑って松田の隣に駆け寄る。

「おーい、班長ー！ これだけ苦労したんだから結婚式には呼べよー！ 絶対だぞー！」
「そりゃあ呼ぶけど……そもそもなんでお前からここにいるんだよ!」

流れに乗った萩原にも伊達も怒鳴り返す。しかし言葉とは裏腹に、伊達は気安い友人へ向ける顔をしていた。

完全に部外者である秋はそのまま、へたり込んでいる日下部の隣で三人の応酬を眺める。

平和な光景だ。日下部の犯行を阻止した今、この日々がずっと続いていくのだと思えた。

どういうわけか、また笑いが込み上げてきた。

* * *

秋は髪の毛の付け根に指をさしこんでからガンツと勢いよく自室の机に肘をついた。

そのまま髪をぐちゃぐちゃにかき回す。それでも羞恥心は消えてくれないどころか増す一方だ。

(なんつだ、あの青春さわやかストーリーみたいな雰囲気は!?)

萩原たちと別れたあと仮眠をして冷静な思考を取り戻した今、秋は数時間前の行動を

激しく後悔していた。

失敗した。完全に失敗した。徹夜明けの謎テンションのせいでかなり恥ずかしい行動を取ってしまった気がする。

(なに、あの、なに!? あんな年甲斐もなく子供のようにはしゃいで……もうやだ……消えたい……)

思い出すだけで顔から火が出そうだ。

常に余裕を崩さないクール美女という自分のイメージが崩壊したらどうしようとは思った。残念ながら彼女の自己認識を正してくれる人間はこの場にはいない。

「まあいいや、思考を切り替えよう、うん」

ぐちゃぐちゃになった髪を整えながら深呼吸する。少しでも気分が落ち着いたので、記憶をたどって気を紛らわせそうなネタを探し始める。

真っ先に出てきたのは日下部誠のことだった。

(なんか色々言われてたけど、もしも羽場二三二が本当に死んでたら日下部がやったことってそこまで悪くない?)

ずっと引つかかっていたことだ。

何度も友人を殺されていた萩原と松田の手前口に出すことはできなかったが、どんどんとその考えが肥大していく。日下部は別に悪くないだろう。

(第三者の意見を聞きたいな。スコッチでいつか)

秋は思いつくなり立ち上がると、くるりと百八十度回転した。今まで背中を向けていた壁に向かって声を張る。

「スコッチー。話があるからリビングに来てー」

「今行くー」

すぐに隣にあるスコッチの自室から返事がかえってきた。

一緒に住むようになってはじめてのうちは律儀に部屋の前まで移動していたが、やがて

用事がある時は壁越しに呼びかける習慣がついたのだ。いちいち部屋前まで移動するのは面倒くさい。

リビングで合流して、どちらともなく食卓テーブルの定位置に腰かけてから、秋は話を切り出した。

「ほら、今まで追ってた事件が解決したって仮眠前に話したじゃん。その犯人が大切な人の仇を取るために復讐に走っててさ。結局復讐の内容は勘違いだったんだけど、もしも勘違いじゃなくて本当に大切な人が自殺に追い込まれてたんなら、犯人そこまで悪くない？」

「いや悪いだろ。どんな理由があつても罪は軽くないし償うべきだと俺は思ってるよ」

「うわー、生真面目」

一瞬表情が削ぎ落ちてしまったが、すぐにヘラリと笑っておちやらけた態度をとる。鉛が胸に落とされた気分になったと知られたくない。

しかしスコッチは隠したかった秋の本心にめざとく気づいてしまう。

「その反応……。そうか。アドニスはさっきの犯人と自分を重ねてたんだな」

「は？ 何言ってる、」

「……言いくいけど、心構えがあるのとないのとは全然違うから言うよ。」

忘れてる記憶を取り戻すために俺を軟禁するとか言ってたけど、記憶を取り戻そうとするポーズを取りたいだけで、本当に思い出したいわけじゃないんだろ？ いや、少し違うか。失っている記憶の内容が望みと違ったら立ち直れなくなるから、色々理由をつけて行動しないでいるんだ」

スコッチは言いづらそうに少しのあいだ目を伏せた後、覚悟を決めたように秋の目を見つめる。

「自分が犯罪に手を染めたのは致し方ない理由があったからで、だから許されるはずだって希望に縋ってる。違う？」

心臓がミシリと嫌な音を立てた。

嫌だ、それ以上聞きたくない。

これは自分が求めていた答えではない。

「……思考を停止させるのは楽だし、苦しい現実と向き合うつらさも理解しているつもりだから、逃げるスタンス自体は否定しない。

でも君は組織にいるのが不思議なくらい平凡だろ。仮にアドニスが求めている致し方ない理由つてのが見つかったとしても、君が、犯罪を犯すだけの境遇だったんだから仕方がないって完全に自分を納得させられるわけがない。そうするには不器用すぎるんだ」

分かったような口をきくなど怒るべきなのに、唇は縫い付けられたように開いてくれなかった。凶星だからだ。

「断言するけど、望み通りの過去が見つかったとしても、自画自賛して恐怖心を紛らわしてる今みたいに、あんな過去があるから仕方ないんだって必死で自己暗示をかけるだけになるよ。罪悪感から目を背ける口実ができるだけで、罪悪感そのものがなくなるわけじゃない。それでいて君は今の時点で許されたがってるんだから、罪悪感から目を逸らし続けられるわけがない。」

アドニスには罪と向き合わない限り楽になれないんだ」

心が丸裸にされる。

見たくない部分を強制的に見せられる恐怖と、隠していた部分を暴かれる羞恥心で身体がすくむ。

「なんで、」

秋は蚊の鳴くような声で言った。

「どうして、スコッチがそんな指摘、」

あの質問をした時、スコッチなら肯定してくれるはずだと秋は確信していた。だからこそ相談相手に彼を選んだのだ。

秋とスコッチは対等な立場ではない。軟禁する側とされる側。一方的に命を握る側と握られる側。

そしてスコッチは公安の捜査官。国益のために動く立場だ。今の最優先事項は黒の

組織幹部である秋の籠絡あたりだろうか。

だからスコッチは、どれだけ本心と乖離していても秋が望んでいる耳障りのいい言葉をかけるべきなのだ。

今からでも、思ってもいない気休めの言葉をかけてほしい。そうすれば現実逃避していられる。

しかしスコッチは秋の願いをバツサリと切り捨てた。先ほどの言葉を撤回せずに話を続ける。

「公安警察官としての最適解を選ぶだけなら、今のはどうしようもない愚行だったのはわかってるよ。その上で指摘した。だって、」

彼は懐かしさと悲しさが見え隠れするほほえみを浮かべ、て、

思考にノイズが走った。

スコッチが消えた。

代わりに、秋の目の前には確かに知っている誰かが立っていた。

その人物が口を動かす。

——君は昔のオレと似てるんだ

幻覚が現れたのは刹那。瞬きにすら満たないほんの僅かな時間だった。何者かの幻影は、泡のように一瞬でかき消える。

「——ッ！」

すぐに意識が現実に戻った。

全力疾走した直後のように心臓がバクバク言っている。

激しい心音は何かを思い出したからで………何を思い出したんだ？

やがて不思議に思う気持ちすら忘却の彼方へ消えていった。

「じゃ、そういうことだから。ちよつと変な空気になっちゃったな」

スコツチがいつも通りの笑顔を浮かべたことで、話題が終了した空気になった。

秋は先ほどのやりとり全てを頭の片隅に追いやって蓋をした。嫌なことは忘れるに限る。

スコツチの指摘通り目を逸らしても根本的な解決にはならないのだろうが、今が楽な

らそれでいい。

最後の仕上げだ。

スウと小さく息を吐いて頭の中で唱える。

(私は素晴らしい私は素晴らしい、間宮秋様サイコー、そういえば植物に美しいものの名前を聞かせるといいって聞いたことあるな。シエリーが育ててるサボテンに間宮秋って唱え続けてあげよう………よしっ)

思考が完全に切り替わった。

自然と普段通りの笑みが浮かぶ。尊大で偉そうで常に自信満々な、計算され尽くした『間宮秋』の顔だ。

秋の突然の変わりのようにスコッチは目を丸くした後すぐに納得した様子を見せた。いつものやつか、と言いたげな表情だ。

彼は気を遣っているのか普段よりも明るい調子で尋ねてくる。

「そういえば今まで調べてた事件ってアドニスだけで調べてたわけじゃないんだろ？他の人たちとどんな関係性だったんだ？」

「うーん、なんだろう」

改めて考えてみてもしくりくる答えは全然思い浮かばない。

元々は利害の一致で結ばれた間柄だったが、それとは違う気がする。

改めて彼らとの関係性をラベリングしようとしても何も思い浮かばなかった。

* * *

萩原、松田と再び集まったのは、日下部誠逮捕から一ヶ月後だった。

期限までに犯人逮捕が叶わず八月一日にも伊達の命が狙われた場合に備えて松田が有給を取得していたため、三人の予定が噛み合ったのだ。

全員が集まった目的は二つある。一つは伊達殺害犯探し終了のお疲れ様パーティー。しかしこれはいでに過ぎない。

メインは失恋した松田を慰める会だ。

そう、松田は失恋した。

なんでも佐藤は高木とくつついたらしい。奥手そうな高木がアプローチを始めた原因は伊達。

萩原が教えてくれた話によると、松田の思いを知らなかった伊達が高木の背中を押し、たせいで二人はゴールインしたそうだ。

「ていうか失恋した松田を慰める会の会場が毛利探偵事務所って、上司がいらないとはいえ流石にどうなの？ 助手が私用で使ってるってまじくない？」

「間宮ちゃんもしかして今までも無許可で使ってると思ってた？」

「違うの？」

「んなわけねえだろ。小五郎さんに許可もらってたんだよ。事務所が閉まっても問題ない日に席はずしてくれたりとかさ。今回だって、事件かなんか解決したみてえだし今日は事務所使わないから打ち上げにでも使え、だってさ。深く聞かれたことはないけど、なんとなく俺の行動に気づいてたっぽいんだよな、小五郎さん」

「あのオッサン意外と鋭いもんな」

松田が口を挟んだ。元刑事の先輩に対して随分な物言いだ。失恋の傷をごまかすために憎まれ口を叩いているのかもしれない。

秋は松田の肩にポンと手を置いた。

「あー、ほら、なんだ。恋愛だけが全てじゃないし、ね?」

「ね? じゃねえよ。変な同情しやがって」

松田が半目になってぼやいたところで、萩原が軽い調子で割って入った。

「間宮ちゃんもそんな深刻にならなくて大丈夫だつて。恋にも満たない淡い気持ちだったから失恋って感じでもないし。じゃなきゃ俺も囃し立てたりしねえよ」

「でも昔、『佐藤のほうがお前よりも百倍いい女だ』とか言われたけど……」

「知ってるか? 被乗数がゼロに限りなく近い数なら解は小せえんだよ」

被乗数の意味はわからないが貶されたのはわかった。

「目ん玉腐ってるの?」

「あの時のお前の印象、後ろ暗いことがありそうな上にずっと自画自賛してるヤバイ奴だったんだよ」

「後ろ暗いつて尾行のこと？　だからあれは知り合いの探偵に教えてもらったんだってば」

「言つとくけどお前の中の探偵像、相当おかしいからな。盗聴や尾行ばかりか躊躇なく発砲する言い訳になつてねえんだよ。班長を助けてくれた恩があつて、ダチだから見逃してゐつてだけで、そうじゃなきゃ普通にしょつぴいてるぞ」

「とも、だち……？」

驚きすぎて声がひっくり返る。

同時に、妙にしっくり来る響きだと思つた。

そうか、友達か。

「ダチじゃなけりや怪しき満載のお前なんてすぐに突き出してるに決まつてるだろーが。相変わらず萩がはじめからお前を信用していた理由はわからずじまいだけど」

「あつたねー、そんな謎」

松田が何事もなかつたかのように話を続けてくれたおかげで、大きな動揺を見せてしまつた気恥ずかしさはしぼんでいき、すぐに消えた。

普段通りの気軽さで言葉を返してから、なんとなく二人して萩原に目をやる。彼はにっこりと笑って立ち上がった。そのままこちら側のソファの背後にまわり、勢いをつけて松田の肩を抱く。

「にしても騒いでるうちに元気になってきて安心したぜ。とにかく佐藤ちゃんのことには気にすんなよ、俺たちがいるじゃねえか。ま、俺彼女いるけど」

「テツメエ……」

松田が青筋を浮かべて言い返したのが後押しとなつて話の流れが完全に変わる。

「たしか付き合い始めたばっかだろ。どうせ三ヶ月後には振られてっぞ」
「振られ文句は『事件と私どっちが大事なのよ!』だね。賭けてもいい」
「ひっでー」

萩原がケラケラと笑いながら言った。恋愛のスパンが短い自覚はあるのだろう。

なまじモテるので恋人には困らないようだが彼はすぐに振られる。探偵という職業が死ぬほど恋愛に不向きなせいだ。

和やかな空気の中ノック音がした。探偵事務所の扉からだ。

「お、来た来た。ポアロでハムサンド注文しといたんだよ」

萩原が言いながら扉に向かう。

何気なしに視線を向けていると開けられた扉の奥に金色が見えた。

立っていたのは男性店員だった。ハムサンドを持ってポアロのエプロンをつけているので間違いない。噂に聞いていた頭の切れる店員とは彼のことなのだろう。

やけに見覚えのある男だ。

というかバーボンだった。

秋はピシリと固まった。

本来なら彼がここにいるはずがない。

なにせ今までのどの周でも、バーボンが安室透としてポアロで働き始めるのは一年後。まだまだ先のはずだ。

確実に未来が変わっている。

未来が変わった心当たりに考えを巡らせていると、バーボンがこちらに気づいた。

二人の視線が交わる。秋の姿を捉えたバーボンの目が少し丸くなり、スツと冷たく細められた。一瞬、不穏な空気が流れる。

表向きスコッチを殺した事になっているせいで、バーボンは何かと秋を目の敵にしてくるのだ。正直、顔を合わせると面倒な相手である。

いつ均衡が崩れてもおかしくないピリついた雰囲気を変えたのは、またしても萩原だった。彼は軽い調子でバーボンに話しかける。

「てかなんで安室ちゃんがポアロにいるの？ 今日シフト入ってないだろ」

「そうですけど……。どうして僕のシフトを把握してるんですか」

「常連の女子高生によく聞かれるからさー。女の子の質問にはできるだけ答えてあげたいだろ？」

「はあ、まったく……。この前事件でシフトに入れなかったたのでその埋め合わせですよ」
「あー、よくバックれてるもんな」

前回までのバーボンはポアロでアルバイトをするかたわら毛利小五郎に弟子入りしていたはずだが、今回もそうなのだろうか。

（助手と弟子だからあんなに親しいとか？ 萩原はともかく、バーボンが相手を懐に入れるなんて初めて見たけどなあ）

秋が考えているうちに、彼らの話題はいつの間にか松田の失恋に移っていた。

松田が失恋した原因を熱心に話し合っている二人と、失礼な物言いの数々に文句を挟む松田という構図ができあがっている。

その様子を、秋は一人ソファー席から眺めていた。

バーボンの表情は普段よりも子供っぽかった。優しいお兄さんで売っている安室透や、秘密主義者特有のミステリアスさを纏っているバーボンとはえらい違いだ。きっとあれは降谷零の顔なのだろう。

秋は、萩原が言っていた公安の友人の正体をなんとなく察した。

知り合いとはいえ公安の人間に、ただの探偵助手がどう接触したのかとずっと不思議に思っていたが、相手が職場の下のフロアに潜入していたのなら説明がつく。

「やっぱり一緒に過ごした時間が圧倒的に足りなかったんですよ。聞けば伊達刑事にべったりだったそうじゃないですか」

「わかる」

「テメエら好き勝手言いやがって……。特に安室！ お前に俺を分析できるほどの恋愛経験ないだろーが！ 合コン行つても食事に夢中になつてるか男連中とばかり話す様子が目に浮かぶようだぜ」

「そういえば知らない方がいますね。挨拶させてください」
「話を逸らすな」

「うわ、こつち来た」

白々しい言葉を吐いたと思つたら、いつの間にかバーボンが目の前まで移動してきた。

彼は胡散臭い笑顔を貼り付けて言う。

「はじめまして、安室透です。毛利先生の一番弟子で下のポアロで働いています。ところであなたは二人とどういう関係で？」

バーボンは二人、と言いながら背後に視線を向ける。その先には玄関付近にいる萩原と松田がいた。

彼の問いで、いつしか彼らと一緒にいるのが当たり前になっていたのを思い出した。それに先程の松田の言葉。

答えは決まっていた。

バーボンの目をしっかりと見つめて告げる。

「間宮秋。二人の友人だよ」

予想外の答えだったのか、バーボンが少し眉を寄せた。

第2章 萩原研二の消失 第11話

「私以外のループ者に会ったことは？」

「ない。間宮ちゃんが初めてだよ」

「ま、そうそう出会うものでもないよね。私たち以外のループ者が存在するかどうかもわかんないし」

主役に緊急の呼び出しが入ったせいで松田の失恋を慰める会がお開きになり、残された二人は約束通りループ知識の共有をしていた。伊達航死亡を食い止める手伝いをする代わりに萩原が知っているループに関する情報を教えてもらう取り決めだったのだ。他にもいくつか質問を投げかけてみるがどれも予想通りの答えが返ってくる。

二人ともループの開始地点は十五歳の春、終了地点は組織壊滅から数日後。同じ『繰り返し』を共有していると見て間違いない。

用意していた質問も尽きてきた。

秋は何気ない様子を装って本命の質問を最後にぶつける。

「そういえば萩原の『後悔』って何なの？」

ループ現象を引き起こすトリガーは何かしらの後悔を抱くこと。ただし後悔を抱いてもループが起きない場合もある。ループが起るか起らないかの相違点はずっと不明だった。

しかし同じループ者である萩原と出会って一つの仮説が浮かんできたのだ。萩原と秋、二人が同時に『後悔』を抱いた場合にのみ時間が巻き戻るのではないか。その仮説を検証するための質問である。

しかし秋の期待とは正反対に、彼は不思議そうに首を傾げた。

「後悔……？」

「私はそう呼んでるんだけどね。ほら、ループ発生の条件って後悔とか心残りを感じることにじゃん。で、それを解決すれば時間の繰り返しが終わって元の時間の流れが戻ってくるあれ」

「……」

萩原はより一層不可解な表情を浮かべた。

視線を右上に動かし、何やら考えこむこと十数秒。

「待ってくれ」

口元に手をやりながら萩原が言う。瞳には困惑がありありと浮かび上がっていた。

「その言い方、間宮ちゃんはこの十五年間でくり返される事象以外に同じような経験を
してるのか？」

「え、逆に萩原は違うの？」

「ああ」

「……じゃあ萩原はループ体質じゃない？ ループを観測できるようになったのは後天的なもので、私の体質で引き起こされると考えられる今回のループに偶然巻き込まれただけの可能性も……？」

考えを整理するために小さく口に出してみる。

秋は多少混乱したし驚いたが、逆に言えばそれだけだった。

数ヶ月前の彼女だったらいずれ敵対するかもしれない相手に下手な情報を与えてしまったと慌てただろう。

些細な自分の変化がくすぐったくて、秋は少々大げさに呆れた表情を作ってみせた。

「にしてもあの態度からして何か重要な情報握ってるかと思つてたのに、まさか私よりもループについて知らないとはね。骨折り損のくたびれ儲けだよ、ほんと」

「でもさあ、日下部さん捕まえるときに発砲したじゃん？ 俺から情報を引き出すのが目的ならあそこまでする必要ないだろ。つまりいつの間にか間宮ちゃん目的が俺たちを利用して情報を得ることから班長を助けることにシフトしてたわけで、それだけ俺たちに絆されてたつてことに……なんで突然取り出した手鏡をしげしげ眺めてんの？」

「改めて私の顔がいいなって」

「誤魔化しかた下手すぎるだろ」

「……………なんのことかな」

「あー、うん。まあいいや。間宮ちゃんの話によるとその『後悔』つてのを解決できればループが終わるんだよな」

「そう。言つてなかつたけど私部分的な記憶喪失でさ。忘れてる内容を思い出すのがループ終了条件だと思うんだけど……」

「違うな」

萩原が言葉をかぶせてきた。彼は力強く断定する。

「間宮ちゃんが思い出さなくてもループは終わる。『後悔』は別のものだ」

どうして断言できるのだろう。

前から萩原はそうだった。まるで何かを知っているかのような不可解な言動が見え隠れしている。

秋は不思議に思いつつもそれ以上追求しなかった。出来なかったと表現したほうが正しいかもしれない。

* * *

そして月日は流れ、伊達殺害を阻止するために萩原や松田と駆け回った日々から一年

が経った六月。

秋は重い足取りで屋内駐車を歩いていった。一步踏み出すごとに足音が反響する。急なあの方からの命令でジンを始めとした幹部の集団と合流するハメになった。彼ら実行部隊とは顔を合わせただけで罵り合うほど仲が悪いため憂鬱である。

屋内駐車場の一番奥にポルシエを発見する。一台分スペースを空けてその隣に停まっているのはキャンティかコロンどちらかの車だったはずだ。

秋は最後に大きなため息をこぼしてから、両車の間にズカズカと入っていった。

ポルシエの助手席側の窓を叩く。嫌なことにジンが座っていた。ウオツカならまだマシだったのに。

ジンは窓を開けると苦々しげに言った。

「アドニス……どうしてテメエがここに居るんだ」

「あの方からの緊急命令。第二の暗殺計画で使用するはずだった狙撃場所が変更になったから教えてやれって」

「……」

ジンは思案するようにダツシユボードへ目をやった。開け放された窓から金属がカ

チャカチャイいう音が聞こえてくる。どうせ意味もなく拳銃をいじっているのだろう。変なプレッシャーがかかるからやめてほしい。

「狙撃場所の変更お？　なんでそんな事態になったんだい!？」

背後の車からキャンティの喚き声があった。ジンや、その奥に座っているウォッカにも聞こえるように話しているせいかな音量が大きい。

「もともと使う予定だった建物が二軒とも爆発四散してね。ほら、米花町の近くの杯戸町だし」

「……嫌と言うほど納得できたよ。でもどうしてあのお方は作戦決行場所に杯戸町なんか選んだのさ!？」あの事件発生率なんだからトラブルが起こるのは予想できたじゃないか!　おかげでクソ女と顔を合わせるハメになるし……」

「木を隠すなら森の中。事件を隠すなら事件の中。あの地区なら暗殺を行っても『いつものやつか』で流されるからだよ。にしても、クソ女?　大幹部であるアドニス様によくそんな態度取れるよね。尊敬するよ。私の素晴らしさに嫉妬してるとか?」

「どっちも自称だけどね!　アンタが大幹部だなんて世迷い事信じてるのなんて組織に

入ったばかりで内情をよく知らない新米のペーパーだけさ！」
「フツ……」

秋は全く反論できなかつたので意味深に笑って誤魔化しておいた。

彼女は基本的に組織の人間から嫌われている。だからバーボンはアドニスへの憎悪を隠そうとしないしその態度がむしろ賞賛されているのだ。

証拠に、今度はコルンとウォツカが両側から口を挟んできた。

「お前、うざったい」

「そういうところが一々癩に触るんだろぅが」

「二人の言う通りさ。でもねえ！ 一番気に食わないのはそこじゃないんだよ！」

言いながらキャンティが勢いよくドアを開けて外に出る。そのまま後ろ手でドアを叩きつけるように閉めてからズカズカと近づいてきた。

怒りで目を見開いているせいで左目まわりのアゲハ蝶のタトウーが変形しているのが確認できるほど接近してからキャンティは喚き散らした。

直情的で荒っぽい彼女は顔を合わせるたびにこうして突つかかってくるのだ。

「我慢ならないのは凡人風情が釣り合わない立場に納まつてる現状だよ！ 確かにアンタは裏社会で生き抜くだけの小手先の技術は持つている。組織で使い捨てに毛が生えた程度のネームドになる実力もある。でもそこ止まりさ！ 裏社会の最奥も最奥、裏社会の人間たちですら存在していると断言できないほど謎に包まれたこの組織で、私たちと対等に話せる立場にのし上がるだけの技術も能力も覚悟だつてない」

後ろのポルシェから声がしたのでふり返る。

タバコをくわえた口を忌々しげに歪めてジンがうなった。

「だと言うのにテメエがある意味特別扱いを受けているのは事実だ。だからテメエの主張を信じる新人なんかも出てくる。……アドニス、お前はずっと危険な任務を免除されているな。狙撃場所を伝えるだけだなんてガキでもできる要件であつても今日この場に來たのが珍しく思えるくれえには、死んだり逮捕される危険のある任務にテメエが駆り出されることはない。」

なア、才能も技術も何も持っていないお前ごときがどうして特別扱いされている？
その立場を手に入れるのにどんな汚い手を使ったんだ？」

文字通り命を懸けて組織に尽くしている面々からすれば、なんの対価もなく優遇されているように見える自分の立ち位置が気に入らないのだ。

溢れんばかりの殺気と憎悪を向けられて、秋は視線を宙に放った。

(汚い手ねえ)

一周目で発見した裏技を使ってさっさと優遇される立場になっただけなのだが、素直に答えるわけにはいかないので普段のドヤ顔を貼り付けておく。一目見れば感涙に咽び泣くほど素晴らしい笑顔だ。

「おい、見るだけではらわたが煮えくり返る顔をさらすな」

「ははは聞こえないね！ 私が特別扱いされてる理由？ そこにいるだけで利益をもたらすからかな。ていうかさっきの言いがかりといい、私に敵意向けてくるのって要するに醜い嫉妬だよ。僕たちはあのお方のために頑張ってるのに一人だけずるいーって小学生レベルの」

「ジン！ DJの前にコイツのドタマぶち抜いていいかい!？」

「え、DJってなに？ 誰？」

「フン、そうしたいのは山々だが……」

「無視かよ」

「どうやらそうも言ってられねえみたいだぜ。メンバーが揃った」

ニヒルに笑いながらジンが目で指し示した先には一台の車があった。窓から運転者が顔を覗かせる。

「遅れたのは謝るけど、そこにいられると車が停められないのだけど」

最後の暗殺メンバー。表向きはアナウンサーとして働く黒の組織の幹部にして、その正体はCIAのNOC。キールだ。

彼女は迷惑そうに眉をしかめてクラクションを鳴らした。

ジンにせつつかれて渋々座ったポルシェの後部座席で、秋は半目になって目の前で繰

り広げられているやりとりを眺めていた。

「どうした、キール。約束は十時のはずだぞ」

「ごめんなさいね。気になる車がついて来ていたから念のために撒いたのよ」

「問題はねえんだらうな？」

「ええ、ただの思い過ごし。だからドア越しに構えているそのベレッタ、サヤに納めてくれない？ 妙な勘ぐりで私を撃てばDJは殺れないんじゃないやなくて？」

「まあいい。このビルの五百メートル四方には我々の目が届いている。妙な車が近づけばすぐにわかるだらうからな」

車の並びは奥から順にジンのボルシエ、キールの車、スナイパーコンビが乗る車だ。

彼らは車に入ったまま窓だけ開けて話している。

運転席に座っているキールと助手席に座っているジンは二車の扉を挟んで隣に座っている状態とはいえ、このまま話すのはどうなのだらうか。

ジンなどは二台隣のキャンティたちに聴こえる音量で話しているせいでかなり声が大きい。

万が一誰かが通りかかったら会話内容が全て筒抜けだが、ジンは平然と会話を続け

る。

「じゃあ最終確認だ。第一の作戦を言ってみろ」

「時間は十三時、場所はエディP。インタビュアーの私はDJを例の位置に誘導する」

「そうそう、待つてるよ、キール！　アタイのこのスコープのど真ん中に獲物を突っ込んで興奮させてちょうだいね」

「あらキャンティ。コルンも一緒ね。頼りにしてるわよ。私たちの功績は日の目を見ることはないけれど、失敗はすぐに知れ渡ってしまふんだから」

「フン、成功しても失敗しても世間に知られることはない。それが組織のやり方だ」

「ああ、そうだったわね」

秋は思った。エディPってなんだよ。

DJといい訳のわからない符号が登場しすぎだ。

改めて尋ねれば教えてもらえるだろうが理解してないと知られるのは癪なので、秋は訳知り顔で頷いておいた。

* * *

DJは衆議院選挙に出馬した土門康輝^{やすてる}、エディPは杯戸公園のことだった。第一の暗殺作戦が終わったから判明した事実である。

なお、せっかくコロンが標的を捉えたのにジンが「邪魔な羊が多すぎる……」などと言い始めたせいでタイミングを逃してしまい、第一の暗殺作戦は失敗した。秋は散々からかっておいた。

第二の暗殺作戦について詳しいことを話すため、組織のメンバーは古びた倉庫に移動する。時折組織が待機場所として利用している廃倉庫に降り立つとジンが説明を始めた。

「十六時ごろDJは橋の上を通る。そこが暗殺場所だ」

その後行われたやり取りをまとめると次のような作戦だった。

二人のボディガードを連れて車で移動している土門を外に引きずり出すため変装

したベルモットが車の前で転倒。正義感の強い土門が出てきたところで、後ろからバイクで追いついたキールが頭を撃ち抜く。最後に二人のボディガードをキャンティとコルンが始末する。

「そして狙撃場所が変更になってるらしいが……。アドニス、場所を教えろ」
「人に物を頼むときはそれ相応の態度つてものがあろうと思うけどなあ」

秋は悪どい笑顔を浮かべた。

先ほどボロクソに言われた仕返しをしてやろう。

人差し指を立てて幼子に言い聞かせるような口調でゆっくりと言う。

「お願いしますアドニス様、どうぞこの無知な私に教えてください」

瞬間、重い音が響いた。顔の真横を突風が駆け抜ける。髪から焦げ臭いにおいが漂ってきた。

「は？ え？」

ジンの手元に視線を落とす。黒光りする拳銃が握られていた。

振り返って背後の壁を確認する。銃弾がめり込んでいた。

状況を理解した途端ガタガタと足が震え出しそうになる。頬スレスレをジンが撃つた銃弾が掠めていったのだ。

キャンティが両手を叩いて喜び、コルンが嬉しそうにはにかみ、ウォツカが「さつすが兄貴！」と声をあげている中、秋は叫んだ。

「ばっつっつかじやないの!? なに銃ぶつ放してるの!？」

「ホオー、随分と慌てているな」

「……………銃弾残したら足取り掴まれるんじゃないかと思つてね。ジンの巻き添え食らうのは御免なんだけど」

「そんなもん下っ端に後処理させる。それで？ 新しい狙撃場所つてのは？」

何事もなかったかのように話を続けるジンを見て、秋は仕方がなさそうに首を振った。また銃をぶつ放されて下っ端の仕事が増えたら可哀想だし、という態度を心がけて小さく息を吐く。

しかし膝は力を込めてもなお微かに震えたままだった。気づかれる前に大人な自分が折れた体で素直に従っておこう。

「まったく、仕方ないな。あそこだよ、新しく建った——」

「口で言うな、地図を指せ。盗聴対策だ」

「はいはい」

ジンが視線で示した先には車の屋根に広げられた地図があつた。ウオツカに準備させていたものだ。

見ると、いくつか印がつけられている。一際目を引くのが鳥矢大橋につけられた赤丸と「ベインB」と書かれた文字だった。どうせDJやエディPと同じ痛々しい符号だろう。触れるだけ無駄だ。

「()と()ね」

急いで新たな狙撃場所を指さし、秋は地図に背を向けた。先ほどの発砲にビビり散らしている悟られる前にさっさと逃げたい。

「じゃ、そういうことだから。役目は終わったし帰るよ」

「待て」

ジンに言われて足を止める。

引き止められた苛立ちを覆い隠して仕方がなさそうな態度で尋ねた。

「他に何か？」

「まさかテメエがここまで馬鹿だとはなア」

「？ ……ああ、IQが20違うと話が通じないって言うもんね。あまりにも賢すぎる人間は常人には馬鹿に見えるってやつか」

「客観視すらできないほど頭が足りないテメエに教えてやるよ。狙撃場所変更の連絡なら電話で事足りるはずだ。あのお方がわざわざお前をここに寄越した理由を考えろ」

「えー、年寄りの判断ミスとかじゃない？ 変なところで慎重だから通話を盗聴される場合を考えたとか。言っちゃ悪いけどあの勿体ぶった言い回しで伝達事故が起こらないと思ってるアホだし。あのポエムを交えた話し方、絶対勘違いに勘違いを生みまくってるって。直接的な話し方をしないから誰も気づいてないだけで」

「IQが20違うと話が通じないって言うもんなア。馬鹿にあのお方のお心を理解させるのは無理だったようだ」

「こ、コイツ……!」

「ともかく最後まで付き合ってもらおうぞ」

* * *

伝言を済ませれば帰れるはずだったのに、ジンの発言のせいで同行することになってしまった。

特徴的なポルシェのエンジン音を聞きながら、秋は後部座席の窓から外を眺めていた。大きな水溜りの真上を走ったタイヤが水飛沫を散らす。

最悪のドライブだった。

相性最悪のジンと同じ空間にいるだけでも最悪なのに、ジンが唐突にキールの脱ぎたてホヤホヤの衣服を漁り始めたのだ。地獄みたいな絵面だった。

「なにやってるの……？ シエリーからキールに乗り換えたとか……？」

「は？ なに言ってるんだテメエ。キールが今まで履いてた靴に発信器と盗聴器がついてたんだよ」

「!？」

「発信器は潰したし、盗聴器は何重にも布で包んで音を拾われないようにしてあるがなア」

「ごめん、盗聴対策だの言ってDJとかエディPとかベイソングとか言ってたの、ただの厨二病ごっこかと思ってた。意味あつたんだね」

全く悪いと思っていなさそうな声色で言ったらバックミラー越しに睨みつけられた。しかしジンが言い返してくるよりも早く、車を運転しているウオツカが尋ねる。

「それで兄貴、どうするんですかい？」

「暗殺は取りやめだ。あのお方から連絡が返ってきたらキャンティたちにも伝えるが、どうせ許可は降りるだろうぜ」

「ええ!? なんでまた!？」

「ターゲットを変更するからさ。報告によると、キールが俺たちと合流する前に接触したのは毛利探偵事務所の面々だけ。しかも奴らは昨夜からキールの部屋に上がりこんでいたそうさ。たわいもない事件の捜査だったらしいがな。何日も前から虫が取り付けられていてキールが気が付かないわけがない。名探偵の毛利小五郎ならなおさらだ」

「つまり……？」

「ああ、この盗聴器と発信器の持ち主は毛利小五郎しか考えられねえ」

どうしようもなく嫌な予感に襲われた。指先から血の気がひく。

秋が何か言う前にウオツカが問いかけた。

「つてことはターゲットって……」

「新たなターゲットは米花町五丁目、毛利探偵事務所だ。疑わしき者は殺す。もちろん毛利小五郎の周りの人間も全員な」

ジンの言葉に心臓が凍った。

毛利探偵事務所は萩原の職場だ。

第12話

タイミングの悪いことにキールが姿を消した。『前』のループで話を耳に挟んだことがある自分はFBIの作業だと知っているが、この状況ではどうしても毛利探偵事務所が怪しく見えてしまう。

秋は商品を眺めるふりをしてコンビニの陳列棚の陰に隠れていた。見つかりやすい場所でサボっているのはキャンティあたりに糾弾される確率が上がるためだ。

(毛利探偵事務所へ向かう前に手分けしてキールを探すよう説得したのはいいけど、残された時間は少ない。今のうちに対策を打たないと……)

何度も同じ時間を繰り返していると言っても土門暗殺の一件に関わったのは今回が初。どこまでが『前回』と同じなのかは知らないし、把握している真実は随分とおぼろげである。役に立ちそうなループ知識は無い。

秋は思わず歯噛みした。

(まずいな)

まだまだループが続くのなら、次の周が始まると同時に人の生死もリセットされるため安心して構えてられる。しかし今回でループが終わる可能性が出てきた。『後悔』は

別のものと萩原が断言したためだ。

洞察力と推理力に優れた彼が言い切るのだから、ループ終了条件は記憶喪失以外の要因の可能性が高い。知らず知らずのうちにループ終了条件を満たしてしまったために、この周でループが終わる展開もあり得る。

記憶喪失以外に『後悔』の心当たりが全くないのも懸念に拍車を掛けていた。当たりがついていないのだから、ループ終了条件達成を故意に避ける手段は封じられている。

もしもループが終わるとしたら、この週の出来事が確定された過去となる。毛利探偵事務所襲撃が成功して萩原が殺されたら彼の死が確定する。

そこまで考えて、はたと思考の変化に気づいた。秋は購入するつもりでもてあそび始めたチューインガムの袋をいじる手を止める。

伊達航殺害犯捜索を持ちかけられたばかりの時は、萩原なんてどうでもいい存在だったはずだ。なにせ都合の悪いことが起こったら薬物で廃人にして記憶を消し去ってから殺す気満々だった。

だというのに、今では組織に反抗してまで萩原を助けることを考えている。確実に自分が変わっている。秋はその変化に対して自嘲気味に笑い、すぐに頭を振った。

(そうじゃない、今は毛利探偵事務所襲撃について考えないと)

毛利小五郎暗殺は毎回起こっているのか、自分がこの任務に関わったせいで変化が生じたのか、秋にはなにも分からない。

あれこれ考えているうちに時計の針は刻々と進む。

ぐちゃぐちゃの思考を整理する時間は残されていなかった。最優先は萩原に危険を伝えることだろう。

考えがまとまらないままポケットからスマホを取り出す。慌てすぎて暗証番号入りに何度か失敗した後メッセージアプリの通話機能を開いた。

電話はすぐに繋がった。萩原の呑気な応答が聞こえてきて肩の力が抜ける。

『あれ、間宮ちゃんじゃん。久しぶり』

「あー、萩原？ その、なんだ、うん……」

電話をかけたはいいものの言い淀んだ。命を狙われているから今すぐ避難しろだなんてどう伝えていいのかわからない。

秋がモゴモゴと言葉を噛み殺していると、萩原が先に言葉を発する。

『この時期だと……毛利探偵事務所襲撃か。んで、それを知ってるってことはもしかして、間宮ちゃんも組織の一員として一緒に行動してたりする？』

息が止まった。今までとは別の理由で心臓が嫌な音を立てる。

なんだ？ 彼は何を言っている？ あの物言いはまるで、秋が黒の組織の一員だと知っているみたいじゃないか。

(違う、落ち着け、冷静になれ。手を震わすな。……そうだ、萩原はバーボンと懇意にしていた。バーボンから警告されていてもおかしくない)

『……………おーい？』

「あ、ああ！ もちろん萩原が知ってるのは予想ついてたよ」

秋は余裕たっぷりの声色を心がけながら言った。自分が不意を突かれたと知られたくないだなんて妙なプライドが働いたせいだ。

「言っとくけど数分間の沈黙があつたのは萩原が私の裏の顔を知っていて驚いたからじゃあない」

完全に嘘だった。

萩原からは何も見えていないのを忘れて、いかにも平常心に見えるようにガムをもてあそぶ手を早める。包装紙が手から滑り落ちた。

慌てて屈んで拾おうとしたら今度は余計遠くに弾き飛ばしてしまう。割と動揺しているらしい。通話を終えて深呼吸してから拾おう。

彼女は無言で立ち上がってから萩原に向かって言い訳を始めた。

「ちよつと思ひ至つてき。安室透がポアロで働き始めた時期からして、私の正体を知らされたのは伊達の件で動いていたタイミングと合致している。そのくせ私への態度に変化がなかったのを不思議に思つてね。断じてそれだけだよ、うん」

『そりやあ元々知つてたからな』

「……………あー、急に耳がおかしくなつたみたいで。え、なんて？」

『ほら、ポアロで推理ゲーム解いてた時。あの時には間宮ちゃんの正体、すでに知つてたぜ』

それはつまり、初対面の時である。秋は再び混乱の渦に突き落とされた。

じゃあなんだ？ 萩原は組織の人間だとわかつていて自分を伊達救済に巻き込んだことになる。それはあまりにも危険感がなさすぎる。

(いや、そういうえば私を伊達の件に巻き込んだ経緯も少々不自然だった気がしなくもない。当時はそれだけ困りきつてるんだと思つてたけど、犯罪者だと知つた上での申し出をしてきたんなら話は変わってくる。もしかして裏の目的が——?)

頭が目まぐるしく回るが、疑問が肥大化していくばかりで納得のいく答えは出てこない。

問い詰めたいのにどこから尋ねればいいのかわからなくて、秋は口をハクハクさせた。

彼女が次の言葉を決めかねているうちに萩原が淡々と告げる。

『それよりも問題は差し迫った毛利探偵事務所襲撃だ。手出ししななければ疑いを残しつつも一旦組織が引いてくれる展開になるけど、どうせなら警戒を完全に解いておきたい。そのためには間宮ちゃんとの協力が必要なんだけど手を貸してくれるか?』

* * *

空がどんよりとした灰色の雲で覆われている。

もの抜けからな毛利探偵事務所内をガラス越しに確認するとジンは一つ舌打ちをこぼした。組織が到着する前に探偵事務所の面々は避難し終えていたらしい。

「チツ、逃げ足の速い……」

毛利探偵事務所向かいのビルの屋上。なんの変哲もないそこには、黒の組織幹部が勢揃いしていた。

気を取り直すようにポケットからキールの靴底にくっついていた盗聴器を取り出し

てジンが人相の悪い笑顔を浮かべる。

「まあいい。どこかで震えながら反撃の目を見つけようと自分がしかけた盗聴器の音を聞いているだろうさ」

「え、なに？　もしかして居座るつもり？　その馬鹿みたいに目立つ黒ずくめの格好で？　私以外側から見ればおもしろ集団なのに？　やめようよSNSにアップされるのがオチだつて」

「聞こえるか、毛利小五郎。組織われわれは現在米花町にいる。テメエが下手な動きをすれば、絶海の孤島に閉じ込められた兵隊の如く町の人間が一人ずつ減っていくからそのつもりでいろ」

「無視！」

「お前に聞きたいのはシェリーとの関係だ。キールの靴底にしかけられていた発信器と盗聴器、前にあの女にしかけられたものとよく似ている。偶然だとは言わせねえぜ」

どうせジンに話しかけてもまた無視されるのが目に見えているので、秋は横歩きで移動してウオツカの背中をつついた。

「それ本当にシェリー？ ジンの思いすごしじゃなくて？」

「間違いないぜ。あの女の髪がポルシェに落ちていたらしいからな」

「ジンってシェリーの髪を見分けられるの？ 気持ちわるっ」

「ちげえよ。それだけ観察眼が鋭いんだ」

盗聴器に凄んでいるジンと固唾を呑んで成り行きを見守っている面々という状況で、二人の会話だけが場違いだった。たるんでいると言わんばかりにジンが二人へ鋭い視線をよこした瞬間、足音が響く。地上へ通じる階段からだ。

各々が一斉に身構えた。

キャンティとコルンはアイコンタクトを交わし、ジンは懐の拳銃に手をかける。全員が警戒心をにじませて階段を睨みつける中、現れたのはよく知る男だった。

「バーボン!? なんでここに」

「ポアロへの通勤途中に見つけたので。それで？ これは一体なんの集まりで？」

「ああ、そういえば毛利探偵事務所に潜りこんでるんだったな。事前に目をつけていたとは、さすが組織随一の探り屋だぜ」

ウオツカが納得げに頷いているが色々と間違っている。

そもそも毛利小五郎は名探偵ではない。名探偵に仕立て上げられているだけだ。

「おい、盗聴器が音を拾ってるぞ。安室透の正体まで毛利小五郎に筒抜けだ」

「あ」

「なにが起こってるのかわからないって顔をしてるな、バーボン。教えてやるさ。キールの靴にお前のお師匠サマが盗聴器と発信器を取り付けやがったんだ。しかし組織の目はごまかせねえ。目眩しの蠟人形を用意する暇もなく尻尾を巻いて逃げ出し、今となっちゃん俺たちに脅されてる始末だ。知っていることを残らず吐けてなア」

「それ僕の私物ですけど」

「はっ」

先ほどまでドヤ顔で解説していたジンが固まる。

バーボンは呆れ顔でもう一度告げた。

「だから、その盗聴器と発信器は僕のです。ピンポンダツシユ犯のあぶり出しを依頼され、キールですら真相を掴めない事件なんだからと念を入れて玄関前にしかけたもので

すよ。ガムでくつつけておいたので、おそらく剥がれてキールが踏んづけたんでしよう」

「じゃあバーボンが毛利小五郎を探ってるってのは!？」

ウオツカが食い気味に尋ねたがバーボンは鼻で笑い飛ばす。

「僕が毛利小五郎を探っている？ ハッ、冗談を言うのならもつとマシなものにしてください。彼には世間で持て囃されるほどの実力はないし警戒するだけ無駄ですよ。僕がああ探偵事務所に居座っているのは全くの別件。あのお方直々に下された大切な任務のためだ。まあ、あなたがた、特にアドニスの前で説明できる代物ではありませんが」

信用できないと言わんばかりにわざわざ自分のコードネームを出された秋は、珍しくピクリと片眉を上げるだけにとどめた。普段なら自画自賛を交えて言い返し、コテンパンに反論されるところまでがセットだが、今回のバーボンは協力者。話の流れを変えずに成り行きを見守ったほうがいい。

ほぼ予想通り第一声を切り出したのはキャンティだった。

「じゃあ何だい!? DJの暗殺を取りやめてまで出向く必要なんてなかったんじゃないか!」

「無駄足」

「盗聴器がシェリーののと似てるってだけなら偶然の一致で済ませれるわね」

その後にはコロン、ベルモットと続く。

話の流れは意図する方向に向かっていた。

盗聴器および発信器はバーボンの私物であり、毛利探偵事務所とはなんら関係がない。さらに一時期米花町に潜伏していたとされるシェリーが同系統の盗聴器を持っていても不思議ではない。そんな雰囲気や場に充満する。

(この結論になれば組織の動向を探っていた何者かとキール、およびシェリーとの繋がりが消える。キールが関係なくなれば、タイミング的に唯一の容疑者だった毛利小五郎からも目が逸れる。でも頭が切れるジンやベルモットがいる以上、それで終わるわけないよなあ)

横目でジンを確認する。彼は何やら考え込んでいる様子だ。

秋が盗み見を始めて数秒後、予想通りジンが異議を唱えた。

「待て。だったらなぜキールは消えた？ 暗殺のためにターゲットの車にバイクで接近していた途中で急に連絡が途切れた、周辺を探しても見つからないとなりや何者かに攫われたと考えるべきだ。それも複数人のな。それにキールが駐車場での待ち合わせに遅れてきた理由を覚えているか、ウオツカ」

「ええつと……あ！ 気になる車がついて来ていたから念のために撒いたつて言つてやしたぜ！」

「ああ、その通りだ。この状況じゃあただの思い過ごしとは考えにくい」

「普段は『殺した奴のことは覚えてねえ……』とか言つて報連相に支障をきたしまくつてる奴がなんか言つてる。……ま、どうせ無視だよ。わかっちゃいたけどさ」

「それつてまさか——!？」

「そう、俺たちをコソコソとつけ回してたハエのような集団がいるんだよ」

「そいつらがキールをさらつたつてことですか!？」

「間違いねえぜ」

「ちよつと待つてよ。そいつらがキールをさらつたんなら、アタイらの行動をある程度把握してたことになる」

「よくわかってるじゃねえかキャンティ。俺が言ってるのはまさにそれだ。ハエどもはどうして組織の動向を知れた？ この盗聴器と発信器が関係してるんじゃねえか？」

なあ、バーボン」

「まさか僕がその集団を庇っていると？ 冗談はやめてください」

問い詰められてもバーボンは焦りを一切感じさせずに飄々と言つてのけた。

彼はジャケットのポケットから手のひらサイズの機械を取り出す。

「どうせここにいる誰かがポカをやらかしたんでしよう。ここに盗聴器探知機がありません。これで見すみす盗聴器を仕掛けられた無能を炙り出せますよ」

「なんでそんなもん持つてるんだ」

「米花町は何かと物騒なんです。加えて僕はポアロでアイドル的存在なので……」

演技かかった様子で残念そうに首を振るバーボン。秋は思わず呆れ顔になった。

「それ自分で言う？」

「お前の言動の方がよっぽどだろうが」

すかさずウオッカが口を挟む。

秋はムツとして言い返そうとしたが、ベルモットに言葉を被せられた。彼女は腕を組んでうんざりした態度を全面に押し出している。

「さつさと始めましょう。これでジンの気が済むみたいだし」

「ええ」

バーボンは頷き、アンテナを伸ばした探知機を持ってゆっくりと移動し始めた。

左端から進み、コルン、キャンティ、ベルモットを通過する。

秋の前に来たところで、探知機がタイマーのような音を出した。

一斉に全員の視線が集まる。

「……アドニスですね」

「嘘でしょ」

バーボンはアンテナを戻した探知機を反対側に持ちかえ、盗聴器が取りつけられそう

な場所を一つずつ確認した。

袖口、襟裏^{えりうら}、足元。左足に近づくと探知機のライトが点滅する。

全員の視線が痛いほどふりそぐな秋は靴裏を調べた。地面に触れないくぼみ部分にチューインガムが張り付いている。

剥がしたチューインガムの中には盗聴器と発信器が入っていた。

「ごまあねえなア。その様子だと現場から遠のいていたのは特別扱いじゃなくて能力不足なんじゃねえか？」

ジンが嘲つたのを皮切りにドツと場が沸いた。皆、組織の爪弾^{はじ}き者の失敗が嬉しくてたまらないのだ。

「全く。嫉妬されるのは羨望の目を向けられる人間の宿命だよな」

秋は悔しさで歯軋りしそうになりながら涼しげな顔を意識して作った。心を乱さないよう細心の注意を払っていないければ今にも歯茎から血が出ているはずだ。

チューインガムから取り出した盗聴器と発信器をジンに無理やり押し付けてウエツ

トティツシユで手を拭く。

指のベタつきがなくなつて、ジンが興味深げに機器を顔の近くに持つていった途端、重い音が響いた。つい数時間前に聞いたのと同じ。銃声だ。

ジンが持つていた盗聴器が弾ける。コンマにも満たない早さで地面に転がった発信器も同様に破壊された。

予想外の出来事に全員が固まる。

真つ先に動いたのはスナイパーコンビだった。

「後ろ、八時の方向」

「あのビルだよ！」

二人は慌ててライフルに手をかけるが、途中でコルンのライフルが奪い取られる。

「貸せ！」

ジンは素早い手つきで奪ったライフルを構えてスコープを除き、忌々しげに呟いた。

「赤井秀一……!!」

「赤井つてライ? シェリー姉の元カレでやけにあの方がビビってるFBIの!」

「は? 今赤井つて言いました?」

バーボンが目をかつびらいてとんでもなく低い声を出した。

組織にいた頃から反りが合わなかったとかで、スコッチの一件がなくても彼は赤井秀一を敵視しているのだ。

秋は数テンポ遅れて銃弾が飛んできた方向を見る。それらしい狙撃場所は一つしかなかった。七百ヤードは離れたビルだ。

並大抵のスナイパーではあそこから小さな盗聴器や発信器を狙い撃つだなんて芸当できっこない。

三度目の銃声。ジンの頬が切れた。

「FBI……そういうことか!」

「クソツ、銃弾をスコープに貫通させてそのまま兄貴の左目を狙いやがった! あの一瞬でライフルをズラすだなんてさすがの反射神経でしたぜ兄貴!」

続いて四発目、五発目の銃弾がジンの胴体に撃ち込まれる。

しかし彼は表情を歪めて撃たれた場所を押さええるだけで倒れることはなかった。中に防弾ジャケットを着ているのだろう。

(米花町に近づくんなら一般人が起こした事件に巻き込まれるかもしれないもんな。私も着てこればよかった。今度から米花町近くを訪れるときは防弾チョッキでも着とこ)

「あ、兄貴……」

「ずらかるぞ」

「でも毛利探偵事務所は?!」

「構うな、急げ! バーボン、お前もだ!」

「あの男の前にして逃げ出すのは癪ですしこれ以上ドタキャンすると梓さんに大目玉を喰らうんですが……背に腹は変えられませんね」

「そしてアドニス。お前だけ別行動だ。どうやら俺たちと同じ空気を吸いたくないらしいからなア」

「そりゃポルシェの中で散々そう訴えてはいたけど、え、なに? この状況で?」

「心配するな。行き先が人生の終着駅にならないよう祈るだけの慈悲はかけてやるさ」

「電車で帰れだによ！」

「あ、それそういう意味なんだ。ていうかはっや、足はっや！」

途中から彼らは走りながら話していた。すでに階段の中腹に差しかかっている。

秋は慌てて追いかけて出したものの数歩進んですぐに諦めた。距離は開く一方だ。ジョンたちに比べて体を動かす機会が圧倒的に足りない自分では絶対に追いつけない。

そうしているうちに彼らは全員地上に降り立ち、道端に停めていた車に乗り込み始める。

秋は手すりから身を乗り出して思いつく限りの悪口を吐き捨てた。

「ふっざけんなよこのロン毛！ 梅雨の時期に暑苦しい格好したロリコンポエム野郎！

職質されればいいのに！」

しかしジンはこちらに視線すら寄越さなかった。閉じたばかりの扉に遮断されて声が届かなかったのかもしれない。

やがて組織の車が二台とも発車してしまう。

階段の途中で立ち尽くす秋だけが残された。銃撃は止んでいた。

* * *

「つたく！ 萩原が赤井秀一に話を通して撃たれないってわかってたから良いもの
！ 私に死んでたかもしれないのに何考えてんだあの永遠厨二病！」

「……………悪い、あれ赤井捜査官の独断だったから話通す暇がなかったっていうか……。
まあでもあの人頭切れるらしいしスコープ越しに様子を見て間宮ちゃんもグルだっ
て気づいてくれたんだろ」

「嘘でしょ……………ああいや、独断ね、うん。まあ私が一芝居打つのに協力したって知ら
ずに銃撃をやめなかったとしても無事だったはずだし問題はないけど!? だってこの
私だし」

「いや間宮ちゃん急に全身震えだして……」

「これは、そう、武者振るいつてやつだよ」

「……………あー、そうだな。そうしとくか」

命が脅かされたのは本当に久々だった。

組織に入つてすぐに裏技を使えば危険な任務が免除されるし、組織に入るまでの流れには一定のパターンが出来上がっているため、どう動けばいいか、いつ何が起ころうかは事前に分かつている。

だからこそ予想外の事実にもかかわらず動揺しているのだ。

それだけである。決して自分が小心者だからではない。

秋はそう内心で唱えてから、組織の目を欺いた方法を思い返した。

コンビニで購入したチューインガムに私物の盗聴器と発信器を包んで靴底にくつつける。あとは合流したバーボンに発見してもらい、キールが攫われたのは自分のミスだと組織に誤解させるだけ。

至つて単純な手口だった。

「私がミスを偽装するだなんて人類史における重大事件だね」

「それはホントそう。おかげで助かったよ、ありがとな」

ブラインドが下された毛利探偵事務所。小五郎やその娘はまだ避難先から帰っていないため萩原と二人きりである。

問いただきたいことが多すぎるので内密に話せる場を用意してもらったのだ。秋は足を組んで胸を張り、指を二本立てた。

「尋ねたいのは二つ。どうして私が組織の人間だと知っていたのか、バーボンを作戦に組み込んで彼が組織の意思にそむく瞬間を私に目撃させたのはなぜか。下手したら降谷零の顔に気づかれるかもしれないのに。今までの『周』で、組織が潰れて逮捕されたときに降谷零と出会っている可能性が高いと言っても危険すぎるでしょ」

真剣な表情で萩原を見る。

彼は数秒間の沈黙の後、言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「……班長を殺す犯人を捕まえるために動いてた時の俺に、何かしらの疑問を感じたことは？」

「多少はね。時折含みがありそうな言動をするし、何よりあの時点で私が組織の人間だって知ってたらしいのに普通に接していた。ある程度信頼を寄せられてた気もする。私のあまりの素晴らしさに骨抜きにされて信仰の域に達してるとってわけでもなさそうだし。……こうして羅列してみるとけっこう不審だね」

「班長の一件に間宮ちゃんを巻き込んだ理由は二つあるんだ。一つは間宮ちゃんを加えれば行き詰まりだった犯人探しに兆しが見えるんじゃないかと思つたから。これは予想通りだと思う。もう一つは間宮ちゃんが信頼できるか見極めるためだ。一緒に行動する時間を確保できればその分観察できるだろう?」

同じくループしている人間として人となりを知りたかつたということだろうか。しかしその時点で黒の組織の一員だと知られていた。考慮するまでもなく危険な相手だと切り捨てるのが普通である。そうしなかつた理由があるはずだ。

そこまで考えた途端これ以上先に進んではいけないと脳が警報を鳴らした。

自画自賛している時、やけに自分の言葉が上滑りして聞こえることがある。そういう時の反応と全く同じだ。今回のこれも、深く考えたら精神的にダメージを負う類のものなだろう。

一瞬でそう判断すると、秋は慌てて思考を断ち切って別の話題を持ちかけた。

「それで? 今日の出来事からして私が信頼できるって結論を出したみたいだけど決める手はなんだったの?」

「ハムサンドだ」

「ハムサンド?」

「正月明け……班長殺害の容疑者が出揃ったあたりだな。ポアロのハムサンドをテイクアウトして食べてた時、味に心当たりがある反応をしてただろ。一度か二度食べた程度では味の区別がつかない馬鹿舌の間宮ちゃんがだ。心当たりができるほどたくさん、同じハムサンドを食べたことになる」

「どんな食べ物でも美味しく感じられる舌の持ち主と言ってほしいね」

「安室ちゃん……降谷零から聞いたことがあるんだ。あのハムサンドは親友直伝のレシピで、レシピを知ってるのは世界で二人だけだつてな。そいつも組織に潜入してたんだろうけど、間宮ちゃんとそいつとの関係性は希薄で、手料理を振る舞う機会があつたとは思えないって証言を得てる。つまり、」

萩原は真実を確信した探偵の顔で笑い、秋が初めて聞く名前を口にした。

「君は諸伏景光を匿ってるんだらう? 諸伏景光は生きている。あいつを殺さなかつたんなら信頼できるさ」

* * *

特徴的なエンジン音を響かせてポルシェが走っていた。その後ろにはスナイパーたちが乗るバイパーがくっ付いている。

アドニススの靴裏に付着していた盗聴器と発信器はFBIの手によるものだろうと話していたところで無線からザツピング音がした。続いてキャンティの声が聞こえてくる。

『ねえジン、流石にあの状態でアドニスを置いてきたのはマズいんじゃないかい？ 毎回後方から講釈垂れてるだけで現場に出ないクソムカつく相手が致命的なミスを犯したからって、死なれでもしたらあのお方がなんて言うか……』

「問題ないさ。なにせあのお方からの指示だ」

ジンがくつりと笑った。

キャンティに加えて運転席のウオッカからも驚きの声上がる。ベルモットですら僅かに目を見開いた。

ジンは眼前を見据えたまま話す。

「毛利探偵事務所に向かう前にメールが届いてな。前もって狙撃場所に陣取っていた赤井秀一が銃弾を浴びせてくるかもしれないから、その場合はアドニスだけ残して退散しろだよ」

「なんでまた……」

ボスからの指示に含まれた真意をはかりかねてウオツカが零した。

赤井が待ち構えていると予想していたことへの疑問は見られない。なにせボスの慧眼は周知の事実であり、そのおかげで切り抜けられた危機は数えきれないほど存在している。

それら偉業を考えれば、FBIが毛利小五郎の裏にいて、あの場で赤井秀一が出てくることまで読んでいたのも納得できるのだ。

ジンは「さあな」とだけ答えた。

くわえたタバコに火をつけて白い煙をゆつくりと吐き出す。

再びタバコをくわえ直してから視線をバックミラーに映った男へと移動させ、断定的な声色で言った。

「だがそのヒントはバーボンが握ってるんじゃないか？ テメエが毛利探偵事務所に潜入していた理由。俺たちの前で説明できる代物じゃないと言っていたが、正確に表現するとアドニスには教えられない任務だったんだろう。どうして毛利探偵事務所だったのかは知らないし興味もないが……」

車内の視線が一齐にバーボンへと集まる。

無線越しに話を聞いているスナイパーたちも息を止めて彼の反応を待った。

組織随一の探り屋は計算され尽くされた、作り物だと一目でわかる顔で微笑んでから告げる。

「ジンの予想は当たっています。僕に命じられているのはアドニスの見張りですよ」

第13話

スコッチを匿っていたことが萩原經由でバーボン……降谷零に伝わってから、秋は公安への協力を余儀なくされた。

「組織壊滅作戦当日だが、君は事前に研究所内へ入っておいてくれ。かつてシェリーが在籍していた場所だ。混乱に乗じて彼女の研究データを手に入れてほしい」

「えー、バーボンがやりなよ。この前頼まれて研究施設のセキュリティ情報盗み出してきたばっかなんだけど」

「人手が足りないんだ。それに君のほうが適任だろう。なにせ定期的に顔を出しているから研究所にいても怪しまれにくい」

「そうだけどさあ」

「組織が保有する広大な敷地内に立ち並んだ研究施設の一角、製薬棟の最奥に位置する部屋に問題のデータが保管されている。部屋のロックを解除するには研究所員に支給されているIDカードが必要らしいが……そうか、君には荷が重いか。松田の拳銃を気づかれずに奪った君なら可能かと思っていたけどあれはまぐれだったんだろう？」

「まさか。完全に実力だよ」

「よくよく考えれば人が肌身離さず持つているものを盗みとるには技術が必要だ。針小棒大が服を着て歩いているような君の言葉は鵜呑みにできないし……。うん、やっぱりまぐれだ」

「……………そこまで言うんなら証明してあげようか」

というわけで組織壊滅作戦当日、秋は製菓棟内にいた。売り言葉に買い言葉で伊達殺害阻止の手伝いを引き受けたときから全く成長していなかった。

言われた通りデータ保管部屋前へとたどり着く。頃合いを見て研究員から奪ったI Dカードをスキヤナーに読み込ませれば重厚な扉が開く。

中へ滑り込むと鍵がかかる音がした。オートロックなのだろう。内側の壁にもスキヤナーが取り付けられていることを確認した後で部屋を見渡す。

無機質なデザインだ。一定の間隔を置いて柵がずらりと並んでいる。中にはホルマリン漬けやカルテがしまわれていた。

色々と眺めながら柵の間を通り抜けると、デスクに鎮座したコンピュータを見つけた。

コンピュータにUSBメモリを差しこんで事前に指示されていた操作をする。

最後にエンターキーを押した途端、画面が数式やアルファベット、初めて見る記号で埋め尽くされた。秋には解読不能だ。ミミズがのたくった跡にしか見えない。

文字列がどんどんと流れていく中で右下に表示された棒だけが静止していた。作業が完了するまでの時間を色のつき具合で表してくれるそれは白いままだ。データをコピーし終わるまで相当時間がかかるらしい。

秋はキャスター付きの椅子にドサリと座りこんで、目の前に広がる大きな窓へと目をやった。

ここから歩いて五分ほどかかる場所に建てられた施設が見える。シエリーが作っていた薬と並んで、組織が最も力を入れている研究を担っていた場所だ。何をしているのか具体的には知らない。

(あそこで萩原が爆弾解体してるんだっけ)

公安やFBI、CIAなどの各国捜査機関が手を組んで組織壊滅作戦決行まで漕ぎ着けたが、色々と大人の事情があるらしく大々的な取り組みではない。上層部が難色を示

すのだろう。話を通さずに強行突破している機関もあると聞いた。

対する組織は世界中に支部を抱えている。捜査員だけでは手が足りないかと早々に判断した合同捜査本部は、各機関を抱えている協力者をも使うことを決めた。

萩原は公安の協力者、もしくはそれに近い位置にいる人物だったのだと思う。

警察官だった友人が急に消息を経ったと思っていたら数年後に二十八歳フリーターとして現れたのだ。ある程度の事情は聞かされていたと考えるべきだし、もしかしたら安室透が毛利探偵事務所に居座る手伝いをしたのも萩原かもしれない。

ともかく、二年前から協力関係にあった萩原を降谷零が抜擢するのはおかしくない流れだった。組織はすぐに爆破で証拠隠滅を図るので爆弾解体技術を持った人間はいくらいても足りないはずだ。

特に萩原が担当している向かいの施設には安全な状態で爆弾が保管されており、有事の際にはロックを解除して施設諸共爆破することで機密を守るつくりとなつている。その解体が萩原の役目だ。

(設置されてる大量の爆弾、無事に解体できるのかな。萩原の腕を疑っているわけじゃないけど思いもよらない展開が起こるかもしれない。なにせ爆弾と一緒に部下を働かせる頭おかしきジジイが仕掛けたものなわけだし……)

窓の向こう側には問題の建物が見える。

萩原の担当があそこだったからこそ秋は彼もこの作戦に携わっていると知れた。

本来なら必要以上の情報を教えてもらえない立場ではなかったが配置場所が近い以上現場で顔を合わせる確率が高く、前情報もなしに再会して混乱されるよりはマシだと教えられたのだ。

ついでに予想外の事態になった場合の指示出しも通話用のインカムと共に押し付けられたが、彼と連絡を取る手段があるのはありがたい。

(萩原の言う通り今回でループが終わるとすればこのタイミングで死んだ人は二度と甦らない。死が確定してしまう)

湧いてきた不安を拭い去るため、秋は無線機のインカムを操作した。機械的な電子音の後に萩原の声が聞こえる。彼の間延びした返事と共にかすかな足音を耳が拾った。移動中だ。

秋は間髪入れずに尋ねる。

「萩原、爆弾解体の進捗は？」

『ぼつちりよ。全部終わってて、施設を出るために長い廊下を移動してるところ』

「……」

爆弾解体が終了しているのなら萩原が死ぬことはない。頭では理解していても胸に不信感が広がった。どうしてそう感じるのかは分からないが順調すぎる。もしかしたら順調に行かなかった場合を知っていたのかもしれない。

そこまで考えた瞬間気づいたら口を動かしていた。

「……萩原さあ、伊達が死ぬ未来を回避できたらループに関して知ってることを全て教えるって約束だった割には教えてくれた内容しよぼかったよね。あれ、まだ私に言っていないことがあるからじゃないの？」

乾いた唇を舐める。一度口にしてしまえばもう引き返せない。

それでも彼をこの世に繋ぎ止める何かがほしくて、真実と向き合う覚悟などできていなくせに、秋は閉まりそうになる喉を無理やりこじ開けた。

「例えば記憶を失う前の私を知っているとか」

嫌なことに確信があつた。

間違ひなく萩原はかつての自分を知っているのだ。そうでなければ初対面の時点で黒の組織の人間だと知っているはずがない。

組織の人間が信用できるか確かめるだなんて無謀な賭けに出たのも、かつて『後悔』について断言したのも、元々自分を知っていたからだと考えれば全部説明がつく。

固唾を飲んで答えを待つ。返ってきたのは肯定だつた。

『大正解。予想通り俺は記憶を失う前の間宮ちゃんと同面識があつた。でもまあ、一旦ここで話は中断しようぜ。今は込み入った話をするほど時間がないし、そもそもまだ過去を知る準備ができてねえだろ。俺が死ぬんじゃないかつて不安にかけられて引き止めるために約束を取り付けたかつただけと見た』

「……………」

自分を抱きしめるように右手で二の腕を握る。徐々に左手が白くなり始める。右手に力を込めすぎて左腕の血管が圧迫されているのだと気づくまで時間を要した。

自分の感情を言語化されたせいにより一層恐怖が強まったのだと思う。同時にこれ以上目を背けることもできなくなった。

認めよう。萩原の言う通り秋は過去を知る準備ができていない。それどころか心の奥底ではずっと知らずにいたいと思っている。過去を知ってしまえばそれがどんな内容だろうと自分の罪と向き合わなくてはならなくなるからだ。

だから萩原がかつての自分を知っていると薄々勘づきつつ、今日までその話題を避けてきた。

肺が押し潰される。うまく息ができない。

背中が丸まっていることに気づいて秋は慌てて背筋を伸ばした。

それでも息苦しさは消えてくれない。

——強まっていく閉塞感を吹き飛ばしたのは萩原の明るい声だった。

『だーいじょうぶだつて！ 爆弾は全部解体バラし終わってるしこの棟にいた組織のメンバーは非戦闘員だったのもあってとつくの昔に制圧済み。あとは施設から出て後方待機班と合流するだけなんだから。全部が終わって間宮ちゃんちゃんの心の準備ができたら話してやるよ。あー、でもループが続くんならそれぞれ十五歳の体に逆戻りしちゃうか。

お互いどこにいるのか分からないままなのも不便だし、また時間が巻き戻った場合に備えて実家の電話番号教えあつとく？ ま、今回でループは終わると思うけどさ」
「だね」

あつけらかんとした、茶化すような物言いだったが、彼の性格を考えればこちらの心情を察した上での振る舞いなのだと想像がつく。

萩原が口にする実家の電話番号を聞いているうちにふつと力が抜けた。少し安堵したのだと思う。

ずつと強ばりつばなしだった口元を緩めて、今度は秋が児童養護施設の電話番号を伝える。

数字をそらんじながら眼前のコンピュータに目を落とすと、ディスプレイに表示された長い棒のアイコンが作業終了を告げていた。USBメモリを引き抜いてポケットにしまう。

仕事を終えてから窓の外に視線を戻した。萩原のいる施設が、空を飛ぶヘリのライトで闇から浮かび上がっているのが見て取れる。向かいの施設はとにかく広い。萩原が出てくるまで時間がかかるだろう。

自然と笑みが溢れてくる。

胸に抱えたモヤが晴れたような、清々しい気分だった。

秋はホツと息をついて、

爆音が右耳を突き抜けた。

部屋が閃光に包まれて視界が真っ白に染まる。

思わず耳からもぎ取ったインカムを放り投げると同時に目を閉じる。窓の外から聞

こえてくる地の底を這うような轟音に肝が冷えた。

しばらくそうしていた。正確な時間はわからない。数秒にも数十分にも感じられた。

ともかく、静かになって一定の時間が過ぎてから秋はおそろるおそろる目を開ける。

目を開けて真っ先に飛び込んできたのは火の海だった。萩原がいる施設が轟々と燃

えている。窓という窓から炎や煙が吹き出している。

黒い煙が闇に溶けていく。爆発の衝撃でヘリが傾いていた。

「……………」

愕然とする。ポカんと開いた口から間拔けな声がこぼれた。

一体なにが起きているのだろう。頭がやけにぼんやりとしていて上手く働かない。

（ええつと、炎。煙。……大爆発が起こったのか。萩原が見逃した爆弾があったとか？
そうだ、萩原。まだ建物内に居たはずで——）

ハツとして、急いで床に落ちたインカムを拾い上げた。ボタンを押しながら何度も呼びかける。どれだけ声を荒げても返事は返ってこなかった。

* * *

——研究機関制圧時に起こったクロノス棟と呼ばれる建物の爆発ですが、設置されていた爆弾はすべて解体済みだったことが確認されました。

——だとするとあの爆発は事故なのか？

——しかし事故にしては破壊された場所がピンポイントすぎます。何者かが、なんらかの手段によって爆発を引き起こしたと見るのが妥当かと。

——セキュリティや外部からのアクセスは全て無効化していたはずだが？

——ですね。引き続き調査を続行します。

喧騒が耳を通り抜けていく。組織壊滅作戦終了後に現場で交わされていた捜査官たちの会話は霞がかつて感じられた。

それから数日後。

拘束状態の秋の元に降谷零が訪れた。彼は開口一番に告げる。

「萩原は死んだ」

最悪だった。

降谷は褐色肌でもわかるほど濃いクマをこきえていて、何かを耐える表情を浮かべた。ひどい顔だ。自分も彼と負けず劣らずひどい顔をしている自信がある。

強化ガラスに映る自分が、血走った目を虚空に向けてぐしゃりと髪の毛の付け根を握りしめた。自身に言い聞かせるためにブツブツと唱える。

「一つ、ループはトリガーとなる『後悔』を解消しない限り終わらない。二つ、ループ中に別のループが起ることはない。スコッチと接触を続けてもループが終わらなかつた過去を顧みるに、スコッチと接触して最終的に失っている記憶を取り戻すところまでがループ終了の条件だと思われる。萩原は今回でループが終わるはずだと言つてたけどあんなものは間違いだった」

「突然どうしたんだ……?」

「そうだ、そのはずなんだ。だって萩原は機会が来たら全部話すつて私と約束したんだよ? この私との約束を守らない人間がいるわけがない!」

「……あー、きみにとつても萩原が大事な友人だったのは分かった。だからもう少し落ち着け」

「その顔は私の気が狂ったと思つてるでしょ。今にわかるよ、もうすぐ『巻き戻る』時間になる。ああ、巻き戻りを認識できないバーボンにはわからないか」

言い終わつて勝手に満足すると壁にかかった時計を見つめた。時計が刻む微かな音だけが狭い部屋に響く。二十三時五十九分。

あと数秒で日付が変わるタイミニングで秋は秒針に合わせてカウントを始めた。

「さん、にー、いち」

ゼロ。

瞬間、幾分か幼くなった秋がベッドから飛び起きた。

黄ばんだ壁紙が見える。児童養護施設のものだ。

「…………ツ」

割れるような頭の痛みと共に記憶が怒涛のごとく押し寄せる。

胸を撃ち抜かれたスコッチ。頭を吹き飛ばされたスコッチ。薬品のせいで人間なのか液体なのか判断がつかなくなったスコッチ。

組織に入るために両手を汚し続けた日々。廃ビルから飛び降りたせいでぐちゃぐちゃになったスコッチの死体。絶望をありありとにじませたバーボン。

尾行に気づかない伊達航。証拠探しのために徹夜した日。ハムサンド。湯気を立てたビーフシチュー。炎と煙を吐き出し続ける組織の研究棟。

震える足を叱咤し可能な限り早く動かしてトイレへ向かう。何度も経験した甲斐があつて今回は間に合つた。

喉から熱いものが込み上げる。どれだけ出しても次から次へと吐き気の波は襲ってきた。

胃に残っていた食べ物どころか胃液すら出し尽くしたところで嘔吐が終わつた。ループした瞬間は毎回こうだ。脳に何十年分もの記憶を一瞬で刻む弊害だろう。疲れた身体に鞭を打つて口をすすぐ。汚れた水を吐き出してからぼやいた。

「あーあ、しばらくしたら歯磨きもしないと」

口調とは裏腹に心は弾んでいる。これで萩原の死はリセットされた。

* * *

時間が巻き戻った当日。

迷惑がかららない時間になると秋は施設の固定電話に飛びついた。事前に聞き出していた萩原の実家の番号へ電話をかける。

代わりに出た姉が外出中だと教えてくれて、帰宅したら折り返させると約束もしてくれた。

しかし次の日になっても折り返しの電話は来なかった。不審に思ってもう一度電話をかけたが繋がらない。いくら待っても誰も電話に出ないのだ。

それから何日間も電話に出てもらえない日々が続いた。

交通費を工面するのに一週間がかかった。

秋は必要な金額を手にするるとすぐ電車で飛び乗った。幸い、彼の実家がどの街にあるのか聞いたことがある。ある程度場所がわかっているのだから修理工場を営んでいる家なんて聞き込みをすれば簡単に見つかるだろう。

予想通り、そう時間はかからずに萩原家を発見できた。

沈みゆく夕日に照らされて、一般的な住宅である萩原の実家が真っ赤に染まっている。ギヤーギヤーと不気味なカラスの鳴き声が響く。

郵便ポストには何日分もの新聞紙が無造作に突っ込まれている。

不穩さを意識しないよう努めつつ緊張した面持ちでチャイムを鳴らすと大学生くらの女性が出てきた。萩原によく似た垂れ目の下には黒いクマが浮かんでいる。彼女が話に聞いていた姉だろう。

一週間前に電話した萩原の友人だと告げると、彼女は痛ましげに眉を下げた。

「ああ……。そうか、研二の」

研二と口にした途端顔がクシヤリと歪む。今にも泣き出しそうな顔だった。

しかし彼女はゆつくりと息を吐き、すぐに表情を整える。先ほどまでの悲しみや不安は見受けられない。代わりに秋への憐れみと覚悟を決めた真剣さがあった。

両肩に手を置かれた。

目をしっかりと見つめられて、言い聞かせるような声色で告げられる。

「落ち着いて聞いてくれ。……あいつは行方不明なんだ。急に姿を眩ませてな」

は、とか細い息が漏れた。

日本の警察は優秀だ。きっとすぐに見つかる。研二は大丈夫だ。そういった励ましの言葉が右から左へと通り抜けていく。

萩原が姿を消したタイミングを聞き出したことだけ覚えている。気づいたら養護施設の自室に戻っていた。ずっと上の空だったせいであろうやって帰ってきたのか記憶にない。

時間が巻き戻って出来事がリセットされれば非ループ者たちと同じように萩原も蘇ると思っていた。

しかし彼は時間が巻き戻った当日に姿を消した。そうになると自ずと答えが見えてくる。警察は誘拐の線で調べているらしいが、あれは誘拐などではない。

「……ループ者がループの途中で死ぬと消滅する」

重い感情を吐き出すように声に出してベッドに倒れこむ。胸の不快感が増したただだった。

第3章 スコッチは自殺をやめてくれない 第14話

朦朧とする意識の中まぶたをこじ開ける。いつの間にか寝てしまったのだろうか。スマホを探そうとして腕を動かせないことに気がついた。腕だけではなく両足も胴体も全く動かない。唯一動かせるのは頭だけだ。

「あ、起きた？」

「アド、ニス……？？」

「正解」

いつも通りのドヤ顔に似た笑顔を浮かべる彼女を認識すると共に、徐々に意識が覚醒し始めた。彼女が座っているのは黒いソファアーム。

ソファアームにも、その後ろに広がっている殺風景な内装にも見覚えはない。知らない場所だ。

混乱しつつ視線をおろすとベルトで椅子に拘束されている自身の体が見えて、やっと

状況が把握できた。俺は組織の幹部に拘束されている。

「公安の潜入捜査官なんだってね。組織中に知れ渡ってるよ。スコッチを見つけ次第殺せて命令が幹部に一斉送信されてから一時間くらいかな」

「一時間前ってなると……」

「そう。私とスコッチが二人で任務をこなしていたとき。任務が終わってからスコッチを気絶させてこのセーフハウスまで運んだんだよ」

アドニスの説明を聞いて思わず舌打ちしなくなった。組織に長いこと属している幹部と行動しているときに連絡がまわるだなんてタイムミングが悪い。

俺はこれから取れる行動をいくつもシミュレートする。最高の結末は何事もなく逃げ切ること。しかしこれは不可能に近い。現実的であり公安警察として最も国益に貢献する方法を打ち出すべきだ。

考えだしてから数秒にも満たないうちに答えへ辿り着いた。自殺だ。せめて降谷セロの情報ロが組織に知られないようスマホを破壊する形で自殺を遂げなくては。

決意を固めた俺の心情など知らずにアドニスは悠々と足を組み替えて言う。

「まあでも私は優しいからね。助けてあげるよ。大幹部の私が殺したって言えば口々に裏取りもされずにスコッチの死亡は確定する。生きていようがバレるわけがない」
「……なんて?」

思わず聞き返してしまった。

アドニスとは俺から視線を外し、顎に手を当てて何やら考え始める。

「理由を説明してあげたいのは山々だけどその前に舐められない程度に脅しとかなきゃだしなあ……。よし、巻きでいこう」

俺に聞こえない音量でブツブツ言った後、彼女は親指と人差し指とを擦り合わせた。空気を切る虚しい音がする。

どうやら指を鳴らそうとして失敗したらしい。彼女は恨めしげに自分の指を見てから誤魔化すように腕を振り、綺麗な笑顔を貼り付け、説明を再開した。

「もちろん条件はあるよ。私と一緒にこのセーフハウスで過ごすこと。もちろん反抗の意思がないって私が納得するまでネット類や外出は禁止。公安への連絡なんでもって

のほかだ。つまりまあ、好きなだけ娯楽品は支給するから引きこもりしててよ」

言いながら彼女はズボンのポケットからスマホを取り出す。見覚えのあるフォルム。俺のスマホだ。

いくら抜けているように見えても彼女は組織の幹部。油断ならない相手だと再確認する。現に先回りされているのだ。家族や仲間の情報が、何よりバーボンの正体を示す手がかりが入っているあのスマホを奪われるのは最悪の展開と言える。

ポーカーフェイスすら忘れて睨みつける俺の焦りとは正反対に、彼女は自信ありげに胸を張った。ゆるりと弧を描いた唇を釣り上げる。

「このスマホに入ってるデータ、組織に流されると困るんじゃないかなあ」

「……俺に見せたつてことは脅しに使うつもりなんだな」

「そう。スコッチが自殺したら組織にデータを流す。さらに私が死んだ場合もデータが組織に流れるように手を回してある。つまり相打ち覚悟で私を殺してデータを始末する手段も消えたわけだね。どうせ見られたら困るんでしょ？」

「あー、要するにそれが嫌だったらさつき言つてたようにこのセーフハウスで過ごさせて？ どうして？」

「スコッチに死なれると困るから」

答えを聞いてもより混乱しただけだった。

釈然としない様子の俺を見てアドニス は視線を斜め上に放る。どう説明したものか迷っている様子だ。

やがて、ややそうしていた後で口を開く。

「部分的な記憶喪失なんだよ、私」

彼女は その 眩きを皮切りにポツポツと言葉を捻り出した。

アドニスは一部の記憶があやふやらしい。

例えば組織に入った理由を覚えていない。どのような手順を踏んで組織に入ったのかは覚えているが、当時の感情がすっぽりと抜け落ちているようだ。過去を思い返すと他人のホームビデオを見ている気分になるとか。

まるで整合性を整えるためにそれらしい記憶をあとから埋め込まれたようだと言っていた。

「で、私はスコッチが記憶を取り戻す鍵だと睨んでる。うーん、なんて言うかスコッチに
関する件で体が勝手に動いたことがあつた、みたいな」

視線をさまよわせて急にしどろもどろになる。アドニスが隠したがるようなことが
起こつたのだろう。

よく分からないが一つだけ確定したことがあつた。

「わかつた。記憶を取り戻す唯一の手がかりである俺に死なれると困るんだな」
「そーそー」

返事は上滑りしていた。

彼女からは記憶を取り戻したいという気持ちが一切読み取れない。そういうポーズ
を取っているだけで実際は記憶など心底どうでもいいように見える。

むしろ忘れている現状に安堵すら覚えているような――。

そこまで考えて思考を打ち消す。自由に体が動けば両頬を叩いていただろう。

(とにかく今考えるべきなのはアドニスの真意じゃない。公安警察官としてどう行動す

るかだ。国益という大きな括りで今の状況を俯瞰しろ。潜入捜査を任される程度には優秀な捜査官が二人、危険な状態にある。諸伏景光と降谷零だ。諸伏が死ねば降谷がNOCであると情報が流されてしまう現状では、降谷の安全を確保するためにも諸伏が生存を目指すべきなのは間違いない)

……方針は決まった。

俺はスコツチの仮面をかぶる。快活な笑顔、言葉はちよつとぶつきらぼうに。

「理由はわかったよ。今日からよろしくな」

握手のために手を差し出そうとして拘束されたままであることに気がついた。

* * *

そうして始まった同居生活の中、俺はさりげなく情報を集め続けた。おかげで判明し

た事実がいくつかある。

一つ、俺たちが住んでいるのはタワーマンション。窓から見える景色から判断して二十階目前後の部屋だろう。

二つ、アドニスの金回りはすこぶる良い。

成人男性一人が突然生活に加わっても問題ないだけの広さを持つセーフハウスを所有していたのもそうだし、人一人が生活するのに必要な物資を躊躇なく購入できたことから予想はついた。

それに共同生活が始まってしばらくの間は俺を監視するためのカメラやマイクも必要だったはずだ。逃亡対策でセーフハウスのセキュリティも見直しただろう。その上で彼女は金銭面を気にするそぶりを一切見せなかった。

おまけに探りを入れてみても「私ほどになると未来を見通すのもわけなくてね。株や宝くじ、競馬でもいいか。その気になれば適当な方法で簡単に大金を手に入れられるんだよ」と煙に撒かれる始末だ。

三つ、これは時間の経過によって自然と判明したことだが、アドニスには俺の尊厳を踏み躪る意思はないらしい。

極めて利己的な理由による軟禁なので道具のように扱われるのも覚悟していたが、彼女の態度は同じ組織のコードネーム持ちとして任務に当たっていた時と変わらなかつ

た。

それに加えてこちらの精神面を気にかけている様子も見受けられる。俺に反抗の意思がないと証明されてからの話だが、インターネットを始めとした気を紛らわせる道具の支給、条件付きではあるものの外出の許可も出された。

何より助かるのが、言い出しにくい困りごとができたタイミングで毎回声をかけてくれること。あまりにもタイミングが良すぎて、その時期に些細な問題が起こることを知っていたのではないかと少し疑ってしまったほどだ。

毎日のように気を張り詰めている必要はないと判断するのに時間はかからなかった。

そして半年が経過した今ではアドニスがどのような人物なのかもおおよそ掴めている。一言で表すと、大人になるまでに必要な過程をいくつかすっ飛ばしてここまで来た人間。劣等感や恐怖、低い自己肯定感、悲しみなどから目を背けるために自画自賛をする癖がある。あれは一種の自己暗示だと思う。

行き過ぎた自己暗示は内部まで浸透して本心と暗示との境目をなくす。同時に自分の感情に鈍くなる。彼女はまさにそれだった。感情から目を逸らしすぎたせいで自分の好物すら口々に把握していない。

だからまあ、好意を向けてる相手がいるのに自分の感情に気づかないなんてことも大

いにあり得るわけだ。

そして自分が置かれている状況。

（記憶を取り戻すためか、記憶を取り戻したがってるフリをするためか、どちらだろうがそれだけの理由で男と一緒に寝食を共にするわけがない。特に自信のなさの裏返しでプライドが高いアドニスのことだ。つまらない相手と、そういうこと、〴〵が起こる可能性は極力排除するはずで、それなのにこの状況になつてゐるってことは……）

自惚れだと思う。とてつもなく恥ずかしいことを考えている自覚はある。

だが考えれば考えるほどこの結論が強化されるのだ。

（少なくとも好意は持たれているし間違いが起こつてもまあいいかくらいには思われているんじゃないか……？）

復習しよう。

俺が第一に目指すべきは生存。

次に考えるのがアドニスの籠絡。成功すれば一気に動きやすくなるし、古くから組織

に在籍している幹部と公安との司法取引も見えてくる。やがてそれが黒の組織壊滅の契機となるかもしれない。

そして先ほど導き出した前提条件。

これらの情報から最適解を導き出せ。倫理観や道徳心は後回しだ。スコッチとして組織に潜っている間に何度も闇に葬った。それらを後生大事に抱えるよりも組織の幹部を寝返らせるチャンスのほうがよっぽど重要なのは考えるまでもない。

解はすぐに見つかった。

そもそも対象がこちらにそこそこ好意を抱いていて一つ屋根の下という状況で選ぶ答えは決まっている。ロミオトラップ。色仕掛けだ。

しかし問題が一つだけある。

（俺、ロミオトラの適正ないんだよなあ。成功した試しがないし）

どうやら俺は相手のことが好きだとアピールするのがめっぽう下手くそらしい。落とそうとした女性には口を揃えて「他に好きな人がいるよね」「忘れられない人がいるでしょう?」と言われ続けてきた。

任務で利用しようとした相手どころか本命にすらこれだ。恋人ができても他に好き

な人がいると勘違いされてすぐに振られてしまう。

もちろん今までの人生を振り返っても忘れられない人なんていない。彼女たちとは自分ながらに恋人として精一杯向き合おうとした。それでも信じてはもらえなかったし、彼女たちは口を揃えてこう言うのだ。「ずっと誰かを探してるんだもん」
きつと自分は恋愛方面に関して淡泊なのだと思う。

どうにも恋人らしい触れ合いをしたり愛を囁いたりする気になれないのだ。いざやろうとしても座りの悪さを感じてしまう。

だから相手に恋愛感情を持つていることを匂わせ、逆に向こうから好意を持たれるよう仕向ける方法は使えない。愛を囁き続けて相手が折れるのを待つだなんてもつての外だ。

俺がかろうじて出来そうなのはもつと強引なロミオトラップ。肉体関係を持つ方法だ。

公安で行われた研修の受け売りだが、女性は一度体の関係を持った男性に心を開きやすくする傾向があるし、好意を持ちやすくなる傾向もある。目的達成において強力な一手だ。勝機もある。これが一番合理的な選択だと思う。

俺は普段通りの顔をしてリビングへ立ち入った。

ソファーに座って映画を観ているアドニス元へ向かう。彼女はいつも通りリモコンを片手に早送りしたテレビ画面を見つめていた。

画面の移り変わりが早すぎて、中身がごっそり抜け落ちたパラパラ漫画を眺めている気分になる。これではストーリーを理解できないが、彼女に物語を楽しむつもりはないので支障はない。

目的のシーンをくり返し見て演技の参考にするのだとか。裏社会で生きていく以上本心を悟られない手段は必須となる。

俺は彼女の隣、少し顔を動かさず互いの息がかかるほど近い位置に腰を下ろした。

チラリと視線を向けられたので笑顔を向けておく。不思議そうにしながらも彼女の視線がテレビに戻った。不快感は見られない。

宙を睨みつけるようにして気合を入れ直してから、ソファーに投げ出されたアドニスの指に自身の指を絡める。隣でピクリと身じろぐ気配がした。無骨な俺のものとは全然違う女性の指だった。

* * *

アドニスとは俺が起きるよりも前に出かけていて、玄関から鍵を開ける音がしたのは夜九時をまわった頃だった。珍しい音に目を瞬く。

普段彼女はチャイムを鳴らすのだ。俺が出迎える時の表情からして、家に鍵を開けてくれる誰かがいるのが嬉しいのだと思う。

(昨日の今日で気まずいから顔を合わせるのを少しでも遅らせたかったってところか)

すでにアドニスの性格は把握しているので心情も簡単に予測がつく。俺はささやかな抵抗をしっかりと理解した上で玄関へ出迎えに行つた。

彼女は靴を脱ぎ終わったところだった。俺の顔を見て気まずそうに目を逸らす。

「おかえり」

「………ただいま」

「にしても起きたら居なくなつてたのには驚いたよ。急用が入つたんだっけ？」

「そう。シエリーにどうしてもって頼まれて研究所にね」

「それでこんな遅くまで？　いくらなんでも時間がかかりすぎじゃないか？」

「その後シエリーに付き合ってたんだよ。なんでも今日は姉との面会日だったらしくて、大勢の監視員なしで外出したいから代わりに幹部であるアドニスが見張り役をしろって。結局夕飯にまで付き合わされてさ」

「あれ？　でもシエリーは面会がある日は必ず一日中休みを取るって前に言ってたっけ。研究所にいるシエリーに頼まれて外出したんだよな」

俺に指摘されてアドニスの肩が大きく跳ねた。言い訳を探すこと数秒、思いつかなかったらしく「さーて！　手洗いするか！」と言い残して洗面所に向かう。

俺と顔を合わせるのが気まずくて予定を捻じ込んだのは一目瞭然だった。変なところで律儀なのでまるっきりの嘘ではなく実際に予定を入れたのだろう。

彼女が逃げ込んだ扉を見ていると少し笑えてきた。反応がいいのでついつい揶揄ってしまうのだ。

数分後にアドニスがりビングへ入ってきた。俺を視界に入れた瞬間スツと目を逸らされたので彼女に近づいてみる。

「なんかよそよそしくないか？　もしかして昨日のこと意識してたり……」

「ま、まさか。完璧を体現している私があればのことだ。動揺すると思う!？」

近づいていたおかげで瞳孔が動く様子をしつかりと確認できた。目を見れば大抵のことがわかる。訓練して意図的に動かすことができないパーツだからだ。故に一流のスパイなんかは目を見られること自体を避ける。

裏社会に身を置いている以上アドニスも知っているはずだが、そこまで頭が回らないほど動揺しているのか。というか、あの台詞のせいで瞳孔を確認するまでもなく動揺していることは明白だった。

(それにしても……)

なんだか喉に小骨が引っかかったような違和感を覚えた。アドニスが何か早口で言っているのを聞き流して考え込む。

「動揺ねえ。たったあれだけのことで動揺するほど純情でもないよ。セックスする友人

がいるんだからセックスする同居人がいてもいいはずだし何もおかしくないでしょ。この関係を始める時だつていい歳した男女が一緒に住むんだからこの展開も織り込み済みだった。この状況で動揺するだなんて相手が好きな人だからくらいしか………ん？　なんか変な方向に思考が逸れてたような……まあいいか！」

完璧。この単語が引つかかったんだ。

「むしろ隙だらけのところの意味だと思うけどなあ、俺は。実際完璧って言われて違和感すごかったし」

しばらく考えてやつと答えに辿り着いた達成感からか、つい口にしてしまった。

何気なしに零してからハツとする。確実に墓穴を掘った。あれはプライドを傷つける発言だ。

最近気づいたことだが、彼女は自分を過剰に褒め称える時に周りから向けられたい評価を口に出している。つまり完璧だと思われたかったわけであり、そこを指摘してしまえば気分を害するのは想像に難くない。

「あーっと、そうじゃなくて……」

俺は慌てて言い訳をしようとして、アドニス顔を見た瞬間考えていた言葉が全部吹き飛んだ。

彼女の顔に浮かんでいたのは驚き。目を丸くして口をポカンと開けている。それからワンテンポ遅れてほんのり頬が色づいた。

(……喜んでる、のか?)

彼女の反応を意外に思う。同時に強烈な既視感が襲ってきた。

……前にも同じようなことがなかったか？ 確かに似たようなことが以前あった。

……気がするような、しないような。

途端に自信がなくなる。時間が経てば経つほどただの勘違いだと思えてきた。

第15話

バチリと視線がかち合う。心臓が大きな音を立てた。重ねられた手が熱い。徐々に近づいてくるスコッチの瞳の奥で何か煌めいているのが見て取れた。崇高で尊い何かだった。

* * *

やっべえな、と秋は思っていた。

どうしようかな、とも思っていた。

顔を合わせるの気ままずすぎだろ、とも思っていた。

スコッチとセックスした。

なんかいい感じになってそのまま、そんな感じの展開になった。

(どうしよう、これ)

秋は遠い目をしながら水っぽいコーヒーを流し込む。これで三杯目だ。そろそろカフェインの取りすぎを心配する頃かもしれない。

組織が所有する薬品会社内の研究施設に秋はいた。そこに併設された食堂で、ドリンクバーのコーヒーを流し込む作業をひたすら続けている。

スコッチの部屋で目を覚ますとすぐにシエリーへ電話をかけ、研究施設で行う用事を無理やり前倒ししてもらったのが早朝の出来事だった。

前倒ししてもらったというか、拒否するシエリーに「とにかく今日行くから！」と叫んで電話を切り、折り返しの電話がいくらかかっても気づかないふりをして押し切った。

着信を伝えるためひっきりなしに震えていたスマホはやがて止まり、代わりにロック画面にSNSのプッシュ通知を次々と表示するようになった。

「なんで出ないの」「はっ倒すわよ」「この対応ジンのことボロクソ言えないわよ」「これからジン未満って呼ぶわ」

この辺りで、秋はようやくとSNSアプリを開いた。「ジン未満はやめて」と送る。

その後少し考えて、気の利いた自分への賛辞でも付け加えてはどうかと思い付く。自分だけがどれだけ素晴らしい存在かを讃え、ジン未満発言を撤回させてやろう。

しかし秋が気の利いた賛辞を思いつくよりも早く、シエリーの長文メッセージが届い

た。

文面はこうだ。

私は用事あるから対応できません。どうしても前倒ししたいなら、何も知らない臨時の研究員に対応してもらおうことになります。そのため普段の研究施設じゃなくて薬品会社の方の研究所に行ってください。

急に敬語になっているのが恐ろしい。

メッセージに添付されたURLを開くと地図アプリに飛ぶ。示されていたのは、組織が所有する薬品会社だった。

……というのが、秋がここに居座っている経緯である。

研究施設で行う用事は早々に終わってしまい、今は昼食を取るという名目で食堂に居座り続けている。

目覚めたスコッチと顔を合わせるのが気まずくて言い訳用の用事をねじ込み、その用事が終わってもなお帰るのが気まずくて食堂でグズグズしているとも言い換えられる。

いい歳した大人がする行動ではないのかもしれないが、昔から逃げの姿勢を貫いてきたのだ。簡単に変えられるものではない。

自画自賛だっけ見たくない現実から逃げるための行動だし、萩原が消えたを知った

後、全てを諦めて今まで通りの行動を取ると決めたのも逃げだ。

逃げることに慣れきっているせいで、秋は一周まわって開き直っていた。

（あと数時間は帰宅を遅らせたいけど、このままずっと食堂にいましたは無理がある。早いところ口実を見つけておくべきだ）

方針を決めると勢いよく残りのコーヒーを流し込んで立ち上がる。プラスチック製のテーブルの間を移動していき、食器回収場所へたどり着いた。

使っていたカップを回収場所に置いたタイミングで見覚えのある茶髪を発見する。シエリーだ。

（……無視しようかな）

秋は日和った。数時間前のやり取りがやり取りなので流石に気まずい。

しかし一瞬の迷いが命取りだった。踵を返す前にシエリーが振り向いてしまう。彼女の視線が秋を捉える。

（見つかつた）

秋は思わず嫌そうな顔をしそうになったがグツと堪えた。一方でシエリーは露骨に嫌そうな顔をしている。

もちろん普段から露骨に嫌そうな顔をされるほど険悪な関係性ではない。むしろ組織の中では割と親しい相手だ。やはり今朝の対応が良くなかったのだろうか。

（どんな理由にしろ、バツチリ目が合っちゃったし無視することは出来ないけど。ここでスルーしたら逃げたと思われる）

秋は腹を括って、ひらりと片手を上げた。

「やつ、シエリー。気持ちのいい天気だね。私と出会ったんだからもっと気持ちのいい日になるね！」

「今日曇りよ」

「気持ちのいい天気かどうかは心持ちで変わるんだよ。あまり知られていないけどね」
「じゃあやつぱり気持ちのいい天気じゃないわね。……それと、その呼び方やめてくれる？ コードネームの存在を知らされていない姉がいるから」

シエリーは途中から音量を落とした。姉に聞かれなためだろう。

彼女が気遣わしげに視線を送っている方向を確認すると、すぐ近くの席に座った黒髪の女性を発見する。話に聞いてこそいたが宮野明美を実際に見るのは初めてだ。

（面会日か。組織に許可された日だけ、表向きシエリーが勤務していることになっている薬品会社のラウンジで会っていると聞いたことがある）

同時に、秋を見て露骨に嫌そうな顔をした理由に当たりがついた。姉と会っている時に、組織の人間と遭遇するのは嫌だろう。

シエリーの都合がつかなかったのも、数少ない姉との面会日と被ったからだと考えれ

ば納得できる。

シエリーがここにいる理由も同様だ。普段はアレウス棟だかクロノス棟だか、よく分からないカタカナ名がついた研究施設にいる彼女だが、その研究施設の存在はごく一部の人間にしか知らされていないので、末端構成員や明美のようにほぼ一般人と接触する時はここを使う。

秋はすぐに視線を戻してシエリーとの会話に戻った。

「じゃあ何て呼べば？ 志保？ 志保ちゃん？」

「……………シエリーでいいわ」

「だよね。私も呼ぶとき据わりが悪かった」

彼女のことはシエリーと呼び捨てにするのが一番しっくりくる。

「ところで今日前倒しで行った検査の詳細は？」

「脳波測定と唾液検出。後はいつものセットだね」

「ふーん。脳波は取ったばっかだし、唾液のストックも十分にあるのよね。わざわざ今日検査をする必要はなかったんだけど、朝っぱらから電話をかけてきたあなたが前倒ししてほしいって言って聞かないから。担当者である私に予定が入っているから無理

だって断る前に切られるし……。おかげで代役を立てる羽目になったわ」

「ごめんごめん」

ここは素直に謝っておく。シエリーは大きく息を吐いただけに留めてくれた。

そこまで話したところで、移動してきた宮野明美が遠慮がちに尋ねた。話がひと段落したと判断したのだろう。

「ええつと、志保。そちらは？」

「話によく出てくるアドニスよ」

(話によく出てくるんだ)

秋は少々驚いたが、すぐに納得のいく解釈を思いついた。

『アドニス』は人名に使われる名前だし、コードネームの存在を知らない明美に対して話しやすいのか。近況を知りたがる身内がいる場合、一番話題に出しやすいのかもしれない)

ジンもそこそこ人の名前っぽいのが、彼の話を姉にするのは嫌なのだろう。その心情はよく分かる。

口を挟まずに話のいく末を見守っていると、シエリーが「定期的に雑談をする関係つてところかしら」と続ける。

当たらずとも遠からずな説明だったが、秋は訂正しなかった。自分とシエリーとの関係はあまり公言していい類のものではない。

ごく一部の人間しか知らない情報だが、秋は組織の研究に被検者として協力している。「被検者」なのだから実験体のように非合法な実験のモルモットにされるわけでもなく、倫理的かつ道徳的な範疇で検査協力をするだけだ。

なんでも非常に珍しいナントカという物質が秋の体内に存在しており、それを調べれば組織の研究が著しく前進するらしい。

そしてこれが組織で優遇される立場になるための裏技である。

秋の体を調べれば研究が飛躍的に進むと偶然発覚した途端、どの周だろうとあの方直々に検査協力が命じられる。

同時に、極めて貴重な被検体を失いたくないというあの方の意向によつて危険な任務を免除される立場になれるのだ。

さらにあの方は組織の全貌を幹部にすら教えないほどの秘密主義。組織の目的を突き止めるヒントを与えたくないのか、秋が被検者である事実に緘口令をひく。

結果、秋が特別扱いを受ける真の理由は広まらず、得体の知れない幹部としての地位をゲットできる。

不当に特別扱いを受けていると主張してジン一派が突っかかってくるというデメリットこそあれど、メリットが大きすぎるので秋は毎回この立場に収まっていた。

（私の検査を担当しているのがシェリーなわけだけど緘口令が敷かれている以上公言するわけにはいかないし、ああ言うしかないのが現状だ。にしても、なんの研究してるんだっけ。シェリーが関わってるんだし製薬関係だとは思うけど……）

パチン。宮野明美が両手を合わせた音で、明後日の方向に向かい始めていた思考が打ち切られた。

「あら、あなたが！」

明美は本当に嬉しそうな顔で笑った。組織の幹部を紹介されたとは思えない表情に、秋は思わず目を瞬いた。

「宮野明美です、妹がお世話になってます。志保、彼氏でも作ったらどうかって言ったの覚えてる？ あれは彼女のことを言ってたのよ。名前からして男性だと思っていたものだから」

「おあいにくさま。余計な気遣いだし私がお世話してるのよ」

なんだか失礼な物言いをされた気がするが空耳だろう。

秋はそう自分を納得させてから、さりげなく近くのテーブルを確認した。宮野姉妹がいる場所を取り囲むように点在している大柄な男たちが目につく。非戦闘員ばかりの研究棟には不釣り合いな体つきだ。

監視員だろう。シエリーはその特殊な立場ゆえに、監視なしでの外部の人間との接触を認められていない。外出するのだからコードネーム持ちの幹部の監視か、ネームレス複数人の監視がなければままならない状態だ。

(……新しい用事が見つかった)

面倒な手続きと幸運がなければ姉妹で遊びに行くこともできない二人を哀れに思った優しい自分が手を差し伸べる。完璧な筋書きだ。これなら帰宅が遅れるのも納得できる。

「シエリーさあ、物騒な監視員なしでお姉ちゃんと出かけたいくつてよく愚痴ってるよね」

「……それが？」

不審そうに眉をひそめるシェリーに向かって、秋は魅力的な笑顔を浮かべた。シェリーの眉間の皺がより一層深くなる。「まさかこの腹立たしい表情が魅力的だとも思ってるんじゃないでしょうね……？」とでも言いたげな顔だ。

「逐一姉に自慢したくなるほど魅力的だとか、性別という括りを超越するほどの美形だなんて至極当然の褒め言葉をかけられちゃサービスしないわけには行かないからね。私が監視役になってあげよう」

「一言も言っていないのよ」

「ネームド一人の監視はネームレス複数人の監視に匹敵する。美人で美形で美しいお姉さんと行動するだけなら息苦しさもないんじゃない？ 外出許可は取れないだろうけど、そもそも許可が必要なのはそれ相応の監視役を事前に用意するためだ。ネームドが一人いるんなら突然外出予定をねじ込んででも許されるはず。事後報告ばっかのジーンって奴が居るくらいだし怒られることもないでしょ」

「まあいい、まあいいわ。いつものことだし現実を歪曲しまくった言動には目を瞑りましょう。それよりあなた、その申し出の真意ってまさか私がお世話してるって発言を撤回させるためじゃないでしょうね……？」

「どうやら空耳ではなかったらしい。秋はしばし言葉に詰まってから、「シエリーって私のこと割と舐めてるよね」とだけ返した。」

* * *

カフェにシヨッピング。宮野姉妹の行き先は極めて一般的なものだった。

何より印象に残ったのはシエリーの様子である。普段ほとんど笑顔を見せない彼女は、姉の横で普通の少女のように笑っていた。

監視員である秋を除けば、親しい姉妹の休日を体現した光景だった。

秋は壁に寄りかかって化粧室の前でできた長蛇の列を見やる。どうして女子トイレとはこうも混むのだろうか。宮野明美が戻ってくるまで時間がかかりそうだ。

秋が軽く息を吐いたタイミングで、隣に佇むシエリーから話しかけられる。シヨッピングモールに流れる軽快な音楽とはアンバランスな、皮肉げな口調だった。

「それで様子がおかしい理由は？ 私たちの外出に付き合うだなんて気まぐれを起こした理由とも言い換えられるわね。初めは私の発言を撤回させたいのかと思ってたけど、それにしても上の空になっている時間が長い。さらにあなたの性格を踏まえると、何か

から逃げるための口実が欲しかったんでしよう？」

「……」

「目を背けたい現実があるのか、このあと気が進まない予定が入っているから私たちに付き合うことで先延ばしにしているのかは知らないけど、ダシにされてるこっちはたまったもんじゃないわ。それにこのままダラダラしても状況が変わらないまま時間が経つだけよ。誰かに相談して道が開ける可能性に賭けた方がいいんじゃない？」

そうは言われても未成年に話せる内容ではない。秋はシエリーの視線から逃げるようにリノリウムの床を熱心に眺め始めた。

しかし横からの視線は一向に無くなってくれない。口を割らない限り諦めてくれなさそうだ。適当な相談をして誤魔化すしかないだろう。

秋は言葉を選びながら口にした。

「……これは例え話なんだけど、何度も時間が繰り返される不思議な現象にシエリーが巻き込まれたとしよう。シエリー以外の人は繰り返しを知覚できずに毎回記憶がリセットされる。もちろん宮野明美もだ。記憶を引き継いでいない宮野明美の行動が『前回』と『今回』で食い違った場合、シエリーは同一人物だと判断する？ それとも姿形

が同じなだけの別人として扱う？」

秋がここまで動揺している大きな要因として、例のあれが前回では起こり得なかった出来事だからというものがある。

冷静な計算によるロミオトラップにしる雰囲気には流されるだけにしろ、スコッチ軟禁を決めた時点であの展開が訪れる可能性は織り込み済みだったというのに、『前回』では何も起こらなくて意外に感じていたほどだ。

だからこそ考えてしまう。

前回と今回でスコッチの行動が異なるのは何故か。今に至るまでの些細な積み重ねに変化が生じているのではないか。その場合、人格にも僅かな差が出ているのではないか。『前』と『今』の二人は姿形が同じなだけの別人で、自分が憎からず思っていた彼はどこにも存在しないのではないか。

「……………映画や小説でよくある設定ね」

かなりの間を置いてシエリーが言った。

彼女はあごに手を持っていき、床を睨みつけるようにして深く考え込んでしまう。

「またもや沈黙が訪れた。そこまで真剣に考えられると居た堪れない。」

「あー……、無理して答えようとしてくれなくても……」

「気にしないで。あなたの言葉で馬鹿げた仮説が一気に現実味を帯びてきただけだから」

「？」

「研究の話よ」

「ふーん？」

一般人の何気ない会話がきっかけで探偵が事件の真相を見抜くのと似た現象だろうか。シエリーはこう見えて優秀な科学者である。きつと先程の例え話がヒントとなって研究が進展しそうだとか、そんな所だろう。

秋が納得すると同時に考え事が終わったらしく、シエリーは理知的な瞳を細めて話し始めた。

「その思考実験には明確な欠陥がある。対照実験は確認したい物事以外の条件を全て揃えないと成立しないのよ。同一性が不明瞭なお姉ちゃんAとお姉ちゃんB以外の条件

が全て揃っている状態で別の未来が訪れて初めて、二人のお姉ちゃんは異なる存在だと言える。でも『前』と全く同じ状況を作り上げるのは不可能だわ。まず何よりもイレギュラーなのはループしている私。『前』の知識がある時点で異なる存在と言えるもの。そんな状態じゃお姉ちゃん以外の要因で異なる未来が訪れた可能性を否定できないし、なんなら可能性はかなり高い。

蝶の羽ばたきによる小さな攪乱が竜巻を起こすように、少しの差異が大きな未来への変化となり得る。

『今回』の私が『前』の私と寸分違わぬ動きをするわけじゃないでしょう。起きる時間、あくびをするタイミング、食べるもの。全部を『前』と合わせるだなんて芸当できないわよ。それよりももっと大きな変化——お姉ちゃんへ話す内容が微妙に違うとか——も出てくるでしょうね」

言われて、スコッチと関わったタイミングを順に思い返してみる。

第一に、軟禁が比較的スムーズにいくよう組織でそこそそ友好的な関係を築く。その時期に交わした雑談の内容が『前』と全然違うことは疑いようもない。

次に本来よりも少し早いタイミングでNOCバレしたと偽ってセーフハウスに連行。あの日の彼に話す内容はほぼ変わらないはずである。

記憶を取り戻す手がかりだと睨んでいる彼に死なれては困ると説明した上で、大人しく軟禁されていて欲しいと伝える。もちろん抵抗されないように脅しもする。抵抗の意思を見せたらスマホデータを組織に流出させるぞとか手を出したらどうなるかわかってるんだらうとか。……ん？

(……今回は手を出さなくて言い忘れてない?)

絶対にそれだ。スコツチの性格からして前回は律儀に約束を守っていたのだろう。

壮大に考えすぎていたのが馬鹿らしくなる結論だった。秋は遠い目をして力なく笑う。

依然として店内では軽快な音楽が流れていた。音楽を聞き流しつつ、会話がこれ以上必要なくなったことをどう伝えようかと思案する。しかし答えが出る前にシエリーが穏やかな声で言った。

「ところでお姉ちゃんだけど頻繁にメールをくれるのよ。私が組織の意向で留学させられた時からの習慣なの。たぶん少しでも寂しい思いをさせないために組織にかけ合ってくれたんだと思う。もちろん検閲されるから暗号なんかも決めたっけ。——仮に別

人だとしても同じように私に寄り添ってくれるなら、私が好きな優しさを持っているのなら、そのお姉ちゃんのこともきつと好きになる。これが私の答えよ」

言い終えた途端恥ずかしさを誤魔化すようにシエリーはそつぽを向いてしまう。

軽快な音楽が途切れた。

胸にぽっかりと穴が空いた。そこを冷たい風が吹き抜けていく。

はじめてシエリーとの断絶を意識した瞬間だった。

シエリーは愛想がないしひねくれているし変に達観している。組織への恐怖を隠すために強がっているのが原因だろう。

その息苦しさには心当たりがある。自分に自信がないから自己暗示をかけて偉そうな態度を取るのと構造は同じだ。

秋はシエリーと自分を重ねていたし、シエリーも同じ感情を自分に向けていると直勘していた。二人の間に仲間意識が横たわっていたからこそ気安い関係を築けたのだと思う。

だから余計に、彼女との断絶を目の前に叩きつけられて頭をガツンと殴られた気分になる。

シエリーには心を許せる人がいる。秋にはいない。

萩原は消えて松田とは関係が絶たれた。『前回』の義理で殉職の原因となる爆破事件を起こさなかったために手を回しはしたがそれだけだ。直接会ったことはない。

スコッチはスコッチで行動の変化の明確な理由こそ判明すれど、彼が同一人物である確証はないと来た。

孤独が浮き彫りになったせい、隣に立つシエリーがやけに遠く感じられた。

* * *

スコッチを助けると決めてから二回目の周では、スコッチが拳銃を手に入れられない状況を作り出した。一般人のふりをして足音の正体を伝える作戦は失敗に終わったためだ。

あの日は廃ビルの屋上でスコッチと対峙していた。冬の冷たい空気が頬を突き刺してきたのをよく覚えている。

緊迫した面持で互いを注視する状態が続く。先に視線を外したのはスコッチだった。彼は秋の右胴体をすばやく確認した。いつも拳銃をしまっている場所だ。

「残念ながら拳銃は持つてきてないよ。奪われて自殺されたら敵わない」

乱入者が現れないよう手は回してある。そこそこ親しくしておいた自分が助けてやると持ちかければ話を聞く姿勢にはなってくれるだろう。勝機はある。

「助けてあげるって言ったらどうする?」

「……ッ!」

スコッチは信じられないと言わんばかりに目を見開いた。

「本当に?」

「もちろん」

短く言葉を交わしてから手を差し出す。吸い寄せられるようにスコッチが一步、二歩と近づいてくる。この瞬間、秋は成功を確信した。

廃ビルにライヤバーボンが向かってくる様子はない。屋上は静けさに包まれている。冬の太陽が冷然とした光を発している。日差しに目がくらんで秋は目を細めた。

——衝撃。

世界がひっくり返った。違う。自分がひっくり返ったのだ。スコッチに投げ飛ばされた。

驚きこそすれど咄嗟に受け身を取ってその勢いで体を起こす。体に痛みはない。手加減されたのか。

今はどうでもいいはずのことを頭の片隅で考えつつ、慌ててスコッチがいた場所に目を向けた。いない。

代わりに少し離れた先に影があった。視線を上げる。屋上のフェンスの上にスコッチが立っていた。

「ごめんな」

彼の姿が見えたのは一瞬。

それでも彼の瞳に宿った力強い何かが見て取れた。

少して人間がコンクリートに叩きつけられる音がした。

どうしてこんな昔のことを思い出したのかといえば、あのとき彼の瞳に宿っていたものをつい最近目にしたからだ。

ロミオトラップを仕掛けてくる直前の彼も同じ目をしていた。軟禁初日のスコッチもだ。

あの目は何なのか、『前』と『今』のスコッチは本当に同一人物と言えるのか。

これらの疑問に蹴りがついたのは、近頃世間を騒がしている通り魔に遭遇した時だった。

第16話

スコッチには定期的な外出を許可している。強いストレスを溜めて精神に支障をきたされては本末転倒だからだ。

外出のルールは二つのみ。一つ、必ず秋が同行すること。二つ、外出前に変装を施すこと。

変装と言っても髪型を変えたり眼鏡をかけたたりする程度のもではなく、性別や年齢が異なる相手にも成りすませるほど本格的なものだ。あそこまでレパートリーは多くないものの、ベルモットが行う変装に近いと言えるだろう。

なにせ、スコッチに変装術を伝授した秋が学んだ相手は『何度か前』のベルモットなのだから。

学んだ相手は何度か前の周のベルモット。当然『今回』の彼女は秋に変装術を教えた記憶を持ち合わせていない。

それどころか『今回』、スコッチ以外に変装術を披露したことはないのです、秋の隣を歩く男の顔が作られたものだと思ひ至る人間は皆無。もしかしたら似たような技術を

持っているベルモットや怪盗キッドなら見抜けるかもしれないが、偶然彼らと出くわす確率など限りなくゼロに近い。

ゆえにスコッチ外出の危険性は低く、さほど警戒する必要はないというのが秋の見通しだった。

しかし米花町の治安の悪さには敵わなかった。

スコッチは通り魔に刺された。

* * *

近頃無差別に人を刺して回っているとニュースになっている男に遭遇したのは、帰路についた時だった。

通り魔の手に握られたナイフが、スコッチの脇腹を目掛けて迫ってくる。一切の無駄がなく、驚くほど俊敏な突きだ。通り魔よりも傭兵上がりの犯罪者だと言われた方が納得できる。

いくら体術に優れたスコッチでも不意を突かれた以上、咄嗟に相手を制圧するのは難しい。一度避けてから反撃の機会を窺うべきだ。

秋はスコッチが避けると信じて疑わなかった。現に彼の實力なら問題なく避けられたはずだ。

しかしスコッチはあの一瞬を、自身の背後に立っていた秋を確認するのに使った。

秋がナイフの軌道上にいるのを確認した直後、彼の瞳が覚悟の色をのせる。ナイフを避けるために動かしていた足の重心を元に戻す。

スコッチはその場にとどまり、左脇腹を刺された。秋を庇ったせいだった。ここ数年間で最悪の気分だった。

「そんなにスマホが大事?」

セーフハウスに戻るなり秋の口から冷たい声が出た。

「私が死んだらスコッチが持っていたスマホのデータを組織に流すって脅してあったから私を助けたんでしょ。いくら防刃ベストを着ていたとはいえ、刺された場所が悪けれ

ば死んでいたかもしれない。出血すらなかったのは良かったけど、自分の命を危険に晒す必要はなかったはずだ」

スコッチを刺したあと通り魔はフラフラと立ち去った。秋は無言でスコッチの手を引いてセーフハウスまで帰ってきた。その間二人に会話はなかった。

玄関の扉を閉めた途端言葉が堰を切ったように溢れてくる。

「こっちがどれだけ大変な思いをして助けたと思ってるの？　いくら記憶を取り戻すためとはいえ人間ひとりを始末したように見せかけるのも骨が折れるんだけど。この最高に優秀で素晴らしい存在である私がわざわざ助けた命をそう易々手放すなんて許されると思ってる？　それも精神がガキのまま止まっているでしょうもなく面倒で価値のない人間を助けるために！」

矛盾した主張をしているなあと頭の片隅で感じた。

慟哭にも聞こえる引きつった笑いを漏らしてから、秋はやぶれかぶれな態度で問いかける。

「スコッチがNOCだとバレたときに私が助けなかったらどうなっていたか考えてみようか。最初の問題。NOCであることが組織中に通達されてスコッチは逃げ回ります。なんのために？」

「……生き残るため？」

白々しい答えに口角が動く。鏡を見なくても歪な笑いが深まったのが分かった。

「ずっとぼける必要はないよ。自分が組織の手に落ちてても情報を死守するためだ。仲間や家族の情報が入っているスマホと自分自身をどうにかして始末しなくてはいけない。いくら口を割るつもりがなくても白白剤を盛られたら終わりなんだから、自殺する必要がある。それじゃああの日の装備を思い出してみよう。スコッチはあの日、自殺に使えそうなものを持っていた？」

「……持っていない」

「だったらどうやって死ぬ？」

「……飛び降り自殺かな」

「スマホを破壊できるか怪しいの？ もっと確実な方法があるよ。組織の追っ手から拳銃を奪って、心臓と胸ポケットに入れたスマホを同時に撃ち抜くんだ。そうすればス

マホから意識を逸らせる」

「そんな状況そうそう訪れるもんじゃないだろ」

「この話では訪れたんだよ。飛び降り自殺のために廃ビルの屋上へ逃げ込んだところで組織の幹部が現れた。ジャケットの内側に拳銃を入れている。スコッチなら最後の抵抗に見せかけて襲いかかり、わざと投げ飛ばされて拳銃を奪い取れるはずだ」

「そうかもしれないな」

「銃口を胸に当てた瞬間、その幹部がシリンダーを掴んで言った。俺はFBIのNOCだ。スコッチはどうする？ 警戒を続けながらも引き金を引こうとした指を止める。

一応は話を聞く体勢になる。と、そこに！ 階段を駆け上る足音が！ 続いて一般人の声。一般人はスコッチたちのやり取りを遠くから見ている、階段を駆け上がっている人物に危険を伝えるために叫んだ。その金髪のお兄さんってね。一緒に潜入している幼馴染の特徴だ。足音の正体は幼馴染だ。

さて、この状況でスコッチはどうする？ 別の幹部の襲来に驚いてシリンダーを掴む手を緩めた自称FBI。スコッチを助きたい一心で走ってくるバーボン。……スコッチはその一瞬で引き金を引いた。スコッチはそういう人間なんだよ」

彼がどんな顔をしているのか秋は知らない。視界に入っているはずなのに何も見え

ない。

これがスコッチを助けようとした最初の週の顛末だった。

偶然通りかかった一般人に扮して足音の正体を伝えてもスコッチは迷わず引き金を引く。

一見不可解な行動だ。しかし何度もループを重ねる中でスコッチがどのような人間なのか知っていくにつれて、困惑は納得へと変わっていった。

今となつては彼の心境を筋道立てて説明できる。

あの時ライの正体を裏付ける方法はなかった。ライは本当にFBIなのか、口からの出まかせではないのか。実際にFBIだったとしても利用されるのが目に見えている。助かりたい一心で彼の手を取るのとは如何なものか。

それに親友の命を救うために必死で走ってきた降谷はスコッチの自殺を止めてしまふ。そうしなければ芋づる式にバーボンもNOCだとライに知られる。

下手をすれば降谷まで命を失いかねない状況だ。

ライの言葉を信じて自分が助かる期待値とそれによるメリットは、降谷までをも危険に晒すデメリットに打ち勝てなかった。

スコッチはあの一瞬でそれだけを判断する能力を持ち合わせているし、正義のために

自分の命を天秤にかけられる人間だった。天秤が傾いたら迷わず自分の胸を撃ち抜く胆力も持ち合わせていた。

だからスコッチは自殺を選ぶ。

一瞬で最適解を導き出す能力が異様に高い彼は一秒ですら躊躇つてくれない。

スコッチは自殺をやめてくれない。

「あの場面で自殺を選び取るスコッチが！ 優しくてポヤポヤしてて正義のために非情になるのに強い抵抗感を持っていてどうしようもなく潜入捜査に向かない性格にも関わらず、一切躊躇せず自分の命すら投げ出す徹底さという適性が上回ってたから潜入捜査官に選ばれたであろうスコッチが！ それほど最適解を選び取る能力がずば抜けているくせに！ 私なんかを助けるために自分の命を危険に晒した！ ふざけるなよ」

どんとんと声が怒りを孕んでいく。

自分が何に怒っているのかもよくわからないまま秋は口を動かす。

「一方でさっきの状況だ。スマホの情報を守りたいだけなら、むしろあそこでナイフを避けるべきだった。スコッチと同じく防刃ベストを着ていた私がナイフひと突き程度

で死ぬ確率なんて微々たるものだ。それなら二度目、三度目の攻撃を確実に避けて私を死に至らせないために、戦闘に優れたスコッチが無傷で残ったほうがいい。なんなら私が刺された隙について通り魔を制圧してもよかった。あの場面で自殺を選べて、『今回』でも私に対して最も有効な一手を打ってきたスコッチが取った行動だとは思えない。スコッチの行動は極めて矛盾している」

「していないさ」

スコッチが静かに、力強く言い切った。

「そもそも俺はデータ流出を防ぐために君を庇ったんじゃない。あの一瞬でそこまで気は回らなかった」

「じゃあどうして、」

「君に死んでほしくなかったからだ」

頭が真っ白になった。

彼が何を言っているのか分からない。数秒間は耳に届いた情報をうまく処理できなかった。

秋が感情を整理し終える前に、スコッチが続ける。

「アドニスはずっと逃げ続けてるだろ。忘れてる記憶とか重ねてきた罪とか自分の感情とか、そういったものから。俺にもそういう時期があつたから少し気持ちがわかるんだ」

俺の父さんと母さんは六歳の時に目の前で惨殺された。

彼は夕飯の献立を告げるのと同じ雰囲気でも口にした。

「事件直後はショックで一時的な記憶喪失になつていたし声も出せなかつたよ。平常心でいようと心がけていても、ふとした時に息が詰まるんだ。その時は決まつて、強大で全貌の见えないとてつもなく恐ろしいものが一度に襲いかかつてくる感覚があつた。ふとした時にアドニスが見せる表情は、きっとあの時期の俺が時折浮かべていたのと同じなんだ」

秋の足は棒になつたかのように動いてくれない。必死で隠していたものが暴かれてしまうと頭が警報を鳴らしているのに、黙って聴き続けることしかできない。

スコッチの声は穏やかだった。

「それでも俺は犯罪者に囚われた潜入捜査官だからね。気取られないようアドニスを観察していたし雑談に見せかけてブラフをかけたつもりもした。何より寝る時はもつと気をつけたほうがいい。隣で寝ている俺にはうなされてる声がバツチリ聞こえていたよ。味覚障害の気もありそうだ。自分の感情に鈍感で好きな食べ物すらよくわかっていない。心因性による症状の一種だと思われる。高い自己評価を口にするときは瞳孔が開く。嘘をついている自覚があるからだ。あの自画自賛は本心からのものではない。あれは威嚇だ。自分を騙すための方便だ。君は自己評価がとんでもなく低い。それに加えて自分のことが嫌いだろう。

環境に起因するものだとか片付けるのは簡単だけど、それ以外の情報とつなぎ合わせるのと別の原因も見えてくる。犯罪行為への罪悪感、犯罪者になった経緯を全く覚えていないことへの不安。自責の念。深い絶望と自己嫌悪の中、これ以上苦しみたくなくて諸々から目を背ける。自分の感情を押し殺して別の設定を強く信じ込む。低い自己肯定感や自己嫌悪を忘れるために自画自賛を、犯罪行為に手を染めた理由を思い出したら次の段階へ入ることになるから、過去を知った上で罪とどう向き合うのか考えなくてはならないと勘づいているから、思い出さないための行動をとる。自分の罪悪感を認めず過去

を知りたがっていると思ひ込んだまま思ひ出さなくて済むように、記憶を追い求めるポーズだけとって有効な手を打たないまま過ごしている。

そうやって自分の感情に蓋をして都合のいい設定を演じて過ごすうちに、自分の感情まで見失いがちになったんじゃないか？ 君はずっと逃げ続けている」

自分はずっと逃げ続けている。スコッチに指摘されるまでもなく、心の奥底では理解していたことだった。

「事件の犯人を捕まえるまで、俺の中の時計の針は凍りついていたんだ。だから向き合わないといけないものから逃げ続けていて、そのくせ完全に吹っ切れるほど器用じゃないから結局一歩も動けなくなっている君と、過去の自分とが重なった。いつの間にか君を昔の俺と重ねるようになっていた。

そういうわけで通り魔が握りしめたナイフを見た時、咄嗟に思っちまったんだろうな。俺は逃げなかったんだからアドニスも逃してやるもんかって。あそこで死なれたら前に進む機会は一生失われる」

スコッチの瞳に何かがチラついた。何度も前の周で飛び降り自殺を図る直前に見え

たものと同じ。

あの力強い炎は、意志とか信念とかそういうった類のものだ。

どの周だろうが彼はこういう人間だった。冷徹なほど理性的な判断ができるくせに変なところでお人好しで、なにより真実から逃げ出すのを良しとしない。

確実に一人潜入捜査官を残して目的の達成へ繋げるために自決を選び続けた。

一度前の周では、自分の罪を正当化しようとしていた秋にどんな理由があろうと罪は軽くならないと断言してきた。

そういう時、彼の瞳では決まって激情が渦巻いていた。

今までと今回のスコッチは同一人物と言えるのかだなんて悩んでいたのが馬鹿らしくなる。多少行動の変化はあれど彼の本質的な部分は何も変わらない。それでいいじゃないか。

「アドニスに氣にしていた答えは極めて単純なんだよ。俺が君を庇ったのは身勝手な同一視によるもの。ただ死んでほしくなかっただけだ」

随分と優しい声で告げられた。秋はその言葉を心の中で繰り返す。

(死んでほしくなかった……)

胸の中のモヤが晴れた心地がする。自分を庇ったスコッチの行動にあれほど苛立っていた理由がわかった気がした。

* * *

「それで、結果は？」

『貴方の予想通りよ。最も人を狂わせる強烈な衝動、恋愛感情』

古い洋館の一室。暖炉の炎が踊り、目の前にある大ぶりの肘掛け椅子を照らす。

そこに座る部屋の主には密かなこだわりがあった。どれだけ科学技術が発展しようとして使用するの慣れ親しんだガラパコス携帯だけ。スマートホンが主流になったせい

でメールアドレスの「遊び心」が無駄になってしまったのは残念だった。

こちらの未練がましい気持ちなどいざ知らず、二つ折りの携帯電話から聞こえる女の声は続ける。

『わざわざ無差別殺人をさせて、末端の人間を通り魔に仕立て上げるまでもなかったわ。アドニスと一緒にいた男を好いているだなんて、刺された時の反応を見るまでもなく道中のやり取りだけで分かったもの。それどころか変装させた私を監視につけることもなかったんじゃない？ 私じゃなくても見抜けるわよ、あれは』

「問題ない、知りたかったのは男へ向けられている感情の詳細。特に男を失うかもしれない状況になった時の反応だ。何をどれだけ大切に思っているのか。行動の指針は何か。どういったときに裏切るのか。この辺りを抑えておけば人を掌の上で転がすのはたやすいのだから」

『つまり刺された男を目にしたアドニスの様子ね。ひどく混乱してたわよ。強い恐怖と怯えがありありと確認できた。あの男に相当強い感情を向けているんでしょうね』

「なるほど……」

『報告は以上よ。それにしてもアドニスの隣にいた男、顔に違和感があった。そこいらの人間は誤魔化せるでしょうけど、他の誰でもない私の目は誤魔化せないわ。どうして

アドニスに変装した男と外出していて、あなたはその二人を探っているのかしら。ねえ、ボス？」

「さあな。理解していると思うが今回の任務のことは、」

『ええ、もちろん他言しないわ。もう一人のキャストなんて口封じされた後でしょうし。じゃあね』

リップ音を響かせてベルモットが通話を切る。

老人は一昔前の携帯を折り畳むと小さく息を吐いた。察しのいい女だ。

続いて自分が腰かける椅子から少し離れた場所へ視線を投げる。視線の先には、眉間を銃で撃ち抜かれた通り魔の死体があった。

死体を肴にワイングラスを傾ける。ワインの芳醇な香りが漂い、部屋に立ち込めた血の匂いと混じり合う。

「全く、銀の弾丸を正しく発射できる唯一の撃フアイアリングピン針だからこそここまで対策を講じているが……やったことと言えばせいぜいスコッチを匿う程度。やはり哀れなマリオネット止まりか」

転がった男の死体と彼女の姿とが重なる。

幻視した「彼女」に向かって老人は嗤った。

「そもそもアドニスとはたかが人間。クロノスの力は使いこなせぬし『猪の牙』^{アレウス}にかかれば呆気なく敗れる。有象無象の人生を操り、いずれ時の神の力を完全に手にする私とは格が違うのだ」

第4章 小さな攪乱

第17話

スコッチが死なない未来を掴むのに何度も失敗した一因として、不自然なNOCバレが挙げられる。NOCバレの原因を潰しても次から次へと別の原因が現れるのだ。ここまでやれば大丈夫だろうと安心した途端にスコッチNOCバレの知らせが入る絶望感は忘れられない。

あの一連の流れを思い返せば思い返すほど、「スコッチは公安の潜入捜査官である」という情報が前提にあつて、それを組織に周知させるために何者かが証拠を用意している。しかし思えなかった。

そしてスコッチの正体を知っている人間など高が知れている。公安の誰かだ。

故に公安にはスパイか裏切り者がいるはずだと秋は考えている。

組織が潰れたあとスコッチが公安へ戻った時にも内通者が残っていたら、もう一度スコッチが狙われるかもしれない。

彼の死を回避するためにかけた労力を思えば、全てが終わった後にスコッチがあつさり始末されるなど到底納得できなかつた。

……断じてそれだけである。ただ単にスコッチに死んでほしくないとかそんなじゃない。ないつたらない。

（つてわけで、これから私が目指すのは裏切り者だかスパイだかの特定。警察庁に所属しているバーボンは無事なことを踏まえると、内通者は警察庁の情報にまで手を出せない立場だ。おそらく警視庁公安部内部の人間であるところまでは簡単に想像がつく）

次に内通者を探す方法だが、これもすぐに思いついた。ちようどいいポジションの人間が一人いるではないか。

警視庁公安部に指示を出す立場にいてスコッチを大切に思っている人物。バーボンのこと降谷零。彼と手を組めば内通者の特定もその対処も完璧にこなしてくれるだろう。彼にはそれだけの力がある。

最後に降谷から内通者の正体を聞き出せればしめたものだ。次の周からは相手が事を起こす前に始末するだけでいい。これでスコッチの死に繋がる要因は完全に断ち切れる。

しかし一見完璧に思えるこの計画にも欠点はある。

表向きスコッチを殺した事になっていいるせいで、秋はバーボンに死ぬほど恨まれていいるのだ。内通者の話をしてまともに取り合ってくれないだろうし、根拠であるスコッチNOCバレルの経緯に触れようものなら怒りが爆発するかもしれない。

なにせスコッチが死んだ周で、彼に自決を促したと勘違いされていた赤井が観覧車の上でバーボンと殴り合いになったと風の噂で聞いたことがある。恐ろしすぎる。

(私の国宝級の顔を傷つけないためにもバーボンからの好感度回復は必要不可欠。そのため利用するのがシエリーだ)

シエリーは絶賛逃亡中である。

姉である宮野明美が殺されたことにより研究をボイコットしてから色々あつて組織から脱走した。大体ジンのせいだ。ジンのせいで！

(……まあそれはともかく。シエリーがベルツリー急行に乗るといいう情報を得た組織は列車内で彼女を始末することにした。送り込まれるのはベルモットとバーボンなんだけど、バーボンが大人しくシエリーを殺すつもりだとは思えない。シエリーほど重宝されていた科学者ならまだまだ使い道はあるはずだし、バーボンも生きたまま連れ帰って

あの方たちを説得。そのまま組織で飼い殺す方向に持つていくつもりだろう。しかし私はベルツリー急行でシェリーが死ぬと知っている。これを利用するんだ)

何が起るのか具体的には知らないが、予想外の展開で死にかけるシェリー！それを颯爽と助ける秋！「もしかしてそこまで悪いやつじゃないのか……？」となるバーボン！これがバーボン懐柔計画の全貌である。

(不明瞭な点が多いせいで雑な部分はあるけど、きつと上手く行くはずだ。なんてっ たってこの私なんだから)

完璧にかけた自己暗示のおかげで、考えれば考えるほど失敗するビジョンが見えない。秋が恐れていると唯一認める存在であるヤツが現れれば話は別だが、よっぽど巡り合わせが悪くない限り偶然彼と遭遇したりはしないだろう。

秋は成功を確信して、意味もなく髪をかき上げてから不遜な態度で笑った。

* * *

シエリー殺害予定場所であるベルツリー急行は、廊下からして絢爛な装いだった。鈴木財閥が誇る最新鋭の豪華列車なだけある。

秋は廊下を歩きながら、自身の耳に入っている小さなインカムへと意識を集中させていた。

『邪魔者も居なくなつたところで最後の確認といきましょうか』

バーボンの鼻持ちならない声がする。邪魔者呼ばわりされたせいで思わず眉が跳ねた。

乗車名簿を盗み見て突き止めた彼らの客室へ出向いたのが数分前。シエリー殺害に力を貸したいと申し出た途端、バーボンによつてつまみ出されたのも数分前。彼らの客室に滞在できた時間は五分にも満たなかった。

(まあ、その一瞬で置いてきた盗聴器の音声をこうして聞いているわけだけど……)

シエリー殺害の詳しい概要さえ掴めればこちらのものだ。タイミングよく現場に乱入してシエリーを助けるだけでいい。バーボンからの印象は少し良くなり、いずれ手を組む布石となつてくれるだろう。多分……おそらく。きつと。

『ベルツリー急行が運行したこの五回すべてで、必ず同じ列車、同じ部屋をとる乗客が確認されています。決まって八号車のAからE室を予約している彼らが、今回も八号車に乗り合わせるのには安易に予想できました。その上そろつて大火災に巻き込まれた過去持ちとなれば利用しない手はない。ボヤ騒ぎでも起こせば一発で混乱状態になつてくれるでしょう』

『そうね。シエリーに組織の存在を匂わせておけば、ボヤ騒ぎが私たちの罠だと気がつくはずよ。そうすれば避難指示が出された後、シエリーは自ら火元へやってくる』

『指示通り避難したら他の乗客を巻き込んでしまう。それならば一人で殺された方がマシだと考えて、ですか』

『ええ。そこをバーボン、あなたが押さえるの。後は決めていた通りに貨物車へ誘導する』

貨物車へ誘導した後の作戦を聞き終えると耳からインカムを取る。後は雑談に見せ

かけた探り合いが繰り広げられるだけだろう。聞く意味はない。

これから何が起るのかはおおよそ理解した。何度も同じ時間をやり直している間に組織で聞きかじった情報とつなぎ合わせて考えると、貨物車でアクシデントが起こってシエリーが死ぬのだろう。

そして先ほどの会話によると貨物車でシエリーと対峙するのはバーボンのみ。シエリー救出作戦にもってこいの状況だ。

考えながら、立ち並ぶコンパートメントの横を通り過ぎる。

先ほど発車したばかりの列車が徐々に速度を増す。窓の外の動きが早くなる。

と、そこで。少女の弾んだ声が思考に割って入ってきた。集中力が四散し、自然と少女たちの会話へ意識を傾けてしまう。

「そういえば聞いたわよ。おじ様がイケメンを雇ったんですって?」

「ちげえよ、ガセだガセ! アイツが勝手に押しかけてきてるだけで俺は認めてねえつーの。つたく、人手は足りてるってのになんで男なんざ雇わないといけねえんだよ」

「ちよつとお父さん、そんな言い方……」

「事実だろーが。だいたい売り込みに来てるにしては態度がデカいんだよ態度が」

「僕あの人のこと知ってたよ!」

……聞き覚えのある声だ。

もしかしたら、もしかしたらだが、ヤツかもしれない。

思考がそこまで及んだ瞬間、心臓が暴れ始める。耳が役割を放棄する。雑音として処理された彼らの会話が右から左へと流れていく。

「本当、ガキンチョ。イケメン？」

「うん。佐藤刑事が取られるんじゃないかって高木刑事が心配するくらいにはね！」

「ああ、そういえば探偵団のみんなで高木刑事の恋愛相談に乗ってるって言ってたわね」

「うん！ 結局杞憂で二人はくつついたわけだけどさ」

「相談に乗ってたってより無理やり聞き出したんでしようけど」

「ははは……」

「にしても佐藤刑事との仲を心配されるんなら刑事さんだったのかな？ 元警察関係者って言ってたし」

「いいや、確か高木刑事は爆発物処理班の人だって——」

今にも暴れ出しそうな恐怖心をなだめすかすのに少々時間がかかった。

秋は油が切れたブリキ人形そっくりな動きでぎこちなく振り向く。最悪なことに予想は的中していた。

(げつつつ！ 江戸川コナン!!)

ヤツの姿を見て叫ばなかった自分を褒めてあげたい。

江戸川コナンとは、秋が恐れていると認める唯一の存在だ。

ずっと前の周に、黒い服を着てジンと電話をしていただけなのに盗聴器と発信器をつけられたあげく、最終的にFBI包囲網まで敷かれた事件があった。それを裏で操っていたのが江戸川コナンだった。

かろうじて逃げ切れたものの、秋は一連の事件によってトラウマを刻み込まれている。

とても子供とは思えない頭脳や行動を目の当たりにして恐怖を抱いたのもある。執拗に追いかけて回してくる執念に酷く怯えもした。

しかし何よりも恐ろしいのは彼の目だった。真つ直ぐ真実だけを見据えるあの目を向けられると、自分の存在全てが否定されている気がして惨めになる。

(よし！ 計画は全部中止！ 次に停車する駅で降りよう！)

秋は瞬時に逃亡を決めた。

それだけあの少年は恐ろしいのだ。見た目と中身のチグハグさからして、妖怪とか化け物の類だと思う。控えめに言って二度と関わりたくない。姿を見るだけで鳥肌が立つ。

だから、この状況において最も優先すべきは江戸川コナンからの逃亡だ。残念だがシエリーには正史通り死んでもらうしかない。バーボン懐柔作戦は別のものを用意しよう。

……と思っていたのに、シエリーを炙り出すボヤ騒ぎが起こってもなお秋は列車内にいた。急遽終着駅に到着するまで停車しない取り決めになったせいで下車するタイミングを逃したのだ。

どうせ殺人事件でも起こったのだろう。車内で事故が発生したとしかアウンスされていらないが殺人事件に決まっている。江戸川コナンが乗り合わせた列車で人が死ななくてどうする。

『繰り返します。八号車で火災が発生しました。七号車と六号車のお客様は念のため前の車両に避難していただくようお願いいたします』

客室にとどまったまま次の動きを決めあぐねていると、何度目かの避難勧告が流れた。

秋は隣に置いた乗車券を一瞥する。乗車券に書かれている通りここは七号車だ。指示に従うのなら避難する必要がある。

(でもなあ……)

不審な動きをして江戸川コナンに目をつけられないためにも素直に避難しておくのが定石だろうが、問題はコナンを見かけたのが六号車だという点だ。彼が乗っているのが六号車だとしたら避難場所が鉢合わせだろう。それは嫌だ。

(本当に火事が起こっているわけじゃない。シエリーを炙り出すためにベルモットたちが騒ぎを起こしているだけだ。悩んでいる時間はまだあるけど……)

そこまで考えたところで、誰もいないはずの廊下から物音がした。足音だ。大ききからして子供のものではない。つまり江戸川コナンではない。

ドアと壁の境目に耳を当てる。足音が遠のいたのを確認してからゆっくりとドアノブを回す。

秋は扉から頭を出して廊下を覗き、女性の後ろ姿を捉えた。珍しい茶髪が目を引く。シエリーだった。よくよく考えれば彼女を八号車へ向かわせるための罠なのだから彼女以外であるはずがない。

(このまま事が進めばシエリーは死ぬ)

確認するように頭の中で唱えた直後、どういうわけか彼女と関わった日々が蘇ってきた。なんだかんだ顔を合わせれば雑談するし妙な親近感もあった。それなりに親しかったと思う。

死ぬとなると少し寂しい相手だ。スコッチとは違って自分の身を危険に晒してまで助けたとは思わないが。

(……だからどうした)

秋は変な思考を吹き飛ばすように頭を振った。今後の動きを考えなくては。

乗客に紛れて避難するのはもう無理だ。アナウンズがかかってから随分と時間が経ってしまったている。すでに避難しているであろうヤツの注意を引いて怪しまれるのがオチだ。

秋に残された選択肢は二つ。このまま部屋に居続けるか、シエリーを追いかけて当初の作戦を実行するか。

なぜだか強い光を宿した二対の目が頭をよぎった。江戸川コナンとスコッチ。真実から決して目を逸らそうとしない二人の目。

腹は決まった。

このまま部屋にこもり続けた場合、不自然だと江戸川コナンに見咎められるかもしれない。シエリーを追いかけた方がまだマシだろう。万が一見つかっても、火災現場へ向かう少女を止めようとしたと言い訳ができる。

……それだけの事だ。

秋は一步外へ踏み出し、八号車に向かつて歩き始めた。

* * *

八号車には煙が立ち込めていた。火災を偽装するためにバーボンが仕掛けた煙幕だろう。

わざと足音を鳴らして歩く。

八号車の最奥、貨物車の目の前で銃を掲げているバーボンと貨物車の中にいるシェリーに近づいて秋は第一声を発した。

「久しぶりだね、シェリー」

「……僕たちの邪魔はするなと言い含めたはずですが」

代わりに答えたのはバーボンだった。秋に目をやってもなお銃口はシェリーへ向けたままだ。

「邪魔？ まさか！ バーボンの手伝いをしにきたんだよ。ていうか二人のコンパートメントまで出向いて話を通そうとしたってのにバーボンが追い出したせいで、」

「ちようど良かったわ。アドニス、あなたに言っておきたいことがあったの」

「あの時の文句を言おうと思っただけどまあいいか。シエリーの話を優先してあげるよ。なにせ私はどこぞの銀髪ポエムやスカした探り屋と違って大人だからね」

「もしかして僕のこと言ってます？」

バーボンが不機嫌さを隠そうともしない態度で言った。

二人の会話がそれ以上続かなかつたのは、シエリーの瞳がまっすぐ秋を射抜いたからだ。

「あなたは知っていたんでしょ？ お姉ちゃんが殺されること」

秋はシエリーの顔を直視しなくなって煙幕へと視線を移す。なるほど、姉の殺害を止めてくれなかつた恨み言をこれから聞かされるわけか。気まずさが原因で明美殺害からシエリー逃亡までの間彼女を避けていたからこそ今のタイミングなのだろう。

「言い訳に聞こえるかもしれないけど、宮野明美殺害は事前に通達されてなかったよ。言っちゃ悪いけど彼女みたいな一般人の始末なんて日常茶飯事だし、特別取り上げられる話題でもないから」

「そうじゃなくって……『前回』も同じことが起こったんだからお姉ちゃんが死ぬのは分かってたでしょう？ ああ、前々回も、それよりずっと前もかしら」

息が止まった。

その物言いはまるで――

「どうしてお姉ちゃんのごことは助けてくれなかったの？」

最後に吐き出された問いかけが慟哭に感じられた。一方で彼女は別のことに気を取られている素振りを見せている。チグハグな態度だ。

しかし些細な違和感などどうでもいい。それよりも問題なのは、シエリーがループ現象を確信していると思えない言葉を発したことだった。

「なん、で」

「残念ながら時間がないの。『次』の私に教えてもらいなさい。話を聞き出すのは十三歳になった私。それ以前のタイミングで尋ねても、あの現象を確信できる材料は揃っていないから不信感を持たれて終わるわ。十三歳の私に、あなたが本来なら知り得ないはずの指摘をして私の仮説を立証させるのよ。……そうね、シエリーはゲノム創薬の専門書を姉に貸している、がいいかしら」

そんな悠長なことは言ってられない。秋はパニックになりながらもシエリーを問い詰めようと一歩踏み出した。

一人だけ話について来れていないバーボンが眉をしかめる。「一体なんの話です?」
しかしシエリーは説明を求める二人を歯牙にもかけず、横の棚にかかった布をめくる。中には赤いランプが点滅する機械があった。

「時間がないと言ったでしょう? 爆弾よ。至るところに仕掛けられているみたいだし、時間が来たら最後貨物車ごと吹き飛ぶのは確実。あなた達は逃げることね、死ぬのは私だけでいいんだから」

「やいせませんよ」

バーボンが何やら話し始めるが耳を通り抜けていった。そんなことに気を取られている暇はない。ずっと頭の中でシエリーの言葉がグルグルしている。

（シエリーはループ現象を確信しているけど彼女自身がループするようになったわけではないはずだ。もしそうなら宮野明美が死なないよう動くはずだし私を問い詰める意味もない。どうしてループ現象を知っている!? どうして私がループしていると確信した!? それらしいことを言ったことはあるけど、それだけでこんな突拍子もない現象を確信するわけがない。何か他の要因が――）

い。それ以降の思考は爆発音に吹き飛ばされた。同時に熱風とむせ返るような火薬の匂い。

「手榴弾だ！ 何者かが投げ込んだ！」

バーボンが叫んだ。

意識が現実に戻る。自分は扉の脇に背中を預けるようにして爆発から身を守ってい

た。咄嗟に体が動いてくれたらしい。

向かい側ではバーボンが同じようにして身を隠している。

煙が逃げ出し、代わりに新鮮な空気が流れ込んでくる。背後に大きな穴が空いていた。列車の連結部分が吹き飛んだせいで出来たものだ。穴の先に、やけに鮮やかな山の緑が見える。

「くそっ！」

バーボンが外を見つめて悪態をつく。

連結部分が吹き飛んだせいで貨物車が列車から切り離されていた。線路を進む音が響くたびに貨物車との距離が開く。

——そして、さらに大きな爆発音。

貨物車が爆発した。中にいたシエリーがどうなったかなど一目瞭然だった。

第18話

親友と最後の対面が叶ったのは、彼が人間の形状を保てなくなった後だった。

床に散らばった骨のまわりにヌメついた液体がまとわりついている。かろうじて残った肉体は液状だった。組織で頻繁に用いられる死体を溶かす薬が使われたのだと理解するまでいやに時間がかかった。

「裏切り者は殺す。それが組織のやり方でしょ？」

平然と言つてのけたアドニスの姿が忘れられない。

あの日から僕は憎しみに囚われ続けている。

* * *

裏切り者は必ず始末するべきだと盲信しているジンが率先して殺そうとしているだけで、シエリー殺害が組織の総意だと考えるのは早計だ。あの方が完成を渴望している研究の詳細は不明だが、シエリーがその研究を大きく促進させる能力を持っていることは掴んでいる。あの方からすれば、シエリーが大人しく従ってくれるに越したことはないはずだ。

シエリーには使い道があるし、僕の話術を用いれば彼女を殺さない方向に導くのも可能。となれば、シエリーを生きたまま連れて帰ろうと考えるのは当たり前の話だった。

シエリーが乗るといふベルツリー急行内で彼女を炙り出し、貨物車へ誘導して殺すのがベルモットの計画。それを利用し、生きたままシエリーを捕らえて組織に連れ帰るのが僕の計画だ。

しかしベルツリー急行に乗り込んだ段階で想定外の事態が起こった。列車内にアドニスもいたのだ。

シエリー殺害に一枚噛ませてほしいというのが彼女の主張だったが、もちろん邪魔をしないようお願い含めて部屋から追い出した。

彼女について考えるだけであの日の憎悪と失望が蘇ってくる。頭がカッと熱くなる。身体中を怒りに支配され、目つきが険しくなりかけた。

しかし「バーボン」にしては少々不自然な反応だ。バーボンはアドニスを煙たがって

いるとはいえ、わざわざ思い出して怒りをあらわにするほど憎悪を抱いているわけではない。

ベルモットが視線を窓へと放ったほんの一瞬で表情を取り繕う。いつも通りの胡散臭い笑顔を貼り付けて彼女と計画の最終確認を続ける。

幸い、言葉が途切れることはなかった。ベルモットの裏をかくために何度も計画を思い起こしてきた甲斐があつて、ボヤ騒ぎを起こしてシエリーを炙り出す手順など他ごとを考えながらも誦じられる。

やがて確認が終わった。

次に行くのはベルモットの変装だ。変装道具を用意するために立ち上がろうとしたタイミングで声をかけられ、僕は重心を元に戻す。

「アドニスだけどシエリー殺害には加わらせないほうがいいわよ」

「言われなくとも。ご存知の通り、僕は彼女のことを嫌っていますから。……と言いたところですが、その上で忠告されたとなれば気になりますね。わざわざ何故？」

「彼女、シエリーを殺したいだなんて微塵も思っていないもの。本人に自覚はないけどね」

あつさりと告げられた言葉を簡単に信じることはできなかった。
あの悪魔みたいな女が？ シェリーには情けをかけるって？

「へえ、なんでそんな事がわかるんです？」

「アドニスの演技には感情が乗っていないのよ。上つ面を真似しているだけ。自分の感情に蓋をしているせいで必要に応じて感情を引き出せなくなっているのね。だからあの子の演技は簡単に見抜けるの」

「……シェリーを殺したいと主張していたのは演技だったと？」

「本心と乖離しているのは確かだけど、嘘をついているのかと問われれば即答はできない」

「煮え切りませんね」

「そもそもアドニスの偉そうな態度は全部演技なのよ」

ベルモットの表向きの顔はハリウッドの大女優。当然演技に關しては右に出る者がいない。言葉や振る舞いが本心からのものなのか見極めるなど、彼女にかかれば造作もないのだ。

彼女の慧眼は組織で絶大な信頼を寄せられていると言えば精度の高さが分かるだろ

う。

僕以外の人間が揃いもそろって赤井秀一の死亡を信じて疑わないのも、奴が死ぬ間際に漏らした「まさかここまでとはな」の言葉が本心からのものだとベルモットが断言したのが大きい。

その彼女が言うのだから真実なのだろう。しかし釈然としないのも確かだ。僕が懐疑心を覗かせたのを見て、ベルモットは付け加えた。

「直視したくない真実があるから、本当の気持ちには蓋をして意識を嘘で塗り固めている。結果としてアドニスは自分の感情に対して鈍感となり、演技によって作り上げられた自分が本当の自分だと思いこんでいる節がある。ごっこ遊びにのめり込みすぎた子供みたいなものよ。だからこそ『自分は唯我独尊を絵に描いたような人間だ』という設定と行動とが食い違ったら、自分を納得させるために新たな設定を付け加える。今回だって本心ではシェリーが気になったから乗車したんでしようけど、その感情は設定と食い違うからシェリーを殺したいだなんて新しい設定を付け加えたし、それが真実だと思ひ込んでいる」

「それは……滑稽ですね」

やつとのことで吐き出した相槌は冷笑を含んでいた。

まだ景光ヒロが生きていた時、アドニスとスコツチの間には奇妙な絆があった。

詳しいことは知らない。景光を問い詰めても同じ幹部として普通に接しているだけだとしか言わなかったし、実際に何かが起こったわけではないのだろう。

しかしアドニスが景光に向けていた感情には恋情が含まれていたし、景光は景光でアドニスをやけに気にかけていた。幼馴染として景光の隣に立ち続けた僕だからこそ分かる。

二人の間には名前をつけるのが難しい何かがあった。スコツチがNOCだと判明してもアドニスに殺されることだけはないだろうと思える程だった。

それなのにアドニスはスコツチを殺した。

だからこそ僕は怒りと混乱に支配され、やがて失望と憎悪だけが残ったわけだが――

(自分の恋心にすら気づけないのか)

ある意味アドニスは可哀想な女だ。ベルモットの話を聞いた後では一縷の憐れみすら覚える。

もちろん相手にどれだけ同情の余地があったとしても犯した罪は軽くないし、一

度犯した罪は何があらうと覆らない。

僕は意識を引き締め直した。アドニスの背景に何があらうともやることは変わらな
い。彼女諸共、組織の連中を牢獄に押し込むため任務を続行するだけだ。

殺人事件というアクシデントはあつたが作戦は予定通り進み、ついにシエリーとの対
峙が叶つた。

拳銃を突きつけて八号車の奥にある貨物車に移動させる。発煙筒の白い煙が立ち込
めているせいで見晴らしは良くない。

火事を理由に乗客を前車両に追いやつたおかげで僕ら以外の乗客はいない。車両は
静まり返っている。

だから、第三者の足音はよく響いた。
わざとらしく足音を立てて近づいてきた女がいつもの小憎らしい笑顔で言う。

「久しぶりだね、シエリー」

アドニスだった。

シエリーの生死が気になったから乗車したというベルモットの予想は当たっていたらしい。

景光のことは殺したくせに。

そう頭をよぎった瞬間、全身の血が沸騰しそうになる。抑えようとした怒りが低い声へと形を変えた。

「……僕たちの邪魔はするなと言いつつ含めたはずですが」

「邪魔？ まさか！ バーボンの手伝いをしにきたんだよ。ていうか二人のコンパートメントまで出向いて話を通そうとしたってのにバーボンが追い出したせいで、」

「ちようど良かったわ。アドニス、あなたに言っておきたいことがあったの」

「あの時の文句を言おうと思っただけどまあいいか。シエリーの話を優先してあげるよ。なにせ私はどこぞの銀髪ポエムやスカした探り屋と違って大人だからね」

「もしかして僕のこと言ってます？」

このまま勢いに任せて言い負かすのは簡単だが本来の目的を見失っては行けない。僕はグツとこらえた。全く、どっちが大人だ。

シエリーも僕と同じことを思っているのは明白だった。額に手を当ててため息をつ

いている。アドニスが余計なことを言って相手を怒らせる展開に慣れているのだろう。彼女の顔には諦めがありありと浮かんでいた。

……表情の変化は少しきこちなかった気がするが。

シエリーが視線を上げる。瞳がまっすぐアドニスを射抜く。

そうして「言っておきたいこと」とやらを口にした。

「——あなたは知っていたんでしょう？ お姉ちゃんが殺されること」

しばらく二人の会話が続く。

「言い訳に聞こえるかもしれないけど、宮野明美殺害は事前に通達されてなかったよ。言っちゃ悪いけど彼女みたいな一般人の始末なんて日常茶飯事だし、特別取り上げられる話題でもないから」

「そうじゃなくって……『前回』も同じことが起こったんだからお姉ちゃんが死ぬのは分かっていたでしょう？ ああ、前々回も、それよりずっと前もかしら。……どうしてお姉ちゃんのこととは助けてくれなかったの？」

「なん、で」

「残念ながら時間がないの。『次』の私に教えてもらいなさい。話を聞き出すのは十三歳になった私。それ以前のタイミングで尋ねても、あの現象を確信できる材料は揃っていないから不信感を持たれて終わるわ。十三歳の私に、あなたが本来なら知り得ないはずの指摘をして私の仮説を立証させるのよ。……そうね、シエリーはゲノム創薬の専門書を姉に貸している、がいかしら」

何の話をしているのかさっぱりだがアドニスは何となく混乱していた。シエリーが何か言うたびに青ざめていく。

僕だけが会話についていけない。前提となる情報を知らないと理解できない内容なのだろう。

それよりも気になるのはシエリーの言葉。

（どうしてお姉ちゃんのごことは助けてくれなかったの、ねえ。まるで別の誰かは助けたかのような物言いだ。アドニスが助けそうな人物なんて――）

まさか、と思う。

都合のいい妄想だとも思う。

それでも理性とは裏腹に期待が膨れ上がっていく。

「スコッチ」の死体は原型を止めていなかった。その上アドニスが公安の犬を庇う理由など存在しないからと彼の死は深く調べられなかった。

遺体が入れ替わっていても誰も気づかない状況だった。

貨物車の至るところに爆弾が仕掛けられていると話すシエリーへの受け答えをしながらも、僕はどこか上の空でいた。もしかしたら親友が生きているかもしれないという期待に頭を支配されて、周囲への警戒が疎かになっていた。そのせいで何者かに不意をつかれてしまう。

あの男そっくりな影が、貨物車に手榴弾を投げ込んだ。

熱気と暴風。それに火薬の匂い。

僕は咄嗟に体を物陰へ隠し、爆風から身を守る。

しばらくすると火薬の匂いが流れて、代わりに新鮮な空気が入り込んできた。

目を開ける。空の青と山の緑が広がっていた。

貫通扉が跡形もなくなっている。最悪なことに貨物車は列車から切り離されていた。

「くそっ！」

叫ぶ間にもシエリーが取り残された貨物車との距離が離れていく。

——そして、さらに大きな爆発音。貨物車は吹き飛んだ。中にいた人間がどうなったのかなど確かめるまでもない。

不思議な心境だった。

恩師の忘れ形見にして組織で確かな地位を築く一手を失った落胆と、期待から来る高揚感。

アドニスを見つめる。僕の視線に気づいた彼女が不審そうに眉を寄せた。

本来貫通扉があった場所から風がなだれ込んでくる。僕らの髪をかき乱す。

緊張で舌が痺れているなどと気取られないように、普段通りの笑みを貼り付けて僕は言った。

「スコッチは生きているんじゃないですか？」

第19話

江戸川コナンにビビったりシエリーの爆弾発言に動揺していただけなのに、気づいた時には全てが解決していた。

バーボンが勝手にスコッチ生存へとたどり着き、二人の引き合わせに成功してしまったのである。公安にいる内通者の搜索も快く引き受けてもらえた。

訳がわからない。何がどうなってるんだ。

秋が頭を抱えているうちに事態はとんとん拍子に進み、半年後には組織が崩壊していた。赤井秀一と降谷零が中心になって色々やったらしい。

事態が目まぐるしく変わっているのに何が起きているのかいまいち把握できていないのが正直なところだ。

現在、秋は公安に身柄を拘束されている。

座っているのはパイプ椅子。目の前にはアクリル板。部屋は一面無機質なコンクリート壁で、椅子以外の家具はない。アクリル板の向こうには、こちら側と同じ殺風景な空間が広がっている。面会室だ。

公安が非公式に所有している拘置所のような施設に入れられ、施設に併設された面会室と独房を行き来する生活を送るようになるのはループでのお決まりのパターンである。

もちろん一周目の終盤も今と同じ状況だった。

あの時の自分も、今と同じように面会に訪れる降谷を待つていたことを思い出す。程なくしてやって来た降谷はいくつかの質問を投げかけ、一通り質問が終わるとスコッチの死の真相を話し始めた。

あれから全てが始まったのだと思うと、我がことながら少々呆気なく感じる。同じ時間が延々と繰り返される現象の幕開けにしては随分とゆるやかだ。

これが映画だったら、ループが始まるきっかけはもつと劇的なものだっただろう。

(ベタな設定だと恋人の死とか)

取り止めのない思考がそこまで及んだところで、やっと扉がノックされた。

秋が返事をすると同時に降谷が入ってくる。グレーのスーツのくたびれ具合から、忙しい日々を送っているのだと察する。組織壊滅に伴って仕事量が急増したのだろう。

彼は大腿で向かいの椅子へ移動し、ドサリと座る。動きまでも慌ただし。

「頼まれていた内通者探しの報告をするために今回の面会があるわけだが……」

彼は間髪を入れずに本題へ入った。

「そんな話だったね。結局誰だったの？」

「結論から言うといなかった」

「……………ごめん、なんて？」

「裏切り者も内通者もいなかったんだ。実のところ公安では君の証言を疑問視する声も上がっている」

「……………いや、そんなはずは、」

声に困惑が色濃く表れた。

発声よりも思考に意識が引つ張られて、言葉がどんどん尻すぼみになる。

スコッチのNOCバレの経緯は異様の一言に尽きる。それなのに公安内部に原因がない？ 降谷が出し抜かれたのかと一瞬考えたが、組織随一の切れ者の名を欲しいがままにしていたバーボンの能力はよく知っている。それは無い。

原因が公安内部にないのは確かなのだろう。

となると、考えられるのはただ一つ。確率が低すぎて検討する価値もないと無意識のうち切り捨ててきた瑣末な可能性。

(……いや、後にしよう)

秋はゆるりと首を振った。思考の先に待っている最悪の仮説に今たどり着いたら降谷の前で取り乱すことになってしまう。

彼女は自分に言い聞かせる狙いもあつて呟いた。

「……まあ今考えても仕方ないか」

「だな。ヒロのNOCバレについてはこっちでも調べてみるさ」

ヒロというのがスコッチのあだ名であることは文脈で分かった。初めて聞く呼び名だ。

鉄格子がついた窓から日の光が差し込み、降谷を照らした。代わりに秋に落ちた影がより濃くなった。

彼女は逸れそうになる気持ちを制して、降谷との会話により一層集中する。

降谷は次の話題へと移った。

「それとNOCバレの一件以外で要望は？ 可能な限り叶えよう」

「鏡がほしいかな。獄中での楽しみなんて芸術品の鑑賞だけだし、そろそろアクリル板以外で自分の顔を眺めたくてね。そう、世界の創造主が一目見ようものなら大地に花が咲き乱れ、天に虹がかかり、祝福を与えるため天使たちを降臨させること間違いなしな……」

「使い方によっては武器にも自傷の道具にもなる。駄目だ」

「ケチ」

「……ふざけてないで真面目に答えた方が賢明だと思うけどね。ベルツリー急行では随分とシェリーの話が気になっている様子だったし」

バーボンらしさが頭を覗かせた。鼻につく物言いや含みを持たせた口調もそうだが、片目を閉じながら話すのがそれらしい。

「あの様子じゃ公安が真相を掴めてるとも思えなかったけど、そんな事を言い出すなん

て何か情報が？」

「いいや。シェリーとの面会を取り付けるよう尽力すると言っているのさ」

「死んだ相手と？」

「彼女は生きている」

「は？」

目を丸くした秋に対して唇だけを釣り上げた笑いを見せてから、降谷はベルツリー急行での真実を話して聞かせた。

あの時のシェリーは怪盗キッドが変装した姿で、キッドは爆発とともに隠しておいたハンググライダーで逃げ出したらしい。

中身が別人だったら話が食い違いそうなものだが、別の場所に控えていたシェリーが指示を出していたそうさ。

つまりベルツリー急行で告げられた言葉はシェリー本人のもので間違いない。言われてみればあの時の彼女は事情を知らない第三者が聞いても理解できない言葉選びをしていた。

「だからこそシェリーは無事だし、君が望むのなら彼女と話す機会を設けられるよう掛

「け合うけど、どうする?」

「お願い。にしてもやけに親切だね。スコッチを助けた恩を感じてるとか?」

「もちろんそれもあるさ」

降谷は一呼吸置いた。

彼の目が怪しく光る。またもやバーボンの影がチラついた。目が、自分に有利な取引を気取られずに持ちかける時のバーボンだ。

「一番の目的は対等交換。なに、そこまで難しい話でもない。今からここへ来る人物に可能な限り協力してほしいだけだ」

彼は、取引相手を出し抜いた後のバーボンそっくりな綺麗な笑顔を浮かべて言った。先に報酬を掴まされたのだと理解して秋は叫んだ。

「嵌められた!」

「はははは。これからは気をつけた方がいい。君は騙しやすいからね」

「クツソ!」

「……おっと、もうすぐ到着するな」

言われて、外からする足音に気がつく。二人分だ。

ややあつて足音が止まると、扉の前に控えている見張りに開錠の指示を出す聞き慣れた声でした。どうやら片方はスコッチらしい。

遅れて鍵束のものであろう金属音。

身柄を拘束されてからというもののスコッチと顔を合わせる機会がなかった秋はともかく、降谷ですら少々緊張した面持ちで彼らの入室を待っている。

面会室は無音だった。

だからこそスコッチが連れに尋ねた内容がはつきりと聞き取れた。

「そういえばゼロに聞いたよ。警察をやめて毛利探偵事務所に再就職したんだって？
どうしてまた……」

もう片方が鼻で笑う。続いた答えには自嘲が混じっているように感じられる。

「幹部サマを問い詰めるとき一緒に聞かせてやるよ」

ついにギィと軋んだ音を立てて扉が開いた。スコッチたちが入ってくる。もう一人が誰なのか判明した瞬間、カウンターに置いていた腕が滑った。勝手に唇が動いて訪問者の名前を示す。

（——松田）

驚愕のあまり声が出なかったのは救いだ。殉職の原因となる爆破事件を起こさないために手を回しはしたが、『今回』の彼と直接顔を合わせたわけではない。面識がないのだから、呟いた名前を聞かれると少々面倒な事態になる。

天然パーマとサングラスは記憶の通り。服装と雰囲気だけが違う。

松田は喪服のように真っ黒なスーツを着て、鋭いナイフのような空気を纏っていた。一つ前の周、伊達殺害犯探しのために萩原を加えた三人で集まっていた時の彼とは在り方が違うのだとひと目で理解する。そして変化の原因にもすぐに思い至った。ループ開始時点——今から十五年前に突如として萩原が消えたせいだ。

ループを知覚できないために、ループ開始前と『今回』の周とが地続きになっていると認識している松田視点では、萩原は十五年前に忽然と姿を消したことになっている。

十五年前に萩原の姉から聞いた話では、誘拐事件として扱われたらしい。

松田がズカズカと近づいてきた。彼は勢いに任せてカウンターに手を置き身を乗り出す。

「酒の名前で呼び合う犯罪集団が瓦解して、その幹部の身柄を公安が抑えてるって聞いたんでな。ゼロに頼んでアンタに会わせてもらった。訊きてえことがある。——萩原研二を知ってるか？」

松田が現れたとき以上の衝撃と混乱が秋を襲った。

彼が消えた親友を探すのは理解できる。

彼はそういう人間だ。もしかしたら『今回』の松田が警察官になったのは、萩原の件も関係していたのかもしれない。

問題は、降谷に話を通してまで組織の幹部に萩原のことを尋ねようとしたその行動だ。

一時的に蓋をした瑣末な可能性が蘇る。

もしもあの仮説が当たっていたとしたら。

スコッチがNOCである証拠を流し続けた真犯人であろうあの人物が萩原消失に関わっていて、その証拠を松田が掴んでいるのなら全てが繋がる。繋がってしまう。

息が浅くなる。まぶたが極限まで広がる。嫌な予感に全身を支配される。

秋が萩原の名前に反応したのを見て、松田がさらに前のめりになった。アクリル板ギリギリまで顔を近づけて怒鳴られる。

「知ってるんだな!? どこで知った!? アイツはどうなった!?!」

鬼気迫る勢いだった。一層鋭くなった眼光は秋だけに向けられている。

秋の答えに全神経を集中させていて他の物音は聞こえない状態なのだろう。様子がおかしい松田を心配する降谷やスコッチの言葉は届いていない様子だった。

「おい、松田!」

とうとうスコッチが声を荒げる。

肩を後ろから揺さぶられて、やっと松田は正気に戻った。

「……悪い。突然詰められても答えられるわけねえか」

小さく謝ってから姿勢を戻す。背筋を伸ばしてネクタイを緩めたときにはもう、松田は冷静さを取り戻していた。

「公安二人への説明も兼ねて順に話してやるよ。俺は個人的に酒の名前で呼び合う連中を追っていた。通称は黒の組織だったか」

松田の背後で、降谷とスコッチが困惑気味にアイコンタクトを交わした。二人とも初めて知ったのだろう。

松田の言葉は続く。

「そこで安室透の登場だ。聞けばバーボンだなんて呼ばれてるそうじゃねえか。組織の幹部である安室透が毛利探偵事務所へ弟子入りしたとなれば、あの事務所には組織に繋がる何かがあると考えるのが筋だ」

「……それが警察を辞めてまで毛利探偵事務所に転がり込んだ理由か」

「まあな。一介の警察官がチマチマ調べるよりもよっぽど勝率が高いだろ」

「どうしてそこまで、」

「萩原研二。十五年前に姿を消した親友の消息を探るためさ」

尋ねた降谷が息を呑んだ。それと連動するように秋の鼓動が早さを増す。耳を塞いで大声で喚き散らしたい衝動に襲われる。

「萩原は突然姿を消した。警察は誘拐の線で捜査したが目立った成果をあげられず数年後に捜査は打ち切り。でもそんなわけねえんだよ。俺は確かに目撃証言をした」

「まさか握り潰されたのか!？」

「ああ、今から思えば公安案件だったからな。調書に残さない方が都合が良かったんだろ。被害者の親友が事件当日不審な車を目撃していて、乗っていた連中は互いを酒の名前で呼び合う全身黒ずくめの男たちだっただなんて」

息が止まった。

萩原は時間が巻き戻る前に死んで、次の周での消失が確認された。だからこそ秋は「ループ者がループ中に死ぬと次の周以降で存在ごと消える」という仮説を立てたし、今日まで一度もその仮説を疑わなかった。萩原について考えないようにしていたと言っ

た方が正しいだろうか。

組織壊滅作戦時に萩原が死んで、次の周が始まってすぐ萩原が姿を消した。これら二つの事象からループ者消失説に至っただけであり、萩原が消える瞬間を目撃したわけではない。

新たな条件が一つ加えられただけで仮説は簡単にひっくり返ってしまう。

条件その三。時間が巻き戻ってすぐ萩原は組織の人間に誘拐された。

「もう一度聞く。萩原研二を知ってるか」

再度問われるが秋には答える余裕などなかった。

時間が巻き戻った直後、萩原は組織の人間に誘拐されている。タイミングからして偶然では済まされない。何者かが裏で糸を引いている。

加えて、萩原と言えれば死に方も不自然だった。

こうは考えられないだろうか。何者かが何らかの方法で爆発を引き起こして萩原を殺し、時間が巻き戻った直後、秋が彼と合流する前に萩原を誘拐した。

あまりにも手際とタイミングがいい以上、その人物も『前回』の知識を有しているのは確実。間違いないループ者だ。

そして、わずかな時間で組織の幹部に一般人の誘拐を命じられて、『前』の組織壊滅作戦真つ只中に爆発を引き起こすことが可能で、萩原を知り得た人物。

同時にスコッチがNOCである証拠を用意し続けた人物。

該当者は一人しか思いつかない。

（真犯人は第三のループ者であるあの方——烏丸蓮耶だ）

萩原と接点を持ったそもそもの原因は、毛利探偵事務所を探れというあの方直々の命令だった。

萩原は事件を未然に防いで回っていた。

本来起こるはずの事件が発生していないこと。未発生事件の共通点からして毛利探偵事務所に近い何者かの仕業であること。この二つは萩原と出会うよりも前の秋ですら予想していた。

自分たちと同じくループしているあの方が気づかないわけがない。

萩原がループ者であり事件を防いで回っていると予想したあの方が、確信を得るために同じくループ者であろう秋と引き合わせたとしたら？ スコッチの死を回避しようとして動いていたのだから秋がループしていることは一発でバレただろう。

(組織内部にループ者がいることを想定して動かなかつた時点で勝敗は決していたんだ)

敵の強さを自覚して途方もない恐怖に襲われる。いつしか握りしめていた拳の内側は汗でベトベトだった。

ゆっくりと開く。手のひらには爪が食い込んだ痕が残っていた。

三日月型の痕は恐怖によるものではない。恐怖と同時にやってきた激しい自責の念が原因だった。

(……私のせいだ)

あの方は萩原に対する秋の反応によって彼のループを確信したはずだ。あの方のことでだから秋に見張りでもつけていたのだろう。一年早く探偵事務所に居座るようになったバーボンが見張りだったのかもしれない。能力の高さが保証されているうえにスコッチの一件で秋を恨んでいる彼なら適任だ。

そして、萩原の居場所をあの方が知っていたのも秋が原因だった。あの方から下され

た命令は毛利探偵事務所の関係者を調べ上げろというものだったのだ。

彼らの個人情報は全て報告した。萩原の実家の住所も含めてだ。

毛利探偵事務所を調べる表向きの理由に納得していたし、下手に情報を出し渋っても疑われる状況だった。

だとしても、何も考えず流され続ける毎日を辞めていればあの方の不審さに気づけたかもしれない。

萩原が消えた後の対応もそうだ。

ループ者消失説はあくまで仮説の一つで、他の可能性も無数に存在していた。

その上でループ者消失説を盲信したのは都合が良かったからに過ぎない。覆しやうがない出来事が起こったのだと諦めて、後は考えないようにするのは楽だった。

逃げずに萩原の身に何が起こったのか突き止めようとしていたら違ったのではないだろうか。

あのとき萩原に何が起こったのか本当に知りたいと思ったら松田に協力を仰いでいたはずだ。そうすれば組織が絡んでいるとすぐに知ることができた。

組織の内部だなんて最も探りやすい場所にいたくせに何もできなかったのは、ひとえに自分のせいだった。

その上、他にもこの答えに繋がっていきそうな糸はいくつかあった。自分が被検者となっているシエリーの研究。どれだけ握りつぶしても新たに湧いてくる、スコッチがNOCである証拠。

全てを見逃していた。現実を直視したくないから真実に繋がりにくい糸を無意識のうちには除外して、深く考えないようにしてきた。全ては自分のくだらない逃げ癖が原因だった。

気がつくと部屋には秋だけが残されていた。

松田は目を改めると言い残して退室したらしい。放心状態から戻った秋に監視員が教えてくれた。

それから特筆すべき出来事は起こらないまま『巻き戻り』の日はやってきた。松田が再び訪ねてくる前に時間が巻き戻って全てがリセットされたし、結局シエリーとは会えなかったためだ。どれだけ降谷に説得してもらっても「次の私に聞け」の一点張りで、面会を承諾してくれなかったらしい。

十五年前、児童養護施設の一室で飛び起きた秋はやるべき事を理解する。今まで通り

組織に入ってシエリーから話を聞かないことには何も始まらない。

第5章 救済と真相

第20話

九回目の巻き戻りを迎えて十五年前の児童養護施設に戻ったあの日、記憶の濁流に呑まれながらも、心はある一点に留まっていた。とうとう現実を追いつかれたという痛切。脳が勝手に動き、記憶を取得し、整理する中で、冷え冷えとした実感だけが凝然としてそこにある。

受け入れ難い自分の姿や真実。様々なものから秋は逃げて、逃げた先に待っていたのは萩原消失の真相だった。

萩原は消えてなどいなかった。あの方が企てた誘拐によって姿を消しただけだった。真実を知りたくないから真実に繋がりがそうなパーツを避けて、自分を誤魔化すための暗示を信じ込んできたせいで、すぐそばで行われていたあの方の暗躍に気付こうともしなかつた。

「第一に情報収集だ」

薄暗い自室に佇む一際濃い闇を見つめながら、秋は自分に言い聞かせた。

情報を得て対策を取らなければ、今度も萩原誘拐を企てるであろうあの方は止められ

ない。

「まずはシエリーに会う」

シエリーはベルツリー急行でキッドを通じてループ現象の存在を知っていると明かした。時間がないから詳しいことは『次』の自分に聞くようにと言い、『次』の自分がループ現象を確信できるような、秋が本来知らないはずの情報を自分に伝えるようなと言ってきた。いわば合言葉だ。

組織壊滅以降、降谷に頼んでシエリーと面会しようとしても拒否されたのが少し気になるが、何か事情があるのだろう。

「シエリーと会うために今回も組織に入る」

組織に入る選択は変えられない。組織に入らない限りシエリーと接触できないし、大きな行動の変化を起こせばあの方に疑念を抱かせてしまう。

あの方は秋が自分の暗躍に気がついていないことを知らない。今でも都合の良い暗示を信じ込んでいると誤解しているだろう。

彼の想定に松田がいないからだ。

秋があの方の暗躍を知ったのは、十五年間消えた親友を探し続けた松田が『アドニス』との面会に漕ぎつけ、黒の組織による萩原誘拐を口にしたからだ。彼がいなければ秋は今でも萩原消失説を盲目的に信じていただろう。仮に萩原消失が間違いだと気付いた

としても、萩原消失の裏にあの方がいることや、あの方がループ者であることには一生たどり着けないはずだった。

松田のファインプレーを知らないあの方は、秋が気づいていると予想だにしない。

あの方は油断している。

せつかく油断してくれているのだから、秋はこれまでと同じく組織に入るべきだ。下手に行動を変えて疑念を持たせたくない。

「私は組織に入る」

決意を固めるため、もう一度繰り返す。

鳩尾がズドンと重くなった。

情報を満足に得られていない今の段階では正確なことが分からないが、あの方がどれだけ罪深い存在かは嫌と言うほど理解している。

彼は萩原の将来を理不尽に奪い取り、スコッチを殺し続けた。何より、あらゆる犯罪に手を染めている犯罪組織のトップだ。彼のせいで不幸になった人間は山ほどいる。

（あの方の罪深さを語るなら、私にも全く同じことが言える）

秋は組織の幹部として理不尽に他人の未来を奪い、大勢の人を不幸にしてきた。

組織に入って犯罪に手を染めるようになったのには悲劇的なきっかけがあつたはずだと信じて、その過去によって許されたがついていた秋が、ずっと目を逸らし続けてきた

事実だった。

十五年前の児童養護施設に『戻って』きた時から、身に染みて自覚している。

(そして私は、これからも同じことをする)

これまでも、これからも、秋は人を不幸にし続ける。

彼女の目的は萩原誘拐の防止だ。そのためにはこのままあの方が油断した状態を保ち、水面下で動かなくてはならない。

水面下で動くにはこれまで通り組織に入って、自然な形でシエリーに接触。ベルツリー急行で仄めかされた情報を彼女から得て、どうにか対策を考える。

これまで通り組織に入るのは、大勢の人を不幸にするのと同義だ。たくさん殺すし、殺さない場合も誰かが不幸になる。

あの方が見せた冷酷無慈悲な行いと全く同じことをする。

(私に犯罪を回避して立ち回る技量はない。疑われて粛清される危険を減らすために殺す必要がある)

(今まで通り組織に入ってシエリーから情報を得なくてはならない。でないとは萩原誘拐の対策を取れないしスコッチの自殺すら防げなくなる)

秋は心の中で自分に言い聞かせた。

神がかり的な頭脳を持っていれば違う道を選べたのだろうか、自分にはこれしか思い

つけない。重い感情を一緒に吐き出すようにして息を吐く。

一つだけ救いがあるとすれば、ループによるリセットだ。全てが解決してからも一周分余計にループすれば、世界がリセットされて全てをやり直せる。罪は消えないにして、犯罪行為の結果は消える。

ただし、こうも上手く物事が進むケースは極めて稀だと秋は知っていた。経験則から自分が願う未来は訪れないだろうと半ば確信してもいる。

だからこそ、最後の条件を付け加える。

(もしも、もしもリセットが出来なかったらその時は――)

……とまあ、十周目はシリアスな様子でスタートした。しかし物事は予測通り進まないもので、超絶シリアスな決意とは裏腹に事態は予想外の展開を迎える。

まず、主にあの方の怠慢のおかげで萩原誘拐は起こらなかった。

そして秋はシエリーに嵌められていた。

* * *

シエリーから指定された時期を迎えるまで、秋は情報収集に勤しんでいた。

確かにシエリーからもたらされる情報が本命ではあるが、組織のトップであるあの方と敵対する立場にいる以上、組織の内情を知っているのはプラスに働く。

しかし敵はあの方だ。表立って動けばすぐさま悟られるだろう。出来ることと言えば、雑談に見せかけて組織の目的やあの方の真意を話題に出す程度だった。

(今夜も収穫なしか)

幹部の溜まり場になっているバーから帰る道中、秋は小さく息を吐く。

あたりが静まりかえっているせいで、静寂特有の小さな高音が耳についた。

月明かりすらない真つ暗な夜だった。数歩先の道すら見通せない。

捜査は難航していた。

どの幹部に尋ねても大した答えを持ち合わせていないか、真実に掠つてすらいらない想像を語られるだけ。

下手に追求しても不自然だし大した成果も得られないだろうと計算して、僅かな落胆を覚えながら別の話題へ舵を切るのが常だ。もちろん今日も惨敗である。

(そりゃあそうか。ラムですら組織の目的やあの方の真意を知らないようだったし)

かなり前に探りを入れたところ、ラムはアポトーシスがどのと言っていた。検討外

れも良いところだ。あの方がループ者であり、研究者のシエリーがループ現象を確信していたのだから、どちらかと言えば量子力学方面だろうに。

ラムの回想がきつかけとなつて、これまで探りを入れた、錚々たる顔ぶれの返答を思ひ返す。

ベルモットは若返り関連だと思ひ込んでいるらしいし、ジンの答えは「知らない」の四文字を長つたらしく引き伸ばしたものだつた。

（多分あれだな。あの方がポエムしか言わないせいで部下の認識に誤解が生じてるんだろうな。私が懸念していた報連相の齟齬、やっぱり起きてるし……）

代わり映えのしない日々が流れていく中、何も成していない焦燥感が付き纏う。

暗澹とした気分になつてくる。このような時は、決まってベルツリー急行で告げられた言葉を反芻するのが常だつた。繰り返し唱えすぎて、今となつてはつつかえる事なく一語一句変わらずに誦じられる。

（残念ながら時間がないの。『次』の私に教えてもらいなさい。話を聞き出すのは十三歳になつた私。それ以前のタイミングで尋ねても、あの現象を確信できる材料は揃っていないから不信心を持たれて終わるわ。十三歳の私に、あなたが本来なら知り得ないはずの指摘をして私の仮説を立証させるのよ。……そうね、シエリーはゲノム創薬の専門書

を姉に貸している、がいかしら)

一つ前の周で、シエリーはそう言った。

十三歳になったシエリーに言われた通りの言葉を告げれば、組織の中核に近い研究者から話を聞き出すチケットが手に入る。

電灯の下へ差し掛かったので秋は立ち止まって腕時計を確認する。零時を回っていた。シエリーの十三歳の誕生日だ。

* * *

数日後、シエリーは秋のセーフハウスの一つにいた。

彼女は腕を組み、訝しげに目を細める。

「一体全体どういう風の吹き回しかしら。サイズが合わなくなったから私の服を新調するのにあなたが付き合って、」

「ベルモットはシエリーを嫌っているしジーンにやらせるわけにもいかないし、交流がそこそこある同性の私に白羽の矢が立ったんだよ」

「その帰り道に偶然私が気になっていた有名サンドイッチ店の前を通りかかり、テイクアウトのみ対応の看板を見たあなたが、自分のセーフハウスが近いから購入してそこで食べようと言いだなんて」

「悪の組織に囚われている未成年への憐れみが半分。コーヒー？ 紅茶？」

「紅茶」

答えを聞くと、秋はビニール袋から紅茶のペットボトルを取り出した。シエリーが服を選んでいいる間、サンドイッチ店の横を通りかかるよりも前にコンビニで購入しておいたものだ。

シエリーの視線が袋のロゴに注がれる。サンドイッチ店に差し掛かったあとで訪れる機会などなかったコンビニのロゴを確認して、隠すそぶりも見せない秋に辟易とした色を浮かべた。

しかし追及するだけ無駄だと思ったのか彼女は何も言わず、今度は差し出されたペットボトルへと視線を移す。

「せめてコップに移すとかできないの？」

「紙コップなら」

秋の答えに呆れたような半目を向けてから、シエリーは部屋をぐるりと見渡した。

「確かに物が少ないわね。本当にここに住んでるの？」

「セーフハウスだからね。利用頻度の低い拠点の一つっただけだよ。ここは来客用。重要度が低いから人に知られても一番問題ない場所とも言える」

「なるほど、だから幹部の住居にしては狭いのね」

「メインで使ってるセーフハウスもこんなもんだよ」

スコッチ軟禁のために購入したセーフハウスが特別だっただけで、秋の普段の生活はこの程度だ。趣味といった趣味もないし、適当に食べて寝るだけで一日が終わる。いつかのスコッチに言わせれば自分を大切に扱っていかないらしいが、その理由が見出せないのだから仕方ないだろう。むしろコストパフォーマンスに優れた人間だと言つて欲しい。

「おまけとして、シェリーを招いた理由のもう半分を教えてあげよう。ここなら盗聴対策もバッチリだからだよ」

「……誰かに聞かれたくない話がある？」

「大正解」

言いながら、秋はビニール袋から紙皿を取り出して一枚シェリーに渡した。

彼女は購入品のサンドイッチを取り出し、紙皿の上で口元へと運ぶ。

サンドイツチをかじる前に、秋の真剣な表情に気づいたシエリーが手を止めた。不思議そうに目を瞬かれる。

彼女の瞳をしつかりと見つめて、秋は言った。

『前』のシエリーから、十三歳以降のシエリーへ伝言がある。シエリーはゲノム創薬の専門書を姉に貸している、だってさ」

シエリーの反応は予想外のものだった。

瞳を右上に彷徨わせ、記憶を辿る。ここまではいい。一つ前の週のシエリーに聞かされていた話では、本の貸し借りは彼女自身と明美しか知らないことであり、秋が知っているのなら『前』のシエリーが教えたとしか考えられず、よってループ現象が存在する証明になる。つまりシエリーは、ゲノム創薬の専門書を姉に貸したのを思い出し、それを知っている人物は自分と姉だけであることに思い至り、秋が知っているのを訝しみ、『前』の自分に教えられたから知っているのだと結論を下すはずだった。

しかし彼女は心当たりがなさそうに眉を擡めた。妙な反応だ。

じつと机の一点を見つめて考えこむ。違和感が膨れ上がる。

やがて彼女が小さく息を呑む音が、静まり返った室内に響いた。べちゃりと音を立ててサンドイツチが皿に落ちる。彼女の手は小刻みに震えていた。何かがおかしい。

目が極限まで見開かれている。瞳が思索するように揺らぐ。

秋は少し迷って、言った。

「同じ時間が繰り返される現象に心当たりがあるはずだ。なんなら私よりも多くのことを知っているかもしれない。洗いざらい吐いてもらおうか。……って続けるつもりだったんだけど、」

シエリーの顔は酷かった。頬の赤みは跡形もなく消えて、唇は固く結ばれ、目には恐怖しか映っていない。秋は理由を尋ねる言葉を続けようとしたが、血の気の引いた口からか細い声が出るのが先だった。

「お姉ちゃんの身に何かが起こるのね」

「うん？」

シエリーは思わず聞き返した秋を嘲笑うように唇の端を無理やり釣り上げたが、顔色の悪さは相変わらずだった。

「組織の意向で私がアメリカに留学することになった時から、姉と離れて暮らすことになって、おまけにコミュニケーションを取れる僅かな機会は全て監視付きだつてことは知っているでしょう？ だから事前にお姉ちゃんが暗号を考えてくれたのよ。暗号は簡潔かつ私達以外には解読不能なもの。ミステリーによくある意味合いを持たせた符号ではなく、符号と込めた意味に関連性のないものが望ましい。大量の暗号を分析されない限り第三者が意味を推察できないのなら、露呈するリスクはグッと下がるもの。」

アドニスには特別に教えてあげるけど、私たちが使っているのは本の貸し借りになぞらえた暗号よ。本のジャンルが状況を表していて、本を貸してもらった人物がメッセーヂの主語となる。ジャンルごとの意味は色々あるけど医学書の場合は『命の危険』、『シェリーはゲノム創薬の専門書を姉に貸している』の場合、主語は解説に関係ないカモフラージュ用。重要なのは本のジャンルと本を貸してもらった側の人物——お姉ちゃんね。つまり直訳すると『お姉ちゃんの命が危険』」

今度は秋が驚く番だった。

次の周の自分に協力を仰ぐための合言葉だと伝えられ、律儀に信じてきたものは、姉の危険を知らせるメッセーヂだったらしい。

波紋のように広がり始める動揺を沈めるためにコーヒーを流し込み、話の続きに耳を傾ける。

「さっきも言ったように暗号を知っているのは私とお姉ちゃんだけよ。アドニスに暗号を教えた心当たりが私にはないし、姉が教えるとも思えない。となると、あなたが言った言葉と繋げて、『前』の私に伝えられたと考えるのが一番自然だし理にかなっているわ。よって、時間が巻き戻る摩訶不思議な出来事は実際に起こっていて、アドニスは『巻き戻り』が起こっても記憶を継承できる人間である。これが証明された」

「そうだね」

極力冷静な声色を心がけてではあるが、一言しか返す余裕しかなかった。

秋が固唾を飲んで次の言葉を待っていると、シエリーが細く長く息を吐く音が聞こえた。息を吐きながら目を閉じて、考えに集中している。必死に落ち着こうとしているように見える。

よくよく考えれば、メッセージを仕込んだのは一つ前の週のシエリーであつて目の前のシエリーではない。彼女は今受け取った情報と状況から、『前』の自分の行動と真意を推察し、姉の危険を知つてどう動くか考えなくてはならないのだ。

秋は動揺の波が静かに引いていくのを感じた。むしろ動揺が大きいのはシエリーの方だろう。真面目な話をするときには大人ぶつて「姉」と呼ぶのが常なのに、今はちよくちよくお姉ちゃん呼びが出ている。

秋はシエリーが落ち着くまで気長に待つことに決めて、ゆったりと構えた。

シエリーの瞑想は一、二分で終わった。ゆっくりと目が開かれる。存外しつかりした彼女の声が休息の終わりを告げる。

「状況もおおよそ理解できたわ。『前』の私はあなたを利用して、将来姉が危険に晒され

ると私に警告をしてくれた。内容から考えるに、姉は昏睡状態に陥ったか、あるいは死んでしまった。姉について詳しく聞きたいところだけど、まずは私の有用性を示すために、状況から推察できる『前』の私の行動を説明しておいた方がいいでしょうね」

理路平然と話しているが顔色は相変わらず悪い。

彼女は説明に入る前に一口紅茶を飲んだが、顔色は変わらなかつた。

「私はほとんどの詳細を伏せられて、とある物質に関連する研究をさせられているわ。もちろん組織の目的も、その研究が何を目指したもののなかも知らされていない。下手に調べようとしても始末されるだけだから本気で知ろうと思ったこともない。時折暇潰しであなたの方が目指しているものについて考える程度よ。暇潰しだから真面目な考察なんかじゃなく、もつと自由で馬鹿げた、子供がベッドに入って思い描く空想に近いものだけだね。例えばあの物質が真価を發揮するのは、SF映画のように同じ時間が繰り返される世界だとか。あの物質を体内に保持しているアドニスなら時間の巻き戻りを認識できるんだらうとか。もちろんこんなものは根拠なんてまるでない、子供の無邪気な発想よ。私だって馬鹿馬鹿しいと切り捨ててきたわ」

やはりシエリーが携わっている組織の研究とループ現象には関連があるらしいが、彼女はループ現象の存在すら知らされていない。ループ現象の存在を知らされているの

ならより多くの情報が期待できたのは事実だが、秋は落胆しなかった。

確かに彼女がもっと詳しく知っていれば話はより早く進んだだろう。しかしあの方はループの存在を秘匿するに決まってるし、ループについて知っている研究員を秋に近づけるわけがない。もしもシェリーがループの存在を知っていたら真つ先に罠を疑うべきだ。

あの方の罠である線が消えたのだから良い知らせだとも捉えられる。

「そして、『一つ前の週の私』も全く同じ状況に身を置いていたはずよ。今の私と同じ研究をして、同じような疑問を抱き、同じような馬鹿げた空想をしていた。一つだけ違ったのは、時間の巻き戻りが本当に起こっていると知るきっかけがあったことね。理由は分からないけど、『一つ前の週の私』は時間の巻き戻りを知るというイレギュラーを経験した」

組織の研究でループ現象にたどり着く土台があったシェリーは、『きっかけ』によつてループ現象を確信してしまった。

秋が頭の中で話を要約していると、対面に座る少女が不思議そうに漏らす。

「分からないのは、私がループ現象を知った理由ね。あなたがループ現象を仄めかすことを言いでもすれば確信したでしょうけど、あからさまに怪しい研究の関係者にそんな

不用心なことするわけない……」

顎に手を当てて考えるシエリーからそっと視線を逸らして、秋は遠い目をした。

(言っただな……)

一周前に、例え話だと枕詞をつけてではあるが、ループ現象についてシエリーに話してしまった。

思い返せば、あの時のシエリーは研究関連の何かに思い当たったらしき素振りを見せた。あれはループ現象を確信したものだっただろう。

自分が下手を打ったのを理解した上で、秋はしらばっくれることにした。自分の株が下がるだけの情報は伏せるに限る。「なんでシエリー気づいたんだろう、不思議だなあ」と言わんばかりの表情を取り繕っていると、すぐにシエリーの話が再開された。

「ともかく、『一つ前の週の私』はループ現象が本当に起きていると確信し、状況からあなたが時間が巻き戻っても記憶を引き継げる稀有な人間であることも察していた。そしてどこかのタイミングで、ループを利用して姉を助けることを思いついたんでしょうね。アドニスを紹介して『次の周』の——つまりこの私に情報を届けられれば、姉が死ぬ未来を回避させられる。だから私はあなたに気取られずに『次』の自分への伝言を託したのよ。そうね、まずはループ現象を知っていることを仄めかしてアドニスを動揺させ、『次の私』に話を信じさせるために必要だと言って、暗号化した自分へのメッセージ

を吹き込んだ。姉妹間で使われていた暗号を使って、姉の命が危険だったね」

「なるほど……」

秋は堂々とした態度を心がけて大きく頷いた。ここまでの話が指し示す真実はただ一つ。自分はシエリーに嵌められたのだ。

嵌められた人間とは思えない偉そうな態度を心がけながら、秋は『前のシエリー』の行動を頭の中で整理する。

つまりこうだ。

秋がついとうっかり例え話として時間が巻き戻る現象に触れたせいでループ現象を確信。多少話の流れが不自然だったとしてもあのような突拍子もない話を検討するわけがないと考えてループ現象を仄めかしてしまっただが、事前情報があったせいでシエリーは真実に至ってしまった。

その数年後に宮野明美が殺害され、シエリーは組織から脱走する。

脱走から数ヶ月後にベルツリー急行で、経緯はよく分からないがキッド達と共謀。キッドの変装を利用して自分が死んだと見せかけるための細工をする。

その時、ループしている秋を触媒とすることで、次の周の自分へ警告を出す作戦を思いついたのだ。上手いこと言いくるめて『次の自分』に伝言を伝えさせれば姉を助けられる。

明美殺害直後に秋を利用することを思いついていたのなら脱走前になんらかのアクションがあつたはずなので、思いついたのはベルツリー急行内だろう。

おそらく秋が乗り合わせていると知ったタイミングで思いつき、実行に移した。とんでもなく頭の回転が早い。

ループ現象を知っていることを秋に明かし、『次の自分』から全てを聞くようにと言い含め、『次の自分』を納得させるための証拠だと偽って過去の自分へのメッセージを仕込む。

組織の目を掻い潜って姉と意思疎通をするために編み出された暗号をメッセージに使っているのだから、秋が不審に思うことはない。組織の監視員と同じく取るに足りない言葉だと気に留めないで終わる。

そうして騙された秋は、騙されていることに気づかないまま時間の巻き戻りを迎え、記憶を継承し、指定された通りの状況で『次のシエリー』へ証拠に偽装された警告を伝えてしまう。

『次』の——つまりこの週のシエリーは宮野明美が殺される前に将来起こる出来事を知り、姉の死を防ぐことができる。

上手いのが、秋視点では会話の数秒後にシエリーが爆死することだ。死んだ人間から話は聞けない。秋は次の周が訪れる前に話を聞き出そうなどと考えない。

実際には降谷のおかげでシエリー生存を知ることが出来たし面会希望も受理されたが、シエリー本人に面会を拒絶され続けた。どれだけ降谷を通して働きかけても『次の私』に聞けの一点張りだったのだ。

今から思えば、あれは『次のシエリー』を問い詰めさせるためだ。秋がああの伝言を届けなければ、せっかく仕込んだ過去の自分へのメッセージが無駄になってしまう。

『前の私』が立てた計画の詳細と、計画を成功させたという事実。ループの存在すら知らないこの周の私は、たった一つの暗号から真相を導き、『前の自分』の思惑を察して、交渉の場を整えた。有用性は示したはずよ。確かに組織が行っている研究の確信は知らされていないけど、情報の整理・考察は手伝えるし専門知識に基づく知見も教えられる。ループという未知の情報を紐解く相棒に最適な人材だと思わない？」

外見が全く違うのに、彼女の姿はスコッチを想起させた。顔はいまだに青白く頼りない印象を受けるが、力強い目をしている。戦うことを決めた人間の瞳だ。

「頭脳も知識も全部貸してあげる。だから代わりにお姉ちゃんを助けて。お互いに利用し合う関係の方が、裏切りの心配もないでしょう」

第21話

「頭脳も知識も全部貸してあげる。だから代わりにお姉ちゃんを助けて。お互いに利用し合う関係の方が、裏切りの心配もないでしょう」

「分かった、宮野明美が死なない未来を掴むのに協力するよ」

秋は逡巡する間もなく承諾した。

シエリーが指摘した通り、互いに要求を突きつけ合うこの状況は裏切り防止になる。元よりタダでシエリーから情報を得られるとは思っていない。姉の命がかかっていれば裏切られる心配をしなくていいのだから、明美の生存という対価が降って湧いたのは幸運とも言える。

何より最高の条件を求めて悠長にやっている時間はない。もう一度時間が巻き戻るのを待つて、出来事とシエリーの記憶がリセットされた次の周でやり直すことは理論上可能だが、敵もループしている以上迅速に動く必要がある。

多少のリスクがあるとは言え、シエリーの話に乗るのが今選べる最善だ。

「ただし、本来訪れるはずの未来を回避するうえで、ループ現象の詳細を把握しているのとしていないのでは成功率が雲泥の差になる。この性質上、シエリーの情報が先払い

になるけど」

「いいわ。でもその前に姉に何が起こるのかを教えて。防ぐ未来がどんなものか正確に知らないで、事前に教える情報の取捨選択もできないでしょう」

「オーケー」

言つて、秋は少し言葉に詰まった。シエリーがどれだけ姉を大切に思っているのかを見せつけられた直後だからか、将来起こる出来事を告げるのが躊躇される。

しかし彼女に指摘された通り、ここは真実を語るべき局面だ。変な同情心を起こして事実を伝えないのは、ベルツリー急行で一世一代のハツタリに出たシエリーの覚悟を無碍にすることになる。

「宮野明美は五年後に殺される」

「……ッ！」

覚悟はしていただろうが、それでもシエリーが息を呑んだ。

秋は構わず続ける。

「間接的な原因はもうすぐ明美にできる恋人。明美と交際したことによつてシエリーと面識を持ち、シエリーの周りの人間と親しくなつて組織に入ったのはいいけど、今から三年後に彼がFBIの潜入捜査官だと判明する。宮野明美はFBI捜査官を引き込み、

これから先も連絡を取る恐れがある不穏分子になってしまった」

「……でもお姉ちゃんは私に対する人質よ。自分で言うのもなんだけど、私は組織にとって本当に重要な人物で、研究にも深く携わっている。私の機嫌を損ねるリスクを負ってまでお姉ちゃんを始末するとは思えないけれど」

「そうだね、組織もそう考えた。『恋人がFBIだったから殺した』なんて言えばシエリーは反発するし、復讐を企ててそのFBIと共謀するかもしれない。恋人の正体は知らせないまま、シエリーにも説明できる別の理由を作って殺す必要がある。だから組織はさらに二年後、宮野明美に話を持ちかけたんだよ。十億円を盗み出せば妹と共に組織を抜けさせてやる。もちろん失敗すれば命はないってね」

「……なるほど。姉を始末した後、ジンが私を言いくるめる文句が簡単に想像できるわ。『宮野明美は妹の為に果敢にも危険な任務に挑戦したが、志半ばで死んだ。姉妹二人で自由に暮らすというのは所詮見果てぬ夢だった』とかなんとか」

シエリーが目線を下に落として自嘲気味な笑いを浮かべた。

「お姉ちゃんに十億円強奪を持ちかけた恨みは消えないでしょうけど、それよりも組織への恐怖と絶望感が深々と刻みつけられる。私は抵抗の意思をなくし、不穏分子は始末できる。願ったり叶ったりね。姉は組織にまんまと騙されて成功しようのない任務を負わされ、組織のもくろみ通り失敗して殺される口実を与えてしまった、と」

「いや、強奪は成功するんだけど」

「するの!?! 十億円よ!?!」

動揺しながらもドライな口調を貫いていたシエリーが初めて声を荒げた。彼女の反応は最もだ。金額が大きすぎる。

例えば叶才三^{かのうさいぞう}。綿密で隙のない計画を立て、誰も殺すことなく警察を煙に巻くことから影の計画師と呼ばれる彼は度々大金を盗み出しているが、一度に盗む金は多くても四億だ。十億円の半分以下である。

さらに銀行強盗や輸送車強奪事件は主に米花町近辺で頻繁に起きるが、どれも数億が限度。

十億円強奪は桁が一つ多い。

それ以前に銀行強盗や現金強奪は、金融機関の強固な防犯体勢と検挙率の高さのせいで失敗に終わる確率が高い。仲間や武器を集めるのに手間取っているうちに銀行のシステムが変わって計画が頓挫するケースもある。

強盗・強奪の難易度と頭ひとつ飛び抜けた莫大な金額。ゆえに組織は絶対に達成可能な条件として十億円強奪を命じたし、誰もが失敗を前提に話を進めていた。

「組織の連中は全員そんな反応だったよ。成功するなんて誰も思わなかった。見事十億

円を手に入れた宮野明美はしかし、理由もなく殺された」

「……」

「もちろん組織も考えなしじゃない。十億円強奪が成功したと知って別のカバーストリーを用意した。強奪を成功させるために仲間を引き入れた人物と明美との間で意見の違いが起こり、同士討ちにまで発展したつてね。哀れ！ 宮野明美は勇猛果敢に任務を成功させ、組織はその心意気に免じて彼女の願いを叶えてやるはずだったが、彼女はかつての仲間と殺されてしまう。組織は制裁も兼ねて、明美を殺した共犯者たちを殺した。とまあ、こんなストーリー。もしも上手く行っていたら、シエリーは姉の仇を取ってくれた組織への感謝がどこかにあつたかもしれないね。本当の仇は組織なのに」

「……ゾツとするわ」

「計画が成功した周はないから安心していいよ。組織の目論見とは裏腹に、どの周だろうと明美が最後に死んだのが分かる形で報道される結果になるから。明美よりも前に死んだ共犯者が明美を殺せるわけがないのは一目瞭然だった。用意していたストーリーは破綻。おまけに十億円強奪事件はセンサーシヨナルに報道されていたから、明美が任務に失敗したと嘘をつくわけにもいかない。困った組織は、宮野明美を殺した理由を説明せずに姉を始末したとだけシエリーに伝えた。もちろんシエリーは納得のいく説明しろと主張したし、最終的には研究をポイコットしていたよ。あの時の組織は少

「ゴタついていた」

「まあ、そうなるでしょうね。一連の流れは分かったわ」

それに、とシエリーは続ける。緊張が緩んだのか、口元の強張りがなくなっていた。「話を聞いて安心したわ。お姉ちゃんが殺されるまでの経緯には介入する余地がある。真っ先に思いつくのはFBI捜査官との交際を邪魔することね。十億円強奪の話に乗らないよう手を回すのもいいけど、元凶から潰してしまえば今まで通りの生活が保障されるもの。『前の私』が十三歳の誕生日を指定したのも、二人が出会う前から動けるようにしようし」

「あー、それなんだけど……」

秋は首に手をやりながら視線を斜め下に落とした。憂鬱が胸に立ち込めている。口を開くのが億劫だった。

「宮野明美を助けるには表向きの出来事を変えてはいけないうって縛りがあるんだよ。だからシエリーが例に挙げた方法は全部不可能」

シエリーの反応を伺えば、冷静さを装っている瞳の奥に不安の影がチラつくのが見えただ。緩みかけていた表情も元に戻ってしまう。

「……………理由は？」

シエリーは端的に尋ねた。

秋も同じく端的に返す。

「あの方もループしている」

「ツ……！」

ついにシエリーの体が硬直した。赤みを取り戻しつつあった頬から一瞬で血の気が引く。

「シエリーから話を聞けていない現時点ではあの方の目的を断言することはできないけど、全ての周で取った行動とそこから推察できる行動指針は把握できている。アイツは一週目と同じ出来事をわざと起こし、『正史』の流れから逸れないようにしているんだよ。

なにせせつかくループによって知り得た知識があるのに、それを使って組織をより良い方向に導こうとしない。組織に被害が出る出来事は変えないし、この十五年のうちにNOCだと判明する人間が組織に入ってきてても放置、計画の失敗や情報漏洩もそのまま、有能な幹部が死ぬ時だってノータツチだ」

具体例を挙げよう。

やりようはいくらでもあるのに組織壊滅を回避しない。

あれほど危険視している赤井秀一が諸星大として組織に入ってきてても早々に始末せ

ずに『一周目』と同じ道を歩ませる。組織壊滅の立役者の一人である降谷零も同様だ。彼が公安であることはループ中に判明しているのに、どの周だろうが放置したまま組織壊滅作戦を迎える。

正史とのズレを出さないために、必要なくなると分かっているながら土門康輝の暗殺計画を命じもする。

おまけに正史をなぞるためなら腹心が何人死のうが関係ないらしい。あの方は事故や任務失敗のせいで死ぬ幹部も放っておく。

長年使えた腹心のピスコは暗殺の瞬間をカメラマンに撮影されるし、テキーラは事故で爆死するし、変装していた警察関係者が任務中に発見されたアイリッシュは警察への口封じで殺される。

結果を知っているくせに毎回同じ情報を盗むよう指示して、何人か幹部が死ぬことだっている。

「正史をなぞっているわけだから、正史と異なる展開になりそうな時は手出ししてくる。死ぬ予定の幹部が生き残りそうになったら、裏切るわけでもないのに予定通り死ぬよう手を回したりとかね。あの方って自分以外はいつでも良さそうだし、まあやるでしょ」「根拠は？ 幹部との付き合いが薄くて興味もなさそうなアドニスに気が付けるほど杜撰

なやり口なの？」

「いいや、死ぬ予定だった幹部を助けようとしたことがあるんだよ。幹部って言ってもNOCだけどね」

スコッチを救うためにNOCバレの原因となる証拠を握り潰したら新しい証拠を用意されたのも。NOCであるという情報が幹部に一生送信される瞬間にスコッチの側に居合わせようと考えていた周ではXデーの直前に外国での任務が入られ、任務中に正史よりも早まったスコッチ死亡の一報を受けたのも。今から思えばあの方が裏から手を回していたのだ。

スコッチが死ぬのは本人の意思だったが、彼が死を選ぶ状況が必ず訪れたのはあの方の差金だった。

「ともかく、『正史』から逸れたくないあの方は宮野明美生存を妨害してくる。未来を変えたいならあの方視点での出来事を変えずに未来を変えないといけないんだよ」

あの方の目を欺くため、宮野明美には予定通り十億円強奪を起こしてもらわなくてはならぬ。それには明美の犯行を放置する作戦をシェリーに受け入れてもらわなくてはならない。

だから秋は宮野明美が死ぬ経緯を説明した時に、十億円強奪事件で死人が出ることを伏せたのだ。

犯行の過程で人を殺めているかどうかは、シエリーの心理的抵抗に大きく関わってくる。

自分は十三歳の少女を慮れるほど出来た人間ではない。非倫理的、非道徳的な思考と選択が染み付いている。

明確な一線を超えたのがいつなのかの自覚はないが、引き返せないところまで来てしまったという諦念だけが残っている。

だから、姉のためにここまでしたシエリーが眩しく感じるのも事実だった。

自分ではなく彼女がループ能力を持っていれば、高い知性も相まって、秋に頼ることもなく一度の『やり直し』で姉を助けられるのだろう。

間違つても、何度もやり直した末に状況を悪化させるだけ悪化させて、助けたかった人を助けられない結末に終わったりはしない。

心当たりのない自責の念が頭をよぎった。同時にどこからか不快感が込み上げてきた。秋は慌てて思考を現実に戻す。

丁度シエリーが血の気の引いた唇を開いたところだった。

「あの方に私たちの動きを感じづかれたら、邪魔されるだけでは終わらないでしょうね。アドニスの言う通り、あの方が観測する物事を変えずにお姉ちゃんを助けないと」

自分に言い聞かせるようにも聞こえる彼女の声はもう震えていなかった。

真つ直ぐ秋を見据えて、言う。

「あの方が知り得る情報の範囲を教えて。流石に組織のボスが直接お姉ちゃんの死を確認するわけじゃないでしょう？ 実行犯であろうジンからどのような報告を受けるのか。報道から知り得る内容はどのようなものか。報道規制を命じたのなら、命じるにあたって本当に起こった出来事は把握しているはずよね？」

「シェリーが考えているほど詳しい報告なんてされないよ。『無事に始末した』だけで終わるし、報道規制だって十億円強奪事件の首謀者の死因が、他殺から自殺に変わるだけ。あの方は宮野明美の死に注目したりしない」

「正史の流れから逸れないため、姉の死が同じ条件で訪れるよう神経を尖らせているのかと思っていたけど？」

「ああ、違う違う。あの方は起こる出来事全てを手中に収めているわけじゃないよ。正史をなぞっているとは言っても大筋だけで、些細な変化は放っている。組織の中だけに限定しても、コードネームを持たない構成員を含めた全員の動向をチェックするとか無理だし」

あの方のループに気づいてからシエリーに接触するまでの間も、秋は水面下で情報を集めていた。雑談に見せかけて組織の目的やあの方の真意を話題に出すのがもつぱらだったが、あの方の制御下にある出来事とそうでない出来事の境目を探ったこともある。

だからあの方の行動を把握しているし、思考の予想にも余念がない。

「あの方の思考回路を説明する前に踏まえておかないといけない、ループ現象における原則がある。些細な変化が起きたところで歴史の大筋は変わらないんだよ。強い意志を持って何かを成し遂げようとしている人がいたとして、私が解決策Aを潰しても、その人は解決策Bという別の方法を見つけ出して前に進み続ける。これと同じことが、歴史という大きな枠組みでも起こる。世界を大きく変えていくのは強い意志が介在している事象だから、些細な変化が起きて多少状況が変わっても、歴史の向かう先は変わらないわけだ。……世界を大きく変えていくのは強い意志が介在している事象であり、多少状況が変化しただけで意志は消えない。これは何度も同じ時間を繰り返し返す中で見つけた、世界のルールみたいなものだよ」

「確かに些細な変化は歴史の大筋に干渉しないでしょうね。全ての周のアドニス は記憶

の面でそれぞれ異なる存在だもの。アドニスとの記憶という地球規模で見れば小さな変化が大きな変化を誘発するのなら、あの方の手中に収まるはずがない。いくら国際的な犯罪組織のトップと言っても人間の手に余るわ」

シエリーの指摘は事の要点を的確に捉えていた。

秋は大きく頷いて見せることで同意を示すと、そのまま話を続ける。

「世界を大きく変えていくのは強い意志が介在している事象だつてことをナチュラル人類見下しジジイのあの方が理解できているかは置いておいて、『些細な変化があつても大きな変化は起こらないな。手が回らないし放つといいか』くらいは理解しているはず。だから大きな分岐点だけ押さえてるんだらうね。そして、あの方が定める分岐点には有能な人間が関わっているかどうか。私は意志が未来を変えると考えているけど、能力至上主義のあの方は有能な人間だけが未来を変える力を持っていると考えている。だから未来を大きく変えそうな能力や立場を持つ人間の生死、動向だけに気を配っているんだよ。コードネームを与えられる人間なんかがそうだ。逆に、宮野明美のような一般人は眼中にない。

あの方が見据えているのは宮野明美の死が原因となつて発生するシエリーの脱走であり、宮野明美本人じゃない。シエリーが研究に携わらなくなると、研究の進捗はもちろん、研究者たちのパワーバランスが崩れたりもするだろうし。目的を達成するための

手段であろう『未来を変えない』という方針において、明美の死が重視されるのはそれが理由だ」

「……………脱走。そうよね、お姉ちゃんが殺されたんだから」

シエリーが茫然とした様子で呟いた。ついに処理能力が限界を向かえたらしくぼうつとしている。

情報量が多すぎたか、自分の未来の行動と今の自分とが結びつかないのか。

おそらく後者だ。情報量が多いと言っても、今までの話は「表立って明美の死を防ぐとあの方にバレる」という要綱に集約される。

シエリーにとって組織に所属しているのは当たり前であり、多少の不便や不満は感じながらも組織を脱走しようなどと本気で考えたことはなかったのだろう。だから未来の自分の選択と、今の自分の考えとの乖離に戸惑っている。

それだけではない。シエリーはたった十三歳にして途方もないものを背負ってしまった。

あの方との敵対が決定したのもそうだが、人よりも多くの事を知っているのは重荷にもなる。宮野明美を救うチャンスを得た代わりに自分が失敗したら姉を失う重圧が課せられた。

『前のシエリー』が仕組んだことだし元を正せば悪いのはあの方だが、自分にも原因の一

端がある。

秋は意味もなく首裏をさすつて、言葉を選びながら言った。

「あー……、五年後のあなたはこうしますつて言われても気持ち追いつかないだろうし、今は『五年後に優秀な科学者の脱走が起こる』とだけ捉えておけばいいんじゃない？ 自分と切り離して考えるつていうか。その年代の精神面での成長つて目まぐるしいし、今は受け入れがたくても時間が経てば『脱走する十八歳のシェリー』の感情に近づいてくるでしょ」

最もらしく言つてみたが、要するに現実逃避の提案である。現実逃避しかしてこなかったせいでこれしか言えない。

放心状態から解けたばかりのシェリーは、元に戻るまで時間がかかりそうだった。しばらくの静寂が気まずさに拍車をかける。

「……………そうね、今考えても仕方ないわね」

ややあつて肯定が返つてきたが、妙な座り心地の悪さは付き纏う。秋はこの雰囲気をさつさと払拭しようとして切り出した。

「話を戻そう。一周目の出来事をなぞつているあの方にバレないように、あの方が得られ

る情報を変えずに宮野明美を助けなくてはならないってのが今までの話だったね」

「ええ。あの方が変えたくない出来事は私の脱走だから、お姉ちゃんの殺害自体には注目しないってところまで聞いたわ」

「あの方に届く報告はぎつくりとしたものだよ。いつ、どこで、どのような殺し方をしたか。宮野明美が盗み出した十億円はどうなったか。たったそれだけ」

「それらの情報を変えることなくお姉ちゃんを助けなくてはならない。そういう事ね」
シエリーの言葉によって、一通りの確認が終わる。

話の整理が終わったところで、秋は自惚れたキザな人間そのものの笑みを浮かべた。

「まあ安心しなよ。これは普通の自画自賛は抜きにした客観的な評価だけど、私はかなり頭がいい」

自分は現実逃避ばかりしてきた。逃げ場がなくなるのを恐れて記憶喪失のままであることを望み、しかし記憶を取り戻したくないと自覚することによって内面と向き合うのも嫌で、「記憶を取り戻したいけど全然手がかりが見つからない」と言うカバーストリーを作り上げて信じ込んでいた。失った記憶に繋がりそうな事実に出くわすと意識から除外する。気づかないふりをする。関係ない事柄だと自己暗示をかける。

言い換えれば、新たな事実と出くわすたびに、言語化して認識するレベルに達するま

でのほんの一瞬で記憶喪失の謎に繋がりそうかを判断し、繋がりそうなら自分を騙す筋書きまで一瞬で作り上げ、現実逃避用にカスタマイズした世界を見ていた。

それなりの判断力と発想力を有していなければ出来ない芸当だと思う。

(今までトンチンカンな答えを導き出していたのは、情報を遮断したり歪めたりしていたのも大きい。現実逃避のため視界に入れないようにしていた情報を視界に入れると決めた今ならまともな決断を下せるはず。……多分だけ)

内面で起こった自信の揺らぎはおくびにも出さず、秋は自惚れ甚だしい表情を保った。

組織の連中がこれまで口にした神話に準えた例え話を思い返し、自賛に使えそうな名前を並びたてる。

「私がオーデインとトト神と久延くえびこ毘古びこに同時に祝福されたとしか思えないほど明晰な頭脳を持つのは世界の常識だけど、やはり評価が正しかったと最近証明されてね」

「二回り年下の私に嵌められた直後にそう主張できるあなたの図太さには感心するわ」
(コイツ人が微妙に気にしていることを……)

秋は思わず半目になってしまったが、反応はそれだけに留めた。

再び涼しい顔を作り直し、偉そうな口調で結論を告げる。

「その明晰さを持つてすれば、この短時間で解決策を思いつくなど造作もない。あの方

の目を欺きつつ宮野明美を助ける方法はある」

存外真剣な声色が出たせい、シエリーの纏う空気が一変した。

秋が突然自身の頭の良さを主張し始めた頃から浮かんでいた呆れ顔が引つ込み、真面目な面持ちになっている。合わせられた視線が次の言葉を心待ちにしている。

秋は真面目で涼しげな表情を心がけながら、説明を開始した。

「さっき話した通り、あの方に私たちの動きを悟られないのが宮野明美の死を防ぐ前提条件だ。もしもあの方に気取られたら明美生存の邪魔をされるのはもちろん、不穏分子だと見なされて何かしらの処置を取られる。殺されるよりも酷い目に遭う可能性だつて十二分に考えられる。だから、まずは徹底的に『正史』の内容をなぞる。明美が十億円を手に入れるまでノータッチを決め込むことで、『あの方視点の出来事』をこれまでの周と同じ展開に保ち、疑念が芽生える余地を消す。

動くのは宮野明美が殺される当日。簡単に言うに入れ替わりによる死亡偽装を行う。私が宮野明美に変装して組織との取引に向かい、殺されたふりをすれば、あの方の目に映る出来事に他の周との違いが生じることなく、宮野明美の死を回避できる」

先ほどは明晰な頭脳を持つだのなんだのと嘯いたが、その実、自分が神がかり的な頭脳を持ち主でないことは身に染みて知っている。

非ループ者でありながら次の周へ伝言を仕込んだシエリーや、六歳にして大人顔負けの頭脳を誇る江戸川コナン、黒の組織へ潜入している捜査官の面々のような、能力の高い人々にはどう足掻いても追いつけない。

だからループ中に見た、他人の計画を再利用する。

明美と入れ替わる計画は、ベルツリー急行で行われたシエリーの死亡偽装作戦の再演だ。シエリーに変装したキットが明美に変装する秋に変わっただけ。

ベルツリー急行でのシエリー死亡偽装方法は表沙汰になっていないのであの方には知られておらず、明美死亡偽装の真相に勘づかれるリスクが下がる利点もある。

「背格好が似ているとは言っても流石に難しいんじゃない？」

シエリーから返ってきたのは芳しくない反応だった。カツラを被つたり眼鏡で顔を隠したりと、一般的な変装をするだけなら彼女の懸念通りだろう。しかしこの点は難なくクリアしている。

「随分前の周でベルモットに変装技術を習ったことがあつてね。ベルモットと遜色ない腕前だよ。おまけに組織では下手に疑われるのを防ぐため、変装技術を見せたことがな

い。私の変装技術を知っているのは、『私がベルモットに変装技術を習った周』の記憶を保持しているあの方だけだ。だから、実行犯のジンとウォツカが入れ替わりを思いつくのは不可能だつてメリットもある」

「あの方に入れ替わりを疑われる可能性は？」

「ない。あの方から見れば私が明美を助ける動機はゼロだし、そもそもあの方が注視しているのは明美殺害ではなくその先のシエリー脱走。気に留めるでもなく殺害報告を聞き流すはずだよ」

シエリーの目から怪訝さが消え、先を促す動きをされた。それを受けて、秋は詳細な計画の説明へと移る。

「殺害当日、宮野明美が組織との合流場所に向かう直前に入れ替わり、宮野明美に扮した私が殺される演技をする。運がいいことに殺されたふりが出来る条件が揃っているからね。揃っている条件その一。ジンが腹部を撃つ」

言いながら秋は人差し指を立てた。

「ジンが人を撃ち殺すパターンが二種類あるのは知ってる？」

「いいえ」

「二つ目は、組織に入り込んでいたNOCや肅清対象などの警戒に足る相手を始末する

時に行われる、眉間を撃ち抜いて即死させるパターン。万が一にも反撃されないためだね。そして二つ目が、腹を撃ち抜いて苦しませた末に殺すパターン。警戒に足らない、生きている時間が長くても何もできない無力な一般人相手の殺し方だ。宮野明美は後者に当てはまるから、血糊入り防弾チョッキを着ていれば誤魔化せる」

続いて中指も立てる。

「揃っている条件その二。どの周でも偶然居合わせる第三者。発砲音を聞きつけた第三者が向かってくるのに気づいたジンとウオツカは、宮野明美の死を確認する前に現場から立ち去ってくれる。もちろんこの周では第三者が訪れない場合も見越して、目撃者役も用意しておくけどね」

「どう調達するのよ」

「今から話すよ。条件その三。明美の保護や計画の補佐をしてくれる機関へのツテ。死ぬ予定だった幹部のNOCを助けようとしたことがあるってさっき話したでしょ。そのNOCは公安に所属していてね」

「潜入捜査官の命を救うことで公安にツテを作る……？」

「その通り。幸い、ループの過程でNOCの助け方も、公安内部に後ろ暗いところがないことも判明している。公安から私たちの計画が漏れはしない。NOCの命を救うとき之恩を着せまくったり、ループによって得た知識を利用して好感を持たれるよう立ち

回ったり。そうやって一定以上の信頼を稼いでおけば、宮野明美の保護に協力してもらえる。公安の力を借りられるなら目撃者役の用意も簡単だ」

公安のNOCとはもちろんスコッチのことだ。

一周目、スコッチの死を知った秋は彼の親友である降谷以上に絶望していた。らしい。降谷からの伝聞なので自覚はないし絶望に起因する心当たりもないが、情報源が情報源なので信憑性がある。

絶望の心当たりがない。だと言うのに絶望はしていた。となると、記憶喪失前の記憶が感情の動きに関わっていると予想される。

そう考えた秋は、「スコッチと関わることで記憶喪失の鍵を発見する」という名目で彼を助け、長時間の接触を可能にするため軟禁に踏み切った。

しかし記憶を取り戻す云々は現実逃避の一環だったと後に発覚する。本当は思い出したくないが思い出したがっているポーズを取るためにスコッチ軟禁を執行したに過ぎなかった。

(とは言っても、思い出したがっているポーズを取るだけなら毒にも薬にもならないカウンセリングでも受ければいい。なのにスコッチ軟禁を選んだことはスコッチに死んでほしくなかったというか……。考えるの辞めよう)

逸れ始めた思考を慌てて元に戻す。

現実と向き合う決意を固めた今、失った記憶をおいおい探っていくかなくてはならない。しかし思い出したがっているポーズを取るためにスコッチ軟禁を決行したのは、スコッチを通じて記憶を思い出せる確率は微々たるものだと言っただけだ。

過去の出来事においてスコッチが重要な立ち位置にいそうなのは確かだが、「彼と関わり続けて思い出すのをひたすら待つ」のは博打が過ぎる。

記憶喪失の謎は別の方法で探ることにして、彼にはシエリーの要望に応える布石になってもらった方がいいだろう。

「何より、死亡偽装が終わって表向き死んだことになった宮野明美を組織から隠し、彼女が平和に生きていくために様々な手助けをしてくれる先は必要でしょ。さつきも言った通り後ろ暗いところがない公安警察なら、明美の生存が組織に漏れる心配はないし、日本国籍を持つ宮野明美の保護先として日本の組織を選ぶのは理にかなっている」
そうやって、公安との協力体制について締め括る。

流石に死亡偽装以降の明美の世話など手に余る。公的機関に丸投げすべきだし、彼女にとつてもその方がいいだろう。

これに関してはシエリーも首肯した。

話に区切りがついたので、これまでの会話の要約に入る。ややこしい話をしているのだから、頻繁に立ち返って思考を整理するべきだ。

「これまでの話をまとめると、入れ替わり作戦が成立する理由は以下の三つだね。一、ジンは殺害対象の胴体を撃ち抜くため血糊入り防弾ベストが使える。二、目撃者の発生により、ジンとウォツカが一刻も早く現場から立ち去ろうとして、死亡確認を省略する。三、公安警察と手を組むことで些細な当日のサポートを受けられるし、作戦成功後には明美を保護してもらえる」

言い終わると、早速シエリーが難色を示した。

「その目撃者だけど、発砲音を聞いて現場に向かう程度には正義感がある人なんですよ？ 血だらけの女を見たら間違いなく救急車か警察を呼ぶわよ。そうしたら流しているのは血糊だと露呈する。いくら公安が緘口令を敷いても人の口に戸は立てられないと思うけど」

この周だけたまたま目撃者が登場せず、公安の職員が代役を務める筋書きになれば良いが、これまで通り目撃者がやって来たら彼女の推測通りの展開になるだろう。

しかしその問題はすでにクリア済みだ。

秋は口元に笑みをたたえたまま受けて立つ。

「さすが話が早いね。これまでの周もまさにその展開になっている。居合わせた第三者がすぐさま救急車を呼んで、到着した救急隊員が宮野明美の死亡を確認することで十億円強奪事件は幕を下ろす。この展開を防ぐため、宮野明美に扮した私は腹部を撃たれた衝撃で海に落ちるつもりだよ」

宮野明美が海に落ちるかどうか。ここだけが他の周との変更点だ。

明美が死んだ状況など報告に上がらないため、あの方の世界で起こる出来事に変化は生じない。

「殺害場所は人気のない港湾の倉庫群なんだけど、上手く海に落ちれるように海岸での落ち合いに変更する。ジンたちは共犯者に罪を被せる気満々だから『供物が自ら生贄台に上がってくれたぜ……』で終わる」

「ねえそれジンの物真似？」

「……」

言った後から羞恥心が襲ってきた。秋は無言で目を逸らし、話を再開することで誤魔化そうとする。有難いことにシェリーはそれ以上触れてこなかった。

「海に落ちた私は沈んでいく。沈んで、海面から離れた場所を静かに泳ぎ、公安との合流地点に向かう。ある日突然秘められていた泳ぎの才能が開花した私ならともかく、宮野明美にはできっこない。この点も私と明美が入れ替わらないといけない理由の一つだ

ね」

話のついでに、自分がいなければ計画は成功しないことを暗に念押ししておいた。こうして計画に自分を組み込んでおけばシェリーの裏切り防止になる。裏切るメリットがないので状況的にまずあり得ないが保険は大事だ。

しかしシェリーは胡乱な目つきになった。

「それ、本当に泳げるの？」

「失礼な。自分の命がかかっている状況で普段の高すぎる評価を元に計画を練るほど馬鹿じゃないよ」

確かに中学までは十メートル泳げるかすら怪しかったが、組織に入ってしばらくしたら泳げるようになっていた。泳げるようになるまでの記憶がないのだから唐突に才能が開花したとは思えない。

秋はナルシストがよくやる仕草でフツと笑い、回想を締めくくった。

強気な返しを受けたシェリーは納得したように頷く。

「なるほど、苦痛に塗れた特訓の記憶を抹消して才能が開花したことになっているのね」
(元々泳げなかった前提で考えているあたり重ね重ね失礼だな……)

秋は心中でぼやいたが、口には出さないのでおいた。

文句を口に出したら最後、売り言葉に買い言葉でどんどんと本題から逸れていつてし

まうと経験で知っているので、無理やり話を戻す。

「ともかく、宮野明美に扮した私が海に落ちた後は公安に報道規制をかけてもらい、十億円強奪犯の首謀者の遺体が発見され、自殺だと断定されたとだけ公表する。そうすればあの方が報道内容に違和感を抱くこともない」

「……でもジンやウオツカはどう思うかしら。彼らからすれば、警察が現場を見て自殺と断定したことになるでしょう？ 腹部が出血している状態で海に入ると酷く滲み出し、担当刑事が早々に自殺と結論を出す現場だとは思えないけど」

「いいや、二人からすれば、宮野明美が組織の関係者だと知っていた公安が、捜査の進展を阻止するために情報を握りつぶしたように見える」

「……」

途切れ途切れながら進んでいた議論に終止符が打たれた。

シエリーは顎に手を当てながら真剣な目つきで考え込む。情報を精査し、作戦に破綻がないか確認しているのだろう。

秋はその間に、放つたらかしになっていたサンドイッチを処分しておいた。パサついていた。

シエリーから許可が降りたのは十分以上経過した後だった。「上手くいきそうね」と

いう一言が査定の終わりを告げる。

秋は彼女にサンドイツチを勧めてから話のまどめに入った。

「シェリーの知識と頭脳を貸してもらうために、私は殺害当日に宮野明美と入れ替わって彼女の死を防ぐ。この入れ替わり死亡偽装を成功させるには、あの方に疑念を抱かせる余地を徹底的に潰す必要がある。つまり他の周との相違点を出さないように動くわけだけど、ここでネックになってくるのが、シェリーが未来を知ってしまったという違いだね。未来の知識を知ったためにシェリーの行動が変わると、明美まわりの状況が大きく変わってあの方に疑心を抱かせる確率が上がってしまう」

例えば諸星大の潜入方法。

諸星はシェリーの近くにいる組織の人間と親しくなつて組織に入るのが常だが、諸星が引き起こす所業を事前に知ったシェリーが「そんな人に会いたくない」と姉の恋人との顔合わせを頑なに拒んだら、赤井秀一の潜入ルートが変わる。もしかしたら明美が肅清対象になる理由も消えて、あの方が訝しむかもしれない。

「あの方対策で、未来を知ってしまったシェリーが何も知らない状態と同じ振る舞いが出来るよう、『前』の出来事をその都度教える必要があるんだよ」

「確かにそうでしょうね。でも、いつどうやって話をすり合わせるの？ 今回みたいに

買い物に託^{かこ}けて二人で外出する手は何度も使えないはずよ」

シェリーは一口齧^かつたきりサンドイッチを置いて疑問を呈した。

丁度これから説明しようと思っていた部分だったので秋は胸を張る。

「そこも既に決めてある。なにせオーティンとメーティスとトト神に同時に祝福された
としか思えないほど明晰な頭脳の持ち主だからね」

「さつき自称していた名称と微妙に違うけど、さては覚えてないわね」
「複数の肩書きを持つているだけだよ」

フオローになってない誤魔化しをしてから、秋は真面目な顔つきに戻って言った。
「一定期間で行われる、私の検査協力を利用する」

秋はループと密接な関係があるであろう組織の研究に、被検者として協力している。
今までされてきた表層的な説明と今日のシェリーの発言を合わせて考えると、秋の体内
にあるループの原因となる物質を調べているらしい。

研究の担当者はシェリーである。予想される規模からして彼女以外の研究者も大勢
携わっているのかもしれないが、少なくとも秋が接触する研究者はシェリーだけだ。

おまけに秘匿された研究のため、検査協力はもっぱら彼女の個室で行われる。頻度は
少なくとも月に一度、多ければ月に数度。

今まではくだらない雑談に費やしていた検査協力中の時間を話のすり合わせに使え

ばいい。

「秋は今まで通り検査協力に赴くだけだ。あの方が認識できる二人の行動に変化は生じない。」

誰にも疑われることなく、密室で好きなだけ作戦会議ができる。

シエリーは秋が言わんとすることをたった一言で察して「なるほど」と呟いた。こちらが説明することなく真意を理解してくれるので話が早く進む。

会話が途切れた一瞬で、秋は窓を一瞥する。窓の外には光を失った空が広がっていた。この時期の日没時間を踏まえると、セーフハウスに到着してから二時間は経っていない。

シエリーが明美を助けろと要求してくるだなんて不測の事態が起きたせいで、予定以上に時間がかかった。そろそろ潮時だろう。

秋は視線を元に戻して提案する。

「元々はシエリーへ協力を打診してすぐ解散するつもりだったから、検査協力は情報提供の時間に充てる予定だったんだよ。時間の巻き戻りというたつた一つの情報だけでもシエリーが受ける衝撃は大きすぎる。一旦時間を置いてから、定期検診で詳しいことを教えてもらう算段だった。」

そんなわけで想定よりシエリーの負担が大きいし、一度時間を置いて次の定期検診で続きの話をしない？」

「いいえ。詳しい協力内容を固めておきたいから、研究のぎつくりとした概要くらいは今日伝えるわ。アドニスとの会話に集中している今は一種の極限状態だから大丈夫だけど、解散してやるのがなくなったら絶対不安に襲われる。その時、取り決めが中途半端なままだったら嫌な想像から逃れられなくなるに決まってるもの」

無意識だろう。シエリーは自分を抱え込むように二の腕を握った。

二の腕を握りしめたまま、それに、と彼女が続ける。これまでの必死で恐怖を押し殺している様子から、声色が少し変わった。

「それに、ループ現象という重要なピースが判明して、何も知らされずにさせられていた研究の全貌が明らかになってきた。予測の再構築をしたくてしたくて堪らないの。これはアドニスへの情報提供義務があるからじゃなくて、純粋な科学者としての興味よ。この作業は人に説明しながらの方がスムーズに進むし、アドニス以外にこんな話をできる相手はいないでしょう」

目が輝いていた。いつもは大人ぶっている彼女だが、研究について語るときは年相応の顔をしているのを思い出した。

研究を強制される環境に生まれ落ちたのも確かだが、研究を楽しんでいたのも確かな

のだろう。

この様子だと一気に話を済ませてしまった方が良さそうだ。

「だったら目的の服が見つからなくてシエリーがごねて、他の着回し用の服も吟味していたら何時間も過ぎたから外で夕食を済ませたことにしようか。このセーフハウスには栄養エネルギーバーかゼリー飲料しかないけどいい？」

「……『外で夕食を済ませた』の部分は実行しましょう。少しの真実があったほうが嘘の精度が増すってよく言うじゃない」

第22話

訪れたのはセーフハウスのすぐ近くに位置する、安くて個室がある洋食店だった。テーブルが並んでいる賑やかな一階を通り抜け、二階の個室へ案内される。

さっさと料理を注文し、盗聴器の類がないのを秋が確認すると、すぐさまシェリーが本題に入った。

「どんな質問に答えるのであれ、まずは前提となる知識を把握していないと話にならないわ。組織が行なっている研究についてどれくらい掴んでる？」

問われて、秋は一瞬言い淀む。

正直なところ、ほとんど情報は持っていない。

シェリーに詳しい話が聞けるようになるまで情報収集を試みたものの、あの方の目を気にして大きな動きはできなかつたし、世間話に見せかけて話を聞き出した幹部は揃いも揃って別々の答えを口にした。

組織の目的は永遠の命だとか、あの方が世界を牛耳ることだとか、我々は神でもあり悪魔でもあるだとか。答えは十人十色だつたし、抽象的な話も多くて全貌を掴むのが困難な場合もあつた。

おそらくあの方が、持ってまわった口調によって意図的に相手の勘違いを引き出しているのだろう。もしくは単純に報連相が出来ていないか。どちらにしろ情報を集めたいこちらにとっては迷惑な話である。

組織が行なっている研究についてどれだけ把握しているのかと問われても「全く知らない」としか答えようがない。

しかし無知を認めるのは時として甚大な苦痛を伴うし、秋は甚大な苦痛を感じる側の人間だった。

やや逡巡してから、かろうじて把握している基礎的な物事をあげつらう。

「……シエリーが中心に据えられたチームが薬を作らされていること。シエリーが勤務している棟の隣に同規模の棟が建てられているため、薬の研究と同じくらい力が入れたプロジェクトがありそうなこと。組織が集めているプログラマーが関わっているかもしれないこと。何より、私が被検者として丁重に扱われている事からループ現象が大きく関わっていると予想できる。それくらいだね。……ほとんど何も知らないよ」

「そう」

決死の覚悟で何も知らないと告白したにも関わらず、シエリーの反応は随分とあっさりしたものだった。秋がどれだけ知っているのかは、彼女にとってその程度のものらしい。

いつの間にかスプーンを握る力が強くなっていった。シエリーが平然と話を続けるのを聞きながら、緩める。

「私たち製薬関係者が集められているアレウス棟と、対をなして建てられているクロノス棟。二つの棟で行われている研究は密接に関わっていて、二つを強固に繋いでいるのはとある粒子よ」

「粒子……」

「アドニスが被検者に抜擢された際に行った詳しい説明では、分かりやすいよう物質と表現したわね」

最後に付け加えられた補足によって、どの周でも語られてどの周でも聞き流していた、シエリーによる被検協力に関する説明事項が蘇る。秋の体内には非常に珍しい物質——粒子が存在しており、その希少性から被検者として丁重に扱われるという話だった。

「その『物質』に関する説明ならどの周でもされてるよ。体に害があるかどうかにか興味がなかったから表面的な説明しかされなくても気に留めなかったし、それ以上知ろうとしなかったけど」

「……ああ、なるほど。『これまでの周』ならともかく、『この周』でなされた研究の説明にも全く興味を示さなかったのに、今日のこの展開だったからどういう風の吹き回しな

のかと疑問に思っていたのよ。アドニスが研究内容について根掘り葉掘り聞いてきた事が、手を組む前の私を通じてあの方に漏れるのを恐れたのね」

彼女の指摘は当たっていた。

今までとは異なる振る舞いを知られて、警戒を強められたら色々と動きづらくなる。かと言つて、シエリーに口裏合わせを頼むのも難しい状況だった。

ループ現象について何かを知っていると仄めかされ、次の周で自分に話を通すために必要な「シエリーは姉にゲノム創薬の専門書を貸している」という暗号を教えられた時に、暗号は十三歳以降のシエリーにしか通じないと言い含められていたためだ。

十三歳以上のシエリーにしか伝わらないのなら、それ以前の彼女に対して暗号を持ち出しても話し合いにならない。

だからこそ、指定されたこの日までは無言を貫いてきた。

「正解。暗号は十三歳以上のシエリーにしか通じないって話だったから」

答えながら頭の片隅で思考する。

暗号はアメリカ留学の際に決めたものだそうなので、今から思えば十三歳未満だとしても「宮野明美が危険」の意味は正しく伝わったはずだ。

だというのにシエリーが十三歳以降を指定したのは、諸星大との交際を止める猶予がある時期の中から、冷静に対処できるよう出来るだけ歳を重ねた状態を選んだだけか。

もしくは組織の研究とループ現象との関連性を思いつけるだけの情報が出揃うのが十三歳以降なのか。

この二つのどちらかだろうし、どちらにしる瑣末な問題だ。

この点の追求は控えることにして、秋は話を進めるために先ほど思いついた仮説を続けざまに口にした。

「もしかして私がループ者だと『前のシエリー』が断定したのは、組織の研究の中核に据えられるその粒子を、私が体内に有していると知っていたからだったり？」

シエリーは微笑みで応える。白衣を着ているときによく見せる、学者然とした冷たい笑みだ。

笑みを湛えたまま、彼女は歌うような調子で流暢に話し始めた。

「ご明察。その粒子は、千九百六十七年にジェラルド・フインバーグ博士の論文によって存在を提唱されたものの科学的証拠がないと否定され、しかしその神秘性から人々を魅了してフィクションの中で生きながらえてきた、とある仮想粒子に準えて、私たち科学者の間でこう呼ばれているわ」

一旦言葉が区切られた。笑みが一層深まり、自信に満ちた口元が弧を描く。前髪の下から覗く双眸が妖しい光を宿す。

シエリーは一呼吸おくと、囁くようにその名を告げた。

「——タキオンってね」

小音とは思えないほど凜とした響きを持つ声が空気を振るわせる。

対して秋は、恐らく、確実に、シエリーの予想外の反応をした。

「？ うん」

シエリーのもったいぶりようからして驚愕にのけぞるべき場面だと理解しながらも、秋は首を傾げることしか出来なかつた。初めて聞く名前だ。タキオンと言われたところで「へえ」としか言いようがない。

こちらの鈍い反応を受けて、シエリーの表情は三段回の変化を遂げた。

初めに目を瞬き、状況を理解すると肩透かしを食らつたような顔をし、最後にジトツとした目つきで睨みつけられた。

彼女はジト目のまま「ったく」と溢してから、不承不承だと言わんばかりの態度で解説を付け加える。

「今となつては予知能力やサイコキネシスと同列に語られる仮想粒子・タキオンは時間を遡行する性質を持つ。だからこそ粒子Xはタキオンと呼ばれているのよ」

「！」

真つ先に思ったのはおおよそ予測通りだ、だった。

次に浮かんできたのは、今のシエリーって渾身のギャグを理解してもらえず自分で解

説する羽目になった人に近い状況だよな、だった。

秋は申し訳なく思つてビーフシチューの付け合わせのパンを恵んでやった。

「ちよつと、嫌いな食べ物押し付けられないでくれる?」

「別にパンのことは好きでも嫌いでもないけど……」

「じゃあ何」

「せつかくキメ顔作つたのに自分で解説する羽目になつて可哀想だなつて」

「……」

シエリーの目つきがより鋭くなった。

いまいち締まらないやり取りが終わると、シエリーは無理やりシリアスな顔を作る。強制的に話を戻す気だ。自分も散々同じことをしてきたので、秋も表情を引き締める。こういうのはお互い様だ。というか、雰囲気をぶち壊しているのは毎回自分な気がしないでもない。

気を取り直すように咳払いを一つして、シエリーが言う。

「タキオンは私たちの研究と密接に関わっているうえ、非常に貴重なものよ。自然界には存在せず、入手経路はたった一つなんだから」

彼女がこれまで語つた内容を総括すると、タキオンとは時間を遡行する性質を持つて

おり、秋の体内に存在する粒子だという話だった。

となれば、彼女が言う入手経路とは自分だ。

「私の体内……」

「ええ、タキオンはあなたの体のそこかしこから検出されるわ。細胞はもちろん、体液関係——つまり血液、涙や汗、唾液などにも含まれていた」

「じゃあ定期的に唾液提供させられてるのって、」

「中に含まれているタキオンが目的よ。最も手軽にタキオンを採取する方法として、唾液提供の形をとっているわ。……時間が巻き戻ってすべての物質が前と同じ状態に戻るだなんておかしな現象が起きたとして、『戻った』時期よりも後に建てられたビルはなくなっているはずよね」

「うん」

「ビルだけじゃない。その時点で生まれていない人は居なくなっていて、逆に『戻った地点』以降に死んだ人は生き返ってる。シナプスにおける伝達効率の変化は起こらなかったことになっているから人々の記憶は消えて、誰も時間が巻き戻ったことに気がつかない。それでも時間を遡行する性質を持つタキオンだけはその場に留まり続けるから、時間が巻き戻る前の状態を維持するのよ。そして、あなたの体内にはタキオンが含まれている。特に脳に多くタキオンが見られ、シナプスとも密接な関係にある。この意味がわ

かる？」

「時間が巻き戻っても元に戻らないタキオンが記憶と結びついているから、私は記憶を継承できる」

秋は静かに答えたが、真に理解したとは到底言えない状態だった。

タキオンと記憶が結びついている事実と、記憶の継承とがイコールで繋がれる時点で意味不明だ。人に説明する事態になったら言葉に詰まるのが目に見えている。

巻き戻る世界の中で変わらないのはタキオンだけであり、タキオンと結びついているループ者のシナプス——記憶も『巻き戻り』の影響を受けず、そこにあり続ける。

穴だらけの認識だろうが、一先ずこれでいいだろう。

「所々理解しきれない部分があったとしても、タキオンが記憶を引き継げる原因であることを把握できていれば問題ないわ。時間の巻き戻りを認識できる人間をあなたに倣ってループ者と呼ぶけど、ループ者とはタキオン保持者だとも言えるわね」

シエリーの説明を聞いていると、判明した一つの事実に触発されて、疑問が次から次へと湧き出てくる。

そのタキオンをなぜ組織は研究しているのか。あの方が研究を行う目的は何なのか。知りたいことは無数にあった。

しかし時間は有限だ。店に滞在できるのは長く見積もって一時間半。「買い物帰りに夕食を摂って帰宅」の名目を取るのだから、それ以上シェリーの帰宅が遅れては話の辻褄が合わなくなる。

限られた時間の中で尋ねるべきことを吟味するべく、秋は思考を巡らせ始めた。

（組織の研究についてさらに突っ込んだことを聞いたとして、前提知識が全くないこの状況で研究内容を聞いても理解できるとは限らない）

かつて、興が乗ったシェリーに専門的な話を滔々とされた事がある。彼女は夢中で語った後「電気信号を解析して記憶をデータ化するだなんて面白い研究もあるのよ」と締めくくっていたが、秋に分かったのは面白いどころか頭痛を誘発する作用しかないことだけだった。組織の研究について詳しく尋ねたら、あれの二の舞になるだろう。

（それに、シェリーだって『前の自分』からの暗号を聞いてやつと、ループ現象の存在を知ったくらいだ。これまで自分がさせられてきた研究と、ループ現象とを組み合わせる考えて、組織の研究が目指すものを予想する行程が必要になる。今聞いたところで考えがまとまっていないだろうな。時間を浪費して終わる）

今日を逃したら次に話せるのは検査協力の日。二週間後だ。

今聞いても明確な答えが返ってきて、緊急性の高い質問から済ませるべきなのは明白だった。

「組織が行っているタキオンの研究の詳細や、さらに詳しいタキオンの説明の要求は控えておくよ。その前に一つ二つ確認しないといけないことがあるからね。まずは一つ目。時間を遡行する性質を持つ粒子・タキオンの存在はどれだけ知られている？ 研究内容の情報規制が徹底されすぎているし、タキオンの存在は組織内部ですら秘匿されていると考えていい？」

秋の質問を受けて、シエリーは納得した様子で「ああ、そういうことね」とこぼした。専門的な知識に明るくない秋でも、タキオンがこれまでの常識をひっくり返す代物であることは分かる。フィクションの中にしか存在しないと思われていた『時間を遡行する物質』が存在し、条件さえ揃えば時間の遡行を可能にする人間がいると露呈したら、『タキオン』を多くの者が求めるだろう。

タキオンが存在するのはループ者の体内だけで、検出も簡単であると広く知られれば、どれだけ大変な事態になるか。タキオンの希少性は身の危険に直結する。

「その点は安心していいわ。研究内容の秘匿性ゆえに、タキオンの存在を知っているのは私を含めたごく一部の研究者とあの方だけで、間違っても組織の外には漏れていないから。もしもタキオンの存在が表沙汰になれば、学会は上を下をの大騒ぎでしょうし」「そりゃあ良かった。第二、第三の悪の組織につけ狙われるのは避けたいからね。ただ、この組織でしか研究が成されていない割には判明している事柄が多そうなのが気にな

るけど」

シエリーが話した内容は、元々頭に入っていた研究概要やデータを元にして、ループ現象の存在を前提に構築したものだ。

彼女の類稀なる頭脳はもちろんだが、下地となる研究データも膨大なのだろう。

研究データが多い理由には想像がついている。もしも想像が正しければ、この話題は次の確認事項への布石になる。

「……タキオンについて判明している事柄が多いのは事実よ。文字通り判明していたの。初めから」

「とどうと?」

「私が研究に加わった時点で、不自然なほどに膨大な研究データが揃っていたのよ。今から思えば妙だったわ。タキオンの研究が本格的に始まったのはせいぜい十数年前なのに、それにしても判明している事実が多過ぎた。まるで現代の設備・環境で三百年以上研究がなされていたかのようにね」

実際に流れた時間と釣り合わない結果。

ループ現象を合わせて考えれば、答えはすぐさま思い浮かぶ。

「この十五年間のループの間に何度も繰り返し返されてきた『周』を使って研究が進められている」

秋は断言口調で言った。

シエリーも肯定の意を示す。

「でしようね。組織の中心に近い何者かが、前の周で判明した事実を研究員たちに流して『一周前』で解明された以上の成果を出すよう誘導している。それが繰り返されれば研究はどんどんと進む。おまけに研究員たちはデータ量を多少不思議に思ったとしても詮索しない。詮索の先に待っているのは死なんだから、誰もが納得したふりをして思考を止めるはずよ」

予想通りだった。

あの方は、『以前の周』のデータを一部の優秀な研究者たちが閲覧出来る状況を作ることで、『周』を重ねることにより進んだ研究が成される仕組みを構築している。

シエリーもその「優秀な研究者」の中に含まれており、『以前の周』のデータを閲覧できる立場にいる。

「分かりやすく具体例を挙げるなら、四週目前後の私の目には、タキオンに関する研究が『半世紀前から進められていた極秘プロジェクト』に映るわけね。組織に溜め込まれた研究成果が五十年分だから、ループ現象の存在を知らなければ、五十年前から研究が始まっていると誤解する」

「ああ、そうなるね、うん」

秋は気もそぞろな返事をした。

シエリーを通じて以前の週の研究データを確認できるのなら、萩原が誘拐された周に何が起きたのかを知ることができる。

これまでは悉くあの方に先回りされてきたが、今になってやつと運が味方してきたように感じる。無意識のうちに唇がゆるい弧を描く。

「ともかく、実験Aの結果はこうだったとか、事実Bが既に判明しているなんていう記録が残っているのなら、そこから『昔』の出来事を辿れるわけだね」

「知りたいことが？」

秋はいよいよ本題に入ろうとしていた。

コーヒークップを回す。冷めたコーヒートの水面が揺れる。

特に意味のない行動だった。気がすむとカップをテーブルに戻して足を組み替える。

「二つ前の周で組織に誘拐された、後天的にループ能力を手に入れた人物がいてね。シエリーの話によると、後天的にタキオン保持者になったってことなのかな。名前は萩原研二。私とは友人関係にあった。」

研究員にループ現象の存在を秘匿している以上、何周目の記録かまでは載っていないはずだし、資料に名前までは記載されていないかもしれないけど、後天的にループ能力を得た人物に関係がありそうな資料を当たれば何か出てくるはずだ。彼が誘拐された

目的、彼の身に何が起こったのかを知りたい。まあ、誘拐の目的は十中八九研究のためだろうけど」

「……その人は一般人なのよね」

「そう。しかもあの方に邪魔されなければ警察官になっていた善人だよ」

「ここぞとばかりに付け加えたら、狙い通りシエリーの瞳が揺れた。姉の影響なのか、彼女はこういった話に弱い。」

これで「アドニススの裏切り防止のために、最も価値が高そうな萩原研二の情報を教えるのは最後にしよう」と考えはしないだろう。

「彼の身に何が起こったのかと言ったわね。組織に誘拐された後何をされたのか知りたいう意味？ ……それともその人に異変が起こったの？」

言いにくそうに目をうるうるさせてから、シエリーは最後の言葉を付け加える。

勘がいいことだ。秋は明るい響きを心がけて、「大正解」と笑った。

「——この週の萩原は、ループ中の一切の記憶を失っていた」

「……」

時間が巻き戻った直後、あの方をどう往なすかを思いつくよりも先に会いに行つて、萩原を一目見た瞬間、すぐさま異変に気がついた。彼があまりにも普通に過ごしていた

ためだ。

組織に誘拐された十五年間を過ごして、一時的にでも過去に逃げてきた人の態度ではなかった。あそこにいたのは普通の十五歳の少年だった。

悲痛に顔を歪めるシェリーを見て、本心からの言葉を付け加える。

「別に悪いことじゃないんだよ。むしろ喜ぶべき変化でもある。組織に誘拐された『前回』の記憶もなくしているなら、『知られている』という理由であの方に狙われることはないんだから」

「……それを確認してアドニスはどうしたの?」

「その後、あの方が萩原に手出ししないかをしばらく見張っていた。萩原がどうして記憶を失っているのか、なぜあの方は萩原を放置したのか。シェリーから指定された情報提供の日まで十年待たないといけないあの状況では、全てが深い霧の中に包まれていたからね」

今から思えば馬鹿らしい妄想だが、萩原が放置されているのも、彼が記憶を失っているのも、より凶悪なあの方の計画の前振りかもしれないと当時は考えていた。

だからこそ、最終的に「警戒の意味なし」の結論が出るまで注意深く見張りをしていたわけだ。

「結局、あの方は何か企んでいるどころか、萩原に監視すらつけない杜撰ぶりだったよ。

どうやら何かしらの理由で萩原はループ者ではなくなり、彼がループ者でなくなったからこそ興味をなくしたらしいと判断して撤退した。萩原の周りをうろちよろしすぎるのと、あの方が偽装した萩原消失の真相を見抜いていると向こうに知られるリスクが高まるし」

それらしく語ってみたが、ここら辺の事情は憶測を多分に含んでいる。事実が確定するのは、『萩原誘拐が起きた周の研究データ』から読み解ける事情をシエリーに教えてもらった後になるだろう。

その後、秋は以降の顛末を掻い摘んで説明した。

状況証拠によりほとんど警戒を解いているとはいえ、シエリーと接触して真実が確定するまでは、依頼人を特定できない形で人を使って彼の無事を確認している。今では元気に警察官をやっているはずだ。等々。

話し終わると、シエリーが悲痛な面持ちをしていることに気づいた。彼女に恐々と尋ねられる。

「接触は？」

「一度も。せつかくあの方が興味を失っているのに、わざわざ狙われる原因を新しく作る意味がない」

シエリーはしばらく答えなかった。

店内の小さなBGMがはつきりと聞き取れるだけの沈黙が訪れる。数秒だったのだろうか、秋には数分に感じられた。

結局長い沈黙の後に返ってきたのは、「そう」という相槌のみだった。

彼女は一度何かかける言葉を探す素振りを見せたが、結局言葉が見つからなかったらしく、事実を淡々と告げるだけに留める。

『前回』、彼が非合法な実験を受けていたときの記録は残っている可能性が高いわ。何も知らない人間がそうだと理解できる形では保管されていないけれど、ループ現象を知っている私が見れば彼のデータかどうか見分けられるはずよ。そのデータが見つければ彼の身に何が起きたのかも判明するし、次の定期検査までには答えを用意しておく」

「お願い。……もうそろそろ潮時だね」

個室の壁にかかった時計を尻目に、言葉を付け加える。時刻は十九時を回っていた。

二人がこうして話せているのは、シエリーの服を新調するための買い物の名目で外出したからだだった。当初の想定よりも話が長引いたので、「シエリーが拘って店を梯子したところ夜になってしまったのでついでに夕食も済ませてきた」という設定を用いる予

定でいる。

これ以上店に滞在しては、この設定が通用する帰宅時間に間に合わない。

他の情報は、検査協力の時間を使っておいおい聞き出していく形になるだろう。

秋はレシートを手にして立ち上がった。

「出ようか。責任を持って自宅まで送るよ」

* * *

車の窓から見える外は真っ暗で、街並みは闇に塗りつぶされている。見えるのは灯りの残像のみ。電灯の光や住宅から漏れ出た光が、形を結ぶことなく流れていく。

二人が乗っているのは国産車だ。組織の人間にしては珍しく、秋は国産車を利用してゐる。それも大量生産されているなんの変哲もない自家用車。犯罪者たるもの、こだわりのないのなら市街に紛れ込みやすい大量生産品を使うに限る。

普段はあえて目立つ車に乗ることで、一般的な車種に乗り換えた時に意表を突きやすくする方法もあるが、それはそれで面倒だ。

助手席のシェリーが口を開いたのは、彼女の自宅へ向かい始めて二、三分が過ぎた頃だった。

「そういうえば話し合いだけど、検査協力ではなく私の自室で行ったら駄目なの？ 組織が用意した場所とはいえ、ごく普通のマンションよ。アドニスはその場所を知っているし、ベルモット級の変装技術を持っているのなら監視カメラを誤魔化す方法はいくらでもあるわ。宅配業者に変装するとか、色々」

「流石に頻度が多すぎる」

秋は車を走らせながら否定した。

「話し合う内容が入り組んでいて壮大な以上、初期は一ヶ月に数回ペースで話す機会を設けたい。そのペースで不審な宅配業者がシエリーのマンションを訪れているのは怪しすぎるでしょ。なんらかの疑念を持ったあの方がシエリーの周辺を調べたらすぐに目をつけられる。おまけに、ループ者であるあの方は私がベルモットに変装を教えるもらった周のことも覚えているんだから、不審な宅配業者と私とがすぐに結びついてしまう。シエリーの家に行く案は、検査協力を隠れ蓑にする方法が使えなかった時に改めて検討するよ」

「使えなかった時って？」

「例えばシエリーの個室が監視されていた場合とか」

「はあ!？」

被検者に抜擢された直後の説明時に、『これまでの周』と同じように興味がなさそうな

演技をしたのは、これも理由の一つだった。

協力体制を築く前のシエリーから秋が研究内容に興味を示していたと報告が上がる恐れと合わせて、部屋が直接監視されている恐れまであったのだから、興味がなさそうな演技もする。

「とは言っても、完全に否定する証拠がないってだけで可能性は低いけどね。監視されていた場合のリスクが高すぎるから話し合いをする前にチェックするけど、ほぼほぼ監視されていないと考えて問題ないよ。やるならもつと前の周で散々調べ尽くしているはずだから」

タイムミングよく赤信号に捕まったので、秋はズボンのポケットから煙草の箱を取り出して、掲げて見せた。

「そして、監視されているかどうかを調べるためにこれを使う」

「煙草を？」

口で答える前にシエリーへ箱を渡す。

箱を片手で受け取った彼女は、ずっしりとした重みに目を大きくした。

「やけに重いわね」

「煙草の代わりに探知器が入ってるからね。……シエリーの個室が監視されているとしたら、盗聴されているかカメラが仕掛けられているか、あるいはその両方か。だからこ

の、盗聴器や隠しカメラが発する電波を察知して隠し場所を特定する探知機が入った箱を部屋に置いておけばいい。この探知機には室内の電波送信の履歴をオンライン上で確認できる機能がついてるから、次の検査協力までに不審な電波の有無をチェックできる」

「なるほど。今日の外出の際にアドニス私の鞆に紛れ込んでしまったから、返すのを忘れないよう研究室に置いておけばいいわけね」

「そういうこと。もしもシエリーの個室が監視されているのなら、使われているのはリアルタイムでデータを閲覧できる無線式の盗聴器やカメラの確率が極めて高い。そして無線型の盗聴器や隠しカメラは、電波を飛ばしてデータを転送する仕組みになっている。電波を感知する探知機で探し出せるんだよ」

「使われているのが無線式じゃなかったら？」

「据え置きタイプだね。データを送信しないから探知機で発見されない代わりに、録音・録画したデータを回収する必要があるやつ。あの方が探知機を警戒する理由がないし、リアルタイムの確認が不可能なのは使い勝手が悪いし、何より途方もなく面倒くさい。研究室のセキュリティを書き換えてまで部屋に侵入して、盗聴器やカメラを定期的に回収しないといけないんだから。」

もちろん完全に否定する証拠がない以上可能性はゼロではないし、念には念を入れて

確認するけどね。探知機で探せないからこっちは手動で」

「私たちの様子をリアルタイムで確認できる盗聴器や隠しカメラがあった場合、電波で判別が可能だから事前に把握できる。電波を発さないため手動で探さなくてはならない据え置きタイプが使われていた場合は、盗聴器やカメラを探している様子が記録されるけど、あの方が確認する前にデータを壊すことが可能、と。ただし盗聴器やカメラが軒並み壊されていたら絶対怪しまれるわね」

「確かに。場合によつては音声や映像をそのまま残せるように一芝居打つ？」

「そうしましょう。当日までに口実を考えておくから、話を振つたら適当に合わせて」
「オーケー」

話題に決着がついた。沈黙が訪れる。静寂のあまり、ザアと空気の音がする。

シエリーは緩慢な動きで窓縁に肘をかけて頬杖をついた。暗闇ばかりが続く窓の外を熱心に眺めているふりをしているのが視界の端で確認できる。彼女は視線を闇に固定したまま小さく呟いた。

「……ねえ、本当に未来を変えられると思う？」

蚊の鳴くような声だった。

表情は確認できない。

顔を背けたまま彼女は続ける。

「将来起こる出来事は決定していて、自分たちに介在する余地がないんじゃないかなんて心配はしていないわ。私たちがこうして手を組んだ事実が、未来を改変できる確固たる証拠だもの。私が心配しているのは、本当にあの方を欺けるのか」

秋は咄嗟に左上を一瞥した。

人が左上——相手から見ると右上——を見る時は嘘をついているだなんて俗説があるが、これは人が想像力を働かせるときに自然と左上を見てしまう事に由来しているらしい。何かを問われて想像力を働かせるイコール嘘を考えているという理論だ。

しかし秋が咄嗟に左上を一瞥したのは、想像力を働かせるためではあつたが、想像力を働かせて嘘を考えるためではなかった。

シエリーの心理を想像し、どのような言葉をかけるべきかを考えたにすぎない。

シエリーには組織——ひいてはあの方への恐怖心が刻み込まれている。計画の緻密さを説いたところで無意味だろう。そもそも現段階では不明瞭な点が多すぎるのだから、計画の緻密さもクソもない。

結局考えるのが面倒になって、第一声はいつもの自画自賛にしておいた。

秋はわざと明るい調子で言う。

「大丈夫だよ。存在そのものが規格外である私がついてるんだから。ほら、美貌とか」

「言動が規格外の間違いじゃなくて？」

「天才性が漏れちゃってたかな……」

「どうやら理解能力も規格外のようなね。悪い意味で」

ポンポンと言葉が交わされる。いつもの空気感に戻ってきた。

『この周』で検査協力のために定期的に顔を合わせる様になってからしばらく経つが、検査協力中の雑談ではこのようなやり取りが常だ。秋がボケるとシエリーが突っ込む。結構辛辣な物言いをされるせいで、「シエリーって私のことちよつと舐めてるんじゃないかな」と感じる事がままある。

どの周だろうと、彼女との関係性はこんな感じだった。ベルツリー急行でシエリーがあの行動に出たのも、「アドニスなら騙せそうだ」と思われたせいな気がしなくもない。今回の応酬はシエリーの辛辣なツツコミで終わった。

雰囲気や普段通りに戻すのが目的だったのだから反論は不要だ。

反論をして、伝説の宝刀「でも一回り以上年下の私に嵌められたじゃない」を抜かれるのを恐れたのもある。

車を走らせながら、秋は話を掘り返した。

「本当にあの方を欺いて未来を変えられるのかだったね。仮に、あの方にこちらの計画

が露呈して失敗するリスクが一定以上あるとして、宮野明美を助けるのを諦める？ 何もせずにじっと蹲ってる？」

「……………いいえ」

「じゃああれこれ考えても仕方がない。思いつく限りの対策を念入りに取ったら、失敗してからの事なんか考えなくていい。考えるのは本来にあの方の方にバレてからにしよう」
為さねばならないのだから失敗した場合など考えても仕方がない。失敗のリスクを極力取り除くのと、それでも僅かに残ったリスクを承知で一步踏み出すのは別の話だ。

「……………そうね」

シエリーは長い沈黙の後に同意を示した。

それ以降、彼女が不安を口にすることはなかった。

沈黙の中、低いエンジン音だけが響いていた。

第23話（1）

秋は薄暗い廊下を早足で進んでいた。足音に合わせてリノリウムの床が鳴る。グラデーシヨンのように歩いたところにライトが当たり、後ろのライトが消えていく。

しばらく歩くと、廊下の最奥に位置する無機質なデザインの扉に着いた。二回ノックして、解錠を待つ間に首から下げている入館証明書を外す。邪魔になるのでポケットに押し込む。

ややあつて扉が開いた。扉を開けたシエリーの顔は青白く、目の下には薄い隈が浮かんでいる。姉の死やら時間の巻き戻りやらを知ってから二週間。未来を知った当日はある種の興奮状態だったため深く考えずに済んだが、二週間もあれば実感が湧いてくる。悪い想像に苛まれてきたのだろう。

秋はご機嫌取りも兼ねて小さな紙袋を差し出した。

「はいこれ。会員制のバーで貰ったお土産。いらさないからあげる」

「有名ブランドのクッキーじゃない。どうしたのよこれ」

受け取った紙袋の中身を確認してシエリーが目を瞬く。

秋は慣れた態度で、シエリー個人に与えられた個室であり、検査協力を行う場所でも

ある部屋に入り、壁端に置かれた椅子を持ち上げながら答えた。

「会員制の高級バーって帰りにお土産くれたりするんだよ。これは任務でたまに使う高級バーのやつ」

「へえ。それじゃありがたいがたく頂くわ」

椅子を普段の定位置——シエリーのデスク横に移動させながら考える。

シエリーの機嫌はできるだけとっておいた方がいい。

明美を助ける代わりに情報を教えてもらう約束を交わしているが、全ての情報を教えてもらえたか確認する術はない。「知っている情報を全て教える」という取り決めは彼女の良心によつて成り立っている。一部の情報を除いた状態で、これが知っている全てだと主張されたらそれまでだ。

そもそも、多大なストレスのせいで精神を病まれてもしたら計画が頓挫してしまう。随時フォローはするべきだろう。

「そう言えば買い物に同行した時、シエリーの鞆に煙草が紛れこんじゃったみたいなんだけど知らない？」

「渡し忘れないよう部屋に置いてあるわ」

シエリーはデスクに紙袋を置き、その流れで隣に置いてあつた箱を手を取った。差し

出された煙草箱を受け取る。ずっしりと重い。

「アドニスも吸うのね」

「好き好んでつてわけじゃないけど何かと便利だからね。喫煙所で手に入る情報は馬鹿にならないし、箱に何かを隠すこともできる。情報媒体や少量の麻薬なんかの受け渡しでは結構役立つよ」

例えば忘れた煙草に探知機を隠すなんて使い方もある。

探知機とは、盗聴器や隠しカメラが発する電波を感じて隠し場所を特定する機器だ。前回、シエリーと別れる際に探知機を隠した煙草の箱を渡し、「今度の定期検査のとき忘れず返せるように」という名目で個室に置いておくよう指示した。

もしもシエリーの個室が監視されているのなら、使われているのはリアルタイムでデータを閲覧できる無線式の盗聴器やカメラの確率が高い。そして無線型の盗聴器や隠しカメラは、電波を飛ばしてデータを転送する仕組みになっている。よって電波を感じする探知機で探し出せる。

個室に探知機が置かれていたのは二週間。使用した探知機は、室内の電波送信履歴全てをオンライン上で確認できる物だ。そのためこの二週間の送信履歴はもれなく把握済みだが、不審な電波は見られなかった。

無線型の盗聴器および隠しカメラは仕掛けられていないということになる。

こうしてシエリーの個室を調べているのは密談に使えるか確認するためだ。

密談で話すべきことは山ほどある。明美死亡回避に伴う相談。シエリーが把握している研究内容の詳細。それらを元にした、ループの謎やあの方の目的の予測。ループについて判明している事実を洗い出して行う推論。

これらの作業をこなすには、あの方の目を誤魔化しながら連絡を密に取らなくてはならない。扱う情報量が多いため対面形式が望ましい。

しかし連絡を密に取り合うと言っても電話は盗聴されやすく、新たに作戦会議の時間を設けるのも躊躇われた。探られて痛い腹があるのに今までの周と異なる行動を取るのには避けたい。

(厳しい条件だけど、私の天才的な頭脳は最適解を弾き出したわけだ)

秋は回想に浸りながら口元に弧をたたえた。要するに一人でほくそ笑んだ。スマホをいじっていたシエリーがジト目で見てきたが、秋は気にせず回想に浸り続ける。

(目をつけたのは一定の間隔で行われる検査協力。研究の秘匿性によつて検査協力は大つぴらに行われておらず、大きな機材を使うとき以外は担当者であるシエリーに与えられた個室で実施される)

シエリーの個室、つまりこの部屋は専用のカードとパスワード、極め付けにはシエ

リー本人の手のひらの静脈認証によって保護されており、部屋を開けられるのはシェリーだけだ。さらに検査協力はシェリーと二人きりで行われる。

「鍵」が室内にいるのもあって、密談に最適な機会だと言えた。

ただし監視ツールが設置されていたら、いくらセキュリティが万全でも話が筒抜けになつてしまう。

だから事前に盗聴器や監視カメラが仕掛けられていないかを確認する必要があった。あらかじめ設置しておいた探知機によって、電波を発する盗聴器やカメラの類がないのは確定している。

しかし電波を発さない有線型の機種も存在する。これらは録音・録画のみを行いデータを転送しない機器なので、データを確認したければ後日、本体ごと回収する必要がある。

リアルタイムで確認できない上にセキュリティを書き換えてまで部屋に侵入しなくてはならない面倒さから使用を避けるはずだが、念には念を入れて疑いを完全に潰しておきたい。

秋はシェリーに目配せした。

合図を受け取ったシェリーは、スマホを置いて呆れ声で言う。

「さっき何ニヤついていたのよ」

「悪意のある表現だな。世界を浄化するが如き微笑みをたたえていたと言ってほしいね」

「世界に不幸を振りまいてる犯罪組織の幹部が？ 盛大なマッチポンプじゃない」

呆れたように細められた目が、ふいに部屋の隅へと向いた。シエリーは動く影を捉えたかのように、目を素早く左右に動かす。

「何かいるわ!」

「え?」

「大きめの虫……もしかしたらゴキブリかも」

言いながら、シエリーはサツと秋の後ろに回ってこちらを盾にした。

背中裏に陣取りながら、後ろ手で引き出しから殺虫剤を取り出したのが横目で確認できる。シエリーは引き出しを閉めると、殺虫剤をこちらの手のひらに押し付けてきた。ゴキブリ退治のふりをして盗聴器やカメラを探させる筋書きらしい。

秋は思わず目を瞬いてしまった。大掃除のごとく部屋をひっくり返して隅から隅まで調べる名目を適当に用意して欲しいと頼んだだけなので、このような方向で来るとは予想外だった。

搜索の名目がある程度事前に固めておくべきだったと少々後悔する。ぶつつけ本番の演技は少しだけ苦手だ。

秋は自身の演技力に一抔の不安を覚えつつ返す。

「あー、虫ね。分かった分かった任せなさい」

ちよつと棒読みになつてしまつた。秋は内心で冷や汗をかく。

自然な演技をしたいのなら、演じたい状況に極力近い感情を想起させ、心のままに振る舞うのが定石だとされている。恐怖心や罪悪感、自己嫌悪を見ないようにしてきたせいで、自分の感情に鈍感なきらいがある秋とは相性が悪い。

もちろん腹の探り合い、騙し合い、裏切りが横行している裏社会で生きている以上対策は取つていた。演技の機会が訪れると事前に分かつていれば、必要とされる演技の予測と大量のインプットによる猿真似でどうにかなる。演技に精通しているベルモット相手では怪しいものの、他幹部には通じるクオリティを保っているはずだ。

しかし裏を返せば、事前準備がなければ太刀打ちできないとも言える。

(まあいいか。盗聴器がある確率は低いし、多少棒読みでも虫にビビっていると解釈されるはず。……それはそれで嫌だな)

秋は全く怖くないアピールをしようかと一瞬迷つたが、負け惜しみにしか聞こえないと気付いて辞めた。

仕方なさそうな顔を作つてシェリーが指した部屋の隅に屈む。盗聴器が仕掛けられ

やすいコンセンツトの近くだ。

虫を探すふりをして柵をどかしながらチェックする。それらしいものはない。奥へ、奥へと搜索の手を広げる。

椅子に腰掛ける物音がした後、シエリーが言った。

「お姉ちゃんから連絡があつたわ。恋人に会つてほしいんですつて」

時間は有限だ。雑談に見せかけて進められる話題を先に済ませておくつもりらしい。雑談に見せかけていれば、盗聴されていたとしても、必要に応じて音源を残す選択も取れる。

(そして、その話題が赤井秀一との顔合わせ対策か。今の時期は諸星大だっけ)

未来を知ってしまったシエリーがこれまでの周と同じように振る舞えるよう都度指示すると、二週間前に伝えてあつた。

未来を知ってしまったシエリーの行動に他の周との差異が出て、それにあの方が注目し、こちらの目論見が全て露呈する最悪の事態を防ぐためだ。

直近で起こりうる、これまでの自分とは異なる行動をしそうであり、あの方が注目するであろう事柄は何かと彼女なりに考えて、諸星大との顔合わせだと結論を出したのだろうか。

その判断は正しい。秋が最も懸念しているのもこれだ。

そもそも、シエリーの行動を変えないよう都度指示すると伝えたのは、諸星大対策だった。

将来姉が殺される原因の一端が諸星だとシエリーが知ったなら、「そんな奴とは会いたくない」とゴネる可能性がある。そしたら諸星大が組織に入るルートが変わってしまう。

諸星は明美と交際することでシエリーと面識を持ち、シエリーの近くにいた組織の人間に取り入って組織に入るのが常だった。

この展開が崩れたらあの方に目をつけられる恐れが高い。あの方は能力の高い人物を警戒しているが、どの周でも組織壊滅の立役者を果たす赤井秀一への警戒はひとしお一入だろ

う。

二周目以降は、組織壊滅の未来を知っているあの方が黙認しているために組織の瓦解がなされているとは言え、一周目はあの方の意表を突いて組織壊滅が為されたはずだ。

あの方にとって赤井秀一とは、ループ現象さえなければ自分を討ち滅ぼしていた天敵である。

その赤井秀一が、この周だけ組織に入る手段を変えていたらあの方は怪しむ。怪しんで、シエリーが諸星と会おうとしなかったから潜入方法が変わったのだといずれ気がつく。そうなれば、なぜシエリーはこの周のみ諸星に会おうとしなかったのかと考えるだ

ろう。こうなったら秋の暗躍に思い至るまで秒読みだ。

かと言って、この事情を懇切丁寧に説明して、「こういうわけだから諸星大と会って、シエリーの周囲の人間と諸星が接触する機会が生まれるだけの交友を築いてほしい」と頼めるわけではない。もしもシエリーが諸星に怒り心頭だったら、彼女の感想は「ふざけんなよ」になる。

事情が事情なので最終的には折れてくれるだろうが、シエリーの機嫌を極力とつておく方針は早々に瓦解する。

だからこそ、フォローが必要そうだったらやんわり軌道修正をするために、「未来を知ってしまったシエリーがこれまでの周と同じように振る舞えるよう都度指示する」とだけ事前に伝えておいたのだ。

実際は「都度」という程の頻度ではなく、諸星の件がクリアされれば指示はほぼ必要なくなる。

雑談にカモフラージュ可能な話題を先に済ませるべく、口火を切ったシエリーに対して、秋は軽く尋ね返した。

「へえ、会うの?」

「断れないわよ」

予想よりもシエリーの声色に棘がなくて、秋は目を丸くする。

「てつきり悪感情があるかと思つてた。大好きな姉を奪われたわけだからさ」

「そりゃあ気に食わないのも確かよ。出会いからして怪しいもの」

彼女の表情が気になつて振り向くと、シエリーは姉から聞いた出会いを思い出しているのか不服そうな顔をしていた。でもそれだけだ。

秋は困惑を抱えながら、肯定とも否定とも取れない相槌を打つ。

この場では曖昧な反応が正解だと秋は身に染みて知つていた。

どの周だろうと、この時期に行われる定期検査で振られる話題がもつぱら諸星大の愚痴だつたせいで、秋は明美と諸星との間に起こる出来事を熟知していた。それと同時に、下手に同調しようものなら「お姉ちゃんが選んだ人に文句つけてるんじゃないわよ」と難癖をつけられるのも知つている。

曖昧な反応でお茶を濁すのが無難だ。

ここら一带は調べ終わった。監視ツールは見当たらないので、秋は虫を探している演技を続行する。

「ここちにはいなさそうだけど。虫なんて本当にいるの？」

「他の場所に移動したのかもしれないわ。薬品棚の下を通じて向こうに行つたとか」

「はいはい」

腰を上げてシエリーが指さした方へと移動する。機材がごちゃごちゃと置かれており、何かを隠すのに向いた場所だ。

「見つかるまで徹底的に探してもらおうよ。でないと安心してコーヒーも飲めないじゃない」

「あのー……、手伝ってくれたりは」

「イ・ヤ」

これで部屋をひっくり返す勢いで調べても怪しまれない土俵と、偽装された盗聴器やカメラを見分けられないシエリーが参戦しない理由づけが整った。

秋は仕方なさそうな表情を浮かべてから先程の会話に戻る。

「まあ、想像より姉の恋人を嫌ってないようで安心したよ。ギスギスしないのは良いことだし」

宮野明美が殺される原因が諸星だと知ったせいで彼への当たりが強くなり、他の周の出来事をなぞる過程で大きな支障が生じるのを懸念していたが、この様子なら大丈夫そうだとだ。

秋は右上を一瞥して、シエリーの心境を推測した。

(諸星のせいで姉が死ぬってより、自分が組織にとって重要な科学者なせいでFBIが

明美に目をつけ、その結果姉が死ぬと捉えてるのか)

自分が要因の一つとなったせいでも取り返しのつかないことが起きたと知った人間は、往々にして自罰的な思考になる。自己嫌悪に陥っている時は、客観的な視点を保つよりも自分の中に責任を見出す方が楽だからだ。

秋は盗聴器やカメラを探す手を進めながら、思考を気取らせない何気ない調子で問いかけた。

「でさあ、姉の恋人と会ったらシエリーはどうするの?」

「私が口出しできることじゃないもの。流石に別れるよう迫ったりはしないわ」

「……自分のせいで組織に縛り付けられてしまった姉の人生に口出しする資格はないって言いたげな声色だけど、シエリーがいなかったら両親が死んだ時点で明美は殺されたよ」

「エアコン! エアコンの方で何かよぎったわ!」

(誤魔化したな)

「カバーも外して確認して頂戴」

「んな無茶苦茶な」

しかし丁度ここら一带は調べ終わった後だったため、タイミングが良かったのも確か

だった。最後にエアコンを調べたいと思っていたので渡りに船だ。エアコンには隠しカメラが仕掛けられやすい。

秋は言われるがままエアコンに向かった。

ライトでエアコンの中を照らす。カメラがあればレンズに光が反射する場合があるが、反射光は現れない。

カバーを外すと埃が舞った。フィルターは一面埃で覆われている。端的に言っても汚い。

秋は自分の椅子に腰掛けて高みの見物を決め込んでいるシエリーに言った。

「さては掃除サボってるでしょ」

「……忙しいのよ」

「ついでに今洗う？　じっと待ってるのも暇だろうし」

「姉の恋人である諸星大に会ったらどうするかだったわね」

「洗いたくない、と。言っとくけど日を改めたとしても私は手伝わないからね」

自分で洗うか、コードネーム持ちの権力をチラつかせてそこら辺の構成員に頼むかしてほしい。

シエリーは秋の言葉を無視して話を進める態度を貫いた。

「諸星にはお姉ちゃんを守って欲しいと頭を下げるつもりよ。他にお姉ちゃんを気にか

けてくれる人に心当たりがないもの」

思わず振り返って彼女の顔を見る。彼女は複雑な感情が入り混じった表情で一点を見つめていた。

以前の周でシエリーは諸星を嫌っていたか。そう問われたなら秋は否定するだろう。確かに経歴の怪しさには苦言を呈していたし、彼が組織に入った後は苦言がより顕著になった。具体的に言うくと、大切な姉が怪しさ満載の男と交際しているのを心配して、検査協力中に交わされる雑談の半分が諸星の愚痴になった。それこそ、話半分で聞いているだけで、諸星と明美との間にあった出来事を秋が暗記してしまうほどに。

しかし彼の話をする時の声色にそこまで棘がなかったのも事実だ。シエリーは諸星大を嫌ってはいなかった。

それはきつと姉を守ってくれそうな唯一の人だからで、会ってみたら嫌いにはなれない人格をしていたからかもしれない。

盗聴器もカメラも無いのを確認したので、秋はエアコンのカバーを付け直そうとした。不器用なせいで失敗が重なる。

エアコンカバーと格闘しながら、彼女は軽い調子で尋ねた。

「私は？ 宮野明美を助けてくれる人候補には入ってないの？」

「理由もなくどうでもいい相手を助けられないでしょう」

「まあね。下手な親切心を出して肅清対象になっても困る」

カバーの付け直しに失敗する度、ガコツ、ガコツと音が鳴る。手を動かしながら、秋は過去を思い返した。

ベルツリー急行でシエリーは、なぜ姉を助けてくれなかったのかと訴えてきた。正確に表現すると秋が対面した相手はシエリーに扮したキッドだったが、イヤホン越しに話す内容を本人から指示されていたそうなので言葉はシエリーのものだ。

シエリーはなぜ姉を助けてくれなかったのかと問うた。しかし秋が姉を助けてくれるわけがないと、つい今しがた断定した。

ということとは、

「やっぱりあの発言、私を揺さぶって作戦成功率を上げるためだったなこの野郎……！」
少々声に力を込めたのと同時に、カバーの取り付けが成功した。おそろおそろ手を離しカバーが落ちてこないのを確認してから、怪訝な顔をしたシエリーに体ごと向き直る。

「なんの話……？」

「別に」

秋は一言で誤魔化した。自分が嵌められた時の話は蒸し返したくない。

「ともかく、これで捜索は終わったよ。盗聴器やカメラが隠されてような場所は全部探したけど何もなかった。あの方がこの検査協力の時間を警戒していたとしても、これまでの周で散々調べてシロの結論を出しているだろうし、まあ予想通りだね」

肩をすくめて言う。そもそも、十周目になってまで監視を続けている可能性は元々低かった。

これで室内に監視の目がないことが確定した。シェリーの個室は完全な密室だ。ループのことだろうが明美を助ける計画だろうが心置きなく話せる。

「諸星大との顔合わせはさっきの話通りでいいと思うよ。明言したわけじゃないけど、『前』のシェリーの反応を思い返すと諸星に姉のことを頼んでいそうだったし。時間もないし次の話題に移ろうか」

次の話題。後天的ループ者——萩原研二に何が起こったのかについて。

第23話(2)

「諸星大との顔合わせはさっきの話通りでいいと思うよ。明言したわけじゃないけど、『前』のシエリーの反応を思い返すと、諸星に姉のことを頼んでいそうだったし。時間も無いし次の話題に移ろうか」

次の話題。後天的ループ者——萩原研二に何が起こったのかについて。

と行きたいところだが、その前に確認しておきたいことがあった。シエリーの顔色の悪さだ。部屋に招き入れられた時から気になっていたが、彼女は青白い顔をしていて隈までこさえている。

「調子が悪そうだけど心配事でも?」

「そりゃあね。条件の複雑性によつて私たちが手を組むのは予想外でしょうけど、どこからバレルのか分からないもの。組織の構成員の目がある時は常に気を張っているわ」

シエリーが憔悴しきった顔で答える。

秋は電子ケトルが置かれた棚に向かつて歩きながら言った。

「ループの存在を知っている組織の人間に怪しい動きを見咎められて、芋づる式に私たちの計画が露呈するのを恐れている、と」

「ええ」

「ループの存在を知っているのはあの方だけだから大丈夫だよ。この部屋に盗聴器やカメラの類がないことから、組織の誰かに命じて私を監視する期間もとうに過ぎていると予想される。警戒するのはあの方だけでいいし、あの方自身も普段は姿を表さないからそこまで気を張る必要もない」

確かに、真つ先に警戒するべきはループの存在を知っているあの方の腹心である。しかし、これまで見聞きした情報はそのような腹心が存在しないことを示していた。警戒は不要だ。

結論だけを先に伝えてから、秋がケトルを持ち上げると確かな重みがあった。注ぎ口を確認すると湯気が出ている。すでにお湯が沸いているようだ。

振り向いてシェリーを確認すると、彼女は「沸かしておいたわよ」と告げた。

「電子ケトルに近づいたタイミングあったっけ」

「スマホで操作したのよ。ほら、それIoT家電だから。水さえ入っていれば席を立つことなくお湯を沸かせるわ」

「へー、最近多いよね」

秋は気の抜けた相槌を打った。コップを探しながら、ループの存在を知っているのは

あの方だけだと断言した根拠を説明し始める。

「まず私が確認できた範囲でだけど、幹部は全員組織の目的を誤解している。嘘をついてる様子もなかった。あの方の徹底した秘密主義を考慮すると、誰にも教えてないんだらうね」

「研究の完成形が病的なまでに秘匿されているのは知ってるわ。私たち研究員にすら情報が降りてこないもの。でもだからと言って、幹部の誰にも情報を明かしていないと言える?」

「言える。二週間前、八周目だね。私とループ者と目される萩原の監視につけられていた幹部がいたんだけど、その幹部がNOCだったんだよ。もちろん未来の知識を有しているあの方は幹部がNOCだと知っていた。能力と私を敵視している点を見込んでの抜擢だったんだと思うよ。でもNOCはNOCだ。完全な報告をしてくれる保証はない。もしもループの存在を教えている信頼のおける部下がいるのなら、そっちに私の監視を任せると思わない?」

ループの存在を明かすほど信頼がおける腹心がいるなら、その人物に秋の監視も任せるとは思わない。

腹心に命じれば秋を監視する本当の理由を説明できるのだから、そちらの方がスムーズである。監視役と目的を共有できないと齟齬は起こるし、新しく何かを命じる際に、

理論が破綻しない名目をいちいち考えるのも一苦労だろう。

何より、秋への恨みから躍起になって手柄を立てようとする予測にしても、NOCは所詮NOCだ。NOCが真に優先するのは組織の利益やあの方の意向でなく、本人が考える正義。

実際、バーボンは情報を十全に報告しなかったはずだ。彼は萩原の友人でもある。萩原と秋の接触に関する情報を意図的に握り潰した事は何度もあっただろう。

バーボンを秋の監視役に抜擢したのは、あの方の明確な失敗だった。彼が降谷零の友好関係まで把握しているわけがない。降谷が萩原と同期だったのは事故だ。

横目でシェリーの顔色がマシになったのを確認する。

彼女は脳波測定の準備に着手し始める。手を動かしながら彼女が言った。

「……NOC多くない?」

「まあ、うん……」

思わず言葉を濁してしまう。

NOCを放置することで未来を大きく変えず、組織に潜入できるほど有能なNOCに、捜査の一環として組織の仕事をさせることで利用している側面もあるが、NOCの

多さは弁明のしようがない。

結局、秋は話をまとめることで誤魔化した。

「ともかく、ループを知っているあの方の手先はいない。万が一いたとしても私の監視を任せられる能力を有していない。よって警戒は不要。あの方だつて滅多に表に出てこないし、そこまで神経質にならなくていいよ」

秋が語り終えると、シェリーの頬に徐々に赤みが戻ってきた。不安が解けたらしい。シェリーの顔から前方へ目線を戻すと、秋は慣れた手つきで上の棚から二つの広口壘^{びん}を取り出す。酸化第二鉄のラベルが貼られた瓶には粉末状のコーヒー豆、リン酸水素二ナトリウムの瓶には砂糖が入っていた。意味は知らないがシェリーのこだわりだ。

コップに目分量でコーヒー豆とお湯を入れる。

湯気を立てるコーヒーを見ていると、テイクアウトした喫茶ポアロのコーヒーが連想された。続いてテイクアウトの品を持ち込んでいた毛利探偵事務所の内装が連想され、さらには伊達殺害防止計画をこなしていた日々が蘇ってくる。

二周前に伊達航殺害犯を三人で追っていたのが随分と昔のことに感じられた。当時は萩原に情報提供を頼んだら、代わりに伊達航殺害犯探しを手伝わされた。

あの時は煽り耐性の低さを見抜かれていたせいで、今回はシェリーに嵌められたせいで、本来死ぬ予定の人物を助ける手伝いをしている。似た状況だから思い出しやすいの

かもしれない。

萩原研二は秋が初めて認識した同類であり、かつての友人だった。少なくとも秋はそう思っている。

シエリー用のコーヒーと砂糖瓶を彼女の横に置き、再び戻って自分のカップを手に取ると、秋は椅子に戻った。

検査の準備を終えたシエリーが、秋の頭にヘッドギアを載せる。脳波測定の目的を知らないことに気づいたが、本題に早く入りたいので秋は質問を控えた。

「約束通り後天的ループ者の記録を調べておいたわよ」

自身も腰掛けるとシエリーが口火を切った。

「後天的ループ者に関する記述は一つだけ見つかったわ。内容を要約すると、『タキオンを体内に保有する人間——タキオン保持者の身体が生命活動を終わるとタキオンは消失する、または量がごっそりと減って観測できないほど微量になる』。たったこれだけだけど、アドニスが求める答えを導くには十分でもある」

「萩原が誘拐された目的と、彼の身に何が起きたのかだね」

誘拐の目的は何か。どうして萩原は記憶を失ったのか。再び萩原が狙われることは

あるのか。あり得るのなら今度こそ事前に対策を取れるよう、状況をなるべく把握しておきたい。秋の要望はこれだけだった。

口に出して要望を羅列すると、齒切れ悪くシエリーに尋ねられる。

「……その人の記憶を取り戻す方法は？」

「必要ない。前にも言った通り、萩原が忘れているのは喜ぶべきことでもあるんだよ。『知られている』という理由であの方に狙われることはないし、上手くいけば二度と巻き込まずに済む」

確かに彼に聞きたいことはたくさんあった。組織の任務で接触するよりも前に萩原は知人だったという発言の真意なんかもそうだ。

しかし彼を危険に晒してまで知りたくはない。過去の記憶は自分でなんとかすると決めている。

シエリーは「そう」とだけ返した。目を伏せて横に逸らすと報告に戻る。

「まずは誘拐の目的だけど、研究記録がバツチリ残っているんだから、希少なループ者の研究が狙いだったと見て問題ないでしょうね。彼に何が起こったのかの答えも書いてあったわ」

「タキオン保持者の身体が生命活動を終わるとタキオンは消失する、または量がごっそりと減って観測できないほど微量になる。言い換えると、どこかの周で死んだループ者

はタキオンを失う。ループ中の記憶を引き継げる原因であるタキオンを失えば、ループ能力もループに関する全ての記憶も消える。萩原が非ループ者と変わらない存在になつていたのは前の周で死んだからか」

「ええ。殺すにしても一通りデータを取つてから殺すはずなのに、データも取らずに生命活動を終えたのが確認されたのなら、おそらく拉致されてすぐに不慮の事故で……」
言いにくそうに言葉を濁された。

彼女の勘違いに気がつき、秋は端的に否定する。

「違うな。萩原は誘拐された周——九周目を迎える前に一度死んでいる」

忘れもしない、八周目の組織壊滅作戦時だ。

記憶喪失前の知り合いであることを言い当て、過去を教えてもらう約束を取り付けた途端、萩原がいた向かいの建物が爆発した。今から思えばあの爆発もあの方の差金だったのだろう。

秋の言葉に、シエリーは息を吞んで目を見開いた。真剣な表情で顎へ手を当てながら言う。

「なるほどね。八周目で死んだため体内のタキオンが消失した。時間の繰り返しを認識するのに必要なタキオンが消失したせいで、九周目が始まる時には非ループ者と変わらない存在になつていた、と」

仕組みは不明だが、同じ時間が繰り返される現象が時折起こる。時間が巻き戻ると世界の全てがリセットされる。しかしタキオンだけはリセットの影響を受けずに次の周へ持ち越される。

タキオンは特定の人間の体内にだけ存在する粒子だが、タキオン保持者のシナプスとも密接な関係にあるらしい。タキオンと結びついていてるループ者のシナプス——記憶も『巻き戻り』の影響を受けず、次の周へと持ち越される。

だからタキオン保持者はループを認識できる。これがループ現象の仕組みだった。(簡単にまとめると、ループ者とはタキオンを持っている人間のことであり、タキオンがなくなったらループ者は非ループ者となる。私たちが話している萩原が死んだタイミングは、彼が非ループ者になったタイミングだとも言える)

頭の中で概要を確認し終わると、秋はそのまま話し始めた。

「誘拐された萩原はループ能力を失っていた。普通の人間と変わらない存在なんだし研究のしようがないよ。結局あの方が手に入れられたのは、『タキオン保持者の身体が生命活動を終わるとタキオンは消失する』という情報だけだった。とまあ、こういう流れだろうね」

「自分自身やアドニスと比較して、浮かび上がってきた相違点が死を迎えているかどうか

かだったんでしょね。そして、萩原さんが八周目で死んだのを知っていたのは……」
シエリーは痛ましげに目を伏せた。想像がついたのだろう。

萩原を殺したのはあの方だ。

彼女が口に来れなかつた続きを思い浮かべると、頭に取り付けられたヘッドギアがより一層重くなつた気がした。

気まずさを誤魔化すように、シエリーがコーヒーに砂糖を加えた。

部屋に降り立った重苦しさを払拭するべく、秋は冗談めかして言う。

「流石頭の回転が早い。前の周で突発的に私を騙す作戦を考えて実行し、見事成功させただけある」

「結構根に持つてるわねさては」

「まさか。世界頭脳明晰大会が開催されたら上位十名の中には入っているであろう私を出し抜いたシエリーが味方になってくれて心強いって話だよ」

「何よその聞くからに馬鹿そうな名前の大会は」

秋は一拍置くことで誤魔化すことにした。

「……話をまとめると、萩原誘拐は研究を目的としたものだったことになる。この周で誘拐が起ころなかつたのは、非ループ者と同じ存在になった人間をこれ以上調べても意味がないから。あの方は萩原への興味を失った。この認識で合ってる？」

「合ってるわよ」

シエリーは無事誤魔化されてくれた。突っ込むと堂々巡りになると理解しているからスルーしただけかもしれないが、その可能性は考えないでおく。

肯定を受けて、秋は続けざまに質問した。

「それじゃあ再びあの方が萩原へ関心を向けることは？」

「普通に考えて無いでしょうね。研究が進んで予想外の事実が判明したり状況が一転したりする、僅かな、本当に僅かな可能性もあるからゼロとは言い切れないけど、少なくとも見積もつても今から数周の間は大丈夫なはずよ」

理系が言う「否定できない」は「どう考えてもあり得ないけど、あり得ないという完璧な証拠はないから否定できない」という意味だ。シエリーの言う「ゼロとは言い切れない」も同等である。

シエリーの返事を聞いて、秋は初めてコーヒーを口にした。少し冷めている。

秋はコーヒーを飲み込むと次の問いに移った。気がかりはまだ残っている。

「だったらこの周で萩原が放置されている理由は？ 研究目的による誘拐が必要なくなったにしても、私があの方の立場だったら『萩原がいない』という状況を維持するために彼を殺す」

秋の言葉を受けて、シエリーは顔を僅かに歪めた。

彼女の反応を見て初めて、自分が倫理に反した意見を口にしたのに気がついた。

シエリーの歪んだ目元を見ながら、非倫理的な発言を追求されたらどう答えるべきかと迷う。

友好的な協力体制を維持するために、シエリーの心証を良くしておきたいのだから、何かしらのフォローをしたい。

これまで通り、目的のためなら手段を選ばないバイタリテイがあるだけだと開き直って見せるのは悪手だろう。

しかしそれだけではなかった。シエリーの心証などという表面的な問題ではなく、もつと心の奥底に迫る切迫感がある。

これまでの様に、自画自賛に転換して自分の悪辣さを誤魔化してはいけない。自分はこのように人間だ。超えたらいけない一線をとくに踏み越えている。人間として選んではならない生き方を選択していて、それが普通だと錯覚するほど罪を重ねている。

あの発言がごく自然に出た事実は、自分の罪深さを象徴している。
自分の罪から目を逸らしてはいけない。

そこまでは分かるが、シエリーにどう言えばいいのかが分からなかった。

じつとりと背に汗がにじむ。心臓が耳の裏に移動したのかと錯覚するほど、大きく心臓が脈打つ。ヘッドギアが唸る。

しかし追求はされなかった。シエリーは口を硬く結んで、次の言葉を待っている。

杞憂が空振りに終わり、秋の意識は内面からシエリーとの会話に引き戻された。

これまでで心中で渦巻いていた思考が四散する。核となる何かを言い表そうとかき集めた言葉が消える。装飾が消え去り、思考の本質だけが残る。途方もなく重い何かだ。

「それ」の重さをまざまざと実感しながらも、秋はこれまでの内面の変化をおくびにも出さずに、平然と次の言葉を紡いだ。

痩せ我慢だけは昔から得意だった。

「新たな周が始まると同時に萩原を殺して、遺体を処分するだけなら大した労力はかからないし、あの方が維持したがっている組織関連のおおよその出来事に影響を与えることもない。私が萩原生存に気付いてイレギュラーの九周目を疑う展開を潰すために殺しておくべきだ」

あの方の行動を説明すると、以下のようになる。

八周目で萩原がループ者であることを知り、九周目が始まると同時に萩原を誘拐。タキオンの研究に役立てようとする。

しかし八周目で一度死んでいた萩原の体内からはタキオンが消失しており、あの方の目論見は破綻。非ループ者と同列の存在になった萩原を調べる意義はなく、あの方は彼への興味を失う。

よつて、十周目で萩原は放置され、萩原の誘拐が起こった九周目だけがイレギュラーとなった。

自分があの方の立場だったとして、真つ先に警戒するのは同類だ。ループ能力を持ち、萩原と面識がある間宮秋がいる。

だからあの方は、十周目でも九周目と同じ状況を作るべきだった。十周目以降で萩原を放置すると、秋に無駄にヒントを与えることになる。

あの方が萩原を放置せず、九周目以降ずつと萩原が姿を消していれば、秋は「そういうものだ」と思いこむだろうし、あの方もそれを予測できたはずだ。

特にループ現象は解明されていない事実が多く、秋にとつて自分以外のループ者など萩原が初めてなのだから、自分の知らないルールによつて萩原が消失したと捉えよう。現実逃避癖を考慮すれば、自らそう考えようとするのも予想できる。

実際九周目の秋は、「いずれかの周で死んだループ者は次の周から存在が消失する」という萩原消失説を盲目的に信じ込んでいた。

(あの方が十周目でも萩原を誘拐していたとしても、私は萩原が消えたのはあの方に誘拐のせいだってことも、全ての黒幕があの方であることも知っていただろうけど) ただし秋が萩原誘拐を知り、あの方の暗躍に思い至ったのは、松田のフラインプリーによるものだった。

萩原が消えた九周目の松田は、誘拐された親友の消息を突き止めるために組織を追い続け、最後には幹部である「アドニス」との面会に漕ぎ着けた。彼からもたらされた情報によって、秋は萩原消失の真相を知った。

彼がいなければ萩原誘拐の真相にも、あの方の暗躍にも気づかないはずだった。

そして親友を誘拐した組織を追い続けた刑事の存在など、あの方は全く想定していない。そのためあの方の中では、秋は今でも何も知らないままだ。

(だからこそ、せっかく何も知らずにいる私が何かに気づかないよう、この周でも萩原を始末しておこうと考えそうなものだけだ)

あの方が恐るべきは秋に違和感を抱かせる行為、事柄だろう。

些細な違和感が真実へと到達する足掛かりになるのが世の常である。

特に慎重居士で知られるあの方のことだから、萩原と秋が偶然再会したりしないよう、巻き戻ってすぐに萩原殺害を命じるくらいするはずだ。

秋は目線を下に固定して考え込んだ。自分の思考へと意識が降りていく。

思考の欠片たちが渦巻き、濁流となる。欠片同士が合わさり、離れ、別の欠片とくっつく。

やがて一つの解が浮かび上がってきた。

(私が舐められているからか)

おそらく、適当なカバーストーリーをでつち上げて辛い現実から目を背ける性質を熟知されているのだ。

十五年が何度も繰り返される間、秋は薄い壁一枚を隔てて真実の隣に置かれていた。ループ関係の研究の被検者をさせられ、タキオンと深い関わりのある薬を作らされているシェリーと親しい環境にいた。情報収集に最適な立場だ。

それでも秋は動かなかった。正確な事実を認識して対応するよりもぼんやり流され続ける方が楽だから、研究のきな臭さを薄々察しながらも、真実に繋がりそうな糸を無意識のうちに除外してきた。

それが秋の生き方だった。

知りたくない真実に到達しないよう、無意識の判断に基づいて作られた都合の良いカバーストーリーを盲信することも多々あった。

(こういつた姿を見続けてきたからあの方は私を取るに足らない相手だと判断したし、いなくなつた萩原に対しても同じ行動を取ると予想した)

彼の予想通り、秋は自分を慰めるために萩原消失説を瞬時に叩き出して、それを盲信してきた。

それでいて理性の深いところでは現実逃避を自覚しているから、ストーリーの破綻を防ぐために萩原の実家には絶対に近づかなかつた。

(あの方は私が取る行動を予測していた。初めのうちは同じルーパー者を警戒して嚴重に監視していただろうし、どう動くのかを観察する目的もあつて被検者にしたのかもしれないけど、伊達に長いこと現実逃避を貫いていない。警戒を解いているどころか舐められまくつてる。シェリーと二人きりになれるこの個室に盗聴器やカメラが一つもないのがその証拠だ)

そこまで考えたところで、シェリーの声が思考に割つて入つた。意識が現実へと引き上げられる。

「萩原さんが殺されずに放置されている理由に一つだけ心当たりがあるわ」

長い沈黙の後で口を開いたからか、彼女の声は少し掠れていた。

秋は軽く返す。

「ああ、私が舐められてるからでしょ。確かにムカつくけど敵が油断してくれているのは好機だとも言える。これなら宮野完美の件にも邪魔が入らないし、」

「いいえ」

言葉を続けようとしてシエリーに否定された。遅れて、彼女の顔に再び影が差しているのに気がつく。

「この周になるまで私とコンタクトを取ったことがない事実も関係しているかもしれないけど、それだけでは説明がつかないのも確かだよ。ループだなんて非科学的な事象に対抗できるのは、同じくループを認識できるアドニスだけだもの。いくら侮っていたとしても、自分を脅かす可能性を秘めたただ一人の相手をみすみす放置する理由にはならないわ。アドニスが指摘した通り、保険をかけるべきよ」

巻き戻ってすぐに萩原を殺して死体を処分することで彼が存在しない状況を継続させ、秋が真実にたどり着く足掛かりを完璧に潰す。一般人の少年を人知れず殺すなど組織のトップにとっては朝飯前だし、デメリットもない。だというのに、あの方は萩原を

放置している。慎重で有名なあの方にしては大胆な行動だ。

大胆と言えば自分を被検者に抜擢したのもそうだ。秋の頭がとてつもなく冴えていて逃避癖が現れなかったら、被検者になったがために組織の研究目的を察したかもしれない。同じ能力を有している相手は警戒して然るべきだし、なるべく情報を与えないようにするのが普通だ。

少し考えてから、秋は思いつきを口にした。

「私にわざと情報を与えることで何かを企んでる……わけではないよね、うん」

シエリーの白けた顔を見て慌てて付け加える。背筋を伸ばし、訳知り顔で腕を組んでから秋は言った。

「これはシエリーを試したんだよ」

「つたく、わざと情報を与えているのならもつと分かりやすくやるわよ」

ため息混じりに指摘される。秋の言い訳を全く信じていないのは明白だった。

シエリーに呆れられたまま終わるわけにはいかないの、今度はしっかりと考えてみる。

何かを企んでいるわけではないのなら、萩原を殺す必要はないとあの方が考えていることになる。しかしシエリーによると「秋を舐めているから」以外の理由があるらしい。しばらく考えると一つの説が浮かんできた。あまり当たってほしくない仮説だ。

秋は恐々と口にした。

「……………萩原殺害よりも効力のある保険をすでにかけている？」

「正解」

出来れば否定して欲しかった。

途端、脳波測定器が低く不気味な電子音を立てる。事態の不穏さを象徴しているかのような低い唸りだった。

「こちらの気持ちなどお構いなしに、シエリーは血の気の引いた顔で続ける。

「仮にアドニスが真相を知ってもどうにかする手立てがあるから、あの方は余裕綽々でいられるのよ」

「その手立てって？」

思わず身を乗り出して尋ねると、彼女は一瞬思索する目をしてから、唇を歪めた。

「今は言えないわ。姉を助ける前に裏切られると困るもの。アドニスが強く求める情報は最後まで取っておきたい。元々はあなたが一番気にしていたであろう後天的ループ者の情報を取っておくつもりだったけど全部話しちゃったし」

本来伏せる予定だった萩原の情報を早々に聞き出せたことを喜ばいいのか、『手立て』を教えてもらえるまで時間がかかりそうなのを嘆けばいいのか判断しかねる展開だ。

「裏切らないよ。裏切って、私が気づいたことを密告されても困る」

「あらそう。ともかく、最後まで伏せておく手立てジョーカーを知りたかつたらお姉ちゃんを無事に助けることね」

シエリーは話は終わりだとばかりに冷めたコーヒーを手に取った。

秋は駄目押しでもう少し踏み込む。

「シエリーの気持ちは分かるし、それで安心できるなら別にいいけどさ。あの方の保険がどんなものなのか臆げな輪郭だけでも知っておかないと警戒のしようがないんだけど。宮野明美を助ける前に私があの方の毒牙にかかったりしたら、明美を助けるのは叶わなくなるんだし」

「アドニスが脅威となり得ると発覚してから使う代物だから大丈夫よ。計画に支障はきたさないわ」

言われてみればその通りだ。シエリーの目的は姉を助けることなのだから、計画に支障をきたす情報なら初めから共有している。

とりつく島も無いとはこのことだった。

シエリーが口にしたのは彼女の行動から推察できるものばかりで、目新しい情報は何も無い。

これで宮野明美を助けなければならない理由がより強固になった。

第24話

薄暗い廊下を歩く。

地下のため窓からの光はなく、照明はセンサーによつて人がいる周辺だけが照らされる仕組みなせいで、一寸先には闇が広がっている。

ここは東都の外れに位置する研究所だった。表向きには烏丸グループの傘下に入っている研究所だが、実態は黒の組織が行っている研究の総本山だ。

研究所の広大な敷地には二棟の建物がそびえ立っており、その片側がシェリーの勤務先である。彼女個人に与えられた個室もその地下にある。

シェリーの個室、すなわち検査協力中の密談が行われる舞台。

長い廊下の突き当たりにとどり着き、秋は足を止めた。突き当たりにある扉をノックする。

首からかかった入館証明書を外してポケットに押し込む間に、扉は開いた。

扉を開けたシェリーが一步引いて空間を作る。秋はそこに進み出る。

一ヶ月ぶりに彼女の個室に足を踏み入れた彼女は、後ろ手で扉を閉めると開口一番に尋ねた。

「諸星との顔合わせはどうだった？」

「問題は何も。話していた通り姉のことを頼んできたわ。分かりやすく組織の監視員が近くにいたし、後は勝手に接触を持ってくれるはずよ」

シエリーはふいと目を逸らして答える。

あまりこの話題を続けたくなさそうな雰囲気だ。諸星大へ向ける感情を決めあぐねているせいで、どんな態度を取るべきか決めかねているのだろう。

元より、懸念していたのは赤井秀一とシエリーとの面識がなくなる展開だった。『彼らの関わりを以前の周と同様にする』という目的が筒がなく達成された以上、長々と話を続ける必要はない。

秋はシエリーの意を汲んで、話を終わらせるべくさつきと次の話題へと転じた。

「そりゃあよかった。他に確認することはないし、ループ関連の情報提供に移ろうか」

議論、話し合い、意見交換会、助言。形容の仕方はいくらかでもあるが、要するに検査協力を隠れ蓑にして行うループ現象やあの方の陰謀に関する話題だ。

姉を助きたいシエリーに出来る限りの助力をし、宮野明美が死ぬ未来を防ぐ代わりに、ループ現象やあの方の陰謀を明らかにするのを手伝ってもらおう。二人の間でそういう取り決めがなされていた。

「つて言っても、問題の全貌が見えてこないしシエリーがどこまで知っているのか判断がつかないせいで、何から質問すればいいのか決めあぐねているんだけどね」

秋がそう続けると、シエリーは検査協力に使用する器具の準備をしながら言った。

「真つ先にやるべきなのは、私に何を質問するか考えることじゃないわ。アドニスから私への情報提供よ」

「え？」

「私がこなすのは頭脳役であつて、元々組織から知らされている情報の伝達はあくまで副次的要素。つい二ヶ月前までループ現象の存在すら知らなかった私が持っている情報なんてたかが知れてるわ。第一に、私に必要な情報を与えて、専門的知見と組織が重宝する頭脳に基づく推察を引き出すべきよ」

言われてみれば、彼女は自分よりもよほど知識が不足している。

同時に、不足している分の知識を補えば目覚ましい活躍を遂げてくれるだろうという期待も生じる。

シエリーの頭脳は驚異的だ。

十代前半にして組織の研究の中核を担っている事実はもちろん、秋が宮野明美を助けることになった経緯もその裏付けとなっている。

彼女はベルツリー急行で間接的に対面したあの一瞬で、秋を触媒にして『次』の自分

へ伝言を伝える罫を編み出して実行に移した。

そして伝言を伝えられた『この』シエリーは正しく『前』の自分の意図を読み取り、架空の現象だと思っていなかったループ現象を確信し、僅かな情報から次々と推論を展開していった。

パズルのピースさえ与えれば、あの時のように次々と真実を見抜いてくれるだろう。

こちらが考えに耽っている間に器具の準備を終えたシエリーが、試験官のような形をした細長い容器を差し出した。秋は無言で受け取ると蓋を外して口元に運ぶ。

俯き加減で口を軽く開くと、自然に涎が流れ出てくる。しばらくそれを続ければ、やがて容器に唾液が溜まり始める。

検査協力中に行われる唾液提供は、毎回この流れで行われている。頻繁に行われるので、今では無言で意思疎通が出来るほどだ。

シエリーの説明によると、ループ者の体内に含まれているタキオンを検出するための工程らしい。

唾液を容器に溜めている際は口が聞けないため、その間はシエリーが一方的に話すのが通例だった。

容器を渡してきたのは、しばらく自分が一方的に喋るといふ無言の宣告だ。

予想通り、シエリーは右側の壁に向かって歩きながら朗々と話し始めた。

「大前提として、現代の科学形態ではループ現象はあり得ないこととされているわよ。よって、現代の科学に当てはめてはループ現象の謎を説明していく方法は使えない」

あと数歩で壁につく距離になるとシエリーは踵を返し、今度は左側の壁へと向かう。そうやって部屋の端から端を往復しながら彼女は話す。

「でも今の科学形態はまだまだ未発達なもの。人間は科学で世界の全てを解き明かせたわけじゃない。『科学』は二十万年間に提唱されてきた世界の構造を解き明かす数式の中で最も正解に近いだけであり、正しい数式とはかけ離れたものなんだと私は考えているわ。そして科学に携わる人は、皆多かれ少なかれ似たような感想を持っていると思う。」

だから科学的に説明できないことがあったとしてもなんらおかしくはない。理論の先に観測的な事実があるのではなく、観測的な事実の先に理論があるんだもの。むしろ従来の学説と矛盾する事実を観測するところから科学は始まるわ。

科学とはすでにわかっている答えの集まりでなく、この自然界のはたらきに関する真相を突きとめようとする継続した研究よ。科学の歴史はたんなる事実の羅列でなく、それらを発見しようとした苦闘の歴史でもある」

そこまで言い終えて一拍おくと、彼女は薬品棚に置かれた広口壺を一瞥した。「酸化第二鉄」のラベルが貼られた、コーヒー豆が入った瓶だ。ラベルの真意は分からないが、彼女はこのデザインをやけに気に入っている。

「例えば、月面で宇宙服を着た人間の遺骸が発見されたとしましょう。地球に運んで調べたところ、遺体は五万年前に死亡した地球出身のヒトで、現代の技術を駆使しても到底作れない持ち物を持っていた。この事実を受けて科学者が取る行動は何だと思う？

——五万年前にそれほど高度な文明が地球にあつたなどあり得ないと糾弾するのは科学ではない。現代の『数式』に照らし合わせることでできない事実が観測されたのなら、新事実から理論を組み立て直して真実を究明していくのが科学者よ」

熱弁しているうちに、彼女は少しだけ早口になっていった。

こうして話を聞いていると、本当に科学が好きなのが伝わってくる。

生まれた時から決められた運命や、唯一の肉親である姉が殺される未来のせいで憐れみに近い感情を持ちやすいが、心ゆくまで研究ができるこの環境を気に入ってるのも確かなのだろう。

「シェリー」の人生は、チープな悲劇性と科学者としての幸福で成り立っているのかも

しれない。

基準線まで唾液が溜まっているのを確認すると、秋は容器から口を離れた。

彼女はシエリーが言わんとすることを察して言葉を引き継ぐ。

「つまり、現代の科学に当てはめてループ現象の謎を解明していくことは出来ないけど、生粋の科学者であるシエリーに情報を与えて、観測された事象から逆説的に真実をつまびらかにしてもらうのは可能。そのために観測された事象——私がループについて知ってることを教えろってことだね」

こちらが組織の研究内容や専門的なことを何も知らないのと同じように、シエリーはループ現象の詳細を知らない。彼女の主張通り、まずは知識の共有をするべきだ。

容器に蓋をして、試験官立てに似たラックに入れながら秋は話す。

「とりあえずループ能力の説明からしておこうか。というより、ループ現象を何度か経験するうちに私が体系的に理解した事柄の羅列だね。シエリーが知ってることも出てくるし、知らないことも出てくる。」

まずは用語だけど、同じ時間が何度も繰り返される一つのパターンをループ、その現象をループ現象と呼んでいる。いや、どうだったかな……。割と他の意味合いの時にも

同じ単語を使ってる気も……。ぶっちゃけ感覚で使ってるから特に気にしなくていいよ、うん」

十三歳の少女が小難しい言い回しを多用して科学とは何たるかを語った直後なのもあり、妙に居た堪れない。

しかし今までは考えを共有する相手がいなかったのだから、用語の定義があやふやでも仕方がないだろう。秋は開き直った。

「今度はループのルールだね。『巻き戻る』のは夜の零時ちようどで、飛ばされる先は目を覚ますタイミング。繰り返される『幅』は毎回バラバラ。最短一日、最長が今回の十五年。ついでに言っておくと十五年のループは十回目に入ってる」

「この十五年間以外にも時間が巻き戻るケースがあるの？」

シエリーが目を瞬いた。

秋はその反応に虚をつかれた。

当事者である秋にとつては当たり前の事実ですら彼女は知らないのだ。念頭に置いていたつもりでいたが、自分よりも余程多くのことを知っているように見えるせいで本当の意味では意識しきれていなかった。

「ああ、ループは定期的に発生する現象だよ。私が子供の時から時折発生してる」
動揺が悟られないよう平坦な声を心掛けて答えた。

その後秋は次の説明に移る。

「いくつかのパターンを経験しているおかげで、ループ発生条件であろう共通項も判明している。時間の繰り返しが始まる直前には、気持ちの強さに程度の差はあれど、可能なら時間を巻き戻したいと感じる出来事が必ず起こっているんだよ。雑な名付けだけど、私はこれを『後悔』って呼んでいる。かと言って、『後悔』が発生したら必ず時間が巻き戻るわけでもない」

秋の話を受けて、シエリーが口を挟む。思考の整理も兼ねて言葉を紡いだ様子だ。

『後悔』はループ発生条件の一つだけど他にも条件がある。他の条件が満たされていない時はループが発生せず、他の条件が満たされた時にはループが発生する」

言いながら、彼女は壁際にあるホワイトボードへと歩いていった。

ホワイトボードの脚を掴み、引っぱりながら戻ってくる。二、三メートル離れた位置で立ち止まり、ボードの向きを微調整すると、張り付いていたペンのキャップを外す。「図解するところなるわね」

彼女は円を二つ書いた。大きな円のなかに小さな円がすっぽり入っている図だ。大きな円には「ループ」、小さな円には「後悔」と書かれている。

「ループが起こる条件には『後悔』も含まれているが、それだけではない。他の条件もあ

ると考えるのが妥当だわ」

言いながら、小さな円の外側を斜線で塗りつぶす。大きな円は斜線部分と小さな円に分かれた。斜線部分が他の条件だ。

「その他の条件に心当たりは？」

「あるけど、その前にループ終了条件に話を移そう」

順番が重要だ。順番を間違えると、ただでさえ込み入っている話が余計にややこしくなる。

秋は言葉を選びながら言った。

「こっちも経験則から分かっているんだけど、ループが終わるのは『後悔』を消した時。例えば壺を割って怒られる不安からループが起こつたのなら、次の周では壺に近づかないだけでいい。大切な人が死んだのが後悔なら、その人が死なない周しゅうに辿り着けば、その周で『ループ』が終わる。ループが終わったら『巻き戻り』地点が訪れても時間は巻き戻らない。時間の流れが正常になる」

「後悔や心残りがループ発生の原因であり、ループが終わるのも心残りを解決した時。フィクションにありがちな設定ね」

「まあね。仕組みは一生分からならうけど、何よりも強いのは意志や願いの類だっ

てことなんだと思う」

「それじゃあ、十五年間の繰り返しだなんて途方もない現象を引き起こした意志はどんなものだったのかしら」

「さあ」

秋はあつけらかんと答えた。

無責任な発言にシエリーが胡乱な目を向ける。

「さあ……」

「残念ながら答えを持ち合わせていないんだよ。ループが開始する前——つまりオリジナルの周である一周目のラストに感じた感情の中で唯一それっぽいものはあったけど、釈然としないことも多いから保留にしている」

「……」

「でもまあ、『後悔』が何なのかはどうでもいいや。問題は、私の『後悔』は解決しているはずってこと」

何度目か数えるのも諦めたが、またもやシエリーが不審そうに目を細めた。

その反応を受けて、秋は前提から確認することにする。

「私たちは不確かな情報を確かなものだと証明することができないなりに、薄氷の道を

歩むような議論をしている。あの方から隠れて動く以上、仮説が正しいのかを確かめるのは不可能だから、土台にあるのは不確かな情報ばかりになる。不確かな情報を元に出来上がるのは、どうしたって不安定な理論でしかない。

だから私たちが目指すのは、不確かな情報の中で信頼できそうなものだけを真実だと仮定して、仮定をつなげて、一番それっぽい結論を出すことだ」

「まあ、それはそうね。組織で進められているタキオンの研究に限定しても、判明している事実はとても少ない。適当な理由をつけてデータを確認したけど、意図的に隠されているわけでなく本当に判明していない印象を受けたわ。分からないことだらけよ。アドニスの言う通り、裏付けを取った要素だけを元に理論を構築するのは不可能だから、一種の思考実験だと割り切つて理論を展開していくしかないわ」

「話を進めるには、『真実だと仮定する不確かな情報』が登場する。私の後悔が解消されてるってのも真実だと仮定する不確かな情報によるものだよ」
「証拠はないけど信用に足ると判断された情報とも言えるわね」

どうして信用に足ると判断したのか言外に尋ねられたのを察して、真つ先に口から出たのは願望だった。

「いくつかの不確かな情報の中から正しいと仮定する情報を選ぶのなら、私は萩原の証

言と洞察力を全面的に信じたい。ループに対する主観が私と萩原でかなり違うって発覚した時に、私が経験してきたループ現象のルールについて軽く説明したんだけどさ。ループ発生・終了のトリガーである『後悔』について話して、後悔は忘れた記憶を取り戻すことだろうと付け加えた時に、後悔は別のものだって強く否定されたんだよ。それから数ヶ月後には、今回でループは終わるだろうとも言われた」

組織壊滅作戦真つ只中に、電話越しで軽く付け加えられた言葉だった。

「萩原は私の話を聞いて、『後悔』が何なのかを察して、もうそれは叶っていると断言したわけだ。だからループは終わるはずだと予想した」

「でもループは終わらなかつた。……でしよう？」

「間違っていたのは私の話の方だった。ループが終わる条件は私の『後悔』が解消されることだが、それだけではない。ループ発生の条件と同じだよ」

萩原の推理ミスや何らかの事情で嘘をついた線は考え出したらキリがないので除外する。

萩原の発言が正しいと仮定するとーそしてそれは自分の不確かな認知よりもよほど信頼できる意見だがー、秋の『後悔』は解消されていたのにループは終わらなかつたことになる。つまりループ終了にも裏条件があると考えられる。

「終了にも他の条件がある……」

「その通り。次はシェリーにループを打ち明ける前の私がしていたことについて話そうか。私の予測が正しければだけど、裏条件が何なのかを推察する上での大ヒントが登場する。最も、シェリーも太鼓判を押すほど完璧な予測だと自負しているけどね」

秋はこれまでの行動を掻い摘んで説明する。「前」のシェリーに「自分が十三歳になつてから話を聞け」と言われていたせいで、十年間の暇があつた。その十年間、自分は他幹部からの情報収集に徹していた。とは言つても、あの方に目をつけられないよう、幹部との雑談中にさりげなく話を聞き出す程度だが。

「ロクに情報を得られなかったと思ひ続けてたよ。組織の目的やあの方の真意を話題に出したりしたけど、ラムですら知らなかったし。どの幹部に尋ねても大した答えを持ち合わせていないか、真実に掠つてすらいらない想像を語られるだけで組織の目的には辿り着けないでいた。ただ、場を温めるための前振りに使っていた話題が重要なヒントだつて最近気づいたんだよね。特にジンのようなタイプに見られる傾向なんだけど、本題に入る前にあの方の武勇伝について話しておく気分が良くなつて口が軽くなる」

「なんですつて?」

「あの方の武勇伝。マフィア組織なんかにも多いよ。ボスの武勇伝を語り継がせることでボスへの忠誠と畏怖を強め、その偉大な人物が率いる組織に属しているという事実から、メンバーの間に自負心が生まれるのを目的とした仕組み」

黒を象るこの組織も例外ではなく、あの方の偉業が出回っていた。

ちよつと話題を振るだけで、あの方信者たちは自慢げに話してくれる。あの方の話をさせた後、気分が良くなった幹部は大概饒舌になる。

あれは助かった。今までのような偉そうな態度は控えめにして友好的に振る舞うよう意識してはいたが、そう簡単に言動を変えられるものではない。嫌味の一つでも言われた時は反論してしまうことも多かった。が、あの方の話を振ればピリついた空気は消え失せてくれる。崇拜してやまないあの方の話ができるので相手の機嫌も戻る。

「その武勇伝つてのが問題でさ。巨大なマフィアを退けた、一度危機に陥ったものの見事に逆転して表社会でも成功を収めた、各国捜査機関によるしつこい追跡のせいで大被害を受けると思われたがあの方の先見の明によって被害を最小に抑えられた。などなど、多大な危機に見舞われたのに見事切り抜けたつてのが大抵の語り種」

「こう言いたいのか？ あの方がある意味で偉大な功績を残しているのはやり直したただけだって」

「その通り。おまけに偉業が行われた時期は、揃いも揃ってループが発生した時期だしね。幹部に媚びてるうちにあの方に詳しくなるまで知らなかったよ」

口を挟むことなく、シエリーの風いだ双眸がじつとこちらに向けられている。話を聞くのに神経を集中させている証拠だ。

シエリーが聞き手に回っているのをいいことに、秋は矢継ぎ早に喋り続ける。

「流れはこう。あの方が危機に見舞われて大打撃を受ける。あの方が『後悔』を感じる。場合によってはループ発生条件が満たされる。ーシエリーの予想通り、あの方の『後悔』が裏条件だ。私とあの方が同時に『後悔』を感じた時だけループが発生する。」

私とあの方、二つのループ発生条件が満たされて、同じ時間が繰り返されるようになると、あの方は次の周で『後悔』を解消する。偉業を成し遂げる。ループを抜け出した先にある未来と地続きの、最後の周しか覚えていない非ループ者の目には、あの方が神がかり的な能力で危機を切り抜けたように映る。こうして武勇伝が生まれる」

ループが発生するのは決まって『後悔』を感じた時なのに、『後悔』を感じてもループ

が発生しないケースがあるのは、もう一つの条件が満たされていなかったからだ。秋とあの方の二人が同時期に『後悔』を感じた時だけ時間の巻き戻りが起こる。

秋は立ち上がってホワイトボードまで歩いた。

シエリーが書いた図を見る。「ループ」と題された大きな円の中に、「後悔」と書かれた小さな円が入っている。その外側は斜線で塗られている。

秋は斜線部分に矢印を書いて、「あの方の後悔」と加えた。

「多分ループ発生の有無に影響を与えられるのは先天的なループ者だけなんだろうね。萩原は『後悔』の心当たりが無いようだったし、この十五年間のループが始まるまではループ現象のルの字も知らなかった。途中から時間の巻き戻りを観測できるようになっただけだと考えられる」

本人の証言が正しいと仮定するなら、彼はループのトリガーにならない。これも証言が間違っている可能性を考え出すと話が進まないのです、彼の人柄と洞察力を信じて話を進める。

「ループ発生・終了条件は私の『後悔』だけだと思われてきたが、『後悔』してもループが発生しないケースがあること、『後悔』を解消し終わつたはずのこのループが続いていること、あの方の武勇伝の時期から、もう一つの条件にあの方の『後悔』があると予測できること。ここから導き出される答えは一つ。すなわち裏条件であるあの方の『後悔』！」

振り返つてシエリーを確認する。彼女の瞳に反論の色は見られなかった。

今まではぼんやりと心にあつた予測だったが、説明しているうちに自分の中で明確になつていき、確信が持ててくる。

「例えば、私は長らく『後悔』を解消するとループが終わると認識していたんだけど、これは私よりも先にあの方がループ終了条件を満たしていたからだと思う。私は何度か繰り返さないと『後悔』を解消できなかったけど、あの方は一度か二度のやり直して成功していたんだろうね。自由に動くこともできない子供だった私と、世界的犯罪組織のトップであるあの方じゃ取れる行動の規模も違う」

ここまで話してやつと、シエリーが言葉を発した。彼女は秋の言葉を引き継ぐように

して言う。

「アドニスよりもあの方が『後悔』を解消するのが遅かったのは、この十五年間の『繰り返し』だけ。最長の『繰り返し』を利用して研究を進めるため、わざと問題を放置しているのね」

あの方の『後悔』は状況証拠によって組織壊滅だと確定している。

組織壊滅の数日後に時間の巻き戻りが発生したのだからタイミングも合っている。

おまけに、あの方が組織壊滅を放置して、組織壊滅が近づいてくると一人で逃走するにとどめている理由に、より明確な説明がつく。

その気になれば、組織に潜入して間もない降谷や赤井を殺して、有力な組織壊滅功労者を排除することもできるのにそれをしない理由。

組織壊滅を防ぐとループが終わってしまうからだ。

繰り返し返される十五年間を有効活用して研究を進めたいあの方は、なるべく組織壊滅の芽をつみたくないのだろう。

脳内でここまで考えたところで、シエリーが口を挟んできた。

「それで、あの方の『後悔』って？」

「……ともかく、」

「ともかく、じゃないわよ」

誤魔化そうとした途端言葉が被せられる。

「議論をしていく過程であの方の『後悔』が明らかになつていないと困るでしょう。一人で納得した顔をしているけど、私たちの関係で隠し事したら不信感につながつてあの方に漬け込まれる確率が跳ね上がるわ。話しなさい」

「ごもつともだ。」

秋は目を泳がせた後、組織壊滅についてゲロつた。

* * *

シエリーはわりかしすんなり組織壊滅を受け入れた。

確かに彼女にとつての組織とは絶対服従の相手であり、どうしたつて敵わないと潜在意識に植え付けられている対象だが、組織壊滅によって色々と納得がいったらしい。

むしろ、いくらループを利用したいあの方の思惑があるとはいえ、いずれ瓦解する組

織は盲目的に恐れる対象ではなくなったのだろう。「あの方と敵対する立場にいる」という状況において、少し余裕が出てきたようにも感じられる。

組織の瓦解について一通り話し終わると、秋はこれまでの総括に入った。

「結論だけまとめると、ループ発生とループ終了は私とあの方二人の『後悔』があつて初めて成立する。これでいいよね」

「ええ。おまけにその可能性は極めて高いわ」

科学者ではない秋と話するとき、彼女はなるべく断定口調を使おうと心がけてくれるが、今回は科学者特有の言い回しが思わず出てしまった印象を受けた。

科学者が口にする「可能性が極めて高い」は、「可能性は百パーセント」と同義だ。

話がひと段落した。

秋は席に戻ると静かに言った。

「つまり、あの方を倒そうと思つたら二つの『後悔』を解消して時間の流れを元に戻さなくてはならない」

静まり返った部屋に自分の声がやけに響く。

「あとはあの方を殺せば確実だ。ループ者がループの過程で死ぬとタキオンが消えて

ループ能力を失うのなら、あの方を殺せば彼のループ能力は消える。そのうえ『最後の周』で殺せば、それ以降時間の巻き戻りが起きないんだからあの方は二度と甦らない。最後の周を狙い撃ちできなくても、あの方を殺しさえすれば、『ループ者が死亡すると体内のタキオンが消えて、ループに関する一切の記憶が消える』というルールによって、あの方の記憶が消える。相手が何も覚えていなければ闇討ちだつて可能になる」

ループ者が死ぬと体内のタキオンが消えてループ能力を失うと知つてからは漠然とあの方を殺せばいいだけのつもりでいたが、そうすると第二の条件であるあの方の『後悔』がどうなるか分からない。

最悪の場合、この十五年間を抜け出す手立てがなくなり、永遠とループに巻き込まれる羽目になる。

ループを終わらせるために組織壊滅を防いでからあの方を殺すのが最善だろう。

一見難しそうに聞こえるが、組織壊滅を防ぐのは簡単だ。『巻き戻り』の日までに組織を存続させておいて、時間の流れが通常に戻つたら組織壊滅作戦を始動させればいい。作戦決行日を少しだけズラすだけで終わる。

宮野明美を助ける過程で公安から得られるであろう信用を利用して、ループから抜け

た先の日付が決行日に向いているという情報を流しておけば完璧だ。この日に幹部が一斉に集まるとかなんとかか。

「なんて言ったの……？」

愕然とした表情でシエリーが問う。組織への恐怖心が薄れたと言っても、恐怖の対象であることは変わらないらしい。

「あの方を倒す方法だよ」

秋はこともなげに答えた。

「私はある方を倒すつもりでいる。この周であの方を殺し、二つの『後悔』を解消して時間の流れを元に戻せば全てが終わる」

ずっと考えていたことを初めて口にしたと同時に、胸の内を妙な清々しさが通り抜けていった。

一度腹を決めてしまえば存外楽なものだ。これまで暗闇の中を手探りで進んでいる感覚だったせいだろう。指針が示された安堵が大きい。

秋は高揚感すら感じていた。

「この周が始まったばかりの時は、全てを解決してからもう一度余分にやり直して、私が犯した罪をリセットすることも考えていたけどね。シエリーの真の目的が宮野明美の

生存だったからこれは無理になった。この周で明美を助けても、また時間が巻き戻って全てがリセットされたら困るでしょ。お互いに」

シエリーはあの方の奥の手を秘匿している。裏切り防止のために宮野明美の死を回避するまでは教えられないと主張しているが、何をもって明美の死を防いだとするのかは不明だ。

『この周』で明美が死なない未来を掴んだとしても、またもや時間が巻き戻って全てがリセットされたら意味がない。

「前回の検査協力であの方の奥の手を秘匿すると主張した時はループの仕組みを知らなかったにしろ、姉を助けた後にまた時間が巻き戻って、姉を助けた意味がなくなる可能性を考慮していたはずだ。いざとなったら、最後まで取っておいた最も重大な情報を盾にして、どうにかするよう私に迫る腹づもりだったんでしょ。ああ、私にループの詳細を話すよう仕向けてきたのも、ループの仕組みを把握して全てがリセットされるリスクがあるかどうかを知るためかな」

「……」

シエリーは無言のままだった。正解だと認めたようなものだ。

「だからこそ、私とシエリー二人の目的を達成するため、この周で全てを終わらせる。ループ終了条件を満たし、あの方を倒す。これを約束するから、シエリーは宮野明美生

存が達成された時点で最後の情報を教えてほしい。全てを知った上であの方との対決に臨みたい」

明美を本当の意味で助けるには、この周でループを終わらせないといけない。それはあの方を無力化しないといけない。

しかし、秋があの方を倒すと決めたのはこれが理由ではなかった。シエリーと自分の目的を達成する唯一の方法だからと言って、あの方との対決を覚悟するほどお人好しではない。

彼を倒す本当の方法を知っているのは自分だけだ。

赤井秀一が組織壊滅の銀の弾丸となっても、未来を知っているあの方は事前に逃亡できる。

組織は潰れるが、逃げ延びたあの方は死刑執行されることなく次の巻き戻りを迎える。

彼を倒せるのは正しい方法を導き出せる環境にいる自分だけで、だとしたらやらなくてはいけない。

(……いいや、『やらなくてはいけない』じゃなくて『やりたい』のか)

自分が抱いているのは使命感でなく欲求だ。現実を追いつかれて自分の罪を自覚した今はただ、償って楽になりたい。

使命感に掛けられているのではなく償いを渴望しているだけだとしても、本心からの周で全てを終わらせようと思っている。

口先だけの言葉ではないと分かってもらうため、秋は適した言葉を探りながら語った。

「……私はこれまで、受け入れ難い現実から目を逸らすためにまともに考えようとせず、流されるままぼんやり生きてきた。だから十周目になるまで、組織の研究とループの関係性にすら気づいていなかった。取るに足らない相手だとあの方から思われるに決まっている行動をしてきた。

こんな私だから何が正しいのかは分からないけど、確かなことが一つだけある。あの方と私は悪だ」

あの方と自分を悪だと断じた彼女の声には、毅然とした響きがあった。

「あの方が研究のために九周目で誘拐した萩原は生粋の人たらしだったよ。凄くいい奴で、周りの人全員から好かれていた。こんな私でも彼らと一緒にいた時間は楽しかつ

た」

この辺りから、秋の意識が過去へと遡り始めた。本気であの方を討ち滅ぼすつもりでいることをシェリーに理解してもらおうという目的が一時的に薄れ、過去に心を遊ばせる。

「本人は人探しのためだとか言っていたけど、あいつは探偵助手をやる傍らで本来起こるはずの事件を解決していて、私利私欲のためにしかループの知識を使っていない私とは全く異なる人種だった。今から思うと、呆れると同時に感心していたのかもしれない。

そんな萩原は八周目の終わりかけに、事故に見せかけてあの方に殺された」
途端、秋の声のトーンが変わった。回想に細められていた目が虚ろになる。

「あとは知つての通り、九周目を迎えた途端にあの方は萩原を誘拐した。何も知らない私の目には、萩原が忽然と姿を消したように見えた。九周目になってすぐ、事前に教えられていた萩原の実家に行つて、彼の姉に萩原が誘拐されたと伝えられた。これは正しかったけど、下手に『前の周』の出来事を知っていた私は『いずれかの周で死んだループ者は消失する』なんてぶっ飛んだ仮説を立てて……ここはまあいいや。忘れて。

萩原の誘拐を教えてくれた彼の姉は憔悴しきっていた。凄く顔色が悪くて、ろくに寝れていないようで、私ほどではないにしろ弟に似た綺麗な顔をしているのに、ストレス

から肌が酷く荒れていた」

「うるさいわよ」

ちよつと自分の顔を褒めてみたら非難がましい合いの手が飛んできた。

秋は無視して話を続ける。

「それでも私を励ましてくるような人で、やっぱり萩原の姉なんだなと思った」

「……」

「萩原には親友がいた。ガラは悪いけど正義感の強い奴で、九周目の彼は消えた萩原を探すために人生を捧げた。親友を誘拐した犯人を探すために警察官になり、萩原の誘拐が黒の組織によるものだとき止め、最終的に組織の幹部である『アドニス』と面会するところまで漕ぎ着けた。彼がいたから、私はあの方の暗躍を知ることが出来た」

一介の警察官が黒の組織にたどり着く執念に、シエリーが目を見開いた。

「萩原はみんなに好かれていたから、私が知らないだけで他にもたくさん悲しんだ人がいたはずだ。あの方による萩原の誘拐は、萩原の人生をにして、彼の身近な人々にも濃い影を落とした」

秋は両の手の指を重ね合わせて言葉を続ける。

「あの方はループを存続させて研究を続けるため、『前の周』の出来事をなぞる。そのためなら自分に忠誠を誓っている腹心を平然と殺すし、この十五年間で死ぬ予定のNOC

も変わらず殺し続ける。シェリーが囚われの身で、このままだと宮野明美が殺されるのも元を正せばあの方のせいだし、組織のせいで不幸になつてゐる人がたくさんいるのもあの方のせいだ。あの方はたくさん不幸を呼び起こした諸悪の根源だと言える。

そして、あの方の行いと私の行いは同じ罪を抱えている。私がこれまでしてきた犯罪行為は萩原誘拐と同じ属性の不幸を呼び起こしていたし、あの方が踏みにつてきた数々のものと、私がぼんやり生きながら踏み躪つてきたものは全く同じだ。

だからあの方は討ち滅ぼされるべきだし、私は償わなくてはならないと思う」

話しながら心によぎる光景があつた。

萩原消失の真相を知つた直後。十周目が始まつて、萩原の実家に向かつた時に目にしたワンシーン。

夕焼けで赤く染まる住宅街を二人の少年と一人の少女が歩いてゐた。

松田が萩原の姉に勢いよく告白してバツサリ振られていた。一步離れた場所で萩原が腹を抱えて笑つてゐた。

平和な光景だつた。

あの方が壊した光景だつた。

人が異なるだけで、秋が何度も壊した光景でもあつた。

「この周が始まった時に決めた。可能だったらもう一度余分にループして、自分の犯行をなかつたことにする。無理だったらせめて、あの方を倒すことで贖罪とする。それにシエリーとの取引を成立させるには、この周でループを終わらせるしかない。」

あの方を倒すと約束するから、元々の取り決め通り宮野明美を助けられたら最後の情報を教えてほしい。あの方との対峙には万全の状態で望みたい」

真つ直ぐ相手の目を見つめて秋は言った。

前回の検査協力で、なんの見返りもなく姉を助けてくれるほどお人好しではないだろうと指摘されたばかりだし、信用されきれていないのは分かる。

シエリーとは一抹の警戒心を抱えながらも利用し合う間柄で、顔を合わせれば雑談程度はするが互いの心に踏み込むことはない、微妙な距離感を保っている。

「今すぐ答えろとは言わないよ。ただ、検討しておいてほしい」

選択肢を与えるような口ぶりでないながら、最終的にシエリーは承諾するしかないとかは確信していた。

このまま情報を出し惜しみすれば、決行を迎えた秋が失敗するリスクが高まる。秋が失敗すればあの方の野望を止める者はいなくなり、繰り返される時間の中で明美は殺さ

れ続ける。